

# 奇譚クラブ

1957年 7月号

創作 マットに生きる夢  
 訳 黒いペチ・コート

近藤 一・作  
 鴉嘔吐夫・訳



7月号

昭和三十三年六月三十日印刷 (第十一卷 第七号 週刊第九十六号) (毎月一回一日発行) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年七月号

7

奇譚クラブ

昭和三十三年六月三十日印刷 (第十一卷 第六号) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

(送料八円)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805







〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

小説 虐妻日記	竹谷 十三
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正
お仕置遊戯	桜井美智子
フエチンストの文学ノート	S・T 生
緊縛女体雑考	浮家 鷹三
「禪」先生	青葉 模一
最近の縛り時代劇映画から	嵯峨美也子
お隣の研究	須藤 律夫
玉稿落穂集	編 集
映画に現れたムツキ	赤井 茂郎
虐げられる娘	嵯峨 紀世
サデイスティックな漫画	藤木 仙治

口絵	定価二百円(千8円)
抗束服の装着	四馬 孝・画
道化者の集まり(アメリカ雑誌より)	ネルソン 提督
二丁拳銃の姐御	木製の兵士
新人モデル嬢紹介	花坂 道子嬢
パイプの馬	北原純子・画
凝 視	佐賀美智子嬢
馬を御す令嬢	北原純子・画
大衆文学に現れた責めの描写	奈子の自己愛について(二)
幽囚四ヶ月	門田 奈子嬢
お灸を据えた女の魅力	春田 一 郎
赤い花は泣いている(第四回)	松井 籟子嬢
私のコレクションより	角田 莊吉
「責め」の芝居雑考	本田 由郎
少年権記	山口 幸一
玉稿落穂集	編 集
被縛症	高村 民子
女性の切腹幻想	鳴竹 成太郎
或る下着マニアの告白	古井 真哉
潰滅の前夜	土路 草一
マゾヒズム断想	天泥 盛英
H氏の奇妙な告白	北谷 英二
サデイズム小説	泉 義明
私はおしめマニア	多磨 宏

乙女の腹切抄……………		鳴竹成太郎	
○八月号（復刊第七号）		定価二百円（〒8円）	
口絵		美しい床の間……………	
すべりだい……………		（荻千恵子嬢）	
米誌にみた緊縛面欧米式新スタイル		北原純子・画	
華々しき私刑……………		藤見	
無惨絵マニア……………		才京	
二等兵時代の思い出……………		高村	
被縛症……………		渡辺	
縛り絵マニアの回想……………		川中	
一読者としての公開状……………		真鍋	
元禄女腹切り……………		春田	
一鼻と「変型しぱり」……………		東田	
幽囚十ヶ月……………		矢崎	
自決する従軍看護婦たち……………		松井	
奈子のA感覚について……………		山口	
賭けられた尻……………		千路	
最近の縛り映画から……………		白石	
赤い花は泣いている……………		篠中	
私のコレクションより……………		編集	
続「少年禪記」……………		藤森	
潰滅の前夜……………		東	
緊縛映画速報欄……………		藤木	
最近の映画から……………		藤木	
春日ルミ嬢まいる……………		藤木	
玉稿落穂集……………		藤木	
新聞紙上に出た切腹実話……………		藤木	
探偵小説新考……………		藤木	
蜂胸完成……………		藤木	
とりこの白人娘……………		藤木	
○九月号（復刊第八号）		定価二百円（〒8円）	
口絵		美しい飼育物の調教……………	
吊りを加味したアイデア……………		須川	
緊縛フォト二題……………		BIZARRより	
ナイフ投げの的……………		BIZARRより	

女学生	北原純子・面
欧米式新スタイル二態	月岡
浣腸とおむつ	松井 映子
恋の脱殻	藤見 郁子
文学に現れた同性愛	松原三千代
私の「ふんどし」	真金鍛十郎
「被虐哀欲」其の後	池田ふみ子
渾マニアの女生徒の手記	門田 奈子
奈子の恋愛について	沼正三
沼正三の手帖	沼正三
お灸を据える女性雑誌	松原 一
映画に現れた拷問場面	左巻 政策
現代マゾヒスム芸術時評	原 忠正
探偵小説新考	東 一郎
芝居の責め、紅皿欠皿	本田 由郎
最近の映画から	白石 稔
悦虐に関する一考察	菅原 春夫
「切腹の歴史」	松原 一
私のコレクションより	角間 莊吉
玉稿落穂集	編集部
最近の縛り映画から	嵯峨美也子

○十月号（復刊第九号）

口絵 定価三百円（千8円）

北原純子十月集、壊れ易き獲物	刺青師の部屋、和蘭陀屋敷の謎	現代マゾヒスム芸術時評参考資料	引廻し……春日ルミ嬢、伊吹真佐子嬢	米誌に見た緊縛写真欧米式新スタイル	サデイズム・シーン詳察	藤木 仙治	お灸の女王コンクール	岩瀬 祥一	大衆雑誌と責絵	青山三枝吉	私の浣腸ブレイ	ラブマン	受刑生活の思い出	福村 光治	現代マゾヒスム芸術時評	原 忠正	「まずらお派出夫」の犯罪	青山三枝吉	泥棒に縛られた話二件	池田 正一	エスキモー娘の切腹	本間 宏	ある夢想家の手帖から	沼 正三	「浣腸」に関するレポート	東沼 完一	締めつけられた女優達……	古留 節人
----------------	----------------	-----------------	-------------------	-------------------	-------------	-------	------------	-------	---------	-------	---------	------	----------	-------	-------------	------	--------------	-------	------------	-------	-----------	------	------------	------	--------------	-------	--------------	-------

泥棒に入られた南田洋子	古賀晴雨	「一男色者の手記」	伊藤重八	私のアイデア「晒し台」	矢桐京助	緊縛映画速報欄	千葉栄一郎	探偵小説新考	東野めづみ	サジスチンの半生記	鷹野めづみ	読・乗馬スポンの女腹切	藤山秀緒	最近の映画から	白石稔	〇十二月号（復刊第十号）	定価二百円（〒8円）	新着フオト紹介（一）	北原純子・画	「いでゆ」より	拘束服とマスク、欧米式新スタイル	（雲井久子）	現代マゾヒスム芸術時評	滝れい子・画	文学に現れた責めの描写	松原三千代	私のふんどし（二）	畑村一提供	異性より同性に興味	林靖彦	コルセット・マンボ	東一郎	スカートへの魅力	鳴山能平	牢獄の花嫁	真木不二夫	黄色オラミ誕生	岸本青柳	和装女の縛り責め展覧会	小西鉄二	美女決闘場面のアイデア	南俊夫	腋毛礼讃	藤山秀緒	女武者自刃	沼正三	ある夢想家の手帖から	淡美一郎	醜惡への幻想	編集部	玉稿落穂集	北原純子	魂を病む人	青葉模三	私の告白二題	沼正三	家畜人ヤブー	古井真哉	女性化願望と女性ホルモン	高橋よしえ	杀姫の体験	白石稔	最近の映画から	柳沢吉保	美とワイセツの限界	千葉栄一郎	緊縛映画速報欄	近藤正男	マゾ・クラブの結成を望む	山田正男
-------------	------	-----------	------	-------------	------	---------	-------	--------	-------	-----------	-------	-------------	------	---------	-----	--------------	------------	------------	--------	---------	------------------	--------	-------------	--------	-------------	-------	-----------	-------	-----------	-----	-----------	-----	----------	------	-------	-------	---------	------	-------------	------	-------------	-----	------	------	-------	-----	------------	------	--------	-----	-------	------	-------	------	--------	-----	--------	------	--------------	-------	-------	-----	---------	------	-----------	-------	---------	------	--------------	------





奇譚クラブ 復刊第十六号 目次	
涙のダイヤモンド (一) 地下の拷問室	甲斐仁参・案 四馬 孝・画 楓月太郎提供
縛られた女優たち	
東映「片目の魔王」 松竹「次郎吉格子」	
宝塚「鞍馬天狗斬り込む」 大映「地獄の門」	
花坂道子嬢艶姿集	
切支丹迫害史の内 石抱き算盤責め	北原純子・画
緊縛映画名場面集	楓月太郎提供
東映「闇太郎変化」 新東宝「若君漫遊記」	
イタリフィルム社	
「愛は惜しみなく」	藤木仙治提供
私の本箱から	星光一 18
幻想の娘	笛地 佐渡 28
少年矯正院体験記 重屏禁	嶽 収一 34
ある女性から編集長への手紙	泉 かよ子 37
時評 麻生保の生活と意見	麻生 保 42
創作 L・T 商会	佐川 増夫 44
ある夢想家の手帖から	沼 正三 51
襦袢抄	月岡 映子 54
落日 婦士道	飯田 靖子 57
防毒服と私	青山 芳樹 62
水責に関するノート	甲斐 仁参 66
創作 マットに生きる夢	近藤 一 72



ある女給の体験	日下 絹子 82
続・切腹曼陀羅図絵	法谷 四郎 87
「奇談倶楽部」の会合	白鳥 忠正 119
未来幻想 家畜人ヤプー(第七回)	岸本 青柳 100
寸劇ストーリー	沼 正三 102
南支那海の鬼	本田 由郎 109
空想のネタ	土路 草一 114
ワイセツか哲学か	原 忠正 122
現代マゾヒズム芸術時評	伊藤 晴雨 126
女血だるま	矢桐 重八 128
アブ・モード・オール・スクラップ	池田 ふみ子 134
禪とブリーフ	内田 武男 136
一輝亭雑記	佐々木 ツトム 141
キクに捧ぐ私のアイデア集大成補遺	土路 草一 143
通信	土路 草一 144
黒いペチコート	原作セシル・フオーレ 翻訳 鴉 嘔吐 夫 150
女斗美 廻路	山田 那津子 152
那津子の流陽日記	山本 節夫 156
仏・米の婦人ふんどしに就いて	近藤 栄市 160
私のキタ・セクシユアリス	千葉 栄市 161
通信 六月号の批評と感想	丘 一明提供 162
緊縛映画速報欄	藤木 仙治 163
雑誌通信	甲斐 仁参 164
口絵解説 愛は惜しみなく	
口絵解説 涙のダイヤモンド	
読者通信	







# 涙のダイヤモンド

(1) 地下の拷問室

＜本文164頁の解説参照＞

— 四馬 孝・画 — 甲斐仁参・案 —





女優たち (楓月太郎・提供)



東映 「片目の魔王」 (花柳小菊、千原しのぶ)



松竹 「次郎吉格子」 (高峰三枝子)



縛られた



宝塚 「鞍馬天狗斬り込む」 (新珠三千代)



大映 「銭形平次“地獄の門”」 (日高澄子)

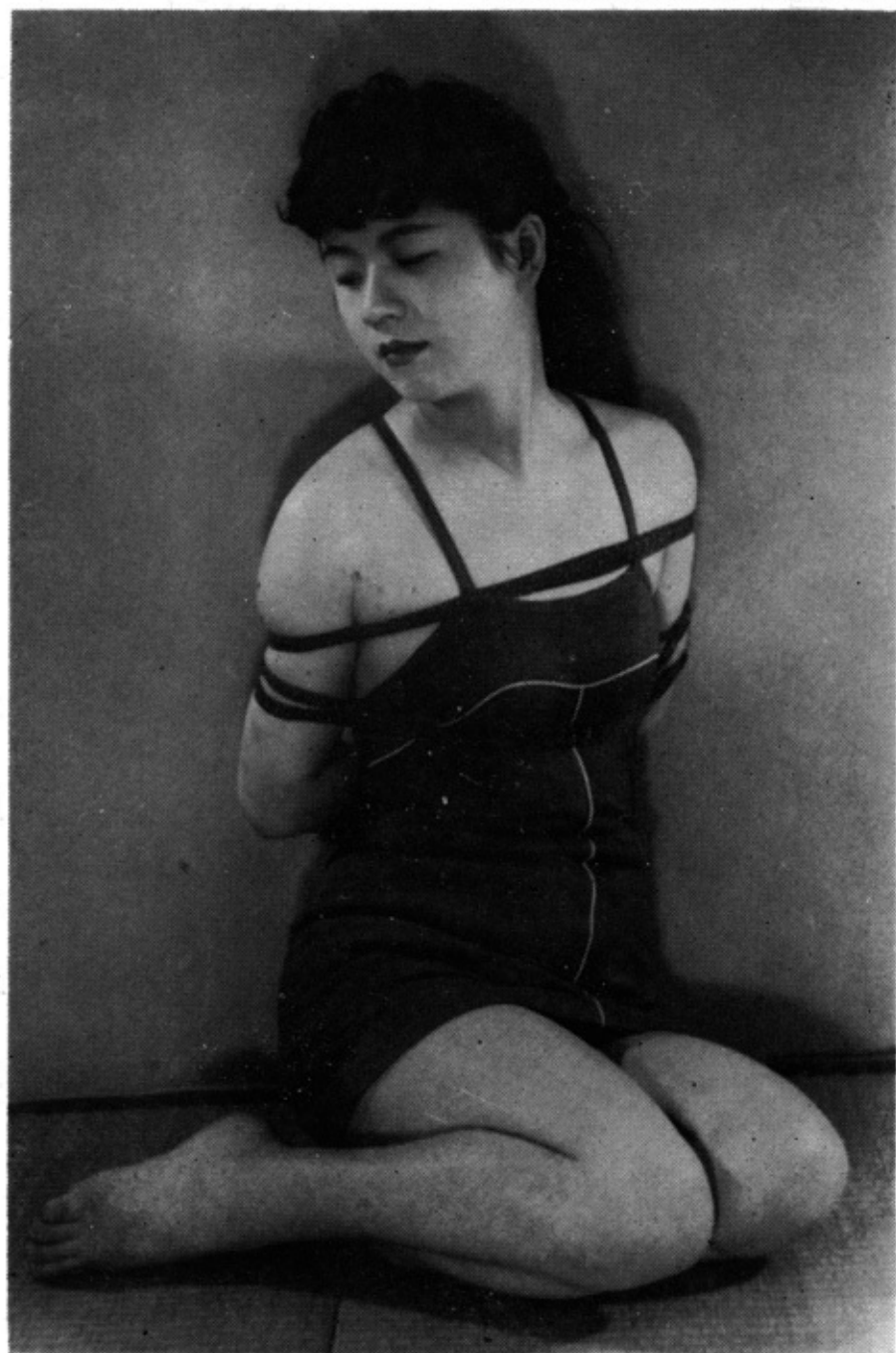




# 花坂道子嬢艶姿集

(モデル 花坂道子)







切支丹迫害史ノ内

石抱き・算盤責め



北原純子・画





東映作品 (闇太郎変化) 田代百合子



16. 新東宝映画 (若君漫遊記) 北沢典子



イタリフィルム社

『愛は惜しみなく』

藤木仙治提供

(本文解説御参照下さい)



△写真 A△

<写真 B>





新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1957年7月号

(第十一卷 第六号 通刊第九十六号)



well-aren't they lovely ?

<アメリカ雑誌 BIZARRE 誌より>





# 私の本箱から

— 大衆小説の縛り場面 —

星 光 一

藤見郁氏の『大衆文学に現れた責めの描写』は非常に広範囲にわたって紹介され、東一郎氏の『探偵小説新考』とともに、もともと愛読している一つで、本誌が着くと一番先に開いたページでした。藤見氏も、のべられている通り、大衆小説の責めという点、どうしても時代物の方に多く、中でも角田喜久雄先生著すところの伝奇小説の中には、必ずと云っていゝほど責めの場面が出て来る様です。そこで私も角田喜久雄氏のものを二つ三つと、その外のものをいくつか書抜いて見たいと思います。

先ず角田喜久雄氏の作品から、前に阪東妻三郎主演で次に大友柳太郎主演で映画化された「錨鳴浪人」を開いて見ます。始めは歌絵という幕府方の侍の妹が薩摩屋敷で責められる場面です。

幾度か失敗した揚句、壁の凹所へ爪先をかけて懸命に窓際まで伸び上らうと、——その途端「曲者」噛みつくやうな呷声と一緒に、

一人の男が物影から疾風のやうに走り出て来た。歌絵は一度にはねとばされて、転んで、叩き落された懐剣へ無念さうに手をのばしたが、その時既にけたましく馳せ集まつてくる足音が聞えて来た。月太郎は窓際へ立ちよつてその騒ぎを見おろしていた。荒くれ男達の罵声に取囲まれて石のやうに口をつぐんでいる女。一人が、口を開かせやうとして庭先に竹刀を叩きつけると、細い女の体はうめき声と一緒に折れそうに前へよろめいたが、その相手をきつと睨み据えるだけで遂に一言も発しない。……月太郎は、竹刀に打たれて、うめき乍ら虚空を睨んだその人の無念さうな顔を思いうかべて、已れの肉体へ竹刀の痛みをうけたやうに眉をふるはせた。その部屋から三四間へだてた辺りで急に人声が高くなった。捕へた歌絵をそこへ引摺りこんで来たらしい。はつきりは分らぬが代る代るに置かけるやうに叫んでいる男の声がきこえる。女の声は一度も聞えず時々はたと人声の途絶えた静寂を、びしっ と竹刀の高鳴る響がつたは



つて来た。またひとしきり 男達の罵声が高くなって、しかし、それもやがて女の強情さに手を焼いたというやうに、そろ／＼部屋から立去って行く気配が聞へた。…… 暗い燭台のかけに、死んだやうに倒れている女の後姿が見えた。歌絵をがんにがらめに縛りあげただけで安心したのか見張の者もついていた。……歌絵は此方へ背中を見せて仆れている。押さえられる時袖がもげたのか片腕が肩の辺まで露出して 荒縄がその軟かい膚へ喰い込みそうに巻きついている。その折れそうに華奢な二の腕と、紅く裏のかえった下着の乱れた裾から覗いている足首の辺とに絵の具で染めたやうに血が滲んでいて、誰か忘れて行ったのだらう 点々と血の飛沫にそまつた竹刀がすぐその側に転っている。その乙女が、どれだけはげしい恨みに燃え、どれほど堅い意思を以て肉体の苦痛にこらえたか。見るからにぞつとするやうなものが其処に感じられるのだ……月太郎は静かにその側へかゞみこんだ。そして何も云はず 脇差から小柄を抜きとると固く肉へ喰い入っている縄の結目へあてがった。

(こうして歌絵は助りますが 次に勤皇派の娘「千鶴」と云うのが敵中にスパイに入っていつて縛られます)

何か、ふと気配を感じて千鶴がぎよッとして振向いた時には既に蔽いかぶるやうな間近に、蒼白い残忍そのものゝやうに、兎唇の顔が迫っていた。流石の千鶴がそのまゝ居竦んだ。立直る暇もなかった。妖虫の触角のやうに伸びた安の片腕が、その身体へ怖い力でからみついた。と思ふと、千鶴は忽ち床の上へねぢ伏せられてしまった。(無念)と思つたが、もがけばもがく程、安の隻手が操る細紐はまるで生物のやうに、見る／＼千鶴の手首へからみついて来た。やがて、後手にく／＼し上げた千鶴の身体を、抛りこむやうに次の間へ押し入れた安は、今しがたまで千鶴の調べていた机の抽斗を

次から次へと忙しげに掻き廻しはじめた。手首を縛った細紐は肉に喰い入るやうに固かった。時間の経過して行くことにいら／＼しながら、千鶴はその結目をゆるめやうと必死にもがき廻っていた。(これまで耐へ忍んで来た苦心が、今となってむぎむぎ水の泡になるのか)と思ふと無念さに思はず涙があふれそうになった。……安は転がっている千鶴の方へ冷い一瞥を投げたまゝ真直に窓際まで歩いて行ったと思ふと高い窓枠へ、ひらッと驚くやうな身軽さで飛び上って、見る間に音もなく外の闇へ消えて行ってしまった。……今安の出て行った窓は、手の自由を奪はれた千鶴にとって、余りにも高過ぎる、歯を喰いしばって縛しめを振解かうとしたが、総ては無駄だった。……千鶴はあせり乍ら手首を結んだ縛しめを振解かうともがいた。少し結び目がゆるんで、手首が僅か自由に動くやうになった。千鶴は、その手首を動かして、扉の把手を握った。……その支那服の男は、主人の顔色を窺ひながらゐるやうに千鶴の側へ詰めよって来たと思ふと、いきなり掌でその唇を塞ぎながら片手で荒々しく横抱きに引抱へた。両手の自由を奪はれている千鶴には、もがく暇も叫ぶ隙もなかった。猫のやうに足音を殺した主従二人は庭を横切つて裏の潜戸から外へ出て行った。……支那服の男が投げ出すやうに千鶴の身体を地上へ横たへた。男はたづさえて来た鍬を振り上げて、その窪地の上をさく／＼音をさせながら掘りはじめた。天も地も人の影も暗い中に千鶴の唇を噛みしめた無念さうな顔許り哀れにほの白く浮き上っていた。……男はうなずいて千鶴の身体を抱き上げると足許の深い穴の中へ今にも投げ込もうとした。

(この時は危く助けられるが次にまた、先に出て来た安に捕り責められる)

『云はぬ、どんな事があつても云うものか』その言葉が終らぬうち



にひゅつと青竹が宙にうなつて、千鶴の身体が炉端へどつとのめつた。ぐつと、こらへて膝の乱れを押さへ乍ら身を起しかけると、息もつかず、二ツ三ツ続けざまに青竹のうなりが骨を砕くばかりに、「うゝッ」とうめいて流石に千鶴はしばらく突伏したまゝ、しかしやがて身体を起した千鶴の顔は蒼ざめ噛みしめた唇の間からは一筋糸のやうに血がにじみ出ていたが、その姿は驚くばかり静かであった。

この小説を読んでから映画の鰐鳴浪人を見に行きましたが、原作にはこれだけ縛りが有るのに映画の方は、まるっきりなのにかっかりしました。次にこれも同氏の作品から『風雲将棋谷』を取り上げて見ます。この小説も再度映画化され、戦後の方の映画を見ましたが、その中では長谷川裕見子が、これから紹介する朱実に扮して責められました。もっとも映画では蠅責めでしたが、なか／＼よかった方だと思います。

朱実がその襖口を一步踏み入れる。同時に背後でぴしッと音がして、襖がとちてしまった。出口と思つたのは何事ぞ、嚴重に板ではりめぐらした座敷牢……「白々しい女子よのう」引き据えた朱実を前にして、当家の女主人お梶は、さも憎さげに云ふのだった。あの座敷牢の中である、その周囲を武器をとった女達が二十名余りも物々しく、ぐるツと取りまいて睨んでいる。「芝神明、大工熊吉の娘お花などとは真赤な偽り、その実、将棋谷の仮の女主人朱実と云ふがそちの名であらうが」……朱実はきつと唇をかねて黙っている。「これ白々しう偽りぬかすか」かくしおほせぬと思つたか、それ迄の作つた卑屈な態度をがらツとすてゝ朱実は真正面からお梶の顔をきつと見据えた。「わらはが、その朱実、その将棋谷の主人であらば何とする」「おうさてこそ」してやったりといふやうに、にんま

り笑つて、「されば聞く、将棋谷の位置は何処？そこへ至るのは道は？」朱実は冷然と笑ひかへして、「申さぬ」「何？」「申さぬ、口が裂けても申すまい。」将棋谷のあり場所は家憲として固く口止めされているものを、まして昨今お国の不利を考へず私利私慾に燃えてその地の秘密を知らんと魔手を伸ばして居るやからの多しときく益々以て申す事ならぬ」「面白い」お梶はやゝ下司に、ふッふッふッ と声をたてゝあざ笑つた。「きつとか？ きつと口が裂けても申さぬか」「もとより」……お梶がさつと右手をあげると、朱実が身構へる間もなく（不覚）如何なる仕掛があつたか足許の畳が、どんと返つて脇へとんで逃げようとした足をさらはれ朱実はどうとそこへのめつてしまった。その背の上へ、ばら／＼と、おどりかゝつて来た女達「これでもかッ、これでもかッ」その一声々々にひゅッひゅッ、うなりを生じて青竹が振りおろされる。「うッ、うッ」うめき声を発しまいと固く唇をかねでいる蒼白な朱実の顔。「しぶとい女め、これでも云はぬか、これでもこたへぬかッ」打っているお梶さへ、はっ／＼と息をはづませていた。何といふ固い意志だらう、その骨身に徹する呵責のもとにあつて朱実は遂に一言すら発しないのだ。流石のお梶も責めつかれた如く、「しぶとい奴ッ」と吐き出すやうに舌打ちして青竹をがらツと投げすてた。もう朱実は、ぐつたりと打伏せになつたまゝかすかにうめき声を漏らすのみで身動き一つせぬ。この上呵責の鞭を加えたら、もう間もなく息絶えてしまふだらう。……後へのこつた老女が、侍女を指揮して朱実の傷口へ薬をつけ、氣付薬を口へふくませて同じやうに立ち去って行く。ぴん、と入口へ錠のおりる音がして、そとはしんと静まりかへつてしまふ。朱実は動かない。まるで死んでしまつたやうに呼吸の音さへかすかなのだ。

以上は二つとも責めの描写は、さすがに巧いと思いますが、どち



らも責めの道具が青竹と竹刀では、どうも単調のようです。次にもう一つ角田作品から『緋牡丹盗賊』を御紹介します。緋牡丹の皿の奪い合いの中で、鐘撞き小町のお柳というのが大分責められます。

喰い入るやうな凝視がきつとその袖の上にとまった。頭巾のかげで、その形相が見る見る変ってゆく、「あゝあゝ」お柳は思はず胸がせまって悲鳴をあげていた。それから、あと、どうしたか、よくは覚えていない。ただ記憶にあるのは無我夢中で石段をかけ下りたことと、矢庭に襟首へぐいっと巻きついて来た荒々しい男の腕と、そして、もうだめだと思った時の、真暗な恐ろしい絶望感と……頭巾の男は全部で四人いた。お柳にむきむきとたまされかけたということが、その男達の怒りをはげしく、かき立てたのではあるまいか。必要以上に、荒々しい残酷な扱ひ方であった。お柳は、首をしめつけられ、口を押しふさがれたまゝ、半ば宙につるし上げられたやうな、かたちで引きずられていった。草履も何も脱ぎ落してしまつたまゝ、その白い素足が、着物の裾を蹴はだけるやうにもがきながら地をずっていた。頭巾の男達は、お柳の家までくると、ぴしやと固く雨戸をしめきってから畳の上へ投げ出すやうにお柳をはなした。「この女郎」憎さげにわめいたのは、さっきの侍であった。わめいただけでは足りないのか、足をあげると矢庭にお柳の腰を蹴りつけた。お柳は、思はずあつと小さく悲鳴をあげながら、横ざまに転がった。たつた今までは、もうこうなつては何も彼も話してしまふ外はない。あの荷物を渡してしまおうと肚をきめていたお柳だったが、足蹴にされたたん、むら／＼と怒りが胸にこみあげて来た。……今となつては却ってさつき迄の恐怖がうすれて来て、どうとでもして見ると、しぶとい怒りが自然目の色にうかび上つて来た。「うぬ、何だそ

の目付、どうしても云はぬ気だな。よし」相手は忿怒をいよいよ煽り立てられたらしい。いゝさま、お柳の手首をぐい／＼と握むと、そのまゝうしろさまに、ぐい／＼とねぢ上げた。自然、お柳は畳を噛むやうに、うつ伏せに引き仆され、片手で畳の目をかきむしりながら身悶へした。「云えッ、しぶとい、云はぬか、云はぬか」相手はお柳の細腕を折れんばかりに、ねじり上げながら、腰の辺りを力まかせに蹴りつつける。「あの荷物を、どこへやった、それを云へ、さつさと云へッ」その度にお柳は喰ひしばった歯の間から「つ、つ、つ、」と苦痛のうめきをもらしながら、のたうつやうに畳の上を転げまわった。我知らず蹴はだけた紅い裾から、ふくら脛が蒼白く



私のアイデア

ローソク責め(1)

甲斐仁参



抜け出して宙に、もがき続けている。髪も乱れ、襟も崩れて、頬には既に血の気はなかった。側に突立った三人は、それを止めやうとするどころか何かいやらしい興味を味はいてもするやうに薄ら笑ひを浮かべながら、お柳の、もがき廻る姿をにや／＼見下している。

「やれ／＼もっとやれ」一人が何思ったか、側にあった太い青竹をとり上げると、びゅツと音たてゝ宙に一振りふってから、お柳の腰の辺りへその先をあてがって、またにやりと薄笑ひした。「おい女、素直に、喋ってしまったらどうだ。云はんか？ うむ？ よしちと痛いぞ」云はぬと一度心にきめたら、もうどんな事があっても誰が云ふものか、「お侍様が四人もおそろいになって、わたしのやうな女一人を、どうともなさいまし、何とでもなさいまし、知らない事は、どうなされても何も申し上げられませぬ」思はず云った言葉が相手の忿怒を更に、むらむらツと煽り立てたらしい。――中略――こゝは橋場も水神に近いせいであらう。乞食小屋のやうな、むしろ掛けの小屋の中に、お柳は後手に縛られた無残な姿で押しころがされていた。……「数弥さま、お願いです。わたしを一思いに殺して下さいまし。死なして下さいまし。一思ひに、一思ひに」「いずれは死んで貰ふ。でも刃物などで殺しはしない。恥かしさと、悲しさと、恐しさに気が狂った果てに、死んで貰ふ。お柳さん、わしのやうな男が思いつめると、どんな恐しいことをやるか、分るかね。いや今に思い当るすぐ分る。もうすぐ分るよ」数弥は、にぢりよって来て、冷たい氷のやうな目で、さすやうにお柳を見た。顔から胸から腰から足へ、じいツと舐めるやうに、「あゝ」お柳は絶へいるやうに息を引き悲しげな瞳で、空の月影をじいツと見た。……数弥の無慈悲な手がお柳の頬にふれた。じつとりと、ねばりつくやうに皮膚へ喰い込んで来る指先であった。その指先が頬から襟へ襟から胸へ、淫らな昆虫が這ふやうに、じりじりと伝いおりてくる。お柳が切なげに喘いで、最後の死力を振り身悶へした時に、数弥の

指先が矢庭にお柳の着物の襟元に掛ったかと思ふと物をも云はず、ぐいツと手荒く引き広げてしまった。月明りの中に、お柳の乳房は蒼白く盛り上り恐怖と悲しみに、はげしく波打ちふるへていた。数弥の瞳は、まるで、その戦慄を楽しむかのやうに、薄笑ひを浮かべながら喰い入るやうにじいツと見つめている。と、その数弥の瞳が突然奇妙にきらりと光った。お柳の右の乳房の下にかくされていた、紅葉の葉形をした小さな赤痣。お柳の胸元を、ことさらにぐいと押しひろげ顔をすりつけんばかりに近寄せながら指先でその赤痣から乳房の辺りを、ねとり／＼撫でまわす。身も心も疲れはて、もはや物云ふ力さえ萎えはてゝいたお柳だったが、数弥の指先が膚にふれると、瞬間本能的に五体をすくめ、身悶へせずにはいられなかった。どうせ甲斐ない無駄な抵抗とは知りながらも……。

（こうして次には非人の手に渡され、その後逃げ出して、又捕まるのですが、このところは前に藤見郁氏の紹介された、同氏の『白蠟小町』の場面とよく似ています）

……四五人が喚声をあげながら走り出す。向ふも必死の走りやうであったが、女の足は男には及ばない。見る見る間がせばまったと思ふと何かにつまづいたか危くよろけてのめった拍子に、追いつがった男達は、どっと一齊に躍りかゝっていった。女はもがいたが、どれほどの効果があったらう。「女だぞ。若い女だ」組み伏せていた一人が女の顔をぐいと引き起して見て、あッと思はず声をあげた。「お柳だ」「お柳だ、お柳だ」一瞬しんとなったが、引き立てたお柳の乱れた胸元から荒々しく息を弾ませている乳房を見ると、とたん男達の顔に一種異様な興奮の色がむら／＼とこみ上げて来た。「掟破りだ」「逃らからうとしやがったんだ」「逃がすな太え女」「さあ仕置だ」「仕置だ仕置だ」……人垣の中央には大焚火が、え



んぐと燃えさかって無残な光景をいやが上にも明々と照らし出している。お柳は今しがたこゝへ連れて来られたところらしく、その解けた帯を長く引きずったまゝ後手に縛られた身を、くの字なりに曲げて倒れていた。半ば失神したやうに、何をされても、もう抵抗する気力さえないらしい。はだけた襟元から乳房の影が蒼白く見える。

お柳の縛りはこれだけです、中々色っぽく書かれてあります。この作の中に、もう一人『愛蓮』と云う娘が、乳房の下を薬で灼かれる場面があります。

……犬兵衛の両眼はかっと愛蓮の苦悶する顔を見つめたまゝだった。両腕が、一つは首にからみ、一つは胸を乳房の上から締めつけて、ぐいぐい、じりじり力を加えながら、その上女の苦悶をまるで楽しむかのように抱きしめたまゝ右に左に、ぐりぐりとゆする「あゝア」もう愛蓮は声さえ出なくなっている。かッと頭の芯が熱くなり、急に目先が暗くなっているかと思つたと、とたん、がっくりその全身から力が抜け去っていった。何か犬兵衛がその愛蓮の胸元に手をかけ、ぐいぐいと襟を引きはだけたことだけが、かすかに最後の記憶に残ったのだけれど、そのまゝ一体どの位悶絶していたのだろう。愛蓮がふッと我にかえった時、その身が柱に後手にきり／＼縛りつけられているのに気がついた。しかも半膚脱ぎに、右の胸を乳房も露わにぐと押し拡げられたまゝの姿だった。犬兵衛はと見ると片隅の抽出しをあけ何やら茶道具のギヤマンの小瓶を取り出していたが、やがて、のっそり愛蓮の前へ戻って来た。……愛蓮は何が起るのか、何をされるのかももう生きた心地がない。と思う間に犬兵衛は細い筆をとって瓶の液体をしませ、ねらいをつけた愛蓮の胸元へ、ぐさりとさしつけた。全く刺したと思われる痛さだった。熱鉄

を押しつけられたといつてもいい。「はあーッ」と絶え入るやうに呻いたが犬兵衛の方はもう物を云はず愛蓮の胸元へ鼻をすれ／＼に近よらせながら薬をひたしては手元を動かし続けた随分長い苦しみだったように思ふ。こんな思いをするなら、いっそ一思いに殺された方がよほどましだと思つたくらいだった。

次に、これも藤見氏によって本誌に幾つか紹介されたことのある宮本幹也氏の作品から、あげて見ます。その一つは『慟哭』という。これは中国の物で、岩堀光氏がよく書いて居られる落城小説の中国版であります。明国の王族の朱雪個が守る南昌府城が、清の軍に攻められ、落城して、朱雪個の妃の蘭芝が殺されるといった場面です。

それは怖しい光景だった。高樓から見下している雪個の眼に、明朝の王族の正妃としての高貴な姿を保ち乍ら蒼白な顔に微笑さえ浮べて立ち現れた蘭芝に、まるで餓狼の様に襲いかゝった暴民が先を争つてその衣服を剥ぎ取るのが見えた。高貴あるもの、美しいもの、由緒あるものが何の価値も持たないのをそこに見た。白日に晒された全裸の女体を小突き廻し乍ら、陳宣が叫んだ。「見ろッ、只の女じやねえか、さあやつつけろ」わっと襲いかゝる群衆。雪個は思わず両手で顔を掩つてよろめいた。いかなる善政も、いかなる人徳も、事ここゝに到ってはいさゝかも役に立たないのだ。引き吊る様な女の呻き声……本氣に出来ない様な蒼空だった。到る所で虐殺、強姦、掠奪が行われたのが昨日だとは。だが、その朝、地上は相変わらず狂気の連続、血の祭典が始まろうとしていた。ジャン／＼と羅が鳴り、胡琴が悲しげに、鼓が馬鹿騒ぎをしながら大街の空気をふるわせると群衆はもう気もそぞろになって、その行列に罵声や野卑な言葉を投げかける。楽隊の直ぐ後、仁ノハム、四ノハム、サビ。



身に糸も纏わない裸身。その白い皮膚には痛ましく縄が食いこんでいた。町から町を引きずり廻され、生きている身にはこれ以上の辱しめは無いと思われ様なことをされた。泥の様に疲れ果てゝいる肉体に鞭うたれ、彼女は何処へ引きずられて行くのであるのか？だが、彼女の瞳は相変らず澄んでいる。彼等は昨日まで南昌府に君臨していた高貴なものを蹴落し、辱しめることに夢中になっていた。今はもう裸体一つしか持たない、このなよ／＼した高慢ちきな女がどうなろうと、民衆は少しも腹が痛まないのだ……彼は颯々と手を振った。それが合図で、行列は王城前広場で止まった。わーっと喚声をあげて群衆が取巻いた。蘭芝の裸身がその輪の中心に立っている。確にそれは高貴と云う名に値いした。明の王族の家に生まれ、明の王族の妻となり、常に諸民の上に立つ教養を身につける修業を重ねて来た彼女。悪びれずに、すっと立っている姿は、神々しくさえあった。だが、今はその神々しいものを踏みにじる祭典なのだ。用意が整うと、数人の男達が彼女を大地へねじ伏せた。仰向けにして大の字に手足を拡げた。右の手にも一頭、左の手にも一頭、右足にも一頭、左足にも一頭、それ／＼馬が結びつけられた。その時、狂気のような楽の音が跳ね上った。パーンと爆竹の音。……「やつつけろ」いらだった陳宜の合図で四頭の馬が鞭打たれた。馬は躍り合って四方へ駆け出す。絹を裂く様な音を立てゝ彼女の五体が裂けた。四分した肉魂を引きずって尚も疾走する馬の後を追って群衆が我先にと蟻の様に集る。

もう一つ宮本氏の物から山窩の世界を描いた『月下の裸女』を紹介します。山窩の娘「ぎん」は掟を破った者として絞首されようとする場面を描いています。

縊の眼に窓の下をその時、山刃を腰にさした五人の男たちに廻ま

れて去って行く、ぎんの姿が映った。……今まで黙って歩いていた少年が急に大きな声を出した。見ると大きな岩の蔭に禪の様な白い長い旗が木の枝に結びつけられている。「あれこそは刑をつける合図だ。明日だと云っていただが」少年の顔が紅潮していた。二人が岩の蔭から頭を出して見ると、三十数人の山窩が並んで見守っているその前に、後手に縛られたぎんが目隠しをされて立っていた。その背後では権を中心にした五六人の男達が立木を一本弓なりに地上まで曲げて、その先端に綱を縛りつけているところだった。「あの綱をぎんの首につけて、おっ放すだ」勿論ぎんの体はぶーんと宙を飛んで、そして木の梢で、ぶらん／＼と宙吊りになるだろう。その光景を想像して、楨は慄然とした。思わず大声で喚いて飛び出した衝動に駆られた。その時、権が狂気じみた片目をきっと上げて、「一夫一婦の掟破った女め、思い知らせるぞ、やれッ」と叫んだ。

縛りの場面は多くないのですが、立木の先へつけてその反動で飛ばして絞首すると云うのが一寸変わっているのも書抜いて見ました。それに挿絵（山田弘）が良かったので、私には印象に残る一篇でした。挿絵といえど読切小説集に載っていた土師清二先生の『俠盗ふくろ組』の挿絵（石津博章）は、実に良いと思いました。白黒丈けでは、もったいない位の絵です。挿絵の御紹介が出来ないのは残念ですが、作品の中から縛り場面を書抜いて見ますから絵の方は、よろしく想像して下さい。

芝口一丁目の番所で、お徳は後手に縛られ、縄尻を柱の鉄環に結ばれている。八丁堀与力、糟谷金兵衛と、岡ッ引幸橋の伝五郎が、お徳の前で、一ぶく吸っている。「お徳さん、万助のお内儀さん」と伝五郎は、ギロリと上目で、お徳を見るのだ。お徳はがっくりと、うなだれているきりだ。「お前、お母と我鬼を何処へ隠した。



それを云って見な」「あの、それは」「それは？何処だ」「堪忍なすって下さいまし」「堪忍するの、しねえのと云ってるンじや無え。牢脱けをした万助の、お母と餓鬼の千太郎を、お公儀へ引取って置いてやろう」と伝五郎は与力糟谷金兵衛を見て、「旦那が云っておいでになる、あまり隠し立てをすると為にならねえよ」……「じや手前なにか、お牢役の人々が一家離散の憂目を見てもいゝというのか」「そんなこと、わたしは、わたしには、わかりません」「云ったな、よーし手前はやっぱり泥棒の女房だった。オイお徳、手前の口から万助の女房だと云った事を忘れるな、大泥棒の万助の女房なら、こうしてくれるんだ」と云うなり伝五郎腰を浮かせたかと思ふと壁に掛け並べてある六尺棒の一本を手にとって、「吠面を掻くな」と後手に縛った腕と背中の間へ、ぐいと突込んで、一捏ね、こねて「こうだ」「あッ」「こう、こう、どうだ？」「うッ」腕が折れ肩の附根が外れるかと思われ疼く痛み、お徳は反返った。苦痛で、ひきつったお徳の顔へ「カア」と痰唾を吐きかけて、「コノ外道奴」足をあげて、後頭部を蹴りつけた。パツタリ、畳に打ツ伏せになったお徳、後手に縛られているので堪らない。顔をビシヤツと畳に打ッ付けた。鼻を打ったか、舌を噛んだか、サツと血が散って「うッ」そのまゝ気が遠くなってしまうた。

(一旦家へ帰されますが、再び捕えられます。)

「お徳いるかい。伝五郎だ。旦那を御案内申して来た、開ける」「は、はい」家の内で、お徳の動く気配がして、裏口の戸がスツと開いた。……「覚悟をして手を廻しな」「えッわたしが？」「この間番所で、お



# 私のアイデア

ローソク責め(2)

甲斐仁参

役人の前で、お前の口から万助の女房でございませと云ったのが悪かった。お前も逃れらなくなったのだぜ」「そうですか」お徳は覚悟をして両手を後に廻した。伝五郎は縄を打った。そうして不思議なことには、猿轡を噛ましたことだ。伝五郎が後手猿轡のお徳を引ッ立て、裏口から出ると、松蔵が「火の用心」と云って破れ行灯を吹消した。こうして三人はお徳を守る様に多左衛門町の裏長屋を出ると、あたらしい橋の市詰の空地へ踏込んだ。闇の中に一挺の駕が待っていた。お徳を駕に押込んだ伝五郎は、それでも足らぬと思つたのか、お徳の両足を縛り上げた。どんなにされても、お徳は観念の目を閉じていた。「行ってくれ」と伝五郎。駕は上った。何所



へ行くのか。

最後に西川満先生の『紅衣の女鬼』から抜書きしましょう。これも中国の話で、皇帝の寵を奪われた皇后が、皇帝の亡くなるや、帝の寵妃であった戚夫人を虐殺する。女の嫉妬は怖いと云う一篇。

燕趙佳人多し、と謳われた邯鄲、たった一度しか行ったことのない美姫の街、だがそこに我子が住むかと思うと、戚夫人の夢は遠い邯鄲へ飛ぶのである。「それにしても、如意は、母がこのような憂目にあっているのを知っているであろうか？」男でもない、女でもない。これは人間ではなくて禽獣である。首に食い込む重い板枷のために皮膚は破れ、ひきづる鉄の鎖で、くるぶしは醜く腫れあがっている。鏡のないのが、せめてもの情であろう。垢じみた獄衣は破れ、そこからのぞく肌は埃にまみれて二目と見られない。これが嘗て漢の帝王の愛を独占し、雪の肌を誇った寵妃のなれの果と誰が思おう。石臼の棒を無感覚になった十本の指でつかみ、力なく押しながら夫人は歌った。「子は王となり母は虜となる。終日白をひいて、また黄昏……」……あいにく耳にしたのは呂太后であった。獄吏が戸をあけるのももどかしく、紅衣をひるがえして跳り込んだ太后は、鞭をふり上げて夫人を打った。「まだ、これでも歌うか？ 黙れッ黙れッ」幾度か風を切る鞭に、夫人は地に両膝をついたが、見る見る獄衣の背は鮮血に染まった。「ふん、お前は自分の子にたよって、このわたしに復讐しようとするのか、今にその子がどうなるか見ているがい」何を答えても、それは太后を怒らせるに過ぎない事を夫人は知っていた。激痛をこらえながら夫人は必死になつて心の中で叫んでいた。「周昌、どうか、あの子を守っておくれ」夫人の手が溶ける雪のように石臼の棒からはなれた。気を失ったのである。「水をぶっかけておやり、眼がさめたら、袋にいれて、私

のところへ、今日から場所を変える」いゝ棄てると薄い西日のさす中を、太后は去って行った。

この間に戚夫人の子、如意を毒殺してしまいます。

一度血を見て舌なめずりした呂太后は遂に女鬼の本能を発揮した。いわば、たゞこの日のために太后は晩年のすべてをかけて来た。と云ってもよからう。雲の少い日だった。ふりそぐ春の陽光に梨の花が雪のように輝やいた。そのまぶしさに暗い密室から引きずりだされた戚夫人は、思わず臉を押さえた程だった。これから展開する一大野外劇の立役者にふさわしく、太后は双龍を黄金で刺繍した真紅の衣で身を飾り、貧婪たる目であわれな餌食を凝視していた。夫人はすさまじい太后の気魄に身をすくめた。すると太后は食いつくように、「衣を」と命じた。かねて手順は整えられていたのだろう。宦官たちは一齊に夫人に飛びかかり瞬時にして、まともにするすべての布をはぎ取った。亡き高祖が珠玉と愛し、誰の目にもふれさせなかった、ふっくらと盛り上った美しい双の乳房が、白日のもと衆人の好奇の目の前にさらされた。羞恥で夫人は身悶えした。が、うずくまるうにも両の腕は左右から背後にねじまげられ、顔を伏せようとすると、うしろから髪をつかんでグイと上に向けられた。珍しく昨夜、浴を許されたのは、この残酷な余興に効果あらしめる為であったのかと夫人は、底知れぬ太后の行為に戦慄を覚えた。太后は梨の一枝を折ると、とがった枝の先で、なだらかなカーブを見せる瑪瑙いろの夫人の腹部をついた。「羞かしいか、だが、わたしが受けた恥辱の方が、もっと」太きいのだ。お前は、このいやらしい身体で、わたしから先帝を奪った。あるとき、わたしが天に誓っていった言葉をよもお前は忘れないだろう。その時がとうとう来たの。」「一思いに殺して下さい。」「あゝ、殺してやるとも



存分に辱かしめて、この手で、お前は先帝をたぶらかし、夜毎、先帝を抱いた、憎い憎い手、二度と男が抱けないようにしてやる」眼くばせを受けると宦官たちは、裸体の夫人を地上にねじ伏せ、肩の付根から両の腕を切り落した。鮮血が流れ、石榴のような切口が現れると、医者がすぐ血止めの手当をして、気付薬を飲ませた。「口惜しいか、腕なし、とてもよく似合う。ついでに足も切つてやろう。先帝の胫毛の肌ざわりを知った足、わたしの怨みのこもるその足」太后は、自分で自分の言葉に感動し、指さす手をブルブルとふるわせた。言語に絶する苦痛にのけぞった時、無残、足は二本とも腿の付根から切り落されていた。「これで死ねる」と思ったのに、悲しや、夫人は呼吸をふきかえした。医者を追いやった太后は、喉をひきつらせ、四肢のない夫人の胴体を蹴った。「まるで雌豚だ、豚そっくりだ、ごろごろと転がって、いゝ恰好だ。ふん何という目をする。その目をつぶしてやろうか……」太后は、やにわに駆け寄り、逆手に持った小刀を、ブスリと目につきさした。「もう見えなだらう」「見えます、よく見えます。如意」「嘘をつけ、先帝をとろかした目の玉は、二つとも、わたしの掌の上にある。もうお前は、色目が使えないのだ。見えなくて気の毒だから教えてやるが、こゝにある、このドロリとし青い薬は、お前を啞にする啞薬さ、啞にしたら、その次はつんぼだ。覚悟するがよい」発狂したかのように太后は天を仰いで笑った。

大分残酷なのですが、その割に盛上って来ないのは、戚夫人の苦しみが十分に書けていないせいでしょう。手足を切られた人間がその場で口をきいて、いられるか、どうか、そんなことも考えさせられます。此の書抜きの第一回分は、この位にして置こうと思ひ、後は次回に廻すつもりで本を片付けていましたら、本箱の下に敷いてあった古新聞に、鞭打ちの挿絵がある小説が載ってましたので、

早速写して見ます。新聞が二つに切つてあるので、何新聞か、作者は誰か分りませんが、挿絵は岩田専太郎氏でした。

「マスター」逃げようとする肩口を、もう一度ぐいっとつかむと、どんと横にひねるように突いた。小柄の梨花の体は声もなく、まるでマリのように傍のソファの上に倒れる。「ぬげ」低い声で張が云った。「はやくぬげ」梨花はもう、まったく抵抗を忘れていた。ぶるぶるふるえながら支那服をぬいだ。シュミーズをぬぐ、ブラジャーと、コルセット、パンティ、靴下……それだけの、あられもない姿になって、その雪のように白い肌が「マスター」哀願の泣声にふるえる。が次の瞬間、ピシッ、鋭く梨花の肌が鳴って、「あっ」梨花は床のジュウタンの上に倒れた。雪の肌に、一筋太く赤く、まっ赤な線がみるみる浮かんた。ピシッ、もう一度、梨花の肌が鳴って起き上ろうと、もがいていた梨花は、どっとまた床に倒れた。どこにかくし持っていたのか、張の手には革の鞭が握られている。能面のような無表情で張は革鞭をふり下す。ピシッ、ピシッ、梨花の肌はもう、いたるところ、まっ赤にはれ上って、床の上をのたうちまわって、いつか悲鳴もかすれた。

新聞の連載小説では前に読売新聞に小島政二郎先生だと思ひますが、『女の城』と云うのがありました。これにも終りに近く、縛りと鞭打ちが有ったと思ひましたが、記憶が薄くはつきりしません。

今回は探偵小説の縛り場面について私の本箱の中から少しばかり拾い出してみたいと思ひます。

(未完)



## 異説八百屋お七

## 幻想『炎の娘』

(前篇)

笛 地 佐 渡

## 第一場 寺の中庭

古風な塀に囲まれた寺の中庭に枝ぶりのよい松が点々と立ち並んでいます。そのかげから、小きざみに歩み出たのは吉三郎、紫紺市松模様の太振袖に精巧の袴、そのまゝ浮世絵から抜出た様な水もしたゝる若衆姿——そつとくぐり戸をあけようと手をかけたところへ和尚の声、

「これ、吉三、どこへ行くのじや」

それにハッとして二、三步後へ下ると、

「はい、あのウ……」と云いしづります。

「これ、吉、近頃、そなたの落着きのない素振り、それにそつと抜け出そうとする今の有様、呼止めれば驚く様子、その上、行先も云い難いとはどういうわけじや、あのお七が来てからというものの、吉三、急にそなたがよそ／＼しくなったのを考えると、これ、吉三、

そなたお七のところへでも行く気であったのであろうかの？」

「いいえ、そのような」

「では、どこへ」

「それは……」

「みよ！ すぐには答えられまい、何不自由ない寺の中、わしの用以外、他へ出ることはいらぬそなたじや、かくさずともよい、わしもその位のことには知っているわ、そうであるう？」

「……………」

「お七の来ない以前とは打って変ったそちのそぶり、そなたは別に気がつくまい、前と同じように振舞っているつもりであろうが、わしにはよく判る。わしとてそなたを恋う心がある以上、人を恋う者のけはいが分らずとして何うしようぞ、それ、その目、それはお七を恋うて魂の抜けた目じや」

「和尚様……」

「そなたも前にはよく仕えてくれた。今でもそのつもりでいるかもしれないが、わしはわしからそなたの心がはなれて行くのがよくわかる。それは当然、相手は浮世絵師にも描かれようという美しい女子じや、わしは結局片想いとなつたのじや、しかし今ではそなたなしでは生きて行けぬこのわしじや、お七のことはキッパリとあきらめてくれい、のう」

いつしか土に手をついた吉三は草の上に美しい両の袂を長くはわせ、指をつかえてうつむいたまゝ顔もあげられず、肩をわななかせています。

「たとえ、このわしがゆるしたとせよ、お七とそなたの間は決してそいとげられるものではない。のう、あまり深入りせぬうちにあきらめてくれい、さっぱり返事のないのは不承知か」



この時まで肩をふるわせていた美少年は、キッと顔をあげて叫びました。

「和尚様！ お許し下さいませ、私は、私はどうしてもお七殿の事は忘れられませぬ。お七殿を知るまでは、たゞ無心に何も思わず和尚様の御寵愛を受けて参りました私も、あの清く美しい乙女の姿と心に触れましてからはあやしく胸はおのゝき、心はときめき、真の恋というものを知りそめました。こうなりました上からは、私はもう弄びものゝこの身がおぞましく、いとわしく——和尚様どうかお慈悲でございます、お七殿と私の中を——」

「ならぬ！」

彼の言葉を聞くうちに、半ば哀願的であった和尚の顔からは、かすかなやさしささえも消え失せて、皆まで云わせずとなりつけました。

「そなたはわしの恩も忘れ、わしのこのあつき思いを裏切つて、弄び者がいやになったとまでぬかし居るのか、わしは、わしは、どうしたらよいのじや、すりや、どうあつても、——」

「はい！ お願いでございます。」

「くだい！ そなたは恋の恨みのおそろしさを知つていよう、わしからどうような目にあつてもか？」

「はい、たとえ、八ツ裂きになりましようとも、どのような折檻を受けましようとも、こ

の恋ばかりは……」

「憎い奴！ おゝ、その言葉通りに折檻してやる。こい！」

何事も思うまゝにならぬ事なき我儘坊主は怒髪天を突き、こうわめくと、矢庭に吉三の仕えた手を握り、ぐいぐいと引き立て、落ちていた荒縄で、もだえる美少年を後手に縛りあげ、縄尻を松の幹にくくりつけるのでした。そうして、有合せた棒切を拾って狂気の如くその哀れな獲物をむちうちました。今や修羅道に陥ちた和尚は悪鬼の形相物凄く、振袖姿の美少年を責め立てるのです。ピシリピシリ打たれる度に身悶える美少年の振袖から紅の色がこぼれ乱れるのも和尚の氣持をいやが上にかき立たせ、なやましい迄に嫉妬がつり、打つ手にも力が加わります。

「それでも、それでも、そなたはお七を忘れぬというのか」

美少年は苦しい喘ぎの下からかすかに「はい」と答えます。今や、瞋恚のほむらにもえた和尚は狂おしくむちを振りあげつゝ、呪いの言葉を吐くのです。

「憎い奴め、憎い女め、わしからそなたの心を盗みとつて行つた、あの憎い女め、焦熱地獄に陥ちよ、はりつけにしても、火あぶりにしてもあきたらぬ女め——」

といゝながら、自分の言葉にハッと何かを思い当つたとみえて、

「お七さえこの世になくなれば、おゝ、そうじや」

とニタリと笑いを浮べ、しばしは少年を打つのも忘れて、天の一角をにらんで立ちつきます。哀れな美少年は、既に失心したのかぐったりと前にのめり、痛々しく縄目がくいくんだ双の手に、赤く血さえにじんでのでした。

## 第二場 お七寢室

或る日、お七の家を訪れた和尚は、鄭重に家人に迎えられました。

「どうも、ようこそお越しで」

「大分、無沙汰したで、皆変りもないかな。」  
「はい、ところが娘の七がどうも近頃氣うつ病にふせて居りますので、どうしたものかと困つて居ります。丁度縁談などもございすことゝ困つて居るのでございす」

「そう、わしもそのことを聞いた故、今日は無沙汰のわびがてらに、お七殿の氣うつを散じてあげようと思つて参つたのじや」

「それはどうも有難う存じます」

「いや、人の悩みを解くのは坊主のつとめ、医者もそうじやが、医者や薬で治らぬ奇妙なつきものやたゞりの病もあるものじや」

「はい、まことに。実は私共も誰か行者様におたのみしよつかと思つていた矢先、大和尚様がじき／＼御手下下さるならこの上もない



幸でございます。まず／＼こちらへ」

「うむ、まあ、わしに委せておきなされ、では、早速娘御の部屋へ御案内願おうかな。」

「それが、床をのべ放しのね乱れたまゝ、今すぐ着換えさせますれば、こちらでしばし御休息を」

「いや、その心配には及ばぬ事、病人はねてゐるのがあたりまえ、坊主も医者と同じ事、そのまゝでよい。早速病状拝見の上、あらたかな加持のまじないなどして進ぜようぞ」

「はい、それでは——」と先に立つのを

「うむ、そのように大勢で連れ立って行くのはかえってよくない、殊に氣うつ病とあればな、当家ならわしも間取位は心得て居る、勝手知ったる他人の家とでも云うものか——所で御娘御はどこにふせて居られる？」

「はい、離れの東屋でございますが」

「うむ、そこならわしも案内じや、一人で参じよう。」

「でも、何か失礼でもございますと。」

「そのような心配はいらぬ事じや、殊に一子相伝穴かしこ、真言秘密の秘法を行う故、附添は無用でござろうぞ」

「では、よろしく御願ひ致します。」

そういわれて両親もさからえず、娘一人の寢室へ他人を一人で入れることはどうも懸念が残っていましたが、とにかく男とは云え老僧のこと、しかもじっこの間柄にて信用も

厚い。そこでもみ手をしながら見送ります。これが失敗のもとゝは知らずに。

こちらはお七、家が新築されて戻って来ましたが、普通ならば前にもまして広大に、木の香も新しくなった我が家、むしろたのしく住める筈なのに、すっかりふさぎの虫にとりつかれ、ねては夢、おきてはうつゝ幻、乙女

心の一すじに思いつめたる恋人の、その面影の忘れず、さりとて家の人々に、悟られてはと氣を使う、そのためついに病の床——今で申せば神経衰弱とでも申しましょうか。ひたむきなればこそ、純な心であればこそ、典型的な燃ゆる思いに身をこがす。いかにして人知れず彼のひとと遭い、思いのたけを語ろうかと、そればかりに心を千々にくだきますが、千々に碎けば碎くほど、まとまりのつかぬは考え事の常、たゞ悩ましいばかり、理性的でないとか浅はかだとかの評は当りません。その上約束しておいたあいびきの日に、彼は和尚にさえぎられて遂にまでくらせど来ぬ人となり、そのやるせなさがつてか翌日から臥つてしまったのです。今も今とて悩ましさに転輾反側していると、ガラリとふすまがあいて人のけはい、時ならぬ人のおとずれに目をやれば、乙女心の本能的にいやらしく思うあの和尚、さりとて客人ともあれば起き上つていずまいを直そうとするのを、

「いや、そのまゝ、そのまゝ、病人はねてい

るがよい。おもとが病氣とやらで、わしは今日、氣散じをして進ぜようと思つて参つたじや。」

坐り込むと、何のおとないもなく突然入つてくるのも迷惑なのに、さもなれ／＼しい嫌らしさ。でもお七は女、ていねいに礼を返して、

「それはわざ／＼申訳もありません、このような姿でお恥しい、一寸失礼をし」

と、友禪もようの華麗な鏡掛をはずして鏡に向い、みずくろいを始める。世の中は三日見ぬ間の桜とて、あれからずっと面やつれして別人のようではありますが、物思ふ人のうれわれしげな深味も加つた上、心にひめた情熱のおのずから現われるのも争われず、一寸の間につきり大人びた、そのなまめかしさは邪恋に狂う男女をかき立てずにはいないのです。燃えるような緋じりめんの長襦袢一枚で、二の腕もあらわに、おくれ毛をかき上げるその姿態のあでやかさに、和尚はしばし恍惚とこの娘に対する憎しみも忘れて見惚れるのでした。が、彼女が一通りの化粧をすませ衣桁に掛けた美しい振袖を着ようと起ち上つた時、彼はハツと我に返つて、あわてゝそれをさえぎりました。

「これ／＼そう他人行儀にせずともよい。わしは今日は客ではなく医者様じや、これから診察して進ぜようというので、着たものをぬ



いでもらわねばならぬ所じや、化粧などもせいでよかつたのじやが、そなたのあまりの美しさに、年甲斐もなくついみはれてしまったじや」

とこれだけは悪びれずに本音を吐きます、さすがにお七も「まあ！」とほゝをそめて恥かしがりましたが床の上に坐り直します。和尚はさすがに老獪、直ちに謹厳な顔に返ってずいと近より「手を」と求めて脈をみます。なに、もっともらしいそぶりながら実は何も判りはないのです。でも娘はイヤだとムゲに振切るわけにもゆかず、されるまゝにしています。「ウム」と坊主は首をかしげて、

「これは医者や薬じや治るまい、わしが有難い秘法の加持を施して進ぜよう。」

と後へまわり、「さあ、目をつむって」と有難そうな声を出す、そして何やら口の中でブツ／＼唱えつゝ、すぐ目の前にある乙女のふくよかな体を穴のあく程覗めまわし、そのうつむいた白いえり足と曲線に視線を釘づけにして居ましたが、やおらその背に手をふれて静かに撫で始めました。お七は目をつむってうつむき何やら不安な感じで居ましたが、矢庭に背中へ手を触れられたので、ピクツと体をふるわせました。でもやはり逃げ出しもならず、これも加持の秘法なら仕方ないと我慢しています。和尚の方は乙女の肉体から発散する若い女のムン／＼した体臭にむせ乍ら

次第に声もたかまり、さする手に力が入るので、緋じりめんの肩もはだけて、むっちりした双の乳房までむき出しになって来ます。

お七は反射的に身をちぢめ、はだけた胸をかき合せ、必死に男の手から逃れようと

「はなして、和尚様、何をなさるのです／＼はなして／」

とあえぎ／＼叫ぶ、男もあえぎ乍ら、

「これが加持の秘法じや、そのうちとてもうっとりとなつて来るのじや」とうめくように云います。

「うそです／＼ そんな／＼ 放して／」

と前を乱して身をもがく、その必死の力に勿論男はかよい女の方に負ける筈はありませんが、それでも本能的に彼女が吉三を恋する操の固くて破れぬのを直感するや、腕をはなして

「お七殿／＼ でかした／」

とニコリ笑つてもとの座へかえります。

何と又すばやに君子の豹変／＼ お七はその急変振りに二度びっくり、あわてゝ居ずまいを直し、和尚の顔をみると、

「いや、お七殿、流石はあっぱれ、立てた操も固いものじや」とじつと顔を見つめます。

「え？」

とお七はいぶかしげに、もしやと胸を痛ませると

「うむ、この病では、わしが加持の秘法を施

しても治るまい。じやが、必らず治るよい話をお聞かせしようぞ、お七殿、吉三に会える秘密の法じや。」

とズバリ云い切ると、

「どうしてそれを／」

と思わずにじり寄るお七

「そなたは誰も知るまいと思つて居ようが、わしはとつくに知つて居たのじや、然しそなたには縁談もあること、吉三にもいろ／＼さわりがある、この恋はまこと遂げ難きところじやが、人の悩みを救うは坊主の役目、何とか一目でも人知れず会わしてやりたいものと思つて居たが、やつとよい考えが浮んだのでこうしてやつて来たのじや。つまりそなたの心をためした上、このとつておきの秘法をさづけようとしてじや。しかし今そなたの固い心も知れた、驚かせてすまんだが……」

終りまで聞かず、恋人に会える唯一つの方法を知らせるというこの坊主に先程までの憎さ恐しさも忘れて、すがりつきたい気持で聞くのでした。

「して、その秘法とは？」

「うむ。」

和尚は勿体振つて肯くと、

「よい、他言は無用じや、そつと耳を」と桜貝のような美しい耳に唇を寄せる。それから何が語られ、何が約束されたか——その後お七の病氣は直ちに快方に向い、



「さすがは大和尚様の加持秘法よ！」  
 といよ／＼信仰をましたというのは皮肉な  
 話であります。

### 第三場 責の白州

お七取調の何回目かの白洲が開かれていま  
 す。お七は美しい黄八丈の振袖姿で後ろ手に

縛られ、その裾を長く白州に曳いてうつむい  
 ています。

そこへ与力同心の着座と共に、

「これ女、おもてを上げい！」  
 と声がかゝります。なおもうつむいている  
 と更に「おもてを上げい」と大きな声、下人  
 が六尺棒を美少女のあごにあてがうと、手荒

くグイと仰向かせます。その可憐なやつれた  
 顔はかすかに左右にふるえ、目頭はうるんで  
 います。

「これお七、お前は今までずっと白を切って  
 来たが、もうよい加減に申し上げたらどうじ  
 や、あまりお上に手数をかけるものではない  
 ぞ」

しかしお七は答えません。病床で  
 和尚に、

「吉三に会うには、みつからぬよう  
 につけ火をするのじや、若しみつか  
 っても、白状さえしなければ罪は決  
 らぬ、そのうちわしがうしろから手  
 をまわして必ず何とかしてやる」

とそゝのかかれた言葉が忘れられ  
 ず今までつらい拷問にたえて来たの  
 でした。今こゝで白状してはその苦  
 労も水の泡です。お七のこたえがな  
 いので、与力は同心にめくばせす  
 る。同心は六尺棒に「打て」と合図  
 しますと、下人はさゝら竹でお七の  
 脊を情容赦もなくピシッと打つ、  
 「あゝ」と叫んで身をもむお七――  
 「まだ白状せぬか、つゞけて打てッ」  
 と同心

それにつれて下人のむちが重ねて  
 可憐な肩へ振り下され、彼女は身も  
 世もあらず「あゝ、あゝ」と肩を波





打たせます。

「打てッ」 ピシリッ

「あゝッ」

「打てッ」 ピシッ

「あれッ」

それが数回続いて、後れ毛が白い襟足に乱れはじめる頃、

「姿に似ず情のこわい娘じゃ、もうこの位の責め方では駄目かも知れぬ。吊れ、吊れ、」と同心が叫びます。「ハッ」と答えた下人が喘いでいるお七のえり首をじやけんにつかみ

「立て」と引きずります、お七はよろ／＼と立ち上り、なよ／＼と太い松の枝の下まで追いついて行きますと、下人が長くひいた縄尻を枝ぶりのよい松の枝にかけてスル／＼とたぐります。縄が次第にたぐられて、お七の縛られた後手と、枝の間がピンと一直線になると同時に、お七の体はグイと前こゝみになり宙に浮き、くくられた白魚のような指がはげしくうごめいて、思わず「あれッ」と叫びます。下人はそんなことには少しもかわまわず、グイ／＼縄を引き、お七の体はそのまゝの形で吊し上げられて行きます。黄八丈の振袖からは、緋ちりめんの長襦袢がバラリとこぼれ落ちながら――

「女、苦しいか、それ程苦しくとも、まだ白状せぬか」と与力。同心の

「えゝッしぶとい女め、打てッ」の下知に応じてピシリ、ピシリと打つ。吊り下げられた花束は宙にキリキリ舞いして、松の枝もきしみます。吊られただけでも、今までに倍する苦痛に、喘ぐ息さえはずましてもだえている美少女は、この一撃で身はしびれ、骨身にこたえる苦痛に、思わず

「あれッ、ゆるして」と叫ぶ、

「うむ、白状するか」

「ハイ、申上げます、私がつけ火をいたしました。」

とかすかに答える。ついにかよわい花は暴力の前に屈したのでした。白州のすべての目が息ずまるような、責めさいなまれる美少女の上に注がれていた緊張のクライマックス、食い入るように悶える美少女をみつめていた与力と同心はホッと息をついて顔を見合わせましたが、すかさず同心、

「そのわけはどうじゃ」と問いかけます。

「はい、それは――」と云いかけた彼女の耳に「万一これが明るみに出れば、わしも吉三も同罪ぞ、わしはかまわぬが、いとしい吉三も縛られるのじゃ、これだけは云うてはならぬ。」との和尚の声が聞えて来るのです、とてもこれだけは云えないと口をつぐみます。

「どうしたのじゃ、それは――」

「それは、それは、存じませぬ」

と蚊の泣くような哀切の声――

「なにッ」

と同心は再び眉を逆立て、

「打てッ」と叫ぶ、しばらく後ろに下つていた下人がやおら起ち上り、又も無慈悲な折檻を加えます。

「あゝッあれッ」

と宙にあがく美少女の顔も、肩も、胸も、指も、苦しげにおののいて、吊り下げられた振袖も、それからこぼれる紅色も、はげしく乱れゆらく、その哀れさ、美しさ――

それでも悲しい人の名だけは出すまいとするそのいじらしい努力には、鬼神も泣くであらう。

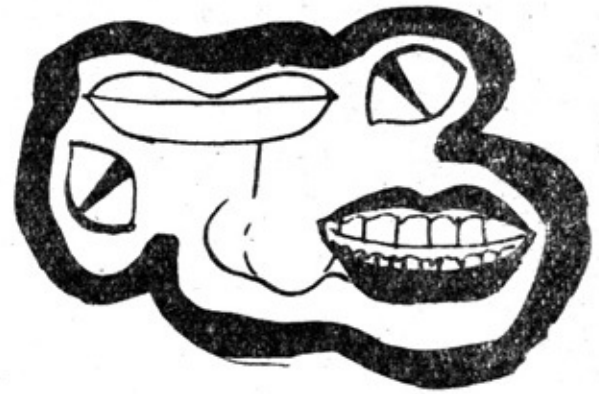
「つゞけて打てッ」と同心が下知するのを、「待てッ」と与力が押止めます、罪人を責めることには何の哀れも感じない与力も、さすがにこの可憐な美しさをこれ以上責め苦しめるのに耐えられなくなったのでしようか、

「もはや罪は白状したのじゃ、理由はそれほど追及するにも及ぶまい。その美少女をそれ以上苦しめるのも哀れじゃ、枝より下して口書爪印の上、牢へ下げて手当てしてつかわせ」と云い残して、つと立ち上ります。

(未完)

このあと、第四場「火刑場」第五場「寺の土蔵」の二章がありますが、余り長くなるので次回にいたします。





## 少年矯正院体験記

## 重 屏 禁

獄

収

一

少年の頃、全く身に覚えのない事を拷問の結果自白させられ、放火の罪名で少年矯正院に送られた事については、大分以前の本誌に色々書かせていただきました。その後、他の方により刑務所の体験記が数多く載せられ、刑務所の様子が詳しく述べられて居りますが、今度は私が矯正院在監中に受けた懲罰の内、特に骨身にこたえたものについて書いて見ました。

私は少年の頃より得心のいかない事については人に頭を下げるのが大嫌いで、そのために今日に到るまで損をしています。本当に放火をしたのなら、拷問にかけられなくても卒直に白状し、その結果、刑務所に入れられても素直に刑に服して罪を償った事でしようが、全くの無実ですのによく調べもせず拷問

問のため精神が朦朧としているとき、犯行を教えこまれて犯人にされてしまった口惜しさが、日を追うにしたがって激しくなり、何のために刑を受けたのかという気があるので、真犯人があがり私が無実であることがわかり、裁判のやり直しの結果無罪になるまでの約三ヶ月間、矯正院在監中は罰は凡て受けたといつていい位反抗的でした。現在では大問題になることでしょうが、昔は、特に戦時中はお上にも時には誤りはあるので仕方がないと諦めるより方法がなかったのです。

私の入れられた矯正院というのは日本内地ではなく某植民地にあったからこんな名前でしたが、日本内地での少年刑務所と異なるのは収容者（少年囚）の服装と戒具（少年囚につける刑具）が異っているだけでした。日本の

内地では少年刑務所を矯正院といったわけですが。私が重罰を受けたいきさつについて書きます。

戦時中は学校等では、必ず軍事教練を受けなければなりません。矯正院でもやはりありましたが、一般の学校で行うものと同じなのは一級の少年だけで、二級、三級の者は徒手教練のみで、四級の者は徒手教練とはいえない変則的な四級独自の教練でした。四級の少年とは、最も成績の悪い者ですが、全部で三十名足らずの人数でした。そして一級の少年が六人助教としてつきました。いくら一級の少年といっても少年囚には変わりありませんが、一米位の竹の笞を持って四級の少年をびし／＼と鍛えました。四級の少年の服装は、赤土色のランニングシャツとパンツだけ



で殆んど裸に近いものでしたが、一級の少年の服装は普通の学校の教練服と区別が付きません。四級少年を五名宛、六グループに分け、一グループに一名の助教がつき、全体を二名の看守が取締るといったものでした。教練を行う場所は、矯正院外の苦役農場の隣りの約三千坪の鉄条網の張り廻らした運動場でした。時々、一般の人が眺めている事もありました。その様な時は非常に恥しい思いをしました。特に同じ年頃の少年に見られることが一番つらいことでした。

教練は先ず五名を四歩の間隔に並べて「気をつけ」「休め」から始まります。「休め」は足を出すのは同じですが、手は後に廻して交叉して組みます。「気をつけ」は出した足を引きつけ、手は後に組んだまゝ上にあげ、正面を直視する。これを繰り返して三十分もやらされれば、全身汗だくになります。少しでも姿勢をくずせば助教の答が飛びます。「右向け右」「前へ進め」等は足の動作は同じですが、手はやはり後に組んだまゝです。歩調を取って歩く場合等とはとてもつらいものです。一人ずつ繰り返して三時間もやらされるのです。一週三回教練がありました。教練に名を借りた苦役でした。入獄してから教練をやらされて五回目位だったと思いますが、私ばかりに助教が答を振りますので大変腹が立ちましたが、手向いをすれば大変なことに

なりますので、我慢に我慢を重ねていました。私より年下の助教は、終りには腿をいやという程蹴飛ばし、倒れた私の顔をズック靴で踏みつけました。さすがの私も我慢が出来ず、かっとなって起き上ったまでは覚えていますが、後は無茶苦茶に相手をやっつけたので、はつきりした事は覚えていません。体力的に秀れている私に力一杯、体当りをされた助教はひっくり返りましたが、私は所かまわず殴りつけて、完全に相手を気絶させました。遠くから見ていた看守は飛んで来て、「何をするか」と怒鳴りながら私を取りおさえようとなりました。他の少年は命令なしでは動けないので、たゞ驚いて見ていただけです。気が顛倒した私は、今度は看守にまで手向いしましたので、看守はピストルをかまえて「撃つぞ」と云いましたので、私は、はっと我にかえり急いで答を捨て両手を上にあげました。さあ、それからが大変です。散々びんたを取られ顔がはれ上り、直ぐ捕縄で嚴重に縛り上げられ九号監舎に送られました。この九号監舎というのは、少年囚の犯則等に対する取調べ及び処罰を受ける処です。縄つきのまゝ取調べられました。この時は確かに悪いと思いましたが、卒直にありのまゝを申し立て拷問も受けずに取調べは終り、捕縄を解いて呉れました。しかし厳正独居を申し渡され、少年囚達から恐れられている九号監舎

の独房に入れられました。厳正独居というのは、約一間四方の監房の板の間に正座させられ、一寸でも姿勢を崩すと罰が加えられるのですが、翌日、遂に足が痺れてどうにもならず、体をくずした処を見つけられて、罰として足どめ縄をされました。写真の様に縛られましたが、非常に苦しく十分もすれば全身汗と油でまみれました。(写真略)

その翌日、嚴重に捕縄をかけられ、院長(典獄)の前へ連れていかれました。散々叱られた挙句、五日間の重屏禁を申し渡されました。又、附加罰として減食五日間、懲鞭三十を申渡されました。そして直にその日より執行されました。重屏禁とは、光の全く入らぬ監房に寝具も何も与えないで入れられる事で罰としては一番重いものです。現在も刑務所に残っていますが、主として脱走囚への罰が主です。懲鞭は答打ちの一種で、日本人以外の人種の軽犯罪者、及び日本人を含めて少年院、矯正院、刑務所に入れている受刑者に対し行われたものです。先ず全裸体にされ、手が絶対に抜けない様に後手錠をかけられ、二本の皮ベルト(巾約二センチ位)を櫛の様に両肩よりかけ、尾錠は丁度、犬の首輪の様に錠を下され、背のバンドの交叉している部分に後手錠を固定されました。今までの緊縛と違い余り苦しくありませんでした。次に医者

者の診断を裸体のまゝ受けました。医者が



「おい頑張れよ、少々体にこたえるけれど、今のお前の体力では、大丈夫だから心配するな」と申しました。変な事をいうと思つていると、やがてその訳がわかりました。間もなく執行室へ連れていかれましたが、看守が便器を持って来て部屋の中ではこれに用を足す様云いました。この監房は窓は一つもなく全くの暗室で、広さは一坪位です。小さな通風孔がありますが、光は全然入りませんでした。三十分毎に看守が巡回して来て、監視孔より懐中電灯で照して監視します。中は物凄く暑くじつとして居られない位です。暗やみの中で坐っていますと、不安定な気持と焦りで気が狂いそうになりました。その苦しみに堪え切れず看守に一生懸命あやまりますが、そんなことで許されるわけはありません。せめて手だけ自由にしようと思いますが、普通の縛り方と違いどうする事も出来ません。食事は一日二回、握飯を二つ当て支給されます。これも手が使えませんので、犬の様に口だけで食べなければなりません。夜は正坐する事は許されますが、手錠はかけられたまゝです。満足にねむられず、うとうとするだけ。やっと朝になつたらしいですが、何時頃か時間が全然わかりません。その日より懲鞭が加えられました。先ず黒い布でしっかりと目隠しをされましたが、これは別に苦痛を与える為ではなく、急に明るい場所へ出る

と卒倒する事があるからです。重屏禁中の者が他の罰を加えられる場合は、必ず目隠しをされます。「出る」と云われて右の二の腕を掴まれて歩かされましたが、やがて浴場らしき処へ連れていかれました。そして革バンドをはずしてゴムホースで水をかけられました。いかに少年囚とはいえ、やはり体を悪くすることを極力避けるためだと思います。体の隅々まで石鹸でよく洗つてくれた後、又、元通り革ベルトをかけられ次の場所へ送られました。こゝでは一番最後に見たのですが、甘守台に縛られました。これは刑具が甘という字に以ているからだそうです。土台の木へ二本の四寸角の柱が立って居り、五尺位の高さに横木が学校の平行棒の様にあり、受刑者の胸の位置がそこへくる様に固定して縛られるのです。普通は両方の手も縛られるのですが、重屏禁中でしたので両手は後手錠にかけられていましたので、胸と足だけ縛られました。やがて、「いくぞ」という声と共に答がびしりと尻に喰い込みました。その痛いことはたとえ様もなく、焼火箸を何本も尻につけられた様でした。二つ三つ位までは覚えていますが、後は氣を失つてわかりません。この答は二尺位の皮の答を十二本束ねたものです。一日、八つが日課でした。氣がつくと又、元の部屋へ入れられていました。部屋の中は、懲罰を受けている間に他の少年囚によつ

て掃除されていました。先程の懲鞭によつて、尻が焼ける様に痛むので正座することも出来ません。両手が縛られているので手をつくことも出来ず、無理に尻をつこうとすれば七転八倒の苦しみです。看守は始めは喧しく云いましたが、余り苦しむのでうるさく云いませんでした。この様にして四日過ぎて後、一日で罰が終ろうとした時、どうにも我慢が出来ず突然大声をあげました。そのために防声具を嵌められました。一刻も早く暗闇の世から逃がれたいとその事ばかり考えているので、僅か五日間が何カ月も経つた様な気がしました。苦しみ悶え乍らやと刑が終り、医者の診断を受け二日間の苦役免除となり、独居房でねかされました。始めは薄暗くし、次第に明るくするという方法で、その間、答の傷跡も治療され、事件以来、十日過ぎてやっと元の処へ帰されました。この罰が骨身にこたえ、それ以来はおとなしくしてました。その後、教練の時間に問題の助教を見ると、何となく親しみが持てる様になり、助教の方も「重屏禁はつらかったろうなあ」等と話しかけてくる様になりました。兎角、重屏禁は私の体験した罰の中で、肉体的にも精神的にも骨身にこたえて最も苦しいものでした。今でも當時を考えると恐しくて身振いがする程です。



△ある女性から編集長への手紙▽

恥　し　い　夢

泉　か　よ　子

編集長様

私の手紙御覧下さいましたでしょうか。

若い女の身として、あられもない縛り姿の写真モデルを志願しまして、さぞ、はしたない女とおさげすみでしょうか。

手紙をさし出した夜、ひとり寝の床で、あれこれ考えて居ますと、今更に亡き夫が恋しく、楽しく縛られた数々の思出がよみがえってきてまして昂ぶる気持をどうすることも出来ません。これが男の方ならばまた色々な慰めもあるでしょうが、女の身の悲しさ辛さしみじみと涙がこぼれます。

眠れぬままに、一番好きなレース飾りのつ

いたナイロンブラジャーを胸につけ、華奢な

ナイロンパンティーズを腰にはいてみますとびったりと肌をしめつけて好い心地がします。

鏡台に向ってお化粧がしたくなりました。

二、三日前パーマをかけたばかりの髪が私の気にいった形に波打って嬉しい。白粉も濃い目に、口紅は思い切りたっぷり塗ってみました。

美しく化粧が出来上ると、筆筒の一番奥に秘めてある秘密のオモチャをそと取り出しました。冷たい感触、銀色に光る鎖です。

静かに手首に巻きつけると自分で後手に縛りました。本当に縛るものではありません、手首にからむのであとでまたひとりで解くので

すが、少し手を動かしますと鎖が手首の肌に喰い入って何とも云えない感触です。

自分の縛られた姿を鏡に写して眺めようと鏡台の前に歩みよりますと——白のブラジャー、ピンクのパンティをつけ一人の女が後手に鎖に縛られている——それは紛れもない私自身の姿です。

その時です。

その時私の背後に黒い影がうつりました。ハッとして顧えると、まあどうした事でしよう。覆面をした背の高い男の姿！

たしかに部屋には鍵をかけておいた筈なのに、いつの間に入ってきたか煙のように音もなくあらわれた覆面の男！思わず声をあげようとしめすと、黙って人さし指を覆面の口あたりに立てて声を出すなど合図し、しかも片手には短刀が、私の胸のあたりをさして向けられているではありませんか！

咄嗟に声がつまって助けを求めることが出来ません。あわてて手で防ごうとしますと、鎖がからまって外れないのです。平素ですと簡単にひとりで解いたり、また結んだりしているのですが、まのあたり侵入者に短刀をつきつけられてあわてたせいでしようか、鎖は



手首に喰入るばかりで自由がききません。

声も立てることが出来ず身をもんでいますと、侵入者は矢庭に私の背にまわって手首の鎖を解くかと思つたら、きつちりと縛りあげてしまいました。

「何をするのです、ほどこいて下さい」

始めて声が出ました。

侵入者は黙つてもう一度短刀をつきつけると、左手で小さな鍵を見せつけました。

まあ、私を縛った鎖の結目に絶対解けぬよう錠をかけたのです。私は身もだえしましたが、ただ鎖が手首を締めつけるばかり……。

侵入者は暫く私の鼻の先で鍵を弄んでいましたが、黙つてポケットに藏いました。それからドキドキと光る短刀の抜身を私の頬へあてて私の目の前に見せつけました。冷たい金属の感触に、私は思わず全身がびくりと痙攣しました。侵入者は、そんな私に微笑みながら、そしてもういちど指を口のあたりへ——

声を立てたら胸のあたりを突き刺すことを示威するのでした。私は再び口が涸れて声が出なくなりました。

す。しかもブラジャーとパンティースを纏っただけの裸も同然の姿で。それから先、救いを求める声を出せば出す機会は何度かあったのですが、私は啞薬を飲ませられたように声がつまつて出ませんでした。ただ時々溜息をつくと、小さな声で哀願するだけでした。

侵入者は背のスラリとした青年で顔下半分覆面して居り、眉の秀でた眼が燃えるようにした。黒いセーターに黒いズボンをはきこなしています。少し長目の黒い髪が乱れて男にしては色白の額に垂れかかっています。佐田啓二のような感じの青年です。

瞳がぶつかるやうな青年は黙つたまま左手で耳を触りながら指さします。はじめは何のことかわかりませんでした。イヤリングの事のような気がして、

「イヤリングなら、鏡台の左の袖抽出にあります」

と申しますと青年はニコリ目で笑つて鏡台の抽出を抜き出すと、四つ程あるイヤリングの中で金色の金物の下に水晶のドロップの下がつた一番華やかなものをつまみ出しました。そして私の左右の耳にイヤリングをつけました。私はじつとしておりましました。

次に首に手をまわして首飾りを示します。私は黙つて姫鏡台の抽出を目で示しました。私は首飾りを三つもっています。どれを取出

すかと見ていますと、水晶のキラキラ輝くネックレースを取出しました。そして私の首に巻くのです。私は思わず頭を下げて、後襟首でネックレースを留め易いようにしました。青年は私を一層美しく飾ろうとしているかのようにです。

それから今度は足を指さして靴下を求めます。私は自分の素足を見られるのが恥しいので、黙つて首を横に振りますと、青年は強く睨み繰返して更に足を指さします。

とうとうあきらめて、

「ストッキングは箆笥の二番目」と教えしました。青年は黙つてストッキングを取出しました。私の一番好きな肌色の薄いナイロン・ストッキングです。

彼は黙つてストッキングを私の足にはかせようとしています。

「お願いです。ストッキングは私が自分ではききます。自分ではききますから手をほどこいて下さい。自分ではききます」

「本当？」

という風に彼は目で問いかけました。

「ええ本当に自分ではききます。それからまた縛っていただいて結構ですから、ちよつとの間だけ鎖を解いて下さい」

「本当？」

また目で問います。



「本当です。必ずもう一度、縛っていただ  
きますから、お願い、ストッキングは自分  
ではかせて下さい」

ニコリ笑うと彼はつかつかと背後にま  
わり鍵を開いて私の鎖を解いてくれまし  
た。

私は急いで——何か急いでしなければな  
らないものの様にストッキングをはきまし  
た。薄い肌色のストッキングは秘かに自分  
で自慢にしている伸びた脚線の私の足をび  
ったりと包みました。ストッキングをはき  
了えると、自分でガーターを出してとめま  
した。外国の写真にあるような、細いベル  
トを腰に巻いてその吊紐につるガーターを  
用意してなかったことを口惜しく思いまし  
た。仕方がないので輪のガーターで金色の  
金具のついたものをピチンとはめました。

「あの、シユミーズを着たいのですけど、  
いけません？」

青年は黙って首を振りました。

「おねがい！」

「……」

青年は無言です。

「では、ちょっと待って下さいね」

私は大急ぎで鏡台に向い、パフを叩きまし  
た。先刻濃いお化粧をしたのが上気して自分  
ながら化粧映えがしたと思いました。



「では、どうぞお縛りになって……」

「……」

彼は黙って足先を指さします。

「エッ？」

彼は靴をはけと命令するのです。

「あのどちらにしましょうか？」

私は白のハイヒールと赤のを出してみせま  
した。



彼は黙って赤のハイヒールをとると靴底を奇麗に拭いて私に差出しました。私はその踵の細く高いハイヒールをはき了ると

「これでよろしくて？」

「……」

「では、どうぞ元の通り縛って頂戴、でも痛くしちやいやよ、それから縛ったあとで私をひどく苛めないでね、お願い」

私は少しおしやべりになって両手を後にまわして揃えました、彼が縛り易いように。

私の手首にまた鎖の感触、二巻き三巻き、私の手首が縛られてゆきます。ア、カチリ！微かな音がしました。私の手首に再び錠をかけたのです。男の手で。

「その錠を見せて頂戴！」

「……」

彼は黙って手の掌に錠をのせて近づけました。銀色に鈍く光る錠。よく読めないけれど数学と英字が刻んであります。

WHITE SLAVE A—369

MISS KAYOKO J 21

そんな風に刻まれてあるような錯覚がします。

「あの、これから私どうされますの、こんなひどい事をなさって、どうして黙ってばかりいらつしやるの？」

彼は口をきくなど指で示しました。そして室の隅から——それまで迂濶にも気がつきま

せんでしたが、彼が自分で持ってきたらしい靴をとり出すと中からカメラが——彼は黙々と三脚を引伸ばしカメラを据えます。

ああ、私は写真にうつされるのです。

「いやよ、恥しいわ、写真なんかとるの」

私は縛られて立ったまま身もだえ足踏みました。あの昼間、編集長様に手紙をさしあげて、縛り姿のモデルにしていたのだきとお願ひしたこと等、忘れてしまったように身もだえしました。でも矢張りそれは小さな声でした。決して外へもれるような大声を出しませんでした。

それよりも若し外から人が入って来て、自分のこんな姿を見られたらどんなに恥しいことでしょう。

「あの、扉の錠はかかっていますか？」

そんな矛盾した言葉を申しました。

彼は黙って扉の錠を点検しました。それから私に壁ぎわに座れと目で命令しました。私はもういちど哀願の眼差しを彼に送り、それから素直に命令された通り床の上に座りました、ハイヒールをはいた儘で……。

彼は電灯の光を私に向け、黙ってカメラをのぞいています。

摺硝子の上に、私の姿が小さく映じています。後手に鎖で縛られた私の姿、

もういちど繰返しますと、燦く水晶のイヤリング、ネックレース、白いブラジャー、白

いパンティ、ナイロンスッキング、赤いハイヒール、裸に近い姿の若い女が床に座られ、後手に鎖で縛りあげられ、縛り目には錠までかけられているのです。

可憐なとらわれの姿！

私は頸をのべて顔を伏せ、少し横座りになって縛られた錠のところを画面にうつるようにポーズしました。

カメラをのぞいていた彼がつか／＼と近寄りました。近づいたかと思うと自分の覆面を外して、それで私の口に猿轡をかけました。イエ本当の猿轡ではありません。口の中には何も押込まないのですから。ただ口の上を黒布で縛るだけ、顔半分がかくれるのです。ああ私が昼間編集長様におねがひした通りです。彼の口を覆っていた布で私の口を——。

覆面を外した青年は覆面から上だけを見ていたときよりも一段とハンサムでした。キリッとした口許、青い髭の剃り跡。彼は黙々と熱心な芸術家のように立仿きました。

「あの私、これからどうされるのかしら？」  
私はついそんなはしたない言葉を口走りしました。青年は黙って私にうなだれたポーズを要求しました。全然私の肌には手を触れないのです。

「……」

フラッシュの眩き、再び、三度  
私の縛られた姿は色々の角度から彼のカメ



ラに焼きつけられてゆきます。私はフラッシュの光る度に自分の身が焼かれているかのようなショックを受けました。

ああ、何という素晴らしい体験  
床に身をうつ伏せて、私はしく／＼泣き出しました。

青年はびっくりして撮影をやめました。暫くじっと見下しています。私は彼にうなじと縛られた背をみせ乍ら床の上にうつ伏せて泣いていました。突然、私の背後に彼の近づく気配がしたかと思うと、カチリと縛しめが解かれました。

次はどんな姿勢に縛られるのかしら、急いで顔を直さなくてはと思って鏡台の方にゆきかけますと、彼は音もなく扉をあけて出てゆくではありませんか！

「あら、もうおしまい？ 待って、一寸待って頂戴、あなたは誰」

「……」

「お名前をかかせて、ね、ね、行かないで、もっとうつして、待って！」

私は自分のあられもない姿も忘れて後を追って飛出しました。ハイヒールで駆け出したのですぐ躓いて倒れました。

「いや、いや、待って！」

泣き叫ぶ声に気がつければ、いつもの六帖の部屋、いつもの夜具に、私は打伏せになっていました。

恥しい夢。でも若し、あの夢が本当だったらどんなでしょう。

夢の中の青年はカメラを操作するだけで殆ど私の身体に触れませんでした。私は身体

## 〔雑誌通信〕

### 「ママ」になりたいパパ

女性ホルモンが効いた大工さん

（「週刊読売」二月二十四日号、〈新聞にのらなかったニュース〉より）

お腹の中の胎児の性別を生れる前に識別する事は、いまだに医学の及ぶところではないが、生れてしまえば性を自由に——男を女に転換することは、そんなに難しいことではないようだ。これは最近フランスに起った出来事だが、二人の子供をもうけたジャン（男性）という大工さんが、此程名前をジャンヌ（女性）に改めたいと、その筋に申し出たものである。この男の申立てによれば、神経障害の治療のため医師の勧告で一昨年以来女性ホルモンを注射したり内服しているうちに、体が全く女性化してしまい、どうみても男として通らなくなっ

自由を奪われていたのですから、若し彼がとんでもない野望を起したとしたら、どんなことでも出来た筈です。それを全然手も触れなかった彼。あんな優しい青年が実在していたとしたら……私。

編集長様 御返事をまっています。かしこ

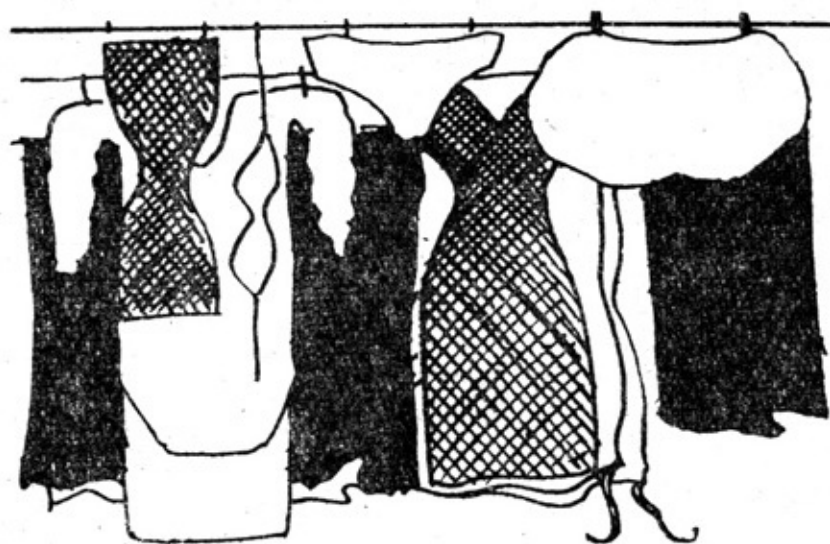
泉 かよ子

たからだという。ところでこの話が明るみに出たのは、彼の九才になる女の子が、担任の教師に「うちのパパったらママと呼べなくてききません。」と泣きながら訴えたからである。ちなみにジャンはこの頃、ソプラノを唄ったり、デイオールドレスを欲しがったり、すでにパパ的要素を失っているという。

（東京、笛地佐渡、提供）

以前、本誌に女性ホルモンによる女性化試験の記事が出ていましたが、この記事は欧米に於ても、このような事実がある事を知り、確かに女性ホルモンの効果がある事を確認しました。これは神経衰弱治療中の現象ですが、女性化願望の男性が意識的に使用すればきつとこれ以上の効果があると思われませんが、どうでしょうか。実験者の其の後の結果報告が待たれます。それにしても女性化願望の方々には嬉しいニュースだと存じます。





時 評

## 『麻生保の生活と意見』

麻 生 保

イタリー映画 クレメンテ・フラカッシ監督

## 愛は惜しみなく

梗概

処はパリ、時代はフランス革命前夜である。コワニイ伯爵家の馬丁、シエラール（ラク・ヴァローネ份す）は主家の令嬢、マツダ

叛徒の群れに身を投じ真先に進んでバスティユの城砦に三角旗を立てる。コワニイ伯爵家はロンドンに逃げようとするが、マツダレーナだけはアンドレア恋しさの余り、侍女一人と共にパリに戻りこれも又、革命党員になつてゐるアンドレアと束の間の逢瀬を楽しむ。これを嗅ぎつけたシエラールはアンドレアを訴えた。叛逆罪に問われアンドレアは

レーナ（アントネラ・ルアルディー份す）をひそかに恋しているが、この美しく高慢なマツダレーナは、馬丁をことごとくに軽蔑している。コワニイ伯爵主催の狩猟会が開かれ、ロンドン駐在フランス大使の秘書、アンドレア・シエニエ（ミシエル・オークレール份す）は、この時マツダレーナと知り合いになる。二人は愛し合うがマツダレーナの父、コワニイ伯爵の激怒を買う。さて、一七八九年、

逮捕され告発された。裁判の日、マツダレーナはシエラールを訪ねて、アンドレアの命を救うためなら自分の身をシエラールに委ねようと申し出た。シエラールは今は革命党の大幹部で、しかも、その日の裁判の最も重要な証人なのである。証人として法廷に立ったシエラールは、アンドレアを釈放させようとして無罪を出張したが水泡に帰しアンドレアは死刑を宣告された。サン・ラザールの獄舎で、マツダレーナとアンドレアは最後の別れを惜んだ。やがて処刑の時が迫った。マツダレーナは、もう此処を去らなければならぬ。意を決した彼女は、死刑囚の一婦人に自分の門鑑を与えて、恋人の後を追った。二人は共に囚人護送車に乗せられギロチンの場所まで連れて行かれたのである。

## 感想

数日前、試写を見て感激の余りこれは是非奇クにお知らせしなくてはと思つて筆を執った次第です。いづれ近日、封切られ公開される筈です。先ずアントネラ・ルアルディーが份するマツダレーナの清純な高慢さに、心ある人はひかれるであらう。すでに「赤と黒」で似た様な役をやつてはいるが、今回の彼女の素晴しさは、オードリー・ヘップバーンを遙かに凌ぐものがある。

最初の狩の場面で、マツダレーナは馬に乗



る時に、彼女を恋している馬丁のジエラールが彼女を抱きかかえて馬に乗せるのであるが、その時、ジエラールは思わず彼女の顔を熱っぽい目で一瞬見つめてしまう。マツダレーナはジエラールをグッと睨みつける。この時の彼女のきびしい眼差の素晴らしさ……彼は我に返りマツダレーナを馬の上に乗せると、彼女はそばにいるお客や友達にジエラールのいる前で「ジエラールはね、馬と同じなのよ。彼はね、私にお熱なの」と云って笑う。さて狩が始まってマツダレーナはアンドレアと轡を並べて馬を走らせる。アンドレアは彼一流の皮肉まじりのロマンティックなやり方で彼女をくどく。彼は素晴らしい女性を讃えた詩があるという、ボツリボツリと一句ずつゆっくり言う。言うまでもなく目の前のマツダレーナの事である。「征服を楽しむ美女」「男を皆跪かせ」などという文句が並ぶ。

(筆者註・もう二つ、三つ、とてもよい言葉があったのだが、映写中にメモ出来なかったので忘れてしまった。)この時の彼女の乗馬姿は全く美しい。アントネラ・ルアイディーはやや額が広過ぎるが、狩の場面では中折にリボンをつけた様な、当時の女の乗馬帽子をかぶっているのが素晴らしい。ただ何分にも横鞍で、ズボンや革長靴の代りに、いとも優雅にふくらんだスカートなのは一寸残念である。それに彼女は余り馬を虐めてくれない。

数回、馬の頸すじに鞭を当てるけれど、余り迫力はなく我々に刺戟も少い。馬から下りて、アンドレアのくどい文句を聞き乍ら鞭をもて遊ぶ処もあるが、どうも彼女の鞭は美しくなく粗末な製品なので、余り興がなく残念である。

アンドレアとマツダレーナのラブシーン。  
マ「私、今まで他人にあやまった事ってないの」

ア「じゃ、僕にあやまって御覧」

マ「何て言ってもあやまるのか知らないの」

ア「ご・め・んな・さ・い」

マ(照れ臭そうに)「ごめんなさいって」

——二人笑う——接吻

とはいえ、マツダレーナは、かの岸田国士書くところの、「鞭を鳴す女」では決してない。マツダレーナは男の愛情に脆くない。アンドレアに甘え切っている様なこのシーンでさえ、彼女は「誇り高き女」である。このあたりのルアルディーの演技は高く評価されるべきであろう。とろける様なラブシーンで、この様な清純な誇らしさを表し得たのは大したものである。いよ／＼大詰を語らねばならぬ。パリのサン・ラザール獄の大部屋で、マツダレーナはアンドレアと最後の別れを惜んでいる。そこへジエラールが部下を従えてやって来て、その日に死刑になる囚人の名を読みあげる。アンドレアが呼ばれた。マツダレ

ーナに最後の接吻をして進み出る。次に呼ばれたのは女の名であった。その女は泣き叫びその処置は不当だと訴える。マツダレーナはその女に黙って自分の門鑑を与え、静かに進み出た。下役人はマツダレーナの美しい髪をバツサリ切り後手に縛り上げる。ジエラールは、それがマツダレーナであったと見るや、余りの大きな驚きと痛恨と感動で倒れそうになり、涙がとめどもなく流れるのをどうする事も出事ない。然しマツダレーナは、蒼白になって泣いているジエラールを尻目にかけ、一顧だに与えず従容として引立てられていった。この期に及んでも彼女は、コワニイ伯爵令嬢の誇りを失わなかった。嘗っての日「ジエラールは馬と同じよ」と言った時と全く同じ彼女である。革命党の大幹部、ジエラールは、彼女にとっては飽くまでも自家の馬丁に過ぎなかったのである。筆者が特に嬉しいのはマツダレーナが最後までジエラールを軽蔑し切っている事である。これは断じて、岸田国士の如き三文文士の貧しいファンテーシの能くする処ではない。多くのお転婆令嬢達の恋物語といささか趣きを異にする処である。猶、この映画は筆者の解釈を認められない向きにもお進め出来る。なぜなら単に映画として極めて秀れた作品だからである。シオルダの音楽は如何にも十九世紀末、イタリアオペラ式であるが、何とも美しい。



## L · T 商 会

佐 川 増 夫

## 一、田口支配人の多忙

田口に車で案内されて来たのは、海岸寄りの小さなキヤパレーだった。ホールで踊っている人々を尻目に階段を登って二階の廊下の中程にあるダンサーの化粧室のような部屋に入り、その洋服ダンスに仕掛けられた極く小型の秘密エレベーターで、ずーっと下に降りた。降りた所は物置のように椅子や机や、その外のガラクタが放り出され、暗い裸電球が一つ、ボツンと灯いているだけだった。

田口は慣れ切った様子で電燈のスイッチを数回点滅した。それが何かの仕掛けになっているらしい。続いてコンクリーの壁の隅の方をぐいと押すと、その壁はクルリと廻って入口が開けた。

その入口をくぐり抜けると、中は煌々と電気がともし、五坪ばかりの事務所になっていた。

て数人の男女が事務を取っていた。事務室の左側には応接室、支配人室、などと看板をぶら下げた室がある。

私と田口が、支配人室の椅子に腰を据えろとすぐに一人の若い女がお茶を持って来た。二十になったかどうか、ぱっちり大きな目が少しきついような感じもする、身体つきは細っそりとした仲々の美人である。

「この人、僕の秘書をやってもらっている中谷さんだ。こちらは医者さんの佐川君、僕の高校時代の旧友でね、今度から仕事を手伝ってもらうことにしたんだ。」

「佐川です。どうぞよろしく。」

「始めまして、中谷と申します。こちらこそよろしく。」

「中谷君、今度っから、お医者さんが居るんだから、君のお得意の仮病使って、さぼった駄目だよ、すぐにばれちゃうんだから。」

「あらっ、そんな、私がいつ仮病を使って、そんなの、ひどいわ。」

「まあいいさ、一寸向うへ行つてなよ、後で又呼ぶから。」

「ふん、知らない。」

中谷嬢は一寸舌を出してアカンベをして出て行ってしまった。

「あの子はずちの社長の娘なんだ。遊んでいればいいものを面白半分で秘書にしてくれて無理矢理に押しかけて来たんだ。勝手なことばかりやって、我儘娘で少々もてあますこともあるんだけどね、あれで仲々センスもあって重宝な時もあるんだ。」

「ふうん、それで社長ってのは、今来てないのかい。居るんだったら一寸挨拶して来なくちやいかなだろう。」

「社長なんて決してここへ来やしないよ。第一、社長っていうのは、ただ僕が仮にそう呼



んでいるだけで、実際は、僕がこの仕事を始めるのに資本を出してくれただけなのさ。直接この仕事に手を出しているわけじゃないから、まあL・T商会は僕が御大つてことになってるんだ。」

「そうか、じゃあ、挨拶になんぞ行く必要はないというわけだな。」

「そうさ、うっかり挨拶に行こうもんなら、奴さん、目の色かえて怒るよ。一寸した有名な人だからな、種々と差し障りがあるのさ、僕なんか街で会ったって知らん顔してやるんだしかし、そんなことはどうでもいいんだ。とにかく君に手伝ってもらえとなると、僕の方は大助かりだよ。大事な品物をつまらない病氣でもされて台無しにしちやうのは全く馬鹿らしいからね。」

「しかし、僕が来たからって、どんな病氣でも治るってわけには、ゆかないぜ。」

「そりやそうさ、別に君を神様だと思ってやしないから心配するなよ。」

「で、どんな病氣が多いんだ。」

「どんなって、そうだな、外傷って云うのかな、うちじや品物には随分氣をつけて大事に扱っているんだけど、大勢の店の者の中には乱暴なものも居るし、止むを得ぬような事故もあるしね、それに輸入品なんか、こっちへ着くともう半死半生みたいになってくるものもあるんだ。その外、普通の病氣だってあるし

ま、いろいろあるがね。」

「ふん、そうか。それで品物ってのは一体、何人位居るんだい。」

「こっちの売店の方には今の所六十人ばかり居るんだ。おまけに売り渡した品物だって、アフタサービスをしなくちゃいけないしね。仲々大変だよ。」

「船医みたいのにのんびりしてられなさそうだな。所で医務室や何か設備は有るのかい。」

「うん、部屋だけはあるにはあるんだが、薬品や設備は殆んどないんだ。君の方で必要だと思うものは、そう云ってくれば何んでも揃えるから、いいようにやってくれよ。」

と、その時、卓上の電話が鳴り出した。

「ハイ、モシモシ、L・T商会の田口で御座居ます。ア、稲村屋のお女将ですか。はあ、又ですかあ、どうも弱りましたねえ、手前共の方では、品物をお売りするのが商売でして、原則としてお貸ししない事になっているんですが。ハアハア、この前もその特別にお願いしたんですが、大分痛められましたなあ、御かんべん願いたいですなあ、ハアハア、そうですね。はあ、そうですねえ、それじやまあ、外ならぬ稲村さんの事ですから、仕方がございませぬ。潔くお貸ししましょう。でもこの前みたいに傷物にしちや困りますよ。エエ、それだけはくれぐれもお願ひしときますからね、大事にとり扱って下さいよ。大体玩

具なんてものは壊れ易いもんですし、特に高級品になればなるほどデリケートに出来ているものですから、大切にお願ひしますよ。ハイハイ、ええ、和服型を三人ね、よく肉のついたのをですか、ハイハイ、じゃすぐにお届けしますから、では又。」

「稲村屋って何んだい。」

「温泉マークさ、ここのお女将つてのが、がっちり屋でね、お客を遊ばせる玩具なんだから自分の所で買って置けばいいのにさ、そのたんびに借りて済そうってんだ。この前なんか、すっかり傷物にされて、工場廻しにしちゃったよ。少しばかり弁償してもらったってソロバンに合いやしないよ。」

田口はそう云いながら呼鈴を鳴らして秘書の中谷嬢を呼んだ。

「又稲村屋だよ。どうせ悪いんでいいから、丈夫そうなの三人選んですぐ届けるように、運送部に云って来てくれ給え。」

「稲村屋なら、特売品でかまわないわね。」

「かまわないどころか、もったいない位のもんだ。」

中谷嬢が室を出ない内に、お次の電話がもう鳴り出した。

「ハイハイ、L・T商会の田口です。あ、松本様でいらっしやいますか、毎度どうも有難がとう御座居ます。先日、お買求め願った品物の具合はいかがでしようか。ハアハア左様



で御座居ますか。それはよろしゅう御座居ました。何しろ責任もっておすすめた品ですから自信はありましたけれど、でもまあ、御満足頂けてこちらも安心致しました。ハアハア、それでは今日は、同じようなのをもう一人、ハア左様で御座居ますか。エートそうですなえ、と、そう、いいのが一人御座居ます。これでしたら、きつとお氣に召すと思うのが御座居ますが、今日でもすぐに御覧にいらっしやいませんか、ハアハア、そうですか、それではお待ち致して居りますから、では後ほど又、はい御免下さい。」

田口はニヤリと笑って電話を切った。

「この人はね、ついこの間、一人買っていたんだけど、又もう一人欲しいって云うんだ。安物は絶対に買わない人だから、仲々いいお客様なんだ。」

「そんなに何人も買って、一体、どうするんだろう。」

「何んていうか、コレクシヨンマニア見たいなもんだらうよ、きつと。」

と、そこへ又しても電話。田口も支配人ともなれば仲々忙しいようだ。

「ハイハイ、田口で御座居ます。毎度有難う御座居ます。ハイハイ、折檻倉をお作りになるので御相談をと申されるのですか。はい、今日でも結構で御座居ますが。その方の係の者も居りますし、色々資料も取り揃えて御座

居ますので、御来店下されば詳しく御説明致しますが。ハイ、そうですか、ではお待ちして居りますから、どうぞ御来店下さい。では御免下さい。さようなら。」

「どうも忙しくって落ち落ち話も出来なくなつて君に悪いんだけど、大体の話は解つたろう、そうだ、中谷君に案内させるから、店の中を一通り見て来たらどうだ。」

私はもうさっきから好奇心をかき立てられていたので、一も二もなくそう願うことにした。中谷嬢と連れ立って支配人室を出ると、後で又電話のベルが鳴って、田口が如才なく応得している声が聞えて来た。

## 二、商品陳列

「最初、浴室の方へ行つて見ましようか。丁度今頃、品物を洗っている真最中よ。」

廊下を曲つて、曲つた突当りのドアを開けると、湯気がもうもうと立ちこめている。よく見ると、白いショートパンツにブラジャーをした四、五人の女達が二〇人余りの裸の女達を入浴させているらしい。裸の女達の手足は鉄の手錠、足枷がかけられている。中には日本髪を結った女も二、三混っている。

「あの裸の女達が商品かい。」

「ええ、そう。」

「すると白いシートパンツの女は店員ってわけだね。」

「そうですよ、こうして毎日、品物を陳列する前には綺麗に洗つてやることにしていますの。仲々大変なのよ。」

十人はゆっくり入れる大きさの浴槽の中に品物達はおとなしくつかっている。洗い場には四つ足のついた細長い台が五つ並んでいてその台の上に、或は仰向けに、或は俯伏せに四肢を、台の足についているバンドで固定された品物達が載せられている。その品物を、ミス・トルコススタイルの女店員が、大きなスポンジで体中を泡だらけにして洗つてやっている。裏表ひっくり返して偶々まで石鹸をつけ終ると、ホースから出るお湯で、泡をすっかり洗い落しラクダ織りのバス・タオルでスッポリとくるんで水気を切る。それから五封度は入ろうという大きなビンに入ったクリームを全身にくまなく擦り込み、その上から粉白粉をはたいて、おまけに香水をスプレーでふりかけてやつてから、台から降ろし隣の部屋へと送る。

「へえ、随分念入りなんだね。これじゃ店員よりは品物の方が待遇がいいじゃないか。」

「そりやそうよ、どんな商売だって大概そうなんじゃないの。うちだって矢張り売物ともなれば、汚れたものを店に出すわけには行かないし、少しでも高く売ろうと思つたら矢張り手入れはよくしなくちゃ駄目でしょ。それ今そこで洗っているのは殆んど特級品ばかり



だから、クリームだってフランスの第一級品を使ってるの。それに香水だって、一人一人に個性を持たせて、異った種類の使うんだから大変なの。もっとも安物はね、みんな同じ安香水で間に合せちゃうんだけどもね。」

「本当に文字通りの全身美容だね。」

「うん、そうよ、これで顔と頭は、又別に専門に化粧してやる係があるんだから、あそうだ、石坂さん、その娘は今日は髪を結い直すから、解いちやってよく洗ってやって。」

石坂さんと呼ばれた店員は、今、台の上に乗った品物の島田をほどき始めた。

「あの人の髪は全部自分の髪なの、今時一寸珍しいでしょう。今晚来るお客様で、きつとあれを買うだろうと思う人が居るの、それで、今日は髪を結い直させて置くのよ。」

今迄入浴させていた品物が仕上がると、今度は外人の女達の一団が連れて来られた例によって裸の手足に手錠、足枷をはめられている。

店員達は、もう慣れ切った様子で、事務的に手早く品物達の手入れを進めて行く。品物達も観念して大人しく、されるがままになっているが、時には、くすぐったいのか、少しばかり台の上で身をもがくのも居るが、四肢



をしつかりと固定されているので、そんなことはおかまいなしに仕事はどんどんと進められて行く。

入浴を終った女達は裸のまま、体重とバスト、ウエストなどを測られる。

「毎日こうやって検査しないと、すぐに肥っちゃうのよ。」

「肥ったって別にかまわないじゃないか。肥ってる方が好いって人も居るだろう。」

「あら、あなた、お医者様のくせに余り審美眼がないのね。そりや肥ってた方がい品物もあるし、瘡せてた方がチャーミングな品もあるわ。だけど矢張り、その品物にとって一番適した目方ってのはあるものよ。拳斗だって



自分の最適のウエイトじやないと上手く戦えないっていうでしょう。」

どうも中谷嬢は仲々口が達者である。

「成程成程、御尤ですな、ところで君の目方も今の所それで最適なのかい。」

背の割にちよいと細すぎる中谷嬢を上から下までジロジロと見て皮肉の一発を放ってやった。

「知らないっ、そんな憎まれ口、私は売物じやないんですからね、余計なこと云うと案内して上げないわよ」

案内してもらえないと困るので私はすぐにあやまった。

「御免、そう怒り給うな。それで肥りすぎたら、その品物はどうするんだい。」

「三百匁位だったら、ここで少し絞って減量しちやうんだけれど、余りひどいのは工場へ送り返して適量に直してもらおうのよ。」

そんな事を言っている中に一人の品物がウ

エイト検査に引っかけたらしい。体重を測っていた女店員が、その品物のぷりぷりした

お尻をピシヤピシヤと平手で叩きながら、

「駄目ねえ、とうとうオーバーしちやったじやないの、あんなに一生懸命絞って上げたのに、瘠せるどころか、かえって肥っちゃうんだもの、もう知らないわ。」

「嫌や、嫌よ、お願い、工場送りは止めて、ね、明日から絶食してもいいから、お願い。」

よほど工場送りが嫌なのか、店員に必死に哀願している。しかし女店員は知らん顔している。で今度は私達の方を向いて

「ね、工場に送らないで。」と頼み込みにかかった。

「上田さん、早く猿轡はめて運送部へ持って行って、工場送りにしてらっしゃいよ。」

中谷嬢は先程の最適体重説を実行する所を見せるつもりか、上田君なる女店員に工場送りを命令した。その品物は少しばかり抵抗したけれど物慣れた上田君に簡単に猿轡されて外へ連れ出されて行ってしまった。

次に入った隣りの部屋は、まるで美容院のようだった。床屋の椅子を少し、スマートにしたようなオート・チェアーがずらりと五台並び、その椅子に取りつけてある革バンドで品物の要所／＼をしっかりと止めておいて、髪を直したり、お化粧をしてやったりしている。

「鏡がないのが、一寸外の美容院と違うでしょう。でも品物はお客様じやないから鏡なんか見せる必要がないんですのよ。」

「ふうん、お客様ってのは別にあるんだからと云うわけか。」

お白粉塗って頬紅つけて、口紅を差した上に乳首にも桃色の紅を塗っている。

「あれは乳紅っていうの、よその美容院じや一寸やって呉れないわね。うちの専売特許っ

てところかしら。」

化粧が済むと、口の中にスポンジのボールの様なものを押し込み、上からバンドで押えて猿轡をしてしまう。

「あの猿轡と手錠、足枷はね、うちの品物の一部分みたいなもののよ。減多に取って貰えないの。猿轡は食事の時と入浴、お化粧の時だけ、手錠と足枷は、別なもので縛る時だけ、それだけしかとってやらないの。」

お隣りは衣裳部屋になっていて、お化粧が終った品物達が、ここでやっと、着物を着せてもらうことになっているらしい。

「和服も洋服も、それに特別製囚衣だってあるのよ。」

中谷嬢は、まるで自分の衣裳のように自慢して見せる。

「ほら、これ、昔のお姫様の衣裳よ、素敵でしょう、こっちは吉原の花魁の衣裳。」

中々豪華版だが、それに劣らず洋服の方も華やかなドレスが沢山取り揃えてあった。

「こんなものを一人一人、みんなに着せるのかい。」

「ううん、そうじやないわ、特選品にたまに着せるだけよ。大概は長襦袢とか洋装なら下着だけだし、特売品なんかお腰か、ズロース一枚よ。こんな豪華なの着せていたら手間が大変ですもの。」



今着付をしてもらっているのは割に高級品なのか、皆、長襦袢とか、スリッパとかを付けている。それがおかしいことに例の手錠、足枷をかけたままほとんど着せてしまう。

「手錠外さなくとも着せられるのかい。」

「ええ、うちの着物はみんな縛ったままで着せたり脱がせたり出来るようになっていて、袖は開いていて、あとでスナップで止めるようになっていて、パンティなんかもフアスナーやホックで、横で止めるようになってるんですもの。」

見ている中に着付を終った女達は一方のドアから出て行き、もう一方のドアからは、化粧の済んだ品物達が裸で入ってくる。

「あら、もう七時じやないの、そろそろ陳列にかからないと、お客様が来られるのに間に合わなくなっちゃう。売場の方へ行ってみましょうよ。」

売場は、中央に赤い絨織を敷いた通路があり、その両側にショーウィンドーというか陳列ケースというか前面をガラス張りにした小部屋が両側にずらりと並んでいる。向かって右側の方は畳敷で和室風になっていて、小さい部屋で三畳、大きい部屋で八畳位ある。左側は洋風で絨織を敷いて、ソファやベッドが置いてある。和室の一番手前の部屋には、まだ品物が入っていなかったが、前面のガラス

の所に『十九才、五尺二寸、十三貫、調教度Ⅱ、五万円』と書いた札がぶら下っている。ふと思いだして、私はポケットから例のカタログを取り出して見た。国産特選品の最初の所に出ている女のことらしい。

丁度そこへ、今私達が入って来たドアの方から一人の品物が女店員に連れられてやって来た。さっき衣裳部屋で見たあの豪華なお姫様装束に身をつつんだ女も、たしかにこのカタログにあった女だ。そうそうその前に浴場で髪を結い直すといっていた娘に違いない。

今は吹輪というのか、華やかな髪飾りをつけたお姫様風の髪を結っている。一寸下ぶくれの柔らかな顔だちにピツタリと調和して絵のように美しい。

「遅かったわね。」中谷嬢が声をかけた。

「ええ、何しろこの髪でこの衣裳なものですからつい遅くなっちゃって、すみません。」

「そう、まあいいわ、じゃ早く飾り付けしちやって、私も手伝うから。」

二人は商品であるお姫様をショーウィンドーの中に入れると、奥の押入れから厚い絹の夜具を取り出して敷いた。掛布団を少しめくってそこにお姫様を坐らせると、中谷嬢が赤い扱帯を手にもって後に廻り、手錠を外して、両方の手首をきっちり縛った。女店員は、帯をゆるめ、幾重にも重ねた着物の胸をはだけて、乳房をむき出しにした。

「あら、両方出しちまわないで、片方は半分だけ見えるようにしときなさいよ。そうよ、その方がいいわ。」

中谷嬢は手首を結えた扱帯の余りを乳房の下に廻し、乳房を上押し上げるようにして縛った。裾も適度に乱し、可愛らしい足を一寸のぞかせて、足首を扱帯で縛り、足枷を取り除いた。女は何にをされてもおとなしくしている。

「折角結った髪、惜しいけれど、一寸崩すわよ。」

中谷嬢が少し髪をほつれさせて、顔にパリリとたらしした。

「あと、猿轡をすればそれで仕上りね、それから、小道具として、行燈でもそばに倒しとくと尚いいわ。」

中谷嬢は仲々権力があるらしい。女店員はいつけられた通り手拭で目のすぐ下まで覆ってしまった。大きな瞳が一層ぱっちり輝いて見えた。

隣のウィンドーには、『二十四才、五尺三寸五分、十五貫、調教度Ⅳ、八十万円』と記した札が下り、中では白い囚衣を着けた大柄な女が、横に倒した十字架にかけられている最中である。胸は思い切りはだけられ、ボリウムのある乳房の廻りにはひしひしと縄がからんで、その縄目からブクブクと盛り上って顔を出しているので一層膨隆して見える。桃色



に染った乳首が花のようで美しい。

「この十字架には足を載せる台がついていないけれど、これで立てたら重みでずり落ちてしまわないかい。」

「うん大丈夫。こういう風に何箇所もキツチリ縛ってあるから落ちやしないのよ。それに少しくらいずれた方が縄がよく締って素晴しくなるじゃないの。」

手、肘、肩、乳房の上下、胴、腰、太腿、膝、足首まで細目の麻縄でキツチリと縛られ縄が豊満な肉体に喰い込んで、見るからに痛々しい。やっと縛り終えて十字架を立てると二、三寸、ぐっとずり下り、更に一層きつく締った。女が「ううう」と低くうめいた。

「こんなにひどく縛っちゃ血液の循環障害を起しちゃうよ。」

「何あに大丈夫よ、この品物は調教度、IVで十分訓練してあるし、それに、一寸仕掛もしてあるんですもの。」

中谷嬢が私の手を取って縛られた女の足首に触れさせた。縄の下にはピンポンのラケットに張っているようなスポンジラバーが入れているらしい。

「ね、こういうのが所々に入っているのよ、だからお医者様、御安心遊ばせ。」

向い側の輸入品のショーウィンドーでも、盛んに商品の陳列をやっている最中である。

ナイトガウンをまとった金髪の女がベッドから半身乗り出すようにして縛り上げられていたり、テーブルの上に鎖でくくられたり、二人ペアに組み合せて縛られたり、カタログに出て居た革製の締具で締めつけられていたり、様々な恰好に飾りつけられている。中級品になると三、四人が一つのショーウィンドーに入れられ、まるで生花のように生けられているものもある。

更に特売品は、やや大き目のウィンドウに和洋一緒混ぜで十七、八人も押し込められている。床には大きなマットレスが一杯に敷いてあり、その上に国産品はお腰一枚、輸入品はブロース一つで、例の手枷、足枷、猿轡をかけられている。一人一人の足首には番号と値段の書いた金属の札がつけてある。狭い所に大勢押し込められているので、品物達は重なり合わんばかりで、本場にデパートの特売場を連想させた。大勢の女の体臭と、香水、脂粉の香りでムーッとするほどになって来た。ふと気がついて見ると、ここに居るのは商品も、売り手も、女ばかりで、男性は私一人だ。「ここじゃ、店員は女ばかりなんだね、一体どうしてなんだい。」

「だって男だと、悪戯をして傷物にしちやったり、扱いが乱暴で壊したりするからよ。その点、女なら余り心配がないから、管理部員は皆女なのよ。」

「だけど、その女店員は二十人ばかりなのに品物は六十人から居るんだから暴れたりしたら困るだろう。特に外国から来た品物なんか随分強いんじゃないかい。」

「なに大丈夫よ、品物は工場で十分訓練してあるし、女店員の方だって縛り方やなんか、扱い方はよく練習してあるんですもの。」

成ほど、そう云われて見ると、縛り方なんか、実に手慣れていて素早い。

そのうちに、どうやら全商品の陳列が終了らしい。

「私一寸行って田口さん呼んでくるわ。お客さんの来る前に一応陳列の具合を見てもらわなくてはいけないことになっているのよ。すぐ来るから一寸待っててね。」

中谷嬢は私を置いてずっと消えて了った。

私はぶらぶらと中央の通路を歩きながら、両側のショウウィンドを眺めた。

女店員達は一仕事終ってほっとしたのか、五、六人ずつ固まって、お喋りに余念がない。私の方をチラリチラリと横眼で眺めながらヒソヒソ話をしているのは、私のことを噂しているのだろうか。元来、余り心臓の強くない私は、一人放り置かれて、少々照れくさい。すぐに戻ってくる筈の中谷嬢も、それに肝心の田口も、どうしたことか一向に姿を現わさない。私は手持無沙汰で佇んでいた。

(未完)



# ある夢想家の手帖から

## 第百十二 黒人女王の人間馬

前項で引いた『女天下』中、「奴隷制」の章には、パウ・ポツゲがアフリカ女権制部族を訪問した時の一八七五年の日記が出ている。引用部分は相当の長文なので、全部の紹介は後日にゆずるとして、ここでは、どうしてもここに書いておきたいこと一つ二つに止める。

それは、この黒人部族の女王が純粹の黒人より肌の色がずっと薄い混血児だったことと、彼女が黒人の男奴隷を馬の代りに使っていたことである。

「女王が姉妹と一緒にやって来た。両貴女はそれぞれ一奴隷の肩に馬乗りになっていた。私の小屋の前迄来ると、この甘美な重荷の運搬者は腰を曲げて蹲まり、女騎手が両足で立って座席から離れ得る様な姿勢を取った。……女王は二十二歳ないし二十五歳位らしい。姿勢はほっそりとして背が高く、肌の色は明るい淡褐色で、私の通訳が云う所では、海岸地方の白人混血児の様に見えるのである。

沼

正

三

る。……交歓の一時間が経ち、私は真珠その他の小さな贈物をした。貴女達は共に自分の奴隷に打ち跨り、ふざけたり、笑ったりしながら、従者を引き連れ、騎乗のまゝ去った。乗られる奴隷が身を屈めると、女騎手は一方の脚を奴隷の項越しにサッと跨らせて、肩の上に腰を落ち附かせる、と忽ち男が立ち上る、といった工合にして乗るのである……」

ポツゲは、人間馬が、余程珍しかったと見えて、このあとも何度も彼女が奴隷に騎って現れる有様を記している。彼女丈でなく、貴族重臣は人間馬を使う。別に個人の変った嗜好(※)としてでなく、制度化して、当然のこととして受け取られているのだ。この奴隷達にメリール国のオラミを思い出すのは私だけだろうか。洵に事実は小説よりも奇だ。

※ 註 エラリイ・クインズ・ミステリ・マガジン日本版三十一年十二月号にヘレン・マクロイ「燕京綺譚」(田中西二郎訳、名訳である。)というのが載っている。篇中ロシア青年アレクセイ・リ



アコフ大佐は当番のコサック兵に肩車して現れる。手には鞭。兵に跪かせて下り立つ。そして「ロシアの将校は部下の兵隊を乗馬がわりに使う習慣があるのでしょか？」という疑問に対して「ぼくにとっては習慣になるかも知れません。ぼくは蒙古馬は嫌いなんです。足許のしつかりしてることでは、コサックの兵隊は馬に負けませんよ。おまけに、はるかに従順です」と云い放つのである。

解説によると、これは、あるロシアの代理公使が北京の雨期の間、靴をぬかるみから護るために、護衛のコサックの肩車に乗って歩くのを常とした、という実録に基づくのだそうである。

然し、こういう人間馬は、要するに個人の嗜好の或いは悪虐の産物である。ここにこれらと女王の騎った真の人間馬との違いがある。(因みに燕京綺譚とポグの日記とは、内容とする時代においては殆んど同時代なのだ。)

尚小説としてこういう肩車型人間馬を取り扱っているものにゾラの「一夜の情を求めて」という作がある。これはいずれ訳出することを約束しておく。

然し、女王の肌の色こそ更に注目すべきだ。女王は絶対の主権者で、彼女の夫は「選ばれた奴隷」に過ぎぬ、こういう天照大神見たいな存在が、混血児であるというのが嬉しい。(原文は「様に見え」とあって、明言していないが、黒人は混血しない限り真黒な肌なのが原則であるから、事実混血児と解して良い。)映画でバート・ランカスターの演じた「白人酋長」は実話に基づくそうだが、そういった黒人を治める白人の天賦の地位が、こんなところにも現れて、半分混っている白人の血が、彼女を女王にしているのである。然し、黒人の身になって考えて見ると、何と可哀想なことだろう。

彼等が黒い肌に自信を持つなら、一番黒い肌の女を女王にすれば良いのだ。それが当然だ。ところが肌の色の薄い方が黒人達にとっても美しいし、高貴なのである。だからポグの逢った女王は混血児だったのだ。盲目の国では片目が王様だ。

つまりそれは、彼等自ら白色の優位を承認したことを意味する。アフリカ土人は欧州人に対してどんな態度を取っている種族であれすべて欧州人に対する内心の畏怖を感じているといわれるが、畏怖は即ち尊敬である。混血の女王の脚の下に首を差し出して馬として使役されることを辞さぬこの奴隷達は、白人女性——たとえデパートの売りでも——を肩に跨らせることには、より一層の光栄を感じないだろうか。

いや、黒人の方でどう思おうと、白優黒劣の序列は天意である。白人女性が黒人を馬にすることに躊躇する必要はないわけだ。空想的構図といえどそれだけのことになってしまいが、森本氏が本誌(三〇年三月号グラビア)に紹介されたヘーゲマンの「アルゼンチンのアマゾン」の絵を見よ。黒人の肩に人間馬専用の褥鞍を置き威風凛々と跨ったこの女騎手の自信に充ちた風貌は、白人は黒人を馬にすることに躊躇する必要がある、という強い自信がなくては、到底描き出せるものではないだろう。

### 第百十三 クレオリン

前項で「アルゼンチンのアマゾン」のことを述べた。このアルゼンチンに関連して、クレオリンについて少々述べておこう。

クレオリン Kreolin (英 creole の独乙語の女性形)とは、狭義では西印度や南米に移住したスペイン系の子孫の中の女性を指すが、広義では広く植民地生れの白人娘と解してよい。(混血した場合もこの語で呼ぶことがあるが、以下の引用では勿論純粹の白人の場合である。)



アルゼンチンは独立前スペイン領だったので、この絵の女騎手などは文字通りのクレオリンと云える。絵自体が空想に基くからといってこういう使用形態がなかったとは云えない。クレオリンの奴隷酷使については、文献が無数にあるのだ。

人間馬より或る意味でもっと冷酷な使用法に移動ハンモックというのがある。十九世紀初頭に中部アメリカを旅して何冊もの旅行記を著したC・C・ロビンは、西印度マルチニク島のサン・ピエール市について、次の如く記している。(『女天下』所引)

「大抵の道は、勾配が余り急なので、車で通ることができない。そこで我が怠惰な、現地生れの御婦人方<sup>クレオリン</sup>は簡単に輿に乗る。もう少し贅沢な向きは、頑強な担架奴隷達の頭部に固定させたハンモックに乗るのである。」

人間の頭部から頭部にハンモックを張らせて、歩かせるのだ。車のない所で一番楽な姿勢で居るには成程これ位良い方法はなからう。然し奴隷の方は大変である。非常に不自然な、肩車以上に労の多い筋肉活動を強いられるわけだ。勿論急がせる時にはピシピシ鞭をくれたろう。「総じて、どの土地でも、鞭、棒、笞、竹、が欧州生れにせよ、現地生れにせよ、御婦人方の主な時間潰しになっている」(クーパー「鞭の歴史」)のだから。

こういう乗物の発明丈でも、駕籠で我慢し続けた封建日本の支配階級などには一寸想像もつかぬ残酷さ——換言すれば人間家畜視だ——が窺えるのである。ロビンは更に云う。「特に私に注目されたことは、現地生れの白人女性達は、男性達よりも、奴隷に対してずっと苛酷だという事実である。彼女等が自分の身体を動かすことをひどく億劫がって、ほんの一寸したことにまで召使達を平気で使う有様からは、彼女等は殆んど道徳的に不感性的なのではないかと疑われる。一寸した目の合図や、単なる視線でさえも、それが何を意味するかを奴隷は汲み取らねばならず、それができずに女主人を待た

せてもしようものなら、直ちに恐ろしい鞭が降る。シヨール一つ、ハンカチ一つ持つこともできなかった腕が、急にそんなに弱い腕でなくなり、人の肩を借りなければ歩くのもやっとだった身体が忽ちシヤンとする。懲罰を他の奴隷に命じてやらせる段になると、彼女等は、犠牲が地面に大の字に身体を伸され、四肢の先を木杭に縛りつけられる有様を平然と眺め、鞭打数を数える。そして、鞭つ方の奴隷の手が鈍ったり、血の流れ方が足りなかったりすると、叱咤激励するのである。以前の優しさは荒々しい怒りに変わる。彼女等は、時々この残酷な見世物を見て楽しむのが習癖になっている。彼女等のだらけ切った気分を一新するためには、正にこの金切声の悲鳴が必要なのだ。血が流れるのを繰返し見なければならぬのだ。昂奮の極、犠牲者に飛びかかり、拗ったり、引掻いたりする人もある……」

「甘い両親に甘やかされて育った現地生れの少女達にとっては、自分の周りの黒人達は、自分の気まぐれ次第に扱える単なる玩具である。彼女等は、唯の遊戯<sup>おもちゃ</sup>として同年輩の奴隷(男性)を鞭つ。両親が大人の奴隷を扱うのを真似しているのだ。年頃になって情熱が激しく発露する様になると、彼女等にはもはや自分の意のままにならぬことがない。彼女等は、すべての命令が、できるできないなど問題にせず、直ちに遂行される様要求する。遂行されなかった場合には自尊心を傷けられ、懲罰を二倍にして返報する……欧州生れと現地生れでは性格に大きな差がある。前者は余程怒って初めて我を忘れてひどいことをするのだが、後者は何等昂奮することなしに二十五鞭とか三十鞭とか命令するのである。現地生れの女性は全く冷静に懲罰を見物するし、落ち着き払って鞭数を二倍にせよ、三倍にせよと命令する……」

まことに、右の文の引用のあとで、キントの結論する如く、「支配階級の女性にとっては、一般に、奴隷の奉仕ほど馴染み易いもの



襦<sup>むつ</sup>褌<sup>き</sup>抄<sup>しょう</sup>

月岡映子

はないのだ。』そして、奴隷の奉仕は必然的に全能感からする残酷行為を昇進させるということが云えるのだ。

ブルフェンは『女性犯罪者』の中でこういうクレオリンの残酷行為の具体例を個人名をあげていくつか記述している。その一例——「南米生れのイネス・ダ・ヘレラ夫人（スペイン系）は意図的に若い男奴隷を屈従させることを事とした。彼女は自分で彼等を懲罰し彼女に足台として奉仕する様に仕込んだ。——性的契機から——彼等に恥知らずな方法で奉仕させた（C技巧のことであろう）。スリッパを口でくわえて差し出させた。奴隷達は獣の様に、地面に置かれた食器から手を使わずに食べねばならなかった。……」

大学の図書館でこの頁を読んだ時、私は思わずドキリとした。司令官夫人の先達がここにいた……

司令官夫人は勿論クレオリンという呼称の当る人ではない。しか

し、本項でいうクレオリンの意味の重点が「劣等種族に囲まれて育った植民地生れの女性」というにある限り、南阿生れの彼女は、ある意味でクレオリンといってよいのだ。第百八項で述べた様な南阿連邦の特性は、この国が、植民地的人種観をそのまま残して一国家に自立したことを示している。人種観に関する限り、彼女はクレオリンだった。だからこそ、トロローペンコレルに雇った時、ヘレラ夫人と同じ様な行為に出たのだ。

クレオリンなどというと難かしく聞えるが、日本でも、戦前満洲生れ、朝鮮生れ、台湾生れ等の女性は、低廉な原住民労働に慣れ過ぎていて、家庭の主婦としては、少くとも自分で相当労働せねばならぬ中産階級の主婦としては、不適当だ、といわれたものだ。程度の差こそあれ、人情には、或いは女性の本質には古今東西の別なしというべきだろう。

S・A・様——。通信欄のお言葉嬉しく拝見致しました。貴方様のお仰る様にフンドシマニアの方々は最近誌上で盛んに活躍なさっておりますが、オシメマニアの方々の声が非常に少いのを私も淋しく思っております。然し毎号といってよい位にオシメに関心をお持ちの方々の記事が通信欄に見られますので、この方のマニアの方も相当にいらっしやるのではないかと存じます。唯、発表なさらぬ丈ではないかと存じます。如何でしょう。

私もオシメや浣腸器のコレクションをしていると同時に、貴方様のようにオシメに関する記事や絵画を集めております。一般の文芸誌、婦人雑誌等の中にも気を付けて目を通し



ておりますと、案外にオシメや浣腸の出てる作品が多く私達マニアを楽しませて下さいます。大分以前の確か小説公園だったかと思いますが興味をひく作品が出ておりました。

それは、踊の先生をしている婚約者のまだ若い母親が、若年性高血圧で倒れ、婚約者である娘さんが母親のおむつの世話をする所があります。ある日、男が訪ねてゆくと娘さんは物干におむつを一杯干している所でした。赤坊もないのにと思い男が不思議に思い尋ねると、娘は「母のですの」と答え、「おむつのお世話までしなければならぬ、一人の母を残して貴方の所へ嫁げない」と未だ若い母の不幸を悲しむと同時に、自分の不幸を歎けるのですが、おむつの処置をする描写がいろいろと書いてございました。

また同じ頃、同様の文芸誌にある女教師の手記風の作品でしたが、頭もよく、顔立も可愛ゆく日頃から、目をかけていた女生徒が夜尿症のため修学旅行にゆけないのを気の毒に想い、母親と相談し、おむつを持って旅行にゆく所があり、旅館で理由を話し特別に二人丈の部屋を貰い、寝る前にその先生が教え子におむつを当てる場面がありますが、愛情のあふるゝ様な文体と共に私を字頂天にしてみせた作品の一つでした。

通俗誌になるともっと興味本位になり、例えば「花嫁さんは夜尿症」や「彼女の秘密」

等はいずれも丁度婚期にありながら、夜尿症のために悩む若い女性をえがいた記事で、作者はオシメマニアではないのかしらと思う程に若い女性とオシメをからませていました。通俗小説ながらも印象に強く残っているものです。其の他にもまだ大なり小なりオシメの出ってくる小説は沢山ありますが、特に忘れられない程強く私の心をひきつけた作品は以上の様なものです。S・A・様もこの様な作品をなにか御存知でしたら、どうぞお知らせ下さいませ。

私の女学校時代のお友達で看護婦をしていらつしやる方がありますが、この方のお話も私達マニアを楽しませて下さいます。特に面白いなアーと思ったのは、同僚の看護婦さんの中に、みんなから浣腸屋さんと呼ばれている方がいると云うことです。これは受持の患者さんの中に浣腸の必要な人が出ると、いつも一手に引受けて自分でやってしまうからだそうです。私達と同じマニアなのであると思えます。一度私も、この浣腸屋さんには是非ともお逢いしたいものだと思っております。

最後に、鴨猟にいった時のことを書いてみましょう。二月上旬の寒い最中のことですが私は会社の男性の方に誘われ鴨撃ちに出かけました。お供をしますと皆さんとお約束をした時、その場にいらしたS子さんが、そっと私に忠告して下さいました。

——A子さん。貴女は鴨猟は今度が始めてなのでしよう。鴨猟は面白いけれど、湖の真中へ小さなお舟でゆくのでしょう。冷えて私達女はすぐにトイレで困るわよ。いざという時の御用意をしてゆかないとお泣きになるわよ。

御用意ってどうなされば宜しいのと私がお尋ねしても、S子さんはなんにもお仰らずに唯、笑っていらつしやいました。S子さんのお仰る御用意の意味はおむつをなさっていらつしやいと云うことなのでしょう。S子さんは前にも幾回か鴨猟へいらした経験があり、一度位は本当にお困りになったことが、おありになるのかもしれませんが。

当日私はS子さんお仰られるまでもなく、オシメを当て、ビニールのおむつカバーでぴっちり止め、その上にストラックスをはきしました。一寸ばかり目立つようでしたが、オーパーが充分にそれをカモフラージュしてくれ、外目には全然分かりませんでした。唯途中で交通事故にでもあったら、そして病院へでも運び込まれたらどうしようかと、それ丈が一寸心配でした。S子さんも私と同じ様なスタイルで約束の場所へ現れました。

S子さんのお話は本当でした。初めから、そのことばかりを気にしていたせいか、舟が沖へ出るともう尿意を感じ、それに小さなお舟です。風が吹くと揺れが烈しくなり、尚



更に尿意を催し益々苦しくなつて参ります。オシメを充分に当てゝあるので、恐らくそのまゝ洩らしてしまつても大丈夫なのですが、万一のことを思い出来る丈我慢し続けていました。風が強くなつて来たので予定より早く切り上げましたので、どうにかオシメを舟の中で濡らさずに済みましたが、みんなと別れ車を拾い家へ急ぐ途中、とある交差点で急に赤信号が出て、車が急ブレーキをかけたショックで私は今まで耐えに耐えていた生理を我慢出来ずにオシメを濡らしてしまいました。

森英美様——。私の拙い文章がお目にとまり恥しく思つております。貴女様と同じ夜尿癖でお悩みになつていらした方を私はお友達に持つておりました。私が女学校を出てタイプを習いにいった所でお知り合いになつた方でお美しい方でしたが、その為結婚を失敗なさいました。私はほんの一寸して偶然のことから、その方が夜尿症であることを知りましたが、御家族の方も理解が深く、劣等感などはお持ちにならず、決して暗い蔭のある方ではございません。貴女も決して劣等感などはお持ちにならぬ様に！ 一種の御病氣なのですから……。そう云う私も小学校の六年生頃までは體質が弱く、母には大変心配をかけ、その頃まで夜は母におむつのお世話になっていました。それが成長して夜尿症が治つても

親しんできたオシメに対して仄かな郷愁めいたものを感じ、それが性と結びつきオシメに對して愛着を感じているのでしよう。私の場合、夜尿症は太陽灯で治しましたが、如何ですか？

また御質問のアメリカ製のオシメは日本では一寸入手し難いものです。製品は純白のものでガーゼの様に柔い布地で出来ており、乾きも早く大変便利に出来ております。通信販売会社で出している部厚いカタログにも、五六種のオシメの広告が出ており、又アメリカの婦人雑誌にも大きな写真入でよくオシメやおむつカバーの広告が出ており、中には各種のオシメの見本を無料で送ってくれる会社もあります。サイズが小型・中型・大型・の外に特大の大人用のものまで作られているのが面白いと思います。オシメ・カバーもそうだと思います。日本国内では大きなホテルのアーケード等にある、外人経営のドラッグ・ストア（薬局）等で売っておりますが、カタログに見られる程に豊富ではございません。

暮しの手帖に各国のオシメがグラビア写真で出ていたことが、ありますが、大体欧米は共通で、いずれも純白のもので、その点、私達日本のユカタ地で作られた、いろ／＼と柄の異つたオシメの方が如何にもオシメらしく私達マニアの心を充分に楽しませて下さるやうに想えます。この場合、いろ／＼の柄のも

のを集めてみたいと云う欲望が強くなり、浴衣の時期になると大抵二、三枚は買い求め一夏着た丈で、そろ／＼涼しくなる頃にはもう私のオシメに化けてしまつています。最近の特売場へゆき季節はずれの品物を取扱っている所で、昨年の売れ残りのユカタを安価で手に入ることを発見しました。まだ／＼数多くの柄の異つたオシメを沢山欲しいと思つていきます。

奇クの愛読者の中にはまだ／＼沢山のオシメマニアがいらつしやろと思ひます。私達マニアで一つのグループを作り、コレクションの出品や、記事、絵画等の交換が出来たらさぞ楽しいことだらうと思つています。また皆さまのお便りを集め、「オシメに関するお便り集」の様なものを作り、奇クの偶へでものせて頂きたいものだなア—と思つています。

——完——

## 四馬孝・傑作集

『美しき女体家畜飼育室』

ハ—潰滅の前夜—よりV（詳細解説は本誌九月号、十月号にあり）（大中判印画紙）焼付 八枚一組 八百円（送共）





〔告 白〕

# 防 毒 服 と 私

飯 田 靖 子

なぜに、このようにこの服装に魅せられる  
のでしょうか――。

六月末のムンムンする雨模様の朝、ラッシュ  
ユアワ―の満員電車は、人いきれも手伝って  
ムシ風呂のようです。ナイロンのジャンパー  
に目のつんだ黒いストラックス、そして赤い深  
目のレインブーツ、その上を、ゴム引きのレ  
インコートでスッポリと覆い、バンドをきつ  
ちりと締め、フードを深々と下げて、死刑囚  
のようにうなだれて立っている女。そして、  
その深々と下げたフードの下には、二筋、三  
筋の汗が糸を引いている顔が、暑さにむれ、  
苦痛にゆがんでいるのです。恐らく、まわり  
の人々はジッとこの異様な姿の私を見つめて  
いる事でしょう。電車が揺れて、顔の汗がポ

ツリとしづくになってレインブーツのつま先  
に落ちます。そのしづくを見るともなく見て  
いると、私の頭には、あのいまわしい、それ  
でいて忘れることの出来ない興奮を経験した  
戦争中の事が浮んでまいります。

一

太平洋戦争も漸く敗戦の兆しの見えて来た  
年、女学校を卒業した私は、お定まりのよう  
に、海岸近くにある化学工場に女子挺身隊と  
して動員されました。勤務は分析室で、現場  
から依頼されるサンプルを分析するという、  
その頃としては、めぐまれた仕事でした。  
戦争の進展に伴って、分析室の若い男の人  
たちは、次々と動員され、敗戦の年の六月に

は、とうとう私一人になってしまいました。そ  
の最後の一人の男であるYさんが召集される  
日、工場長はYさんと私と一緒に呼び、  
「後はやって行けるだろうね」と念を押し、  
「Y君。あれの方も頼んでおいて呉れ給え  
よ。」と言われました。『あれの方――』そ  
の時、私は、なんの事か解らずに、そのまま  
Yさんと分析室に参りました。

「Yさん。あれの方って何なの？」

と早速尋ねますと、

「ウン。防護団のことさ。」

Yさんは、事もなげに答えました。

「防護団って？ それなら、私、救護班にな  
ってるわ。」

「いまわそうだね。けれど、分析室は元々、



防毒班になつてゐるだろう。僕が行つてしまふと、防毒班が一人も居なくなるから、君に防毒班をやつて貰わなくちやならないのさ。」

「じゃ、私一人だけで防毒班をやるの？」

「そうだよ。」

「だけど、女の私でも出来るのかしら？」

「できるサ、だって、何もすることは無いんだよ。アメリカは、毒ガスなんて使われないからカンバンだけだよ。かえつてサボれる位さ。とは言つても、これから夏になると、ゴム人形は、一寸ツライかなア。」

「ゴム人形？」

「防毒服さ。こいつはゴムでチットも風が通らないんだ。だから、夏、こいつを着せられると暑さで参つてしまふんだよ。」

私はハッとしました。いつも警報が鳴るとYさんが着るあの草色のゴムの上衣・ゴムのズボン・ゴムの手袋・ゴムの長靴、それに防毒面なのです。

「それを、私も着なくちやならないの？」

「そうさ、『防毒班は、警報発令と同時に、防毒服を着用し防毒面を装面して、所定の位置に待機すべし。』と言うわけさ。」

そうだ。今これから一寸着る練習をしてみよう。工場長も言つていたからね。」

とYさんは言いながら、ロッカーから、防毒服一式を取り出しました。私は言いようもない気持ちに返す言葉も出ず、黙つてコックリ

とうなずいて了いました。Yさんは「サア、まず上衣からだ。」と言つて、フードの付いたゴムの上衣を着せかけて呉れます。丁度、スキーのアンラックのようになっていて、両腕を通して、頭からかかります。ゴワゴワとしたゴムの感じと共に、ゴムの匂いと、しみついた男の体臭が鼻をつきます。上衣の裾を、ゴムのズボンの中に入れ、腰のバンドをきっちり締めます。それから、両手首と両足首もきっちりバンドで締めます。次にゴムの長靴を履き、長靴の上のバンドを締めましたが、大きいので、ほとんどひざの上まで入りまゝです。それから、ゴムの長手袋で、ひじの所まであり、これもバンドで締めます。最後に防毒面の袋を首からかけて、面をかむります。後頭部から幾本かのバンドで面を顔に固着します。呼吸は、シユウシユウとゴム管を通して袋の中の薬の入った箱からしなければなりません、最後に、上衣についているフードをスッポリかむつて、防毒面の周りをピッタリと覆つてしまいます。これで私は、頭の先から、足の爪先まで、スッポリとゴムの袋に入つてしまつて、Yさんの言うゴム人形になつたわけですよ。

「さあ、防毒班準備完了。洗面所へ行つて鏡を見て来てごらん。」

Yさんの声が、ゴムのフードを通じて、変に聞えました。何だか、きゆうくつで、その

上、こんな異様な姿を誰かに見られるのが恥しいので、ヒヤ／＼して、洗面所に入りました。そして、その鏡に映つたのは、何と奇妙な姿であつたでしょう。タコのような防毒面。草色のゴワ／＼したゴムの服。ゴムの手袋。ゴムの長靴。

五分、十分、私は、ジツと自分の異様な姿を見つめていました。六月の末でしたのでしばらくすると、汗が顔と言わず、体と云わずにじんで来るのがわかります。それに、防毒面のために、息苦しくなつて参りました。しかし、それと共に、私の体は何かしらゾク／＼とする異様な刺激に襲われて参ります。ああ、今にして思えば、これが、私の体内にひそんでいたアブの血の胎動であつたのでしよう。私は思わず、ゴムの手袋のはまつた不自由な両手を、顔を覆つてゐる猿ぐつわのよきな防毒面にやり、ジツとうずくまりました。あまり帰りがおそいので、Yさんが、心配して見に来られた時、私の興奮は絶頂であつたのです。洗面所にうずくまつてゐる、ゴム人形の私を見てYさんは、

「オイ、どうしたの。気分が悪くなつたの。」と驚いて、かけよつて来られました。その声にハッとした私は、きゆうくつなゴムの防毒服の中で、身をよじつて、

「何でも無いの。何でも無いの。」と繰返し叫びましたが、声は、防毒面にこ

もって、徒らに響くだけでした。Yさんに、抱きかかえられて、分析室に戻ると、Yさんは、あわてて防毒面を外して呉れました。スーッと冷たい空気が、汗でグッシヨリぬれた私の顔を撫でます。こもっていたゴムの臭がいやにはつきりします。それと一緒に、もう一度、防毒面をかむせられたような気持ちになり、私はゴムの上衣、ゴムのズボン、ゴムの手袋、ゴムの長靴のまま、傍の椅子に腰



を下し、両手で再び顔を覆いました。警報が鳴ったら、又、この苦しみ、この興奮が味わえるのだと思ひながら、ポト／＼顔から落ちる汗のしずくを見ていました。

## 二

Yさんが、出発してから一週間程は、珍しく警報も発令されなかったので、私もあの重苦しいゴムの服を着せられることなく過ぎま

した。

しかし、七月に入ると、殆んど連日、警報が発令され、それも、朝、出勤して一時間もするかない頃に発令になり、一、二時間毎に解除、発令と繰返し、午後の三時、四時頃になって、やっと静かになるのでした。始めの間は、警報が発令されると、急いで、ゴムのズボン、ゴムの長靴、ゴムの手袋、それに防毒面と身に着け、解除されると、又、脱いでいましたが、次第にそれでは間に合わなくなり、出勤すると直ちに、防毒服装を着け、夕方、退社時まで脱ぐ事はおろか、バンドを弛めて風を入れる事さえ出来なくなりました。お昼の食事の時でも、防毒面だけをやっと脱いで、ゴムの防毒服、ゴムのズボン、ゴムの長靴、それに時には、ゴムの手袋も着けたままの姿で食堂に行き、唯一つ外気に接する事の出来る顔に吹き出る汗を拭いながら、そして他の人々が好奇の眼で見ている中で、不自由な手つきで食事をしなければなりません。

時候はいよいよ本格的な夏になり、太陽はギラ／＼と輝き、水銀柱は連日、百度近くを示す様になりました。ただでさえ暑いのに、殆んど一日中、絶対風の通らないゴムの防毒



服に頭の先から足の先までスッポリと包み、防毒面のゴム管を通して、あえぎながら呼吸しなければならぬ苦しみは、想像に余りあるものでした。汗とゴムの刺戟によって、下着やモンペは直ぐに駄目になり、股下や腋は言うまでもなく、体中一面にただれ、殊に顔は、防毒面のゴムと密着しており、その上、陽に当ることがないので、青白くむくみ上って来ました。しかし、この苦しみが、私には例え様もない刺激であり興奮であったのでした。

そうして七月の末、とうとう私は、この異様な姿で両手を縛られ焦熱地獄の中を歩かねばならなくなったのです。

その日は、朝からムンムンする曇の日でした。連日の汗に汚れた上衣とモンペを鹽に浸けて来たので、今日は一寸暑苦しいと思いましたが、代りのものがなかったため、スキー服にスキーズボンの姿で出勤しました。私が、分析室に入ろうとすると、あの何か恐怖感と呼ぶサイレンが鳴ったのです。急いでロッカーからゴムの防毒服を取り出し、スキーズボンの上に着け始めました。いつもの様に、ゴムの防毒服を頭からかむって、ゴムのズボンはこうとしていると、もう空襲警報のサイレンです。いつもに比べてずい分早く空襲警報になったのが、一寸気がかりでした。連絡班のTさんが特長のあるドラ声で、

「空襲警報！空襲警報！」

と怒鳴りながら、分析室のドアを開けました。私が、ゴムの服を着て、不自由な恰好で手首や足首のバンドを締めているのを見て、「オイ、今日は一寸いつもと違うぞ。早く着なけりや、間に合わんぞ。俺が手伝ってやろう。」

Tさんは、手早く、手首と足首のバンドを締めてくれ、私が長靴を履き、手袋をはめている間に、首に防毒面の袋を掛けてくれ、袋から防毒面を出して、私の顔を面に押し入れて後頭部からバンドで固着させ、ゴムの上衣のフードでピッチリと覆ってくれました「さあ。」

とTさんが、私のゴムで包まれた不自由な体を、ドアから押し出そうとした時、ザアッと言う焼夷弾の落下音が聞え、ハッと思つた時には、室中一面に火を噴き始めていました。Tさんは、

「グズグズしていちや駄目だ！救命帯で逃げよう。」

私を窓際へ引張って来ました。分析室は二階でしたので、非常用にズック製の救命帯と言うものがあって、此を着けて窓から吊り下す様になっていました。この救命帯と言うのは綱の付いた巾広いズックを胸と腰のバンドで背中につけ、更にこの巾の端についたバンドを股に通して前で腰のバンドと連結さ

せる様になっていました。

Tさんは、ゴムの防毒服で包まれた私に、この救命帯を大急ぎで縛り着けてくれましたが、胸のバンドを締める時、何しろ私はゴムの服を着て、手足を動かすのが不自由なのと又急いでいたので、バンドを両腋下に通さずに両腕の上から、それもひどくしつかりと締めてしまいました。だから私は両腕を体側に縛り付けられて窓から吊り下されなければなりませんでした。一方、火の廻りは、意外に早く、私が、あと一米程で地面にとどく所で、救命帯の綱に火がつき、私は地面に叩きつけられ、Tさんも身の危険に、救命帯の綱から手を放し、窓を乗り越えて飛び下りて来ました。

幸い、窓の下は砂地でしたので、二人とも怪我はなく、直ぐに身を起して、走り出しました。こうなつては、Tさんも私も、もうお互いに相手の事にかまって居られません。工場は、一面、火と煙の海です。私は無我夢中で走り、やっとの事で焼けくずれた塀から外に出ました。工場の外は、広い疎開道路でしたので、その真中を懸命に逃げました。両側から吹きつける熱風は、私のゴムの防毒服に当り、その暑さ、その苦しさは死ぬばかりでした。その上、私は両手を縛られているので、バランスが取れず、ゴムの服は重苦しくて、幾度かもう駄目だと思いました。し

かし、やっとの事で、火から遠ざかる事が出来た時には、もう欲得なしにグッタリと横になってしまいました。暫くして、気持が落着いて来ると、やっとな自分の今の姿に気が付きました。私はゴムの防毒服、ゴムのズボン、ゴムの長靴、ゴムの手袋、そして防毒面と全くゴム袋をスッポリ着せられ、その上、救命帯を縛りつけ、両手をそのバンドで縛り上げられているのです。誰か、バンドを解いて呉れないと、防毒面も防毒服も脱ぐ事が出来ないのです。防毒面の汗に曇ったガラス窓を通して、周囲を見廻しましたが、人影もあ

りません。呼吸は苦しいし、それに、暑さに防毒服の中は、スキー服もスキーズボンも汗でグッショリしています。何とかして両手を自由にしようと思をよりますが、徒らにもがくだけでどうにもなりません。仕方なく、私は目にしみ入る汗に苦しみながら、立ち上りました。そして、重苦しいゴムの防毒服装で、汗にまみれ、暑さと息苦しさにもたえながら、家の方向に歩き始めました。

——「ギーッ」と電車のブレーキの音に、私の思い出は破られました。電車は、終着駅に

到着したのです。ドアが開かれ、ゴム引のレインコートのフードを深々と下した私は、多勢の人々にもまれて、改札口へと流されて行きます。今日も、又、ゴム引の作業服が私を待っていることでしょう。と申しますのは、私の仕事は——いや、これは又、この次にお話ししましょう。

ともかく、この防毒服を着せられた私の経験が現在の私の職業——ゴム引の作業服をスッポリ着せられて、暑さにもたえねばならない仕事——に私を追いやり、私にこの様な文を書かせているのです。(此の項終り)

## 「股のぞき」の責め図

——「姐妃のお百」——

南川 和子

伊藤晴雨先生の「女体の縛り方十五種」(奇譚クラブ既載)によれば

『これは昔、佐度の金山の役所に行われたと伝えられる瓢箪責の一種に近いものである。余程の忍耐力の有る者で無ければ我慢の出来ない縛り方だ。両手を先ず後ろに廻して背中で縛る、縄尻を肩に当て、海老責と同じ様に締め上げ、それから縄を両股の

間に入れる。女の首が尻の穴の見える迄固く締めつけて縄を後ろへ廻して手首に縛りその縄尻を梁に吊して引上げると云うのだから馬鹿に手が掛る事と危険が伴うので実験が六ヶ敷い。

伝説によれば姐妃のお百が此の責めに掛った事二度で、余りに苛酷なので流石の毒婦も堪え切れなかったと伝えて居る』

と述べているが、私の調査でも、お百が湯もじ一枚の裾を乱して、悶え苦しみ、大声を上げる度に、肛穴腫出し、汚物を不随意に洩らしたと云う。

「日本刑罰風俗史」(藤沢衛彦、伊藤晴雨

共著)によれば「巷説秋田路」に出てくる姐妃のお百が深川十萬坪で旧主人の桑名屋徳兵衛を殺したのを手始めに、数々の罪で佐渡へおくられ、役人に二度瓢箪責にあっている。とある。

方法は両手を縛り、胴中で縄を巻きつけ左右から力まかせに引っばるので人体が瓢箪のようになる。と説明している。

後、お百は島を脱け、狼に追われ、とど竹取船にひそんで逃走した。

此の絵は、「瓢箪責め」に対する私の想像図である。(二葉の絵は都合により掲載出来ませんでした。——編集部——)



## 落日婦士道

青山芳樹

——その村落のはずれまで辿りついた時、私たち十六名の敗残の部隊は、最早、その部落が優勢な敵軍によって占領されてしまっていることを知った。力なくふり返る後方も亦現在まで私たちを追跡して来た敵によって包囲されているのだ。

昭和二十年夏八月。日本の降伏の報は一日、既に私たちの耳に達していた。大陸の一角に残されたこの十六名は、いずれも病み傷いた無力に等しい兵の集団に過ぎない。将校と云えば私ひとり、野戦看護婦の桂美智子が紅一点の女性として従軍していた。

進むも死、今は退くも亦死！——虚脱したような覚悟の色は、悲しく十六名の無言の面に漂っている。

「I軍医殿！ もうこれまでです。女は敵に遭えば、キット恥かしい死に様をさらさねばならないと思いますから、私は自決させて戴きます。」

桂看護婦がソツと私の傍に来て直立不動の姿勢で云った。桂は今年十九才、年の若さに似合わず大柄で肥り肉の身体は、永い野戦生活にやつれたとは云え、その顔は今も健康に輝いている。決意にキラメク生き生きと澄んだ双つの瞳を、私は哀れにも、こんなに美しい彼女を見たことはないと思った。

「死ぬか？」

「ハイ、死なせて戴きます。御奉公もし尽しましたし、思い残すこともありません。」

健気に云い切ったが——彼女の眼が急にう

るんで来ると、私の胸に力なく上体が仆れかけた。彼女が何を考えているか——私自身の胸には痛いほど分るのであった。それは将校と看護婦という階級を超えた切々たる二人の想いであつた。

「——もう生きる望みもない身体です。」

十九才の花の生涯が、今この一瞬に散ろうとする。再び自分に云い聞かせるように、

「わたくし、ここで自害を致しますから、見届けて下さいませんか？」

美智子の涙はもう厳しく乾いていた。

「腹を切りますから、あなたの軍刀を。」

私はハツとした。

「切腹をするんですか？」

「野戦看護婦だって軍人ですもの、最期は潔くネ、前から覚悟してたんです。日本人ですもの、女だってイザとなれば自分で自分のお腹ぐらい切れますわ。」

この美しい看護婦が、私の目の前で切腹をする——。私は急に胸が高鳴って来るのを感じた。

「本当に切れる？」

美智子は左手を丸い下腹に押し当て、右手で一文字に腹を切る動作をした。

「サムライのお作法通り、切腹して見せます。——わたくし、父からチャンと教わっていますのよ。出征する時、だってそう云われましたわ、皆さんと一しよに死ぬ時は、お前

も立派に腹を切るんだよって。剣道の練習のあとでは、毎日必ず稽古着のまま道場に坐らされて切腹のおさらいがあったの——だから私、平気よ。」

言葉は弾んで乱れたが、美智子の頬は何か激しい情熱に紅く燃えている。——そう云えば、剣を把つては女ながらも中々の名手と聞いている美智子は、敗走がはじまってから、ずっと白い短かい半袖の稽古着一枚を肌に常用していた。汗と埃にまみれて、布地はいたましく汚れていたけれど、黒い菱形模様の刺子が、彼女の豊かな胸の双つのふくらみとムツチリとした白いこの腕をキュッと絞って、白鉢巻とモンペの服装に、不思議な男らしい凛々しさを見せている。その胸は私のすぐ前にあった。

「さ、軍刀を貸して。黙って勇ましく死なせて、切腹させて頂戴、お願い。」

彼女は勿論、そのための短刀ぐらいは父に贈られて持っている筈である。然るに彼女は何か熱心に私の刀をせがんだ。私は軍医だから愛刀はまだ刃に血ぬったことがない。今ここで彼女に軍刀を貸せば、氷の刀身をまず染めるのは、彼女の腹を溢れる鮮血なのだが——さて、今の場合、続いてその返す刃を自分の腹へ——と、思うと私も亦激しい昂奮を覚えた。

「よし、それじゃこれで見事に自決し給え。」

彼女は黙ってコクンと肯いた。一度胸に抱いた大刀を左手にさげると、サッと右手で拳手の礼をした。

「桂 看護婦、唯今より割腹します。」

「……」

天地を染める真赤な夕陽を浴びた美智子の稽古着姿が、そのままクルリとうしろを見せ、ためろう色もなく傍の土塀の一囲いの中へ入って行った。

私はひきつけられるように後を追った。最期を見届けるつもりであった。美智子は土塀の中の草の上に向うをむいて端坐していた。そのまま、しばらく首を垂れて何か祈っているようであったが、やおら稽古着の胸紐を解いて前を掻き開ける様子である。刀に手をかけて鞘を払いかけたが、何を考えたか、また下に置いて、ハッと思う間もなくくりりと稽古着を脱いで双肌をあらわした。夕陽が美智子の真っ白い背中一ぱいに眩しく照りつけていた。そっと首をまわして私が立っているのを知ると、

「あらッ……」

と胸を抱くようにはじらいの微笑みを走らせて頬を伏せ、

「いけない方、まだごらんになっちゃイヤ。」

それでも強いて拒むこともなく、静かに脱いだ稽古着をたたみ、傍に置いた小さな荷物の中から真新しい袖の短い白い稽古着を取り

出して着込み、モンペの紐を締めなおしてグッと押下げておいて東の方を向き、元の場合所に正坐した。肅然とした女のたしなみが身に迫った。

刺子の上から張り切った胸の辺りを押えながら、

「——日本の女の最期の死に様を見せてあげますわ。私、深く切りますから血がずいぶんたくさん出て苦しむでしょうけど、いいと云うまで止めないでネ。一寸、見ないで、外でお待ちになって……」

刀の柄に手がかかった。私は外に出た。涙がつき上げるように両眼に溢れた——。

「美智子——」

無限の夕空へ、訴えかけるように呼んだ時「ウッ」と押し殺したような気合が聞えた。

土塀の上から伸び上って見ると、鉢巻をとった黒髪が、うつむいてあえぐようにふるえていた。中へ飛び込んでゆくと、彼女は稽古袴の前を開いてもう刀を真白な腹に突き立ててしまった所であった。チラと私の顔を見て、深い眼の色になったが、そのまゝ、

「ああーあ、」

とかすかに呻いて刀をグーと深く刺し込んだ。血がトロ／＼と流れ出した。やがて手拭で巻いた刀身をつかんだ手を持ちなおして、丸い肩が高く盛り上ると、一しよに、重いものを引張るように右手に満身の力をこめてデ



リヂリと引き廻しはじめた。下腹から真直ぐに突出している大刀の柄がぶる／＼とふるえている。

「イタイイ……ああ……痛い……」

殆ど夢中で呟いている。気丈とは云ってもまだ十九の乙女の切腹である。気の狂いそうな可憐にもむごたらしい姿であった。

臍の下まで切つて来て、フーッとため息をつき、少し笑つて、

「痛いワ！……でも

もう一息よ、こうし

て……ア、……ウー

む。エーイッ……く

……く……」

無理に声を出しているようだった。自ら励ますような切り込みの声と共に、腰が浮いて刀はザクリと右の下腹まで一気に大きく肉を割いた。

美智子はガックリとなった。ハッハッという激しい肩呼吸。

はじめて見る豊かに張った腹部の柔ら



かな白い素肌が血で真赤に濡れ、一文字に切り開いた創口から、なおもムツと生臭い若い女の熱血が、ゴボツゴボツと音立てて後から／＼湧きこぼれるのだった。腰の辺りに堅くキリツと巻き締めている白い晒の色が目には痛いほどしみた。

「あゝ、よく切れたわ。これでもう死ねばいいのネ、キツト死ねるわ、うれしい。」  
哀れにもふり上げた白い顔に後れ毛がサツ

と乱れかかった。

十分に切腹して置いて、血刀を杖にジツと苦痛をこらえている女の姿の立派さ！ 私は思わず合掌した。大陸の夕陽に染められた、血と刃の無残絵図！

やがて——呼吸が迫つて来た。と、彼女は突然刀を前に置き、右手をズブリと手首まで腹の中へ突入れて臓腑を引き出そうときぐりはじめた。男も及ばぬ女の切腹姿の凄壮さ。

閉じた眼の長いまつげの間と堅く喰いしばった唇の端から、タラ／＼と一筋の血が糸を引いた。

しかし、腕に力がもう尽きたらしく、つかんでいた内臓をはなして、血みどろの手で刀を探しながら、すでに視力が薄れて来た眼をしきりに見聞いて、

「ア、……もう氣力がつかない……でも、あゝ、ダメだわ、死ねないわ。死に切れない。苦しい、もういいわ、早くノドを、止めを刺してイキを止めて頂戴。早く、ああ、イタイ、殺してよ、早くッ、お介錯して。切腹したから介錯して、お願い早く早く、南無——」

悲痛な念仏も空しく口の中に消えて、私に介錯の合図をしながら美智子は静かに体を前に曲げて行った。

前にのめると一しよに、腹の切り口に露出していた白いはらわたが、血の塊とからみ合つて厚い脂肪層の間から膝の下面にドット溢れ出して来た。腸の二管が生きもののよう

に地を這つて伸びた。  
美智子は俯伏して腰を高く上げ、あたりの草を両手で掻きむしりながら、身を揉んで知死期の苦しみに風笛のような悲叫をあげてい

る。  
私は朱に染まつた愛刀を執り上げた。

「覚悟はいいネ。」

涙に曇る声で叫び、切尖を形のいい柔かな乳房のふくらみに当てがい、一思いに突き刺した。

美智子は全身でけいれんし、深い太息を一つして動かなくなった。——断末魔であつた。

今、腹を切つたばかりの生温かい女体を、落日の最後の輝きが、空しく赤く照らしていた。

同時に激しい銃声が周囲に起つた。美智子に続いて腹を切ろうとしていた私は、愕然として起ち上つた。敵襲だ！

——そして、骸をその地にさらした残り十四名の傷病兵と共に、玉砕を伝えられた私がここに生きている。美智子がその中で切腹を遂げた土塀の囲が、奇蹟的に私を重傷のまゝ死に到らしめなかつたのである。

ここに婦士道の掟に殉じて屠腹した一人の女性があつた。亡びゆくものの美しさを、高らかに示しつつ、こころよく彼女は死んだ。掟に縛られ、進んでそれに殉じゆくものの心理は、精神的な緊縛願望——マゾヒズムの「精神的」表現と見られるのである。殊にそれが切腹自害という精神的肉体的痛苦の極致をかりて現れた場合、その満足は最高のものとなる。これを目前に見るもののサド的満足も亦云うまでもない。

それと、ここに附言したいのは、彼女の愛用した、ピッチリと肌を締めた刺子の稽古着のことである。これはそのまゝ所謂「狭窄衣」であると云える。常に締められ、縛られ、抱かれていた感触——それを彼女は、私を意識し出した頃から常に肌に着て愛用していたのであつた。白い稽古着の持つ不思議な魅力については、既に本誌復刊第二号と第三号に詳しく述べられた所であつた。

私は帰国するとその足で、桂看護婦の父君を訪ねた。そしてその壮烈な最期の有様を詳しく報告した。父君はむしろニコリとして会心の笑をその温顔に浮かべながら、

「やはり、立派にやりましたか——」。

と一言、一滴の涙を笑にまぎらわされた。

美智子が生前、一心に剣道の稽古にはげみ切腹のおさらいをした薄暗い道場にも案内さ

れた。壁には彼女の可憐な稽古袴が、まだ生けるもののように掛かつていた。私は特にそれを乞い受けて道場を辞した。

年はかわれど今日は美智子が切腹自刃した命日である。私は彼女の汗のじんだ稽古着を肌につけ、袴を穿いてひとりこの短かい報告的遺書を綴っている。傷癒えてから私は直ちに美智子の後を追うつもりであつたが、あまりにも悲壮な彼女の死を、世に伝え人に語るために今日まで惜しからぬ命を永らえて来た。

今はすべての仕事を終り、この原稿を出版社に送れば、私としてはもうこの世に生きる思いも断ち切れる。私は美智子と同じ稽古着を身につけ、美智子が自らその腹を割いた私の愛刀で、美智子と同じ苦痛を味わうために潔く切腹をする覚悟である。美智子は自ら己が腹部を切り開いて、その臓腑を私に見せて呉れた。私も亦、私自身のはらわたを彼女の霊前に捧げ、かわらぬ愛の誓いを果そうと思

う。  
美智子が婦士道の掟に殉じた如く、私も亦美智子への愛情に殉ずるものである。

(終)

×

×

×





## 水責に関するノート

甲 斐 仁 参

『水』を使用する拷問は古今東西に亘って  
広く行われた模様であり、その方法も千差万  
別と云える。

先ず第一の方法は、水によって呼吸を困難

顔に、それと、タオルがかぶせられた。むっ  
くりと盛り上った乳房、それから下肢にかけ  
ての豊かな曲線……。そうした刺激する女の肉  
体の放つ雰囲気若い部下達を一層あおり立  
てたと云う事もあったろう。

にさせる、つまり溺れさ  
すものがある。「切支丹  
宗門史」等に見られる海  
中の逆磔（海中に柱を立  
て頭部を下に縛り付け、  
潮の満干によって水漬と  
逆吊りとを自動的に交互  
に行うもの）を始め、つ  
るべ井戸の縄に繋いで水  
に突込むもの、川又は湖  
等の岸に材木を突出さ  
せ、それに縛った身体を  
シーソーゲームのように  
水に入れたり出したりす  
るもの等々、勿論水も飲  
むであろうが、息の出来  
ぬ苦しさを利用したもの  
である。同種方法が前掲  
「りべらる」（本誌一・三  
月号の小生ノート参照）  
に記載されて居る。

「いいか、喋る気になったら、頭をふれ、そ  
したら、やめてやる、判ったな」  
だが、縛られてから、寝かされるまで、二  
人とも金切声で毒ずき通しだったという。む  
しろ悲鳴に近い叫びで。その叫びも要領を得  
ない雑言だった。タオルをかぶせられて、  
その上から水が注がれはじめるとぴたりとや  
んだ。

水をふくんだタオルがぴたりと鼻に吸い  
ついて呼吸が出来なくなる。口で呼吸しよう  
とすると水が流れ込んでくるし、どうにも処  
置なしという事になる。絶息しそうになって  
苦しまぎれに降参するというのが狙いだった  
が、最後まで毒付いていたマリーがまずまい  
ってしまった。

何か叫びかけたたん、タオルをかけられ  
て水を注がれたものだから、もろに水が咽喉  
に流れこんだのだ。

ガボ、ガボ……と苦しうにせきこんだ  
と思うと、ヒューと、笛のような悲鳴があが  
った。その間にタオルはぴたりと鼻孔に吸い  
ついてしまったらしい。

乳房が大波のように上下にゆれて悶えて……  
ヒュッ……と、こわれた笛を吹いたような音  
を立てながら無茶苦茶に頭を振った。水は絶  
え間なく注がれつづけられて「喋るか」と、  
きいても、やはり頭をふったまま……  
ウ、ウ、ウ……、とタオルの下から妙な呻き

声がし始めたときは、マリーはもはやタオルが口にあたっていた部分をそっくり口の中に吸いこんでしまっていた。

ピク／＼……と全身をケイレンさせると、そのまゝぐったりと動かなくなった。窒息して失心してしまつたのだ。……

◇

更に水を無理に飲ませる方法がある。前記も続けて次のように記して居る。

……水責の第二の方法をやられることになったからだ。とめどもなく口の中に水を注ぎこむのである。水をのんでのんでのみつくさなければならぬ。……

「喋るか」

ときいても、口を閉じて黙っているメリーの口を無理にこじあけて、水を流しこみ出した。

いやでも何でも水は口の中一杯にたまりその水はのみこまなければならぬ。彼女の顔は段々紫色になりかけてきた。眼は釣りあがつてしまっている。

胃がふくれあがる。そのふくれ上った胃の上でぴんと張った乳房がとり肌だつてしまっているのが、妙に生まましい。

ぶる／＼と彼女の体が小刻みにふるえはじめた。悪感戦慄なのだ。

水がある量、胃に入つて、それ以上、無理

に飲もうとすると、シヤックリのように頭をもち上げては、突張るようになる。

無我夢中でメリーは水に溺れていた。ガツン、ガツンと床に頭を叩きつけながら、今は参つたと合図する元氣も意力もないのか、だらだらと顔中水に埋つたようになりながら、飲まされつづけていたが、とつぜん、ウーンと一声呻くと、氣絶してしまつた。……

以上は白系ロシア人のダンサー、マリーとメリーに対しスパイの嫌疑で旧日本憲兵の行つた拷問の話であるが、次に女共産黨員に対して特高刑事の行つた話を「愛情生活」昭和廿七年二月号の「鞭の下赤き女の恋」から拾つて見る。

……「この上は、こつちも、からだで云わせるぞ」

ニヤリと背の低い刑事はあざけると、割り箸を持つてきて、グイと春子の顔を片腕に抱きこみ、顔をうわむける、彼女は、きりりと歯をくいしばつた。断髪はみだれ、ブラジャーの乳房がふれ上つた。……その箸を、こんどは春子のくちへ押し込み、押しあけて、

「おい例の奴を持って来てくれ」

そばで、莩を吹かしてみていた長身の刑事は、アルミの大きなコップに塩水を入れてきて、彼女のくちへ流しこんだ。

「あつ、うわッ！」

思わず、叫び返した彼女ののどをつたわつて、塩水がゾク／＼と流しこまれる。それを幾杯も／＼流し込んだ。

これが女の生理を利用した、拷問の一種だった。冷えきつた地下の刑事室で、深夜裸にし、幾杯も幾杯も塩水を吞ませると、生理的に小便をうったえてくる。じり／＼と破裂しそうな下腹部の苦痛をこらえて泣きわめく女に泥を吐かせる。……春子もその一人だった。彼女はやがて、ブル／＼と身ぶるいが出そうなほど、小便をもようしうようになった。

人間の考える事は同じと見えて例のサド著「ソドムの百二十日」第三部、七十六番（啓明社版）には次の記述が見られる。

「その男は彼女に大量の水を飲ませ、その二つの出口を縫合せるのだった。女が尿と排便が出来ず死んで仕舞うか、水の圧力が遂に糸目を破つて噴出するのを待つのだった。云々……」

◇

次には水を飲ませ、又それを吐き出させるという方法がある。これが最も典型的（？）なものと考えられ、日本にも古くから「梯子に縛りつけ、顔面に絶えず少量の水をそそぎ鼻と口から流れ込んだ水が胃に満ちると脚部



を上げて吐かせる。水は口と鼻からほとぼしり出て大いに苦しむ……」の記録が見られ、同様方法が欧州中世の宗教裁判等にも盛んに利用されたらしい。この方法が「講談クラブ」昭和三十年九月号、山田風太郎作「天皇と美女と暗殺」の中に記されて居る。

……冷え冷えとした司法省の白州に、中検事安藤則命は仁王立ちになっていた。その足もとに、おかねが大の字に横たえられて、それに五六人の刑吏が、白いもむしにたかる蟻のように、手足をおさえつけていた。……

安藤は顎をしやくった。

「それ／＼」

さすがの女もいさゝかやつれている。やつれたためにいっそう透きとおるような美しさになったのが、かなしいくらいであった。

そのおかねの口へ、刑吏の一人が指をつこんだ。かまれないために、指に繻をはめている。ひらいた口へ、大きな漏斗がさしこまれ、もうひとりが、そこへ桶の水をさあっとあけた。

「うふっ」

水があふれて、頭をもちいたが、髪はじつと砂利にひきつけられている。白いのが、苦しげにゴクゴクうごいた。

「さあ、はやく申し立てえ／＼」

「そ……そんなひと……だれもない……」

「しぶとい奴だ／＼ それもう一杯／＼」

恐ろしいもので、二升も水をあけられると、すんなりした女の腹が、卵をのんだ蛇みたいにコンモリとふくれあがって、波をうった。水がのどまで満ちて、もう物理的に入らなくなると、刑吏が一本ずつ彼女の脚をつかんで、さかさまにした。

「うふっ」

鼻と口からほとぼしる水にむせんで、女の手足がクネクネとのたうつ。がっくりとなったところへ、

「それ、あらためて水を吞ませえ／＼」

おかねは、うめいて、死声をあげた。

「かんにんして……もうかんにんして……思い出しました。或る人を思い出しましたよ。……もしかすると、もしかすると、あいつかも。……」……

この小説にはこの他おかねに加えられる拷問が、箠尻、石抱、駿河問、擦り責と、合計五種類描写されている。



次に水の温度の高低が皮膚を通して及ぼす作用を利用したものを拾って見る事にする。

島原の切支丹迫害で、信徒の背に温泉岳の熱湯（硫黄湯）をそゝいだ話はあまりにも有名であるが、この他、トルコ温泉式のむし風呂利用のもの等があった事も承知である。

一方廊等で行われた私刑の一つに寒中腰のものまで剥いで冷水をあびせる方法、更に雪責までその記録等も数多いが、大部分現在までに本誌その他で紹介しつくされた感もあるので、こゝでは前掲啓明社版の「ソドム百二十日」及び「ジュステイヌ」から少々拾って見る事にする。まずソドム百二十日第三部五十四には次の記録がある。

「娘は Menstruating でなければならぬ。彼女が男の家に来た時、召使は地下室に通す。その地下室には直経十二フィート、深さ八フィートの冷水をたゝえた水槽があり彼女に気づかぬように隠されて居る。男はそのそばで彼女を待ち、娘が近づくやいなやその中につき落す。そして落ち込んだ音を聴いたとたんに Discharge する。彼女はすぐに引き上げられる。しかし Mens なので、悪い病気が彼女の健康を害する事になる。」

次に水ではないが、同部九十七には「彼は溶けた封印用の蠟を女の尻、Cunt 胸の上に点々と落す。」又、同九十一には「彼は彼女の腸を沸立った油で洗う。」等々の方法も記されて居る。

さて「ジュステイヌ」のなかで山中の僧院に連れ込まれた主人公が次々と淫虐な責めを加えられる話のうち Seveirno に責めら

れる場面がある。最近邦訳も出版された様子なので話の前後の状態は御解りの事と思うのでその部分だけ取り上げる事にする。

「朝になり、いくらか元気になったので、彼は又、別の拷問を加えようとするのでした。彼はもっと大きな道具を作って居りました。

これは中が空に刳ってあり、高圧のポンプが附いて居るのです。それで道具の先の穴から恐ろしい圧力の水をふき出させるのです。その道具の大きさと云ったら周囲が九インチ、長さが十二インチもありました。彼は熱湯を入れ、………(中略)………私はそ

んな恐ろしい企てに怖えて、彼の足もとに身を投げて許しを乞いました。けれどあわれみを掛けて呉れるどころか、もっと好色な情熱がそんなあわれみなど消し飛ばし、もっとひどい残虐さを振わせるような呪われた性質なので、もし、私が従わなければ……と憤激して私をおどすので、とうとう云う事を聴く事にしました。………(中略)………恐

ろしい熱さに、私はもう気を失いそうに苦しみました。種々の雑言を投げかけながら、十五分位も私を引き裂くように苦しめながら……後、彼は引金を引ききました。熱湯の円柱がポンプで飛び出し………ました。………私は気絶し、………私の苦悶に比例して彼は歓喜するのではした………」

## ◇

最後に特殊な水責として、伊藤晴雨作「黒縄記」の中で女隠密、絹枝が種々拷問に会う話があるが、その中で絹の袋に小豆を入れたものに水をそそぎ込み小豆がふくらんだ所でこれを引き出す……と云う方法が載せられて居る。

## ◇

次に、某地方の記録に残されたもののうち水責に関係があり、前記に引用した方法以外のもののみを拾って見る事にする。

……その日の夕刻、花魁敷島は再び土蔵から引ずり出された。主人の居間の前には昨日と同様意地悪いやり手や三下達が彼女を待ち受けて居た。

「どうだ、少しは考えもついたか」

亡八の声に敷島はと顔を上げた。

「いやでありんす、この儘、殺してくんなまし。」

「馬鹿云え、手前の身体にや金が掛けて居らあ、どうでも『諾』と云わせるんだ。」

やり手婆が立ち上り敷島の乱れた髪に手を掛けてうつ向いた顔を引き起した。北国の雪をいだいた山から吹きおろす冷たい風が額にかゝった毛を吹き上げた。

「さあ花魁、素直に云う事を聴いた方が得策だよ」

やり手は猫なで声で敷島をうながした。三下が荒縄を手に彼女の後ろに廻るのをチラリと横目で見ながら敷島はやはり無言だった。「なんて強情な、やさしくしてやればすぐつけ上りやがって……」

どんと前に突き飛ばされ、思わず前にのめった身体に荒縄が巻きつき見る／＼後手に縛り上げられた彼女は、冷たい土の上で身を揉んだ。

「舌を噛むといけねえ、これをくわえさせてやれ。」

亡八が太い鉄の火箸を、カラリと庭先にほうり出した。三下が急いでそれを取り上げると、小さく結んだ彼女の唇の間に太い指を突込み歯の間にその先を捻じ込み、ぐいぐいと廻すように押し込んだ。彼女の果敢ない努力をあざ笑うように火箸は生き物のように口の中に入り込み、生臭い鉄の味が口中に広がった。上顎に突き立てられた先の痛さにはっと開いた口にくつわでも噛まされたように火箸が渡され、更に両端を頸の後ろを廻して縄で結ばれ、彼女は目を白黒させ、押し出そうとでもするかのように舌を巻きつけ、自由にならない手の指をひく／＼と動かした。

「のぼせた頭を冷やしてやれ」

亡八の合図に三下は彼女の襟首を掴んでぐい／＼と寛の下に引きずって行った。寛からは雪どけの冷たい水が砂利の上に落ちて居



た。その水の下に顔を仰向され元結の切れた長い髪が杭に巻きつけられた彼女の口には、火箸のすき間から、絶え間なく水が入り込み、鼻の内へも流れ込んだ。俯伏せる事も出来ず、わずかに顔を横に捻じりながら彼女は激しく喘んだ。

金糸、銀糸を縫いつけた豪華な着物もしぶきに濡れ、身をもがく度に前が乱れ、白い脚が裾を割って、苦悶に虚空を蹴り上げた。

暫く水を吞まされた後、彼女は呪わしい寛の下から引ずり出された。夜ごと遊客の前に孔雀のような麗姿を誇った花魁も乱れた髪を海草のように濡らせ、乱れた衣を直す事も出来ぬ憐れな囚人の姿であったが、その紫色の唇、鳥肌立って慄える身体からも懷艶な色気がたゞよって悩ましかった。

「さあ、分別も附いただろう……」

やり手が憎くくしく問い掛けると敷島はうつ／＼と言葉にならぬ声を立てながらも、はげしく頭を横に振るのだった。気持ちの悪い嘔吐感が彼女を襲いガチ／＼と火箸を噛みならせ胸を激しく波打たせながらも我を折らぬ意地に亡八は激怒した。彼は庭下駄をつっかけると荒々しく彼女に近ずき帯の上から力まかせに背中あたりを踏みつけた。恐ろしいうめき声を上げ敷島は鼻と口から奔流のように水を吹き出し、苦しげに足をばたつかせた。二度、三度、水を吐き尽した彼女は再び

寛の下に引ずられ、水に喘ぐのだった。

何度も／＼苦しい拷問が繰り返され、彼女は息も絶え／＼に喘ぎながらも首を横に振り続けた。

「余程のぼせて居やがる、骨の髄まで冷やしてやれ」

亡八の言葉に荒縄のいましめは取られたが更に着物が、腰のものが剥ぎ取られた。いくら情に濡れた身でも、無体に全裸の身を晒させられるのは恥かしい、恐ろしい事だった。冷たい夜風が皮膚を突き通すように痛く、戦慄が背すじを走った。手足を引かれて彼女は又しても寛の下に運ばれ、今度はその下の杭に縛りつけられた。頭の上からそ／＼がれる水は冷たいと云うより針を刺されるような鋭い痛さだった。肩先がしびれてすぐ感覚が無くなった。続いて二の腕が、胸が、きっちり合わされた太腿が、次ぎ／＼と身体から切り離されて行くようだった。

「どうだ、まだ性根が直らぬか」

やり手の声も耳に入らぬのか、敷島はガツクリと口を開き、焦点の合わぬ瞳をあらぬ方向に向けたまゝだった。

次の日、彼女が連れ込まれたのは風呂場だった。荒縄の代りに腰ひもが身体に巻かれ、両手が背中締め上げられた。

「さあ、ゆっくり入んな」

やり手の声に敷島はあきらめたように桶に

裸身をつけた。勿論風呂の中には湯の代りに冷たい水が湛えられて居るのだった。堪えても／＼ガチガチと奥歯が鳴るのをどうしようも無かった。やり手婆はニヤリと気味悪く笑うと敷島の頭をぐいと水の中に突込んだ。彼女は口と目をかたく閉じて必死に息を殺した。やがてゴボ／＼と泡が吹き出され掴まれた頭が水の中で苦悶に踊るのだった。髪を掴まれたまゝ顔だけ水中から引き上げられ、濡れて喘ぐ耳もとに同じ言葉が投げられる。

「どうだ、うんと云うか……」

「いや、いやで……」

言いかたも終らぬうちに頭まで水の中へ突きもどされる彼女だった。何度か白い海豚のように水槽の中で身悶えながら泡を吹き出した後彼女は引き出された。氣息奄々としながらも彼女の頭は横に振り続けられた。

今度は乾いてガサ／＼と皮膚を刺す荒縄が持ち出され、それこそ雁字がらめに全身を緊縛された。喰い込んだ縄の間から可愛らしい乳房が脹れ上って慄えた。肉に喰い込んだ縄の痛さに彼女は呻いた。更にその上に何杯か水が浴せられた。すると縄はまるで生き物のようにギリ／＼としまり出した。息を吐く度に、又少し吸う度に縄が身体に喰い込んで来るように思え、耳が恐ろしい音を立て、脈打ち、頭が錐でもまれるように痛み、次第に目が眩み出した時、縛めは弛められた。しかし

## 〔女装通信〕

青柳 芳章

湯上りに、ついうと／＼として炬燵に入って居眠りをしている私の唇に妻が、いたずら半分口紅を塗っている。私は敢てさからいもせず妻のなすがまゝにして、じっと眼をつむっていた。これが私の女装のはじまりであった。

次は、妻の着物を借りて、白粉も用いて本格的な女装である。然し「はい、出来ましたよ」と妻に差し出された鏡を見て、がっかりした。小肥りで背の低い私は、腹が出ていたので着物を着ると、実に不細工である。カツラがないので手拭をかむる。これで出来上りである。洋服タンスの鏡の前に立った私は、鏡の中の美人？に思わ

休む暇は与えられなかった。何度か血を吐くような苦しみに虐まれた後、失神した彼女は又もとの土蔵に幽閉された。

翌日、与えられたむすびはひどく塩辛かった。しかも一滴の水さえ飲ませてもらえず、

胃の腑が焼けるような、ひどい口渴に悩まされ続けた。夕刻近く運ばれた塩むすびを、もっと激しい渴に責められる事を知りながらも、口中を冷やし度い欲望に負けて貪った。いくら哀願しても水は与えられず、普段なら

考えても見ぬおぞましいものさえ、口に含む彼女だった。

遂に敷島は一椀の水のために首をたてに振った。苦しい水責に負けなかった彼女も、生理を無視した口渴には勝てなかった。(了)



が縛られていたろう。あんなふうにやったら、どうだ。」

云い終ってから、妻は私を軽蔑するかな、と不安になって、妻の顔を見たが、そんな様子もない。

「じゃ、縛ってみるわ」

というわけで、私は妻の着物を着て、妻から細引で後手に縛られた。私も、たまには妻も縛ってみたが、妻は余り好まないようだ。私はかねがね、中年の婦人か女装の美人を縛ってみた、そして自分も又女装して縛られたいと願っている。

同封の写真は、初めて女装した時、妻にうつして貰ったもので、アルバムに貼っておいたら妻が「こんなもの、どこかへしまっておきなさい」というので、ここに同封した。

ず微笑んでしまった。

「いゝじゃないの」

「しかし、随分グロテスクな女形だなあ」

「そんな事ないわ、きれいだよ」妻のお世辞に、私もつい、その

気になってしまう。

「でも、これでおしまいじゃ、つまらないわ」

「じゃ、僕を縛って見たら、よく映画でやるじゃないか、いつか見た、天狗の安」の中で入江たか子



## 創作

## マツトに生きる夢

近藤

一

マツトに生きる夢

新村謙次が白川昌江に目を瞠ったのは昨日や今日の事ではない。昌江が、女子プロレスの日進クラブに所属して間もない頃からの事だ。大学の同窓岡田が主宰するクラブなので時折は散歩と称して出かけとみるのである。若い女体があられもなくマツトの上に転げ廻っているのを見ると、彼女達が色気抜きで懸命にやっているだけに目のやり場に困るようなことも多いものだ。しかも、彼女達は娘ながらプロともなればシヨウマン気質を持ち、昌江以外はいずれも好きで飛び込んだ世界なので、虚栄も手伝い、勝負と人気のために必要以上の斗志を燃やしている。

新村はマツトの上の力斗を見るのが好きだった。日進のリングサイドで、よく彼の姿を見かけるし、ブラジエアとシヨートパンツの娘がタオルで汗を拭きながら、彼の適確なアドヴァイスを受けていることは珍しくなかった。乱暴な言葉遣いの娘達が彼を、新村先生と呼ぶのである。岡田が冗談紛いに、彼を日進ジムのコーチにしようか、と持掛けたことがある。彼は「馬鹿云うな、俺が娘のレスリングで飯が食えるか」と一笑に付してしまったのだが……。

彼には、新村としての誇りがある。かつてアマチュアレスリング

に君臨した風間選手の王座を揺がすべき男と目され、兵役によるブランドクをも取返そうとして講道館の門を叩き、更に唐手を、そして剣道までを学んだ彼としては、同じ学窓に在ってマツトの上ではさして芽が出なかった岡田が時流に乗ってジムを経営していることを羨しく思わないでもないが、やはりそこまでは堕ちられないものがあつた。脊髄の故障、そのために、あの新村が、と世間に噂されるのが恐ろしいのだ。しかしマツトへの郷愁は強く激しい、リングへ上れぬ今は尚更だ。

彼は昌江を見つけた日、岡田にこう云ったものだ。「貴様、どれくらい奴を堀出したな。鍛え方一つで凄いものになるぞ。」

五尺五寸七分で十六貫八百は、確かに女として大柄で立派であるが、然し、この世界では、寧ろスマート過ぎる体格である。五尺四寸でミドルウェイトの大石多摩子が相手になっていて、それこそ貫祿の差と云うのだろうか、まるで、猫が前肢で鼠を弄ぶように、昌江を手玉にとっていた。処が、昌江は、倒されても投げられても起ち上っては向って行く。多摩子も些か辟易したらしく、いきなり昌江を担ぎ上げると、飛行機投で、弾みをつけて投げとばし、仰向

けになった昌江の胸に腰をおろしてしまったのである。それでも昌江は参らなかつた。

岡田が「どうだ。貴様が育ててみたけりや、あの娘を任せてもいいぞ。」と云ったが、彼は黙っていた。

昌江は、確かに、筋が良かった。短期間に、ぐんぐん上達した。得意は左腕のヘッドロックからの首投と飛行機投、シザーズ等であった。特に胴締は、脚が長いだけに有利である。見栄えを充分考慮に入れた派手なユニフォームでマットに躍り出る彼女は、フアッシヨンモデルかと思わせる程の均齊のとれた肢体を誇っていた。義理で渋々入門したという昌江だが、何より良い事に、足腰が無類に強いのだ。然し、それは彼女自身気付いてはおらず、そして岡田も見抜く事ができなかった。昌江は十七歳。明朗で実に素直な少女だった。岡田が一生懸命シヨウのための反則を教えるのを、新村は真向から怒鳴りつけたが、しかし彼女のプレイは非常にフェアで、岡田と新村との争いも知らぬように勝ち進み、ランクも上昇の一途を辿った。

春の全日本女子プロレス選手権大会ライト級のダークホースとして、日進の白川が新聞にも載る程になったのである。

大会の一週間前、或る劇場のアトラクションに女子プロレスのタッグマッチが行われた。日進の看板鈴木夏子、山崎美智子のコンビに相手は大和クラブの美山勝枝、大熊隆子のコンビであった。大和チームは、「殺人」という綽名が少しも誇張でない反則の物凄さで名を売っているコンビである。女の本性とでも云おうか、女子プロレスの反則の酷さは、男のプロレスでは到底見られるものでない。殴る、蹴るは勿論だが、抓る、引掻く、そして髪の毛を撚ったり、拳句の果は、剥出しの腿や腕の肉に噛みついたりするのだ。つい最近も、美山が相手の娘のお尻に歯を立て、あの丈夫なユニフォームの上から尻の肉を噛みきった事があって、大騒ぎになった。当の美

山は、「彼奴のお尻<sup>お尻</sup>って、しよっぺえや。」と笑い飛ばしていたのである。

それ程の大和に対して日進は、しかし、決して劣らなかつた。鈴木、山崎の揃った美貌と試合上手なテクニックは、善玉コンビのピカ一であったのだ。

処が、当日、思いもかけぬ事故が起つたのである。夏子が試合間際まで姿を見せず、一同心配していると、近くの交番からの報せで夏子が愚連隊に因縁をつけられ、負傷したという事だった。些細なことで起つた喧嘩だが、フアイターだけに、夏子も敢て喧嘩を買って出たらしく、相手の男は四人いたそうだが、いずれも夏子の唐手うち、肘うち、膝蹴に痛められていたと云う。しかし結局、女の身で多勢に無勢、それに刃物を持出されては仕方なく、通行人の報せで巡査がかけつけた時は、夏子は顔を護って俯伏せになった儘、彼等の蹂躪に任せていたのだそう。やはり此の世界でも容貌が第一で、しかもそれが売物の夏子であってみれば当然の事だろう。

だが、この事故であいた穴は埋めなければならない。相当期待の一戦に、なまじの代役では相手が承知しない。そうなれば美山組の反則に遭って一溜りもない。アトラクションの一試合だけなので、めぼしい選手としては、セコンドを務める大石多摩子と白川昌江の二人がいるばかり、多摩子の氣遣いを抑えて、岡田は昌江を初めてのタッグマッチに出した。相手は二級上のミドル級だと云うのに。

二十分、ワンフオールマッチ。ゴングが鳴り、まず昌江と勝枝が躍り出た。がっきと組むと見せて、勝枝は烈しく昌江の脇腹に拳打ち。怯む処を、腕の逆を取ってダブルリストロックに攻める。昌江の右手首は逆になった儘、ぐっと背中を持ち上げられ、腕の色が白っぽくなって、肩先がごきごき鳴った。それと同時に、勝枝は昌江の尻を蹴る。い、痛っ！昌江の口から悲鳴がもれ、がっくり膝をつく。観衆はざわめき、中には、手なんか折っちまえ、ミ、ヤ、マ



ア／と叫ぶ女の声もあった。二度、三度、四度、蹴られながら昌江は左腕を伸して、とう／＼勝枝の首筋を抱えた、えいっ／昌江の首投に、勝枝がもんどりうつ。然し勝枝もさるもの、つかんだ手首を放さない。再三の首投でロープ。離れ際、勝枝は昌江の肘や肩口を踏み躪ることを忘れない。昌江が反撃に出る。体当りでロープへ弾きとばし、出て来る処を首投連発／更にヘッドロック／処が勝枝は昌江の脇腹へ爪を立てた。うわアッ／と力を抜いた途端に、足を掬ってトーホールドに移る勝枝の巧みさ。観衆は益々沸く。昌江は跳ね廻り、自由な足で激しく勝枝を蹴りながら、泳えようとする敵の姿勢を利用し、上体を起すと力をこめて勝枝を引倒してすぐにボディシザーズにかかる。昌江の得意の技をはずそうと苦悶する勝枝。昌江の脚が挟みつけた勝枝をぐうっと持上げる。尾底骨攻め／そうされながらも海老固めに返そうとする勝枝。一旦は、はずれたものの、昌江の脚は直に絡んでヘッドシザーズ。仰向けに激しく跳ね廻る勝枝。十分が経過。突然、隆子が飛び込んで昌江の髪を握って引ずる。美智子もロープを潜る。途端に勝枝が昌江の腿に噛みついた。痛ア／／絶叫。四這いになって、タッチに逃げる勝枝。昌江と大熊隆子。隆子は昌江の髪をつかんで引廻す。そして素早く右手を取ってハンマー投／胸から肩を踏み躪る。投げては踏み投げては踏み、昌江の悲鳴が頼りにあがる。原爆投に次いで飛行機投／昌江はグロッキーに



なった。逃れようとするのを隆子の地獄固めが阻む。じりり、じりりと昌江が匍う。びしゃ／ううっ／隆子のナックルパートが昌江の背に鳴る。あと五寸、三寸、二寸、一寸、ほら、ほら、ほらっ。

観衆の興奮。タッチの成った昌江はコーナーへ坐り込む程だった。

多摩子が水のビンとバケツを出して汗をふいてくれる。美智子と隆子。ロロ、頼むぞっ！の聲が上る。胸の隆起の素晴らしさでロロブリジダの愛称で呼ばれる美智子は、ヘッドロックから、烈しいアップパーを喰わせ、きり／＼舞をする隆子を今度はチンロックに次ぐアップパーで攻める。ちきしよっ！ちきしよっ！隆子は、無闇に美智子を振り、引掻く。痛いっ！やめろっ！放せっ！美智子も忿怒の形相で紅唇から叫び、隆子の鼻を摘んで、ぐい／＼左右に振廻した。うわアッ！泣声を出す隆子。観衆の歓喜。絶叫。

相手が代り、美智子と勝枝。勝枝が髪を掴んで引倒せば、美智子は下腹部を蹴り上げて跳ね起きる。勝枝の拳打ちに怒った美智子は、勝枝の髪を掴むや、顔面を猛烈に膝で叩いた。膝蹴りではない。椰子の実割りと呼ばれるあれである。流石の勝枝がよろめいた。すかさずハンマー投！

処が、背後へ廻った隆子がロープの外から美智子を抱えた。思いがけぬ攻撃に、美智子は、忽ちフルネルソンを許してしまった。レフェリーの制止も肯かず、二人掛りの乱打。そしてロープの燃りの間へ首を差込まれた美智子は動けなくなった。ロープを揺る二人。

昌江は夢中とび出していた。無我夢中で、相手のコーナーへとび込み、隆子を肘うちで弾きとばした。その途端、がっ！と後頭部を殴られロープに絡まった。

「早く／＼、こいつをのしちやうんだ。」レフェリーが美智子をロープの燃りから解き放そうとしている間に、勝枝は昌江の両腕をロープへ絡ませて外へ投げた。昌江の体は一回転して観客席に向い、丁度十字架にかかったように、曝された。その頸へ隆子がタッチの縄をぐる／＼巻きつける。

まさえっ！セコンドの大石多摩子が、日進のコーナーに跳び上る。

隆子がロープをゆすり、勝枝が昌江の背中と云わず尻と云わず蹴り捲った。

「ひーっ、ひーっ」悲痛な呻きが昌江の喉から迸る。場内は騒然。「やめろ、やめろっ」

前列の客が立上って怒鳴る。

チーン。ゴングが鳴った。それでも反則は続いた。「レフェリーゴングだ、ゴングだぞっ！」岡田が叫んだが、昌江はゴングが聞こえなかった。苦しいっ！死ぬ。助けてっ！あゝ、あゝ、もう駄目。昌江は只、勝枝が目の前のリングサイドへ投げ落され、隆子と一緒に走って行くのが見えただけだった。

美智子と多摩子に抱かれて控室に戻った昌江は、喉を搔撓って苦しんだ。赤紫色に縄の痕がついていた。岡田をはじめクラブの娘達と新村だけが心配気に見守る中で、多摩子が介抱していた。噛まれた太腿の歯型からは血が流れていたし、それに左足首を捻挫していたのである。

そんな所へ勝枝の言葉が伝わって来た。勝枝は帰り際に、「ロロの奴はなか／＼やるけどさ、新米の方は未だ登喜の相手じやないねえ。」と云って笑ったと云うのだ。

新村は多摩子を押して除けて、いきなり左手で昌江の右肩を掴み、右掌でぱしと平手打を喰わせた。続いてもう一つ、三発目。昌江は肩を揺った。新村の手は昌江の左手のガードに阻まれる。昌江は涙に濡れた顔をきつと上げて新村の瞳を見つめている。

「何するのよっ！先生！」美智子が叫ぶ。

「おい、岡田！俺にこの娘を呉れ、いいな、約束だ。俺はこの娘が欲しいんだ。いいな。貰ったぞ。」新村は憑れたように叫んだ。昌江は新村の唯一人の弟子になった。

選手権大会の間、新村は夏子と昌江を連れて東京を離れた。後援



者から借りた別荘で、のんびりと養生をさせるのが先決と考えたからだ。流石に娘二人は口惜しがって泣いた。そんな時、新村は娘達を両腕に抱いて、三人とも素足になり、静かな葉山の波打際を、無言で歩き続けるのだった。

大会が終り、日進クラブの出場選手十一人のうち、目覚しい活躍の山崎美智子とタッグの人気者桜ノブ緒、バンタム級三位になった霧島京子の三人が、その褒美に休暇を貰って来たので、別荘は一日中賑やかな笑いに満されるようになった。

傷ついた二人の前に、娘達の手柄話は、全く出なかった。夏子が一度だけ聞きたがると、京子が笑って、「どうせ秋には優勝する夏子なんか聞かせる話はないよ。」と云ったし、美智子は「多摩子があんな達の事心配してるよ。手紙でも書いてやんなよ。」と云った。ノブ緒は、その名の起りである桜んぼのような顔に眼をくり／＼させて、「あたしは遊びに来たんだよ。ねえ先生、一緒にままごとしない？」と罐詰を持ち出して皆を笑わせた。

東京へ戻ると新村はトレーニングシャツに着換えた。ジムの一室を借りて特別な器具を備えたが、扉の鍵は肌身離さず持っていた。

昌江はもう起き抜けのトレーニングに出ない。皆は、近くの公園へ揃って駆足、公園で軽い体操、そして帰日も駆足だから、約三十分から一時間経つと、帰って来るが、いつも全身に流れる汗を拭うのも億劫なように、タオルを羽織り突き伏している昌江を見た。或る朝など、誰が声をかけても、椅子に伏して泣き入った儘の昌江は、朝食を摂ろうとしなかった。そんな事が二、三度あったあと、食事を摂らない事はなくなったが、それでも、泣顔だけは一向にやむ気配もなかった。手首や足首には、常に赤い筋が残った。

或る時、ノブ緒が、「ね、あたしもあの部屋でコーチしてくんない？」と悪戯っぽく云うと、新村は、「おい、誰か桜んぼを抑えて

てくれ。今、俺に尻を殴られたいそうだから。」と云った。誰かが、これでぶつ方がきくわよ／＼と差出したステッキを新村が振り上げると、ノブ緒は「うわア／＼ごめんなさい、ごめんなさい。せんせたアんま。」と指の輪を突き出して逃げ廻った。

秘密のトレーニングが一月経つと、昌江は首と腹が別人のように強くなった。相変らず扉の向うからは、短い悲鳴に混って、泣声が洩れていたけれど。

二月経った頃には小部屋に持込まれたマットは三枚になった。えいっ／＼気合の籠った昌江の掛声に反撥する、おうっ／＼と上がる新村の叫び。そして肉と肉との激突の響きが聞えているかと思えば寝業でもあろうか、二人の唸り声が、そして時折、昌江の悲鳴が小さく、然し鋭く上がる。

やがて扉があくと、上気した二人がタオルを羽織って現われる。新村は、昌江の首筋の汗を拭う程の気遣いを見せ、シヤワーも風呂も昌江を先にし、自分は、他の娘達の練習に見入りながら満足げな表情を見せていた。

夏の一夜、隅田公園でナイターのタッグマッチ大会が開かれ、日進からは四つのチームが参加した。ノブ緒と春日滋子、京子と大島冴子、看板の夏子と美智子、それに新村の懇望で、昌江が多摩子とコンビを作った。昌江は此の試合から改名して千鳥と名乗ることにした。新村は千鳥の為に、純白のジャンパーを、多摩子の為にはグリーンのジャンパーを贈った。

メインイベントは夏子。美智子組対共栄の大森良重、永井絹子組と大和の殺人コンビ対国際の児井光恵、大内龍子組のミドル級の二試合で、他の試合は十五分乃至二十分のワンフオールマッチである。この日の大和組の反則で興奮した客が勝枝にジュースの空びんを投げ、大騒ぎになったりした。が、それはとも角、試合の大半は互角の好勝負続きの中で、多摩子、千鳥組の勝ち方だけは、相手がウエ

ルター級とは云え、見事過ぎる程だった。

先発の多摩子がヘッドロックに攻められながら、体重を利用して体当りに続くタックルに足を取り、日進のコーナーへ引張り込んでトールドに固めた儘でタッチした。代った千鳥は、まず相手を抱起こすや、猛烈な膝蹴を二回、それから、大きくハンマー投を一回チンロックからの巴投、ヘッドロックから首投、そうしてコーナーへ引張り込んでのトールド、相手はグロッキーになった。その時もう一人の相手がリングにとび込んで背後から千鳥をひき倒したのだ。多摩子がロープを潜った。その時既に千鳥は攻められた顎を引きつけ、腰の備えを固めると、びしっと相手の右手首を打ち左手首を掴むやフライングダメル、相手は完全に宙に舞った。受身を誤ったリリーフがロープへ逃げたので、先発の相手がよるめきながら拳打ちに来る処を、左をガードに外し、すぐ右から投げをうって、素早くタッチ。多摩子が膝打ち二回、原爆投三回、とびかかってフオール。時間にして七分足らずの勝利だった。

翌朝、トレーニングが済み、娘達に囲まれて岡田と新村が談笑している処へ、夏子と美智子が真剣な顔付でやって来た。「先生」と呼掛け、新村の目の前へ、長さ五十糎位、直径二糎位の丸い棒を差出した。「何だい、これ？」新村が訝りながら手にとると美智子が云った。「あたしたち、優勝したいんです。その棒でお尻ぶっていいですから、マサエと一緒にコーチして下さい。」新村は岡田と顔見合わせた。それ程、二人は真顔だった。

夏子と美智子は一寸頬を染めたが、くると後を向くと豊かな尻を突き出した。

「ぶって、ぶって、ぶって。あたしもぶって」とノブ緒がけたたましく叫び、二人の間に割込んで、尻を並べる。

ジムのリングの上では、千鳥が美智子と熱闘を続けている。もう

十五分以上の激動の連続だった。コーナーで汗を拭っている夏子の呼吸使いが、驚く程荒い。新村の号令によって夏子と美智子は、入替り立代り、千鳥に躍り掛って行った。多摩子、ノブ緒、滋子、牙子等々、皆が固唾をのんで見守る中で千鳥は守勢一方だった。攻撃の機会が全然与えられないのである。相手の攻めをはずすと新手が出、返し技が決まると交替、投げから抑えに行くとブレイクを命じられ、息つく暇もない。今や美智子の逆海老に遭い、顔は真赤に充血し苦悶の表情で涙を流して呻いている。然し千鳥は顎を引き、両手で美智子の足首を握ると、ぐうっと腕を張った。美智子は一度体を浮かすと、どしんと千鳥の背に尻を落す。あっ、あっ、獣のような叫びを上げて、千鳥が潰れる。然し、またじりりと身を起した。美智子が全身を浮かす。弾みをつけて千鳥の背へ。それを間一髪。千鳥が逃れた。アクロバットのように上体を前に折り、美智子の股を潜ったのである。美智子が尻をついた。途端に足を振って千鳥得意の胴締めになる。そこでブレイク。漸くのことで休憩の時間が許されたのである。

千鳥はマットに俯伏の儘動かずにいた。

新村は言葉も出ないのだ。現実此の眼で見たのである。不可能な筈の逆海老をはずし得る人間を。それは男には絶対できない。骨が細いと云おうか柔軟と云うか、驚威的に強い腕と腰と腹筋を持つた女だけに、可能な技だった。それに加えて不撓の体力、不屈の精神力、卓越した勘と運動神経、これらが渾然一体となった成果であり、そして、それを為遂げた唯一人の女が千鳥なのだ。

ライト級のチャンピオンは大沢登喜代である。チャレンジャー決定の第一回戦に勝った千鳥は、順調に勝利を続け大沢の王座に迫る。千鳥のヘッドロックは、以前は左腕を大きく上げて相手の首に巻き、すぐに背中を見せる程に体の向きを変えたものだったが





それが非常に変った。右掌をチンロックのように相手の顎にかけ、引付けながら脇を固めて素早く左手をのぼして首に巻きつけ、ぐいと締めあげた上で引寄せ、充分に腰を入れて廻るのである。締めが緊く、廻転が早いので相手の疲労は増す一方、千鳥はボディに反則を受ける危険も殆どなくなった。両脚のシーザースは凄味を加え、相手の呼吸をよく把握しているので、滅多に外れる事もない上に、絶えず両膝を擦合わせて、相手を苦しめる。総てが新村を相手に体

得した涙と汗の結晶である。それにもうひとつ、素晴らしい進歩は、千鳥が相手のロックをはずす時見せる空手打である。これは力道山の空手打とも違い、相手の手首や足首の関節を激しく打って麻痺させる技であったが、これは新村が剣道の籠手から考えて教え込んだ特技であった。

千鳥の構えはずっと低くなり、腰の備えは隙がなかった。それは単に腰を引いているだけの他の娘達には見られない剽悍なポーズであった。

新村が千鳥について気遣う弱点は、最早一点も残っていない。だが、彼女自身は差当って大きな不満が一つある。地獄固めの返し技が不能なことだ。殆どの攻め技は返せるようになった。反則も恐ろしくはない。が、地獄固めを逃れる方法は、今の処、ロープに逃れるしかないのである。当然、ロープに逃れるのは、返し技に比して問題でなく、遙かに不利である。足が解かれても全然立遅れになるし、激しい反則を受ける機会も多く残ってしまう。しかも登喜代の地獄固めは最大の得意技であり猛烈である。彼女は左足を差込んで軸にする。そして俯伏せになった相手の左体

側に、自分の体を仰向けに激しく叩きつける。これは体固めの姿勢ではないが相手は全く歩行困難に陥る程痛めつけられる。だから登喜代に勝つためには、この地獄固めを泳え抜かなければならない。チヤンピオンシップを握るには地獄固めの返し技をマスターする必要があるのだ。

相変わらず激しいトレーニングが続いた。小部屋の中で、千鳥は新村の地獄固めに呻いている。耐久力をつけるために、腹匍いに寝て背に曲げた両足を括り合わせ、その紐の端を頸に巻き、顔を起して固定した姿勢で三十分近くも放置されることさえある。

シングルマッチではもう誰も千鳥の敵ではなかった。タッグのチヤンピオンを狙う夏子と美智子にしても、シングルでは勝目がなく千鳥は日進のNO.1になった。夏子、美智子、多摩子の音頭取りでクラブの総力をあげて白川に打倒大沢を成就させようという、この世界に珍しい気運が盛り上った。

或る日の午後。リングの上では千鳥が多摩子と夏子とを相手にロープワークの練習をしていると、ノブ緒がそっと新村の背後に忍び寄り、腰のポケットから小部屋の鍵を抜取って、美智子の腕を引張る様に扉の中へ消えて行った。千鳥はリングの上から一部始終を見ていて、コーチを受けるふりをして新村の耳許に囁いたのである。

ノブ緒と美智子は、背後の扉を音もなく開けて新村がはいって来たのに気づかなかった。小部屋の中にはマットが三枚敷いてあり、高い平行棒、スプリング、サドルなしの競走用自転車のボディが固定されていた。縄や鞭には恐怖さえ感じた。新村に、軽く肩を叩かれた時、二人とも、ひえっ／＼と声を上げ、心臓が喉もとまで突上った想いがした。

おやつは好物のハムサンドだったが、二人揃って、汗も拭かず、着換をするでもなく、美智子は消入るように啜上げ、ノブ緒はわあ／＼声を張り上げて泣いていた。まるで千鳥が初めて小部屋へ入っ

た時と同じ有様に、皆は顔を見合わせて囁き合った。

千鳥が二人を慰めるような眼差で新村にきいた。

「先生、酷い目に遭わせたんじゃないんですか。初めての人には可哀想だわ。」

新村は落着いたものだ。

「二十キロのサイクリングと五キロで懸垂二十五だ。」

「まア、そんなに。」千鳥が驚く。

「うん。だが流石に山崎だ。涙をぼろ／＼漏していたが、全部やり遂げたよ。」

千鳥は頷いて、泣き伏している美智子を見た。他の娘達には意味の判らない話だったが、驚く程ハードなトレーニングとは察しがつくし、美智子の肢体を敬意を以て見やった。

「桜ん坊は？先生」千鳥がきく。新村が言下に、「あゝこいつは駄目だ。自転車がこわいなんて逃げ廻るから、マットでのりまきにして尻をひっぱたいてやっただけだ。」と云ったので、おさまっていた泣き声が、再び高くなる。

お尻ぶたれたんだってさ／＼囁きが起る。

「何だ、桜ん坊は自転車なんかこわくて尻をひっぱたかれたのかだらしない奴だ。それで死にそうな声を出してたのか？」岡田が笑うとノブ緒がくし／＼の顔で云った。

「だってさ、あたし、ロロがさ、素っ裸でびしびしって鞭でぶたれながらさ、自転車こいでるのなんか見てたらさ、ぶる／＼慄えちゃったんだもん。とっても可哀想なんだよ。ロロが泣いたってさ、手と足と縛られちゃってておりられないんだもん。ムチの跡で真赤なんだよ、お尻が、嘘じゃないよ。嘘だって思うんなら、ロロのお尻見せて貰いなよ。」今度は、美智子がわっと泣き入った。

「それからさ、鉄棒みたいなのにさ、結かれて、足にこんな錘なんか吊下げてさ、ケンスイするんだよ。できないとまたムチでぶたれ



るんだもん。あたし、厭だ、厭だ、絶対厭だ。」ノブ緒は体をゆすって喚いた。

娘達の視線は美智子の逞しいヒップの辺りに注がれ、次に千鳥に注がれた。美智子は泣き入り、千鳥は顔を伏せてしまった。

「バレたら仕方がないが、桜んぼはお喋りな奴だな。な、桜ん坊、それにみんなもよく聞くん。みんなは女だ。齡頃の娘だ。いくらトレーニングでも、裸の尻を鞭で殴られる事は、確かに恥ずかしからう。辛いだろう。だがコーチが男だから、恥ずかしくて裸になれないと云う者は、優勝したいと思うな。」

所詮、女の取組みのテクニックは見られたものじゃない。だから腕を磨く為に、どのクラブも、練習は色気抜きでやってるんだ。他人と同じことをやってたら強くなれないぞ。みんなが工夫し、研究しているから。白川を見る。自分から進んで、もっときついことをやり通して来た。今のトレーニングなんか、俺が恐しくなつて逃げ出した位だ。山崎だつてそうだ。これだけ実力のある選手が黙って命令通り裸になつたんだ。」

娘達はしゅんとなった。

夏子が美智子の肩を抱いて更衣室へ去り、千鳥も続いて去る、ノブ緒は手放しですすり上げていた。

リングを見上げる新村の顔は、まるで自分自身がマツトの上にいるように輝いている。いや、新村はリングの上にいるのだ。千鳥の体を借りて闘っているのだ。千鳥の構えを見るがいい。左足を引いて腰を割り、右手を脇につけて下から攻め上げる構え。牝豹のような弾力ある軽捷さ。眼光までが、十数年前に、大学のマツト上に見られた新村自身のものではないか。

ライト級の選手権試合。三十分一本勝負。リング上の熱闘は秘術を尽くし、旧進の白川もチャンピオンの大沢も流汗淋漓、正にその

ものだ。既に二十五分経過。場内は騒然。日進側には焦慮が漲る。時々リング上の千鳥とリング下の新村の視線が合う。以心伝心。

千鳥が身を投げて足挟みに出た。危く逃れた登喜代はすぐに足を取って得意の地獄固めの体制に入る。いけない。新村ははっとした。あと五分足らずでは致命的だ。千鳥がこちらの方へじり／＼と匍つて来る。一寸、二寸。そうだ。逃げるんだ。ロープへ。千鳥が新村を見た。新村は泣きたい思いで大きく首を縦に振った。そうだ。それでいいんだ。というつもりだった。

それを、一体どう解釈したのか、千鳥はロープへ二尺程まで来ていながら、ぴたりと腹這いになって匍うのをやめた。登喜代が左足を差込むのを許した。完全な地獄固めのポーズ。重ねて折り曲げられた両脚に、太腿に苦悶の歪みが出る。バカ。バカ。白川のパカ。新村は身も凍る思いがした。千鳥は顔も上げない。

登喜代が足を挟んだ儘、体を起す。ばたん。ああっ！わアッ。千鳥の悲鳴がある。登喜代が、また体を起す。体を叩きつける。その瞬間、千鳥が腰を捻って、右肩をぐっと起した。登喜代の体がマツトに激突。途端に千鳥の右腕が伸び、逆腕の儘で登喜代の顎をロックした。これが、あの非情なトレーニングの賜なのだ。十キロの錘を吊下げ八本の指先だけで懸垂を続けた千鳥の指先の力は、登喜代の顎を捉えたきり放さなかった。登喜代はその手首を両手で握み、絞り上げる。登喜代の体を、千鳥は背中合せに背負うように持ち上げる。次には左腕を後に廻して右手首を援けつつ、自ら逆になった両腕を締め上げた。そして、じり／＼と前屈みに力を籠め始めたのである。地獄固めが完全なだけに二人の腹筋の力比べになった。前に曲った方が勝ちである。あっ。ああっ。という鋭い叫びの合間には、ウーム、ウームという呻きと激しい呼吸遣いが二人の口から洩れるばかり。燃じれてきた皮膚の皺だけが、びり／＼と慄えている。少しづつ、少しづつ、千鳥が曲り、登喜代の全身が弓なり

に反って来る。彊弩の如き千鳥の腹筋！一分、二分、三分、四分。

強烈なライトに照らされて、顔面は真白。汗と、じっとり浮出た脂汗がマットに滴る。時間がない！時間がない！新村は居たたまれぬ思いだった。レフェリーが、びくっと動く。

千鳥の腹筋がぐっと縮んだ。ぎやっ！登喜代が上げた断末魔の絶叫。同時に起る千鳥の叫び。いっ！いっ！

その直後、チーン！とゴングがなった。

ああっ！新村はがっくりと椅子に身を落した。勝てなかった！矢張り、勝てなかった！新村は涙も出ず、眼だけをリング上に据えた。

レフェリーの手でもぎ離されても、登喜代は腹匍いの儘でマットから起きなかった。僅かに体を右左にローリングさせるだけで、頻りに呻いていたし、足を解かれた千鳥も膝をついて上体を起こしたが、すぐばったりと前に倒れた。脱臼！腕をだらんと垂らした不自然な倒れ方。新村は、ぎよっとして立上った。新村の指示も俟たず、既に夏子がリングにとび上っていた。美智子と多摩子が後を追う。

引分の筈の判定が、然し、すぐには下らなかった。レフェリー、ジャッジはリンクサイドに集まり、次にコーナーで伏して動かない登喜代に顔を寄せて何か云った。

中央に出たレフェリーの手は、さっと白川のコーナーを指す。だが、千鳥はぐったりしていた。呆然顔を見合わせたものの、次の瞬間、千鳥を抱き上げていた美智子がさっと片手を上げて観衆に応えた。夏子も多摩子も上気した顔で手を振り、慌てて頭を下げた。

アナウンスが、「逆海老固め、二十九分四十九秒で白川の勝！」と場内に響いた。

チャンピオン白川千鳥！奇蹟の勝利だ。

当の千鳥は、すぐに医務室へ運ばれた。

千鳥が全快して間もなく、大沢登喜代が訪ねて来た。有名だったショートカットを綺麗にセットし、薄く紅を刷いて、明るいブルーのツーピースに身を包んだ彼女には、暗い蔭がない。彼女はリングを去り、新宿で喫茶店に勤めると云う。華やかなマット生活に終止符をうたせた脊髄の故障の事は言葉を濁して千鳥に云わなかった。登喜代の後姿に、新村が心で呟いた。

「立派なものだ。君の気持は、僕にはよく判る。だが君はこれから本当の女の幸せを掴むのだから、しっかりやるんだよ。」そして千鳥に向って云った。

「君は遂に大沢君を破った。だが、まだ完全な勝利を得た訳ではない。チャンピオンは強いばかりでは駄目なんだ。人間としても優勝することを忘れてはいけないよ。」

新村が千鳥の名で、病床に登喜代を見舞い続け、再起不能で、誰一人顧てくれる者もない女子プロレスの選手を、友人の店に高給で引取った話などは、千鳥は知らなかった。

更に、登喜代が、脊髄を酷く痛めていながらも、ジャッジの間に確かに救いを求めた事を認め、自己の負を承認した話を聞かされたのは、ずっと後日のことである。

ライト級チャンピオン白川千鳥は、今日もその弱やかな肢体を、新村の鞭の下に喘がせている。千鳥の王座が、そして人間としての成長が懸っていることを想えば、新村の腕に、大きく力が籠められてもよいのではないだろうか。もっと激しい力が、と思うのだが。

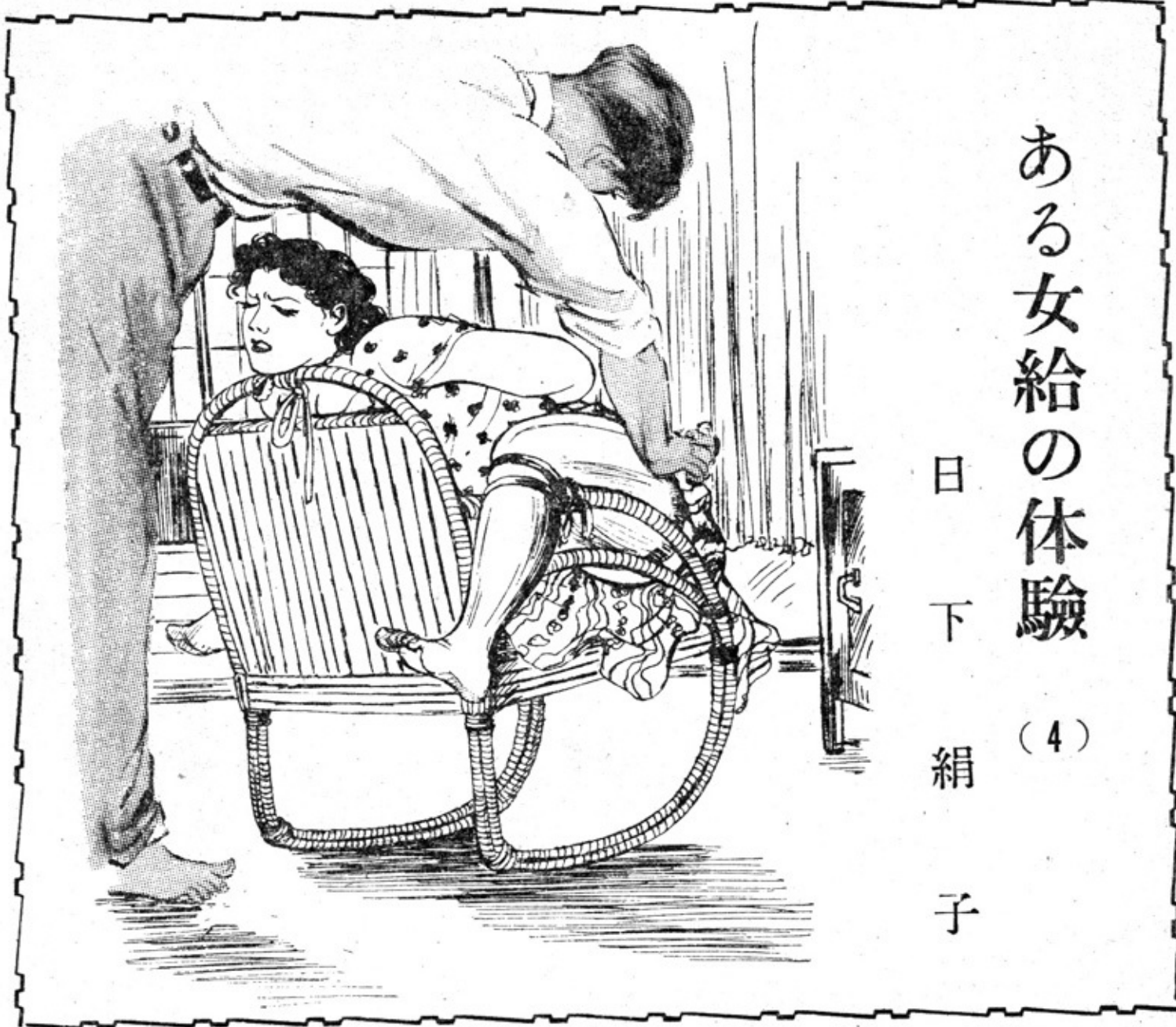
——以上——



## ある女給の体験

(4)

日下絹子



その後、私は住田の経営している「黒館」というキヤバレーに移りました。ここはストリップ劇場とかけもちの踊り子やすれっからしの女給の徹底したサービスマで名を売っており、お上品な雰囲気など薬にしたくもありませんでした。「こんなお店はいやだな」と思っているといふく意慾が出ず、壁には毎月女給の売上げ表がはり出されて私達のお尻をたたきますがお客から普通以上のお金は恐ろしくて取らない私の、成績を示す棒グラフはいつも最低を示していました。

またこの店の女給たちがホテルを利用するときはMホテルと指定されており、もし他の旅館に泊ったことがわかれると殆んどリンチ同様の目に会わされる例も少くありませんでした。この店がMホテルから割戻しを取っているからだそうです、成績の上がらないものには半ば強制的にお客をふり当てられます。その頃の私は全く毎日々々を不安とやけっぱちな気持で送っていました。

悪い事は重なって来るもので、ある日妹からの電話で、少し以前から気分がすぐれない様子だった母が近所の医者に診てもらったところ胃ガンの疑いがあるから病院で手術を受ける様にと、付添って行った妹に耳うちされたことを知らされました。胃ガンならもう助からないかも知れないと不吉な予感におびえながらもこの前帰ったときはまだ元気だったのにと半信半疑で家に帰って来てびっくりしました。わずか一月足らずの間に母は十年も老けて見え「よく帰ったね」と私の顔を見て床の中から妹に夕飯の支度を急がせるその声

も、別人の様に弱々しく、力がありませんでした。私は急にかなしくなつてジーンと眼頭が熱くなり、涙であたりが見えなくなりました。

翌日二人で母を大学病院に連れて行きました。幸いその日の初診者は部長さんの診察を受けることが出来るとかで長い間、廊下で待った後、診察をうけてすぐレントゲン科に廻され、母は重湯の様な液を二回のもで写真を取りました。係の若い先生から明日結果を聞きに来る様にと云われ、次の日、妹と二人で尋ねますと、やはり胃ガンですぐ入院して手術しないと助らないとの事で、すぐ入院の手術を取りました。入院第一日は色々な検査があつて次の日が手術でした。妹に学校を休んでずっと付添ってもらい、私も手術のあとしばらく看護につきましました。経過がよくて四五日すると盃に一ぱいのおかゆを日に数度食べることが出来、一週間目の抜糸のときには、こわいもの見たさにそつとのぞいていますとみぞ落からおへその所まで縦に少し彎曲して切ったあとが、すっかりきれいにくつついていました。

ところが入院費の支払いは退院のときとばかり思っていましたのに十日ごとに請求されるのがわかりすつかりあわてました。私達にもちろん一銭の貯えもありませんから費用は叔父に頼んで役所の共済費から借りて頂き

私があとで少しづつでも返す積りだったのですが、それも月末でないと叔父の手続が済まないのです。それに医療費のほか個室料として日に二百円かかっており私達の予定より少しはみ出すことがわかりました。私は一人悲しい決心をしました。

その頃たびたび光夫さんから電話で「会ってくれ」と呼び出しを受けていたのをずっと断り続けていました。彼とはいつからともなく疎遠になつて以来、彼は間もなく結婚してしまいましたし、いまの私にはもう彼に何の興味もありませんでした。以前あれだけ夢中になつたのが不思議に思う程で、いまでは、うとましさと軽蔑さえ感じていますのに。

でも当時私は予定超過分だけでも何とかせねばと、みにくい物慾にとらわれて彼の気持を利用してやろうと決心しました。後めたい気はしましたが身を売るほどの悲愴感はなかったのです。

その日私は膝上までの下ばきを二枚もつけその上にデニムのスラックスでしつかりお尻をまもり、よろい戸を下した彼の服飾店の小さなぐり戸をたたいていました。「ちやっかりしてやがる」と笑われても私はビジネスを忘れませんでした。赤線とかに行けば優に四、五回は遊興出来ると思われる額が私の手に渡されました。絶対に衣類をぬがせない事とぶつたりたたいたりしない事を約束させて

から黙つて両手を後に廻しました。手首をまいた長いひもが左右にわかれて両腕にかかりお乳の下で胸を二まきして再び手首に返りました。この腕にかかったひもは両腕を体に固定して自由を奪い、胸がぐつとしめられると罪を犯した囚人の様なみじめな気持になつて自然にうなだれてしまいます。

室の中を引立てられることとばかり思っていると「坐れ」と云われ、そつと膝をつきまされるごとに腰を浮かせてそつと後の気配をうかがっていると、私の輪かくの露わなお尻のあたりに充血した目をむいて、じつと偏執的な視線が送られているのを見てぞつとしまりました。

彼は学校の先生が持っている様な根ぶちを取り出し私のお尻をつきます。先程から耐えかねていた私は「そんな事するんだったらもう帰るわ」と憤つて立上ろうとすると後から押えつけられ、声を殺して争ううち、私は椅子の脚でいやと云うほど鼻柱を打ちつけました。ガーンと鼻の奥に痛みが走り、両眼から火花と涙が出て来ました。

イ、タ、イ、顔を伏せて痛みをこらえているとすつと冷い空気がお尻をなぶっていました。名状しがたい怒りがこみ上げて来て「何をするの、いや、いや」と叫んでしまつてハッとしたときはもう遅く、「ピシッ」と



節の多い根ぶちは一瞬焼火ばしを当てられた様な熱さの後、ズキンと心臓のドウキに合せてお尻で痛みが脈打っていつまでも苦痛が去らず、つい「うっ、うっ」声を上げて泣いてしまいました。彼は私のあまり取乱した様子に急いで縄をといてくれました。私が泣顔にコンパクトを出してやけにパフをたたいてみると、彼は椅子に腰を下して一ぶくやり出しましたので、そのすきに脱げ飛んだソックスを拾い、下において靴をはく間も、もどかしく戸を開けていました。

「今度いつ会ってくれる？」というのへ

「だれが会うものですか、ぶちたけりや可愛い奥さんのお尻でもぶったらどう？ 私もう結婚しますからね！」

私は精一杯の捨ぜりふをのこし、まだズキズキいたむお尻に気を取られながら急ぎ足で立去りました。

病院に帰って寝息を立てている母を起きない様ソツと妹と街のお風呂に出かけました。いつもの様に私がタッブリクリームをすり込むのを面白そうに眺めている妹も体はすっかり成熟していて、ちよつとシットめいたものを感じさせます。先に脱衣場に出て来た私に後から妹が「お姉さん、お尻どうしたん？」と声をかけられ、何気なく大鏡に後姿をうつして「ハッ」としました。もり上った臀部を横切つて紫色の鞭の痕が一すじ、しかも根ぶ

ちの節の当たったところが三カ所、お灸のあとの様なアザになり一目で鞭の痕とわかります。いま引いたばかりの汗がまた一度にふき出すのも構わずいそいで衣類をつけながら、カッカツと顔がほてるのを止めようがありませんでした。その夜は病室で泊る予定を妹と一緒にいるのが氣づまりでアパートに帰ってしまいました。

母はその後、一カ月ばかりで退院する事が出来ました。でも昔の様な元気になれず、御飯も殆んど食べる事が出来ないで、まだすっかりなおっていないらしいと心配でしたが、退院後三カ月ばかりで再び悪化しました。帰るたびに衰弱しているのがわかりましたが、やっと寒い季節がすぎて暖かくなったから持ちなおすかも知れないとの私達の希望も空しくなりました。

母の死で妹の結婚を、その年の春に繰上げました。妹はお風呂の件以来、私の生活について一人で心配している様子でした。しかし私は東京での妹の式に列席して帰ってからは叔父の家を引き払って、ただ一人アパートに住みますと淋しさと解放感とが入りまじって私の自制心を失わせる原因になりました。

光夫さんからはあれ以来、毎月きれいな表紙の奇譚クラブを送って来ました。私が以前隣りにいたマダムから雑誌をかりて読んでい

たのを知っていましたから親切心を起して送って呉れたのだと想像していました。ペラペラ頁をくると女の縛られた絵や写真が出ていますので、捕物帳かしらと思ひながらも、その頃は時々映画を見るほかは、新聞や雑誌は読むのが面倒なので積んでおいたのですが、時々取出して告白文などを拾い読みするうちに、私もその中に書いてあるマゾヒストというのではないかと不安になって来ました。告白文を書いていらつしやる女の方の氣持がそのまま私の氣持でもあったからです。

アパートの近くにある小学校で日赤病院の春の運動会が行れたのを見に行った時、私の氣持がはつきりわかりました。看護婦さんたちの障害物競走でゴールの近くにある最後の障害物のハシゴのくぐり抜けの所で若い先生らしい男が二人向い合つてはしごの両端を馬乗りになつて押えていて、そのハシゴをショートパンツや白ズボンをはいた看護婦さん達がくぐり抜けるのですが、ハシゴの足の間隔が広い所と狭い所があり一番端の先生の抑えている近くが比較的広くて先頭のランナーは必ずそこを目ざして走り寄り四つん這いになつてくぐり抜けようとしますが、肥っている人は二三度もがかないと腰がつかえて一気に抜けられませんか。その時、ハシゴを押えているその先生が何か叫びながらランナーのお尻をひっぱたくのです。きつと「しっかり」

とか「がんばれ」とか励ましているのでしょうが、見ている私は自分の顔が上気するのを感じました。見てはいけないと思ひながらも目はそちらに走り、その度に自分がお尻をぶたれている様な恥しい気がしたのです。

周囲が急にざわめくので目を上げると、今しも先頭でハシゴに到着した大柄な看護婦さんが早く上体を上げすぎて腰がつかえて、もがいているところを先生からそのシヨートパソンの大きなお尻を二つ三つとひっぱたかれています。私は危くうめき声が出そうになるのをハンカチを噛んでこらえながら一生懸命気を静めました。

光夫さんはこんな私の性向を見抜いて本を送ってくれたのかしらと思うと、いたたまれない気持です。でも彼との今までの交際のうち、当時でも私の心の底にそんな感情が潜んでいたとしても表面に出した記憶はありません。また事実、彼に責められた時は、苦痛ばかりを味わされ、その為、彼に対してはうとましい感情ばかりが残っているのです。

でも責められたい感情は時々潮の様に襲って来て自分をもて余すこともあります。そんな時はつい彼に綿々と手紙を書いて、出そうか止そうかと迷うのですが、あのお尻に受けた苦痛がよみがえって、やっと私をふみ止まらせます。

寝静まったアパートでそっと起き出し、洗

濯物を吊す長い麻縄の束を鞭代りにしてむき出しにした自分のお尻を狂気のように打ちました。また椅子のシートにソロバンをのせ苦心して自分の両手を後にゆわえ、馬乗りになつて腰を下します。ソロバンの珠が数知れないクサビになりジーンとお尻の肌を喰ひ込み、ほんの二三秒すら辛抱できず腰を上げたり、下したり、そんな時、いつも頭に画く責め手は光夫さんでした。あんな男と心の中で軽蔑していても空想の中では「もう許して」甘えて、私の身も心も屈服してしまします。

お店へ行くのにわざわざ遠廻りして光夫さんの服飾店の前を通ることがありました。二三十米さきから緊張で体のこわばるのを感じながら、盛り場をぞろ／＼歩く人波に混って店の前にかかる人との影にかくれて、すばやく店内を見渡します。店員さんは私がいた頃とはすっかり顔ぶれが変わっていますが、その中に八分丈のストラックスをはいた女店員を発見して思わずドキリと激しいシヨックを受けました。それは光夫さんの好みである事を知っているからです。シヨウウィンドをのぞく振りをして様子を伺っているとその女は、私と同じ程の年かさで濃い化粧が目立ち踵の高い靴のため歩きたびにぶよ／＼ゆれる大きなお尻に私は嫉妬めいた憎悪を感じました。光夫さんには何の愛情も感じていないのに焼もちなんか焼くわけがないと思ひながらも、そ

の女が憎らしくて仕方がありませんでした。

ある日、お客から頂いた招待券で「風と共に去りぬ」のロードシヨウを観ました。以前から映画気狂いの私は見たい映画があるとお店を休んでも出掛けなのですが、すっかり感激して、もう一度原作を読みたいと思ひ本屋にはいった時、片隅に奇譚クラブを発見しました。光夫さんから送って来るかも知れないと思ひながらも読みたくなると矢も盾もたまたえず、そんな事には無関心の様な好人物に見えるおじさんがお店番をしているのが私を大胆にさせました。それでも読みたくもない婦人クラブと抱き合わせで買いました。もしあのおじさんが奇譚クラブの内容を知っていた場合には同じクラブが付いている為、私の方が思い違いをして買ったと思われたい為のむだな擬装だったのです。尚それでも私の顔は自然とほてって来て、丁寧に包装されるのもどかしくてなりません。

しかし、その時別の視線が私に強くそがれているのを感じました。隣りで本を見ていた若い男の人だと想像出来ても視線の合うのが恐ろしく逃げる様に本屋を出ると後から確かにつけられています。この時ほど街灯やネオンが明るすぎるのを恨めしく思った事はありません。もしもつと暗ければその人は私に近づいたかも知れないのです。その人が余程の醜貌でない限り腕づくで連れ去ろうとされ



たら私はきつと抵抗したでしょうが、大きな声は出さなかったに違いありません。声をかけられるかも知れないというスリルに満ちた期待を持ちながら、私は自分の意志とは逆に手を上げてタクシーを止めてしまいました。

アパートに帰ってから、どうしてあの時立停らなかつたのかと後悔していました。でもほんとに声をかけられたら私はきつと白っぽくれたに違いありません。人通りのある所でそんな私の言葉とは逆の気持を充たされる様な行為を期待する方が無理だったのです。

しかし一度汚辱の中に住み込んだ女の体は理性のブレーキも利かず、どんなにでもまみれて行ってしまいます。

その年の七月、この町最大のお祭の前夜、お店や女給はかき入れ時で張り切っています。が私には憂うつでした。この頃になってつくづく酔客の御機嫌取りにあき／＼してしましたし、むし暑さも手伝って心の淋しさはもう自分の気持を制御出来なくなっていました。「行ってもいいでしょ？」と電話で予告して私の足は憑かれた様に光夫さんの店に急ぎました。店の前に待ちかまえた彼は私の腕を痛いほどつかんで二階に上げました。自分から飛び込んで来たんだから、まさか逃げ出しもしないのにと警戒厳重な彼の素振りがコッケイに思えるだけの余裕がありました。

室の真中に大きな籐の肘掛椅子がすえられました。「今さら恥かしがる柄でもないじゃないか」と彼の意地悪い口振りは私の気持が後退する隙を与えない冷たさがありました。

私はギシギシ籐をききませながら椅子の上に追上げられました。広い肘掛に後向けになり左右の膝を広げて載せストッキングの上からしっかりと膝頭を椅子に縛り付けられました。ネックレスの前の所にヒモをつけ、それを椅子の背もたれの上の横わくに私のアゴを乗せる様にしてつなぎ最後に体を支えていた両手は後手に縛られました。胫の先半分は肘掛からはみ出したまま。私は蛙を押しつぶした様に宙のりになってしまいました。

身動き出来なくなった今も私にはもう後悔はありません。かえって何かホッとしたものがありました。彼に一片の愛情もない為か、はげしい羞恥心すら起ってはこないのです。ただこれからどんな責めが待っているのかと思うと自分の肉体が無性にいとおしく思われてなりませんでした。

彼はポケットから魚釣りに使う小さい赤と黒と白のマンダラの「うき」を二つ取り出し私の鼻先きでもて遊んでいましたが、私のみじめな姿を観察する様に行ったり後戻りしたりします。すっかり宙に固定されて頸すら自由に動かせない不自由な私は彼が視界から消えて後に廻ると非常な不安を感じます。

「すぐ落ちるんだな」と彼が前に廻って見せたのは細い脚の所をつままれた先程の「うき」でした。「今度はここへ」ハッと顔をそむける間もなく仰むけられて、それを鼻腔一杯に押しひろげてそう入され、私のはかない抵抗もただギシギシ椅子を鳴らせただけでした。それが一度ならず二度までも行われ、私の意志と無関係に、それまで心の片隅にわずかに残っていた、この世での体面や誇りはすべてはぎ取られ、ひたすら汚辱の中にくずれて行くのです。

両方の鼻腔に「うき」をつめられ瀕死の魚の様に口であえぎながら内面に受けた強い感触は永久に私をとりこにしました。そのうち体重を支えた両膝とひきつれた腋とが痛み出し、全身の震えがだん／＼大きくなって来ました。

哀願の結果、やっと膝と頸との緊縛を解いて抱き下された後も後手はそのままでした。彼は私の縄尻を取ったまま鼻腔の異物の一つを抜き取って別の所に刺そうとします。「もういや／＼」ともがいて逃がれ様としましたが縄尻を引かれながら「今度落したら尻打ち二十」という彼の声の終るか終らないうち「ポトン」とウキの落ちる音がしました。

(未完)

# 続・切腹曼陀羅図絵

法 谷 四 郎

## 第二話 雪顔雪血腸通矢

その翌日、降りつもった街道の雪を踏んで家老達の一行は漸く隣国、藤原家の城下町に入り、慎之介に会う事が出来たのです。

まみの悲壮な死を知った慎之介の驚きと悲しみ、それは今更述べますまい。唯その夜ひそかに美しく死化粧をほどこされたまみの首と「切腹丸」を膝にかゝえた慎之介が、家老の媒妁で悲しい式をあげた事をお伝えしておきましょう。

父の小鍛治実秀の名誉の為に、その刀の切味を示めす為に女乍らも真白な腹を十文字に裂いて散ったまみ……

「どんなにか苦しかった事であろう」慎之介は胸がはり裂ける想いでした。彼は幾度かまみの腹を裂いた「腹切丸」を抜き放っては茫然と美しい乱模様の焼刀に目を注ぐのでした。刀身の上に今も尚うつすらと残る血脂、それは恰も慎之介に向って微笑むまみの姿であるかの様に彼を遠い彼岸の国へとさし招くのでした。

この刀を腹にあてれば慎之介も又、まみの居る所に行ける、しかし彼には唐獅子家の弓の選手としての義務があるのであるのです。

此処数年来敗れ続けて居る通し矢の試合に彼は主君頼人卿始め全家中の「今年こそは」と云う希望と信頼とを背負って明後日に迫った戦を待つ身でした。私情は許されません。

さて第一話でも述べた様に唐獅子家と藤原家の間で五日間にわたって行われる武芸十八般の試合は、その度に多くの犠牲者を出して居ます。しかし又其の反面、敗れた者のいさぎよい最期が人々の間に語り伝えられるのも事実でした。勿論敗れたからとて全部が全部割腹する訳ではなく、殆どが何かしらの因縁、仮令ば主君同志が特にその試合について関心を示めた話合をしたり、遺恨をはさむもの等に限られるのですが慎之介の出場する弓試合は特にそうした期待がかけられて居る負けられぬ戦いだったのでした。

両家の間で起った数多い切腹には胸を打つものが少くありませんが数年前、唐獅子家の指南役であった岡野一郎左衛門の切腹は特に印象的でした。彼は藤原家の幸田某と戦って敗れたのです。人々は一郎左衛門の様子を気づかいました。彼は何事もなく武芸に励み翌年の試合に再び幸田某と刀を合わしました。然し何と云う非運、再び彼は幸田の一撃を肩口に受けて仕舞ったのです。そしてその時、彼の上に集った人々の同情も、一郎左衛門が腹も切らず相変わらず



道場で修行を続けるのを見ると漸く陰口へと変っていったのです。

三年目、戦は三度、一郎左衛門と幸田某との間に行われました。固唾をのんで見守る人々の視線を一身に受けて両剣士は二度、三度激しく打合い、逆に一郎左衛門は相手をももの見事に突倒しました。唐獅子家の家中一統の喜びは如何ばかりか、それこそ小者、町人に至るまで勝利の報を知って肩を叩き合ったのです。

所が、それから数日後、一郎左衛門は自宅に親族、朋友を招いて盛大な祝宴を開きました。上座には頼人卿から賜った刀剣一振り、小袖一重が飾られ、人々の笑声も高らかに、交わされる盃も次第に活気を帯びてきました。こうして酒宴漸くたけなわになった時、座を外した一郎左衛門は思いがけない白装束に身を改めて現われたのです。

そしてアッと驚く人々を制して、中央近く座をしめると静かに永年の苦衷を打明けるのでした。

「本日はこの一郎左衛門にとって生涯の好き日で御座る。この喜びを抱いて腹を切るのは真に武士としての本望、各々方に何卒酒をくまれて拙者の旅路を見送って頂きたい。」

人々は寂として声もなく一郎左衛門に目を注ぐのです。

「一昨年試合に敗れし時、無念やる方なく其の場を去らず腹切らんと刀に手をかけたものの腑に落ちぬ幸田の刀法、若しこのまゝ拙者



が死ねば恐らく次の年も唐獅子家の選手は幸田の為に破れるは必定方々も御存知の如く幸田の用いる七尺近い木刀は真剣には用いられぬけれども、木刀試合とあらば止めだても出来ず、思い余った末が幸田を破るまでは生きながらえんとする悲壮な決心で御座った。二年目再び敗れし時の腹を断つ苦しみ……今思ってもこの五体が震える程じや。然し乍ら運あつて今年漸く幸田に打勝ち

最早思ひ残すことは御座らぬ。仮令明年再び幸田登場するも彼を破る術は拙者の門弟二、三人に伝えてあれば心おきなくお暇出来そうじや……不本意に今日まで永らえた吾が生命も今宵は晴れて三途の河を渡って行く……。ではさらばでござる。各々にも御健勝に……」

こう云い終つて一郎左衛門は人々の止めるのを首を振って答え静かに白衣をはねのけ下腹を充分に出すと短刀を左の脇腹にあてました。もうこうなつては誰も止める事は出来ません。居並ぶ人々は肅然と首をたれて、この勇士の最後を見守るのでした。

「うっ」低く押しこらえたうめき声と共に短刀は深々と下腹深くつきさりました。「ううむ、むっ、むっ」溢れ出る血潮に両手を染め乍ら一郎左衛門はシリシリと刀を廻わします。余程深くえぐった為か三寸ばかり切るともう青黒い臓のものが生きものの様に傷口から溢れて膝の上にダラ／＼とたれさがってきました。一郎左衛門は右腹まで充分に刀を引きまわすと、肩で大きく息をし乍ら酒をとりよせ、溢れ出た腸にたっぷり注ぎかけたのです。

血に染んだ腸は酒を吸ってピク／＼と動きます。一郎左衛門はさすがに「ハッハッ」と激しい息づかいをし乍ら両手をぱたりと畳について「むーっ」と深くうめきました。しかし漸て静かに顔をあげると

「まことに腸にしむ酒の味じや、各々も存分にお過し下され、めでたい今宵じや、どれそろ／＼参ろうか」

と低くつぶやいて、人々に会釈しそして従容として介錯をうけたのです。

人々は今更乍ら一郎左衛門の武士の心を偲んで涙をしぼり、この話は漸て隣国にも伝つて藤原家の侍までが深い感動にさそわれたのでした。

さて今年は初日は何事も無く過ぎましたが二日目の昨日、藤原家

から出場した早月と呼ばれる美しい娘が薙刀の試合に足をはらわれてバツタリと地面に打ち倒されたのを恥じて、駕籠の中で割腹したと云う話が伝わって居ます。

医者に運ばれて行く途中の出来事で永年この早月に仕えて居た供の老女は涙乍ら

「早月様は右の脚を打たれて骨が砕けて居られましたので、かゝえる様にして駕籠にお乗せ申し、城下町の医師の所までお連れいたしました。二丁程進みました時、不意に苦しそうな御声が駕籠の中から聞えてきましたので声をかけますと、何でもないという御返事、きつと打たれた脚がおいたいのであらうと思ひまして少しゆっくりと行く様にと駕籠屋に声をかけて尚も進んで行きました。間もなく『うーむ』といううめき声がすると同時に何やら水のはねる様な音がしたので驚いて駕籠を止め、御簾を上げて見ますとこれは又どうした事でございましょう。早月様は真白な桃の様な御乳房を惜し気もなくむき出され、しかもその左の乳房に深々と短刀を突きさして居られるのでございしました。そして黒い大きな目を裂ける程おひらきになつて何やらお口を動かされましたが声にならず其の儘がつくりと首をたれてお仕舞いになったのでございます。」

私は余りの事に唯ただ驚くばかりで御座居ましたが、氣をとり直して御乳房から短刀を引きぬいて乱れた御着物の襟をお合わせいたそうと致しました。すると早月様は御腹を召されたものらしく、可愛らしい下腹もまるで赤い絹糸でもふりかけた様に真赤にそまつて居るので御座居ました……」

こう老女は述べて泣きぐづれたと云う。未だ二十才をこえたばかり、藤原小町と噂の高い美女にふさわしい見事な最期と伝えられるのでした。

さて、慎之介が明日出場する通し矢というのは方一寸角の金的に



向って二十間離れた所から矢を打込む仕合でした。矢の数は百本、当れば検査役が太鼓を鳴らし十人程の仲間が「エイホーエイホー」と声をあげて氣勢をそえます。去年までの最高の成績は藤原家に仕える夢想流の黒柳鉄心が三年程前に当てた八十一本と云う記録ですが、今年唐獅子家から出場した小野慎之介と藤原家の選手長岡大助の成績は、恐らくそれ以上の記録を作るのではないかとの前評判なのです。

この試合の始まる一月程前のこと柳宮で落ち合った唐獅子、藤原両家の当主達は一方が「わが家臣小野慎之介は飛び行く雁の右の目から左の目を射抜く天晴れ名人……」と云えば一方も又「吾が家中の長岡大助は十間はなれた針すら射る天下の名手、なんの小野如きと比較になるうや」と口争い遂には「今日の試合の結果を見よ。」と言いつつ別れたという具合でした。従つてこの通し矢の試合には慎之介は勿論、相手の長岡大助も死を決して出向いて来て居る筈でした。しかし慎之介にとっては恋するまみに先立たれた以上負けても勝つても行き着く所は同じでした。唯せめてもの土産に、なろう事なら見事、勝利を得て……と思つて居るのでした。慎之介は明日用いる百本の矢、そして弓の具合を心ゆく迄しらべました。朋友達が心配そうにそうした彼の様子をうかがつて居る中に次第に夜は更けて行くのでしよう。ざわめいて居たあたりも何時しか人声が絶えて行きます。

翌日、多くの人々の期待をかけて行われる試合を控えて天気はうららかに晴れわたりました。遠い山々、家々の屋根にのこる雪さえなければ春といつてもよい様な北国の小春日和です。

両選手は満場の歓呼をあげて進み出、一段高い藤原家当主と唐獅子家の名代との並ぶ幔幕に向つて一礼しました。

地面から約一尺程高く台が二つ設けられ、その上に真青な畳が二

枚敷きつめられて居ます。台の廻わりには一寸した欄干が張りめぐらされ藤原家は黒、唐獅子家は赤く塗られてはつきりと分かれたれ、其処から約二十間程へだたった所に二つの金的が陽光を受けて燦然と輝やいて居ます。

両選手互に目礼を交わすと先ず藤原家の長岡大助が重藤の弓に矢をつがえてキリキリと引きしほりました。満場水を打った様な静けさ。

ビュツと云う矢音が人々の肺腑をえぐった時、矢は金的の真中にさゝつてブルブルと羽を震わしています。「ドーン」「ドーン」という太鼓の音と共に「エイホー」「エイホー」という懸声がかゝり満座の人々は思わずどよめきます。続いて慎之介も又弓に矢をつがへハエツシとばかり放ちます。再び上る太鼓の音、こうして兩人共、第一矢は見事に金的を射抜いたのです。

汗をぬぐつて大助が矢を放てばこれも命中、やわか負けじと弓をしぼる慎之介の矢も見事に的を射抜きます。十本を射終つて兩人とも十回太鼓の音を鳥らし、居並ぶ人々も「さすがは大助殿」、「さすがは慎之介殿よ」とこの龍虎相いうつ戦に酔えるが如く手に汗をにぎるのでした。

しかし二十本、三十本と進むにつれ、打損じる矢の数も次第に増えてきました。五十本を打ち終つた時、慎之介の命中は実に四十八本、仕損じた二本も一分と離れない所に突きさゝつて居ます。これに反して大助は三十本目位からやゝつかれが出たものか、五十本射て九本仕損じ命中は四十一本に止つて居ます。唐獅子家からの応援は次第に力が加わり藤原家はさすがに幾分不安の色が濃くなつてきたのです。

七十本目を終ると審判の一人が進み出て今までの当り数を報告します。

「藤原家、長岡大助殿五十三本」

## 「唐獅子家、小野慎之介殿 六十六本」

満場のどよめき、遂に慎之介は大助を七十本目に於て十三本も引き離れたのです。大助はさすがに目を血走らせ髪も乱れ悪鬼の形相で喰い入る様にして七十一本目の矢を弓につがえています。これに反して慎之介は冷静そのもの、美しい切れ長の眸は的を見るといふよりも、何か恋しいまみの面影でも偲んで居るかの様に、これも又静かに弓を引きしぼって居ます。

そして八十本目を射終つての成績は慎之介が七十五本、大助は五十九本と二人の間には最早決定的な差がついて仕舞つたのです。唐獅子家陣営の喜びに比べ、藤原家側は当主始め家臣一同暗澹たる面持は覆うべくもありません。

床<sup>シヨウキ</sup>に坐り汗をぬぐう両選手の前にその時一人の美しい腰元が茶をさゝげます。長い髪を後でたばね、やゝふくらとした顔はまことに初い初いしいあどけなさに満ちて居ます。

この娘を見た大助は何故かハツとした様子でした。然し娘は顔を伏せた儘、茶を大助に差し出し、ついでに慎之介にも静かに進めたのです。そして慎之介がためらつて居るのを見ると、毒見のつもりでしょう、花の様な唇をその茶碗に触れて二口程呑み、恥じらう様に慎之介の顔を仰ぎ見ました。まみに似ています。その顔は。慎之介はひたとその目を見つめ乍ら一口茶をのんで「かたじけない。」とさゝやきました。

こうして再び試合は始まりました。昼過ぎから始つた此の通し矢も何時か時を経たものか、陽の色もやゝ朱<sup>アカ</sup>ね色に人々の影も長くなつてきました。

八十一本目、慎之介は見事に的を射抜きました。大助も又命中です。「ドーン」「ドーン」と云う太鼓の音をきゝ乍ら八十二本目の矢を引きしぼった時、慎之介は不意に身体の奥深く、たえ難い激痛が走るのを覚えて不覚にも思わずよろめいたのです。矢はあらぬ方

に飛び去り、人々はハツと息を吞みました。

慎之介は齒をかみしめると足をふみしめました。しかし次の瞬間彼は再び腹をえぐられる様な激痛を感じて思わず「ううっ」とうめきました。咽喉は乾わき、冷汗は流れ、身体は宙をあゆむ様にとりとめもありません。そしてうつろな耳に大助が射当てたのでしよう太鼓の音が遠く夢の様にきこえてきます。「む、むねん」慎之介はふらつく足をふみしめる様にして次の矢を放ちました。しかし其の矢も遠く離れて飛んだのです。

「おのれ、毒を吞まし居つたな、卑怯な」慎之介はギリ／＼と齒をかみ乍ら二本、三本と矢を放ちます。しかし何れも矢は慎之介をあざける様に空のあらぬ方によろ／＼と飛んで行きます。

唐獅子家の家老がかけつけて、氣附けの薬を慎之介に飲まし、其の瞳孔をのぞきこんでハツと息を吞んだのです。強い精神力に支えられてゐるものの其の眸は既にこの世のものとは思われないうつろなものです。毒、氣附いた家老は早速心利いた者に命じて今の腰元の行方を尋ねさせます。所が彼女も又家老の若しやと云う想像通り自室に戻つて自害してゐるのです。

想うに彼女は大助の恋人であつたのでしよう。恋人の敗北を救う一心で慎之介に毒を進め、自らもその犯行をくらます為に若い命を散らしたに違いありません。しかし死人に口のない今、その証拠はありません。試合はやはり続けなければならないのです。

家老に支えられ、慎之介はふら／＼と立上つて弓をしぼります。幽鬼の様な蒼白な顔には唯目丈がギリ／＼と無念氣に輝やいて居ます。しかし、こうした状態で、何ぞ方一寸角の的を射抜けましよう。矢はいたずらに地面を這い、空中を横切り、七十六本を最後に一本も当たらないのです。

これに反して大助は一本、一本と慎之介の命中率に迫ってきます。固く結ばれた唇から一本血の糸が流れ出ているのも氣附かぬのか、



ざんばら髪の奥からの的を見つめる大助の眸はこの世のものとは思われぬ不気味さ、こうしてこの二人の選手は何れも地獄絵の様に暮れかゝる冬の日に影を長く映して弓を射ているのです。

大助は恐らく、相手が自分の恋人によって毒を飲まされた事など夢にも気附かないのでしょうか。あと十本、あと八本と執念の鬼と化して矢を放っているのです。

居並ぶ両家の侍達も今はもう一言も発するものもありません。手をにぎり、膝を抱きしめては此の死闘を見守って居るばかりなのです。

そして遂に大助は百本の矢を射終って虚脱したかの様にふら／＼と欄干によりかゝりました。的を射抜いた数は実に七十七本、慎之介を遂に一本こえたのです。そして慎之介は八十二本目から九十九本目まで無駄矢を射て現在七十六本、唯残された一本の矢が唐獅子家を藤原家とせめて相討ちに終らせる唯一の機会なのでした。

彼は最後の機会を狙って静かに天を仰ぎました。しかし身体はもはや半ばしびれ、吾が手であり乍ら弓を持つ感覚すら遠い存在の様に思えたのです。「八幡！ 助け給え！」彼は心に念じました。しかし毒に犯された身体は、無念にももういう事はきかないのです。敗北の時は刻々迫ってきます。勝たねばならぬ戦、唐獅子家の希望をになった戦に彼は今や敗れようとしているのです。十九本の無駄矢を続けた今になって奇蹟は起きる筈もないのです。最早敗北です。あと一本、しかし満場の人々の目が息を呑んで注がれて居る最後の一本が、せめて的の近くを通るならばまだしも、地面でも見苦しく這い廻ったなら、未来永劫までの物笑いになるのは当然なのです。

慎之介は無念気にじっと目を閉じました。目蓋の裏に沈み行く夕日の映光がかすかにしのび入りました。

そして慎之介は遂に心を決めたのです。いさぎよく割腹、そうで

す最後の矢を放たず彼は散ろうと決心したのです。

慎之介は静かに弓矢を欄干にたてかけました。そして髪を直し着物物の襟をくつろげると三日前まみが自らの腹をさいた『腹切丸』を抜き放ちました。

「唐獅子家の臣、小野慎之介、武門の神に見放され、恨みを泉下に報ぜん為に此処に切腹仕まつる。武士の最期、よく御覽あれ。」

どよめく人々に言い放つと慎之介は刀を逆手にとり直し、下腹を十分にくつろげ、片足を欄干にかけると左の脇腹に切先をあてたのです。

沈み行く夕日の余光がキラリと刀身にはねかえった時『腹切丸』はズブツと肉を裂いて押しこまれました。

「うーむ、うむっ」

こらえかねたうめき声、刀を右へ引くと血がぶつぶつと吹き出、スウツと糸を引いて下腹を走りました。

慎之介は目をとじると右の手で刀身をにぎり直し、やおら下腹をズブズブとまわして行きます。腹の皮が刀に押されて右の方に寄り傷口は白っぽい脂肪が血をはじいて次第にまくれあがってきます。

シリシリと臍の下あたりまで切ると刀を止めて、さすがに苦し気に息をします。右の方によって居た腹の皮がゆるむと傷口がパツクリと口をあけて青黒い腸が一管溢れてきました。そして一管が出るのと次から次へと重なり合い乍らこぼれ出ようとしているのです。

「むむっ、あっ、あっ、むっ」

毒に弱った身体では思う様に腹も切れぬのか慎之介はギリ／＼と歯をかみしめ乍ら、力の限り刀を引きまわすのです。

「こ、これが、これが唐獅子家の、さ、さむらいの腹切る様じゃ、うっ、何の、何の、くっ、うーむ、む、むうっ……」

最早四寸余りは物の見事に切り開かれました。どろりとした腸は下腹から欄干にかけた片足の上にまでたれさがり、ぐわっと口をあ

けた傷口からは時々血がほとばしって慎之介の両手を真赤に染めています。

「う、うーっ」

『腹切丸』は右の脇腹に向って尚も廻わされようとして居ます。慎之介はぐーっと左の方へ身体を一杯によじると両の手を刀にかけて「むーうっ」

とうめいてしたたか切り裂きました。何と云う切腹でしょう。深さ二寸余り、長さにして七寸以上、殆ど胴体を二つにして仕舞う程の物凄さです。臓のものがガバガバと殆ど溢れています。細長い小腸はゴボツと固まったり、うねうねとうごめいたりして傷口からたれさがって居ます。

「うーむっ、こ、これが慎之介のは、はらわた、立腹切ったはらわたじゃ」

慎之介は刀をすてると溢れ出た腸を両手にかゝえて腹から尚もズルズルと引き出すのです。「うーむ、ウ、ウツ、ウム……」そして何を思ったのか再び『腹切丸』をとり直すと、吾れと吾が腸を傷口の所でぐいとしごいて切りとったのです。血生臭い匂があたり立ち込め、相手の大助も居並ぶ人々も余りの凄絶さに息をのんで針音一つしない異様な静けさ。

こぼれる程の腸を両手に支えた慎之介はよろよろとよろめき乍ら欄干に近づきました。そして残された最後の矢をとるとその先端にこの腸をズブリとさし通しました。そして血にまみれた左の手で弓をもつと

「ご、ごらんあれ、むっ、ああっ、ど、どくに犯されし慎之介が、無念のは、はらわた、よく、ごらんあれ、あっ、あっ」

切れ切れに云い終ると最後の力をふりしぼって弓をきり／＼と引きしぼったのです。何と云う姿でしょう、引きしぼられた弓の先がかすかに震える。矢の先には、今の今まで、慎之介の下腹の中に生き

てうごめいていた腸がだらりとさがり、弓をもつ彼の腹はぱっくりと真赤な口をあけ、切り裂かれた傷口からは不気味な腸が二、三本にゆつとたれ下っているのです。

ビューツという矢音がして、矢は惜しくも金的上をかすかにこえて通りぬけました。しかしつきさ／＼った矢からずりおちた腸はまるで生きものの様に的の上にたれ下ってまといついたのです。

「ドーン」と太鼓が悪夢を払う様に鳴りひびきました。そしてそれと同時に

「この弓試合は勝負なし。」と叫ぶ藤原家の当主の声が凜として響きました。

「い、いかゞじゃ、か、か、からししけのさむらいの死様はこうぞ……」

太鼓の響きも耳に入らぬのか慎之介は欄干にすがりついて尚もうめくのです。かけよった家老が耳に口をあてゝ叫ぶと始めてかすかな微笑みをうかべました。

そして、人々に向って会釈すると、

「まみの血をすった『腹切丸』じゃ、抱いて死のう」とつぶやき床の上に逆さに立てて臍を切先にあてると一声

「うむっ」

と叫んでその上につつ伏したのです。切先は臍から背をぬけ、その血にそんだ刀身はかすかにふるえる慎之介の断末魔の生命を吸ってか、カタカタと身を震わして居ます。大助が、家老がどっとかけよります。そしてこの時、今日一日の暖かさに雪がゆるんだのでしようか、遠い山々の雪が恰も凄絶な慎之介の死をいたむかの様に、どっと雪煙りを立てゝなだれ落ちたのです。



# 『和 装 教 室』

— 晩春・花嫁衣裳の巻 —

白 金 紅 次 文・画

『で——、君はよく承諾したね』

『だって、仕方がないんですもの、身体が身体でしょう、だから』

『いつ挙げるんだい？ 大将と』

『早い方がいいからと云ってたわ、何んだか怖い見たい』

『まあ、いいだろう、兎も角、女一匹片付くんだから、お目出度うと真向から云いたい処だが、これっ切り君と逢えないと思うと、少し寂しいね』

『アラ、まだ脈が切れてないわよ、でも、あたしの様な者でも世間の手前、こんな事をしなければ気が済まないなんて、お年寄りはいっこのね』

『精々、甘え給え、後妻の味も一しおだろう』

ぜ』

『アラ、どっちが……？』

『どっちもさ、君の事だから、気負い過ぎて御先き様を殺さぬよう、蔭ながらお祈りして置こう』

『ずいぶん、急に水臭くなったのねえ、この花嫁衣裳が段々<sup>うづ</sup>怨しくなるわ、そう仰言ると——』

産れが何処で育ちがどうなのとこの機に及んで詮議する必要はないだろう。よしんば詮議するにせよ、順を追うて女の全貌が現われ、筋を展開して、情景が把握出来なければ役場の戸籍調らべと同様、味気なく、何等の意味もないであろう、と敢て云い度いのが私の言い分である。

『成る程ね、お召し物が花嫁衣裳と銘打つだけあって豪華だね、君が三味線を鳴らす時と雲泥の差だ』

『そうかしら？ あの人はこれで十万円位と云ってたわ、本当の処女でもないのに勿体ないお話』

『他人事見たいにそう割り切るなよ、これを着て三三九度でもやれば一段と、ういういしくなるぜ』

『お床入りで、バレて、即座にひっぱたかれたいわねえ？ もう何んでも御存知なんだから』

『年寄りは兎角ぼけ易いから、奴さん、さだめし鉢割りと思うぜ』

『御挨拶ね、あなたと違って高いお金で買わ

れたんですもの、せいぜいサービスしないと  
それこそ、変なお部屋へ入れられそうよ、フ  
フフ」

『変な部屋って何んだい?』

『何んでもないの、あなたには今急には要らないもの、若い人には眼の毒になるもの、ホホホ気になって?』

『思わせ振りの結構だが、一寸気になるね。事と次第によつては百万円積んでも君を買取しなければならん、討入は何も義士ばかりが専売特許じゃないから、雪はおるか火の中へ飛び込んでも』

『三文小説見たいな浴せ文句で気負ったら、先き様——あなたの奥様がそれこそお泣きになるわよ。お部屋って、お部屋よ、御年寄りの遊園地なのよ。妙ちくりんな』

『ねえ、小夜っぺ、今から蜜豆食べて映画を観て温泉までドライブしようか?』

『嫌やねえ、急に水心なんぞ出して、お魚が笑うわよ、だから、笹——さんはお尻が軽いつて言われるのよ。そのお部屋は、あとで御ゆつくり穴のあく程御覧遊ばせ』

『まあ部屋は、そうする事として、十日前に落籍されて、足を洗ってさ、バタバタと花嫁衣裳が出来て、あつと云う間に本宅の奥の、そのまた奥の離れにこるがり込んで形ばかりの式を挙げようなんて早業は常人じゃ出来ないねえ?』

『わたしでしよ?』

『いや、先き様がよ、君もその仲間だ』

『どうもおあいにくさま、けどねえ——笹——さん、あたし、奥さん稼業って辛抱出来るかしら?』

『どっちかと云えばあたし弱虫の方でしよ、出て行けッ!』と云われれば今度限り行く処がないのよ、また義母さんの処へ帰えるのも、それこそ妙ちくりんだし』

『女に喰いはぐれなんてものは、これっぽちも無いんだよ。おべべを着てシヤナリと歩けばまたどこかの千万長者のお年寄が眼尻を下げて君の美しい首玉に縄をひっかけて曳いて行くよ』

『そうかしら?』じゃ今頃、西の方でやってるわねえ』

『西の方って、留守かい?』コレ』

『商用で出掛ける、精々帰って来るまで磨いて置けッておととい出て行つたわ、さつき、あなたを取りついだ女中と耳の遠い飯炊きの婆やさんと三人きりなのよ。勿体ない程お部屋の多い家に、これだけでしよ。本当の奥さんだったなら泣かされるわねえ、お廊下がまた多くて』

『呉服屋の番頭、ちよいと御相談にお伺い致しました。って云うセリフは我乍ら感心したよ』

『あなたも茶目ね、でも、田舎出の女中だからいいのよ、目覚とい女だったら老旦那の云

い付けでさしずめ玄関払を喰う処ね、衣裳はあるし、ちょうどたて込んでいる最中ですもの』

『斯うでもしないと、君と逢えないから仕方がないさ、今度は君が役買う番だ。女中君に暇をやり給え、三時間ばかり』

『まあ、』

『衣裳と君とから、永の別れをするために、さ、いいだろう?』

此処まで追い詰める事は麗らかな春の陽ざしに背いて酷かも知れない。正に散ろうとする花びらに散り際の良し悪しを要求し、散り行く先は是が非でも俺と相談しろと云うのと同じだからである。何と意図し何をたくらんでいるかは恐らく判るまい。ただ妙ちくりんな部屋と態よく逃げた女をぐっと手中に曳き戻すには、俄か番頭とは申せ余程のふん張りと勇氣を必要とする位のことは、奇巧の皆さん、恐らく御異議御座いますまい。

『あなたが、おからかいになる見越の松の、この家は最初から興味さらさないんでしよ、ただ広いばかりじゃねえ?』

『庭が広くて泉水がある御殿なんぞ、およそ見るのも嫌やだよ、それよか、狒々に喰われる女の方が興行価値満点だね』

『あなたらしいわ、でも、何んとか重太郎さん、お株取られて、さっぱりね。』

『重太も軽太もないさ、君だって、助けに来



る筈の岩見が来ない狒々に喰われる女に早晩なるんじやないか。覚悟すべきだね、今となつちや」

『喰われ放しになったらせめて骨だけでも拾って下さる?』

『君のぼちやぼちやした肉片なら拾ってもいいが白っぽい骨片じやどうにもならないから御免だね』

『じやあ、喰われる前に祭壇に飾られたらきつと助けに来て下さる?』

『まあ、時と場合によるね、モソモソした婆さんや小便臭い女の子だったら僕は廻れ右だ。女中君に三時間の暇を与え給え、こんな処から片付けて行かないと愈々以て君は助けられないよ』

『随分、我儘な番頭さんだこと。もう一度お願い、本当に助けて下さるの?』

『助けてもいいよ、だけど理由なく義侠心を発動する訳に行かんしねえ、先ず番頭にお任せ願ってお召し遊ばす花嫁衣裳がお似合かどうか、色直しの裾模様はどのように、お床入りの長襦袢は大柄か小柄かなど、とくと御相談承ってから祭壇に登って頂き度いんだ。そうすりや骨片はおろか毛の先、爪の垢でも拾ってあげるよ』

『じやあ、一寸お待ちになって、』

見ようによつては、呑気な話である。色白く肉の盛った女鼠を爪の先きで尾っぽを押え

何んと媚びようと、じつと目の玉を据えて眺めている野郎猫と思えば間違ひなかる。その殿方猫と女鼠が明るい離れの八帖の間一杯に陳らべられた絢爛たる色も取り取りの花嫁衣裳のど真ん中で繰りひろげられようとする――テクニカラーの一場面は多分陰惨である。う処の年寄りの遊園地と共に是が否でもワイドスクリーンに投影しなければ収まらないと云うものであらう。

『お待ち遠うさま。仰言る通りにしたわ、どう?一通り御覧になる?』

『相当なものだね、何点あるんだい? あの白っぽい打掛けなんか威圧的で――僕は好かんね、打掛けは女の身体の線を殺すから止め給え、着るのは。』

『だって先き様のお好みなんですもの、』

『この松竹梅総模様の着物の方がいいよ、色直し用かい、これは。君はこれが似合うよ、一越縮緬の白地菊の丸か、これにし給え、下着つまり長襦袢は普通なら白だろうが、今日は赤にし給え、それから下は全部赤がいい、帯揚げはこれかい? 綸子ピンクの唐草模様と、よからう、帯締めは、そう、それが当り前だよ、その羽二重丸桁が花嫁に限らず、どの着物にも僕に好きだ。抱え帯は塩瀬の朱なラ上品だよ、帯はどれ? 西陣織だって? 金箔の無地かい、高級品じやないか』

『まるで、あなたがお婿さんか仲人見たい。』

西の方であの人クシヤミしているわ、きつと』

『いいじやないか、番頭すこぶる真面目にお見立してるんだから、処で小夜っぺ、君は一ぺん位は身体に合わせて見たんだろう? 借り衣裳じやないけどさ』

『まだ本式には着てないわ、』

『もつとも、これだけ本式にやったら小一時間たつぷりかかるよ。僕の方が目を廻わす……』

『アラ、何あーに?』

『着付けする方がくたびれて寝込んでやうって云う意味さ』

『一寸着て見ましようか? あの箱にかつらもあってよ、老舗の一番番頭さんも、いらっしやるんだから、フッフ、一寸花嫁さんになつて見ようかしら?』

油が廻れば車は走り出すに定まっている。情が移つれば西の方にお尻を向けて、あらぬ俄か番頭に操られる式前の女小夜っぺはフフンと笑って帯を解き始めた。和装教室亦多忙なるかなである。

『ねえ、あなたは人一倍おやかましいんだから手伝つて?ズロースなんてもの要らないわねえ?』

『練習し給え、当分不用だよ、年寄りには案外せつちだから、湯氣を立てるぜ』

『あつちを向いていらっしやい、一寸見ない



で頂戴』

和装の妙味はこのあたりに在る。方幾寸の、幾尺の布が白い肉体を滑ってはまた着けられ締められ、巻かれて青畳の上を往き来するこの雰囲気は堪らない。曾って、さる処に遊んだ頃、時も春、粹な窓越しにおぼろ霞んだ桜

裾をからげて

廊下を歩いて貰う……

を眺め、脂粉に酔うて一刻しばし鏡に釘付けされた事がある。およそ限られた天地で、限られた戯れを行うためには美しい白鼠は暫時の間、自由に振舞わさせなければならぬ。『御婚礼衣裳って随分重いのねえ、嵩ばって前が合わないわ、裾を踏んじやった。』

『その部厚い帯は結べるかい？ 大丈夫かい？』

『踊りの時、一、二度やった事があるわ、だけど』

『自信がなければ、形だけでいいじゃないか、どうせ』

『どうせって、何よ？ ちゃんと結んで見せるわ、斯うでしよう、これで我慢して頂戴！ 裾の処これでいいかしら？……』

『裾を曳いて立った処は君にはうって付けた。素人の娘さんじや可哀いそうだよ。第一、裾さばきから座り方も知らないからね、仲々奇麗じやないか、こりや人形箱から出て来た生人形そっくりだよ、中身は兎も角、立派な花嫁さんだ。』

『馬鹿ねえ、フッフ、狒々に喰われるの、勿体なくない？』

『勿体ないね、僕なら山田の案山子を置いて逃げて帰えっちゃやう。』

『あたし、何んべんも喰われるの嫌やけど、一ぺん位なら喰われて見ようかしら？ ほんのちようびり』

『ちよっぴりと云わず、たと



喰べられ給え、序に祝詞を挙げてあげる、』  
『だから、殿方って薄情で嫌い。助けるナン  
て嘘ばっかし仰言って——』

『アア村の鎮守の森へ行く時刻が来たよ。誰  
かはお狒々様に捧げられなけやならないん  
だ。祟りが怖いからねえ、さあ、小夜っぺ  
泣かずにこのまんま、行って呉れよ』

『お上手ねえ、もうけしかけていらっしや  
る』

『ええ、と、何処かに縄はないかなあ？ そ  
の行李の紐がいいや、細引の方が感じが出る  
から、そこへ坐って御覧／＼ さあ、いいね？  
この家ともお別れだ。ようく見渡して、あの  
タンスも、あの鏡台も、あの針箱も、衣紋掛  
けのあのきものももう今輪際触れられないん  
だよ。そこで——と』

『どうなさるの？』

『どうなさるって、このまんまじやへ高砂や  
ーに、なっちまう。その膝の手を後ろに廻し  
給え、両手、両腕をさ。手首を袖から出さな  
けりや、柔い手だけど、止むを得んね——斯  
うなっちや、一寸の辛抱だ』

『痛いわ、細引が喰い込んで、二巻き、おく  
くりになるの、随分、きつくお縛りになった  
のね、息が出来ない位。嫌よ、それ、それだ  
けは堪忍して、あとで、嵌められるわ、だっ  
て物が云えないんですもの、』

『さあ、そのまま起って村の役人達や村の衆

が皆んな首を長くしてお待兼ねだ。月も昇っ  
たらしい、そろそろ出掛けようか、縄尻は持  
つぜ』

裾を蹴る、拡がった裾が右に左に奇麗に捌  
かれて緋の無地縮緬の長襦袢が上から下まで  
白一色に映えて、ふるいつき度い程のなまめ  
かしさをふり撒く。

『本当は鎮守の森まで框に入れて担ぐ処だが  
廊下を歩いて貰う。裾はからげよう。ようく  
眺めてお歩き、もう見納めだから』

『あなたも、あたしを見納めね』  
『減らず口はたたかんこと、だから猿轡は必  
要なんだ。』

『お廊下の突き当りをあけて頂戴／＼ この襖  
の右を押して、一枚襖で廻るでしよ、』  
『一寸薄暗いね、いつもこの部屋はこうなの  
かい？ じめじめしていて』

『灯はつくのよ、それを押して頂戴』

『何んだいこの部屋は、納戸かい？』

『このお部屋なの、ここで爺ちやま、お遊び  
になるのよ、いろんな物が転ってるでしよ  
う。先祖代々の物なんですって』

『成る程、有るね、裸の木馬だろう、あれ  
は。何んだ、井戸の車だの、滅法でかい太縄  
だの、庖丁まで——こりや竹光だ、芝居道具  
だね。浄瑠璃の本まである』

『先代の先代が中村座とか何んとか座の道具  
屋なんですって。このお部屋は、その頃の土

蔵を改築したらしいの』

『余っ程の興味が湧かんと、この部屋に  
いるのは御免だね。酒でも飲んで女を引っ張り込  
んで苛めるのには好都合かも知れんが』  
『その古びた抽出をあけて御覧なさい。あた  
しはもうそつと、拝見済みだから』

縛られた花嫁を曳いたミイラ採りがミイラ  
になっちや大変である。古代紫の風呂敷に包  
まれた、いな抽出と云う抽出の全部に蔵われ  
た物はアブノーマル・セックスの豪華版、そ  
してあの古瓶は、あの大箱は？。

『あなたの仰言る狒々供養って絵ね、その本  
にもあってよ』老人輩の御趣向がどうあろう  
と、事、ここに及んで自他共に受諾されては  
苛酷が厳となつても致し方ないであろう。

『読むのは後廻し、冗談事が本當になっちや  
った。よしッ、ここで狒々供養だ。この絵の  
ように——虫が喰って肝心な処が見えんが——  
花嫁恰好に間違いない。ええと、祭壇の上  
にと、この箱の上はどうだい？』

『小さくて横になつたら高島田が抜けるわ  
よ、嫌よそんな恰好だつて』

『じや脚が開かんようにここんとこ、縛ろう  
か？』

『いいの、こうしてるの？ これ位のところ  
で、だって、それは春本でしよ、挿絵のよう  
には、行かない、わよ、痛ッ、——それだつ  
たら足の方でも縛って頂戴。いくらなんでも

恥かしいんですもの、胸の方から喰べて頂き度いわ」

「お狒々様は赤い方が好きなんだよ。どうせみんな、喰べられるんじゃないか。も少し裾をひらくんだよ、何んだ、二枚締めてるんじゃないか、牛だつて興奮するんよ、まして人猿様だもの、毛むくじやらの手の爪がこのお腰に引懸る、それから股の肉だよ、お腹から上は朝食、お乳は子狒々にやるかも知れん。人乳とミルクタンクはおいしいとね、」

「もう助けて頂いても、いいでしょ？」

「このポーと薄暗い部屋に月がなくて幸いだ。白い衣裳に真赤な小夜っぺの腰巻を見ちや、こちらさまが狒々になりそうだ。いっその事、バラバラに咬み切った君の股やお腹をこのお腰に包んで持って帰ろうか？ 今夜の照り焼き用にさ」

「随分、ひどいお方、そんなに腰がお好きなら思い切りあたしのお腰をお剥ぎになったら」

「……と云うのが、作者不明の、この本の荒筋なんだよ。どうだい？ 馬鹿馬鹿しい内容だろう」

「お好きね、相変らず、で——その人、芸者さんでしょ。玉の輿に乗って花嫁衣裳、だいたい無しじゃないの、笹——さんて、どのさ——さん？」

「そりや判らんよ、佐藤だつて佐々木だつて皆、さ——さんさ、僕もそのサ——さんの一人で本当なら迷惑するんだ」

「光榮至極よ、そのお話の続きは無いんでしょ、女の人からお腰を取り放して逃げちやったりして。それよか——花嫁衣裳の方を貰いなさいよ、あたしが着てあげる。そして、あたしに下さるならその狒々つてけだもの？」

「多分、そうだろう。人間なら、何んとかの抵抗族だ」

「抵抗族でも山賊でもかまわないわ、あたしなら咬みついちやうから……、無やみに女の人縛ったりしちや駄目よ、お縛りになり度かつたら、いい妓を世話してあげるわ。あなた好みの、いい妓だから、裸にしようがお腰一枚にしようとおなたの御自由よ」

「すると、この物語はもう一ぺん、サ——さんと云う男にその続きでも書いて貰おうか」

「お止しなさいよ。今時狒々供養なんてものはないわ、ウェットもいいけれど、ドライで行きなさいよ。面白いから。ウェットな娘っ子をドライで、もみ苦茶にしたらお狒々様以上になるわよ、きつと」

「女将だけあって活眼恐るべきだね、じや残念乍ら作者に断つて花嫁衣裳狒々供養の一篇は割愛することしよう。その代り、フレッシュユな処で君の云ったウェットな妓頼んまっせ。」

「任せて損はないわ、月初めに一本になった妓だから」

「序でに何ところ。ドライにするにや、どうするんだい？」

「そこが、あなたの腕の振るいどこよ。お座敷着のまま、それこそ後手にひくくってお給仕させたらドライになるじゃないの？ 島田の首つ玉に縄かけてハイハイさせるの猿廻しよりかましたわよ。何あ——に？ 馬鹿ねえひくくって逆立ちさせちや可哀いそうよ、眼の毒だわ、ホホホ、まあ、ここらでお酒、おあけなさいよ」

——下に召します緋の色が、とんだ座興で狒々となり途中で切れた天然色、たとえ桜の花が散ろうとも、おあと女将の美妓君控えてる、お座敷遊びはいずれ又、御退屈さま

(この項終り)

## 【映画速報】

河合 正守

濡れ髪二刀流(千原しのぶ)後手に縛られ柱につながれる。又後手を背中の方からきれいに写してある。

柳生武芸帳(久我美子)寝所にて布団の中で帯で縛られ猿ぐつわをはめられている。又駕籠の中でも縛られる。

隼人族の叛乱(長谷川裕見子、勝浦千浪)人質として縛られる。



## 『奇談俱樂部』の会合

## △「責め」の研究会報告▽

岸 本 青 柳

## 『奇談俱樂部』の会合

私の住んでいる市内の医師、薬剤師、美粧院の経営者、芸者、バーのマダム、旅館の女将など十数人で組織している「奇談俱樂部」の会員は、世相に現れた事件の真相を探究すると共に「奇譚クラブ」を絶好の資料として緊縛に対する研究を進めて行った。今月の例会では瓢亭の芸者若龍さんにモデルになって貰って、縛り責めの実験をすることにした。若龍さんも人後に落ちない斯道に理解の深い芸者であり、快よくモデルを引受けて呉れた。善は急げというので、当年二十五才の色白な少し肥え気味で背の高い美人型の若龍を責める番に満月旅館のおとめ女将が当てられた。女将も亦、他に劣らぬ発展家ではあるが今日まで自分が縛られることを望んでおり、数回の体験もあるが未だ他の人を縛った経験がないというので責め番を辞退していたが、同志の強いての勧めでヤツと責め手を引受けたものの、始終無言の業を続けた。先ず手招

きで若龍を裏庭の松の根元に座らせ、用意の麻縄でその両手を後手に強く縛り上げる。若龍は痛いのか少しく顔をゆがめて眼を吊り上げて女将を睨み付ける。おとめ女将は右の手に麻縄の端を握った儘、若龍の背後から左肩先を蹴り上げる。若龍はアッと叫んでその身体を右前に俯伏せに倒れた。女将は若龍の帯の上を右膝で強く押え付ける。若龍は両手を縛られた上に女将に押え付けられたので、思わず「痛い」と悲鳴を挙げたので、女将は若龍を引き起し縛った麻縄を解いて、その身体を抱くようにして椽側に連れて来た。

若龍「両手を縛られイキナリ蹴られたので随分痛かったワ」

と言いながら身についた麻縄の縛り跡を擦っていた。この実験を会員同志が研究した結果、先ず五十五点ぐらいで落弟点より五点多かったとの批評であった。

芸者モデルの責めの第一回実験を終ると、

希望に依って私はその第二番を引き受けた。女将の着物や帯や長襦袢、麻縄などは既に用意して行ったが、写真を二枚撮影したいと思ったので、最初は若龍芸者の着物を借受け、同じく庭前の泉水の辺りの松の樹の根元に左膝を立て俯向加減に「かづら」を乱して両手を後ろ手に縛られたところを写して貰い、次は、自分の用意した茶色生地に淡黄の縞縞に細い横筋の入った袴の着物を着て、側の椽の木に吊り上げられた。

この二回の実験に約三十分を費したが、木から吊り下げられた時は、麻縄を二重に胸の上に巻き付けられ、両手を後ろ手に相当強く縛られ、男子会員二人の力で椽の太枝に吊り上げられたので、一度に胸が迫り、呼吸も詰まり、その上、自分の身体が二、三遍クルクル廻わり、両足をバタ付かせたので、随分若龍だった。でも私は芸者の紅いお腰、長襦袢黒襦子の帯、紅の扱帯など身に纏い、「かづら」の黒髪を垂らして完全に女装して縛られ吊り責めされた時は、何とも譬えようのないほどの緊縛味を覚えた。呼吸さえ苦しくならなかったならば、モツと長く吊り責めされ、モツと強く竹や棒でウンと殴って欲しいと思った。

時間の関係上、実験は三回で終り、さて研究批評の結果、私の最初の分は若龍と同じく五十五点、吊り責め方は七十点であった。百

点満点を取るのには、逆さ磔、逆さ吊りか、殆んど人事不省に陥るほどの責め折檻の苦痛の実験、体験を身に付けなくては容易に満点とはならない。夫れほど同志会員の審美眼は昂じており、各自が相当以上の研究体験に富んでいるのである。それほどに会員諸氏が芝居や映画見物には熱心であり、殊に縛られた女優の現われる映画は、二度も三度も観覧に赴くというほどの熱烈さである。従って私も他の会員に負けを取らぬよう「奇ク」の縛られた女優の写真は素より誌中を片っ端から読んで、家人の寝静った夜中や、家人の不在中を選び、女装して自縄自縛の実験や研究に努めている。文字通り奇クフアンの第一人者であるが、之れを一般に公表するの勇氣に乏しいのを遺憾としているのである。

茲で一寸私の女装観を述べて見たい。先ず夜中に重きを置き入浴の後、女の脱ぎ立ての長襦袢を着る。紅いお腰を巻き、黒襟のかかった格子縞の袖長の袴を着て、黒襦子の帯を締め紅い扱帯をする。帯上げには紅白まんだらを用い、顔に紅白粉を塗り、女形に作り、新蝶々の「かづら」を冠る。このように女装を整えてから、麻縄の端を大黒柱の中程に結びその長い端の一端を右手に握り、両手を高く後ろへ帯の上に廻らし、身体を右から左へグルグル三、四重に麻縄で強く縛り付け、なお一間ほど麻縄の端を余して、右手の指先で

右手と左手を交叉して縛り、縄の端をシッカリ握り留めた上で、身体を前後左右に動かし或いた身体を横転、上向、斜向、左右膝立て両足上げなどいろいろ責めの研究する内に、ダラダラ汗が流れ出る。この汗が長襦袢に付いた女の肌の匂いとが混合して、真に自分が女になったような気分になり、その上身体を前後左右に前へ強く引けば引くほど麻縄が肌に喰い入り、痛さがますます激しくなる。頭も適度に振り廻わすと「かづら」の毛が自然に乱れて来る。約半時間この自縛の醍醐味を味わった後、裏庭へ出て改めて松の木枝やペランダの棧に別に太縄を振りかけ足継台の上で、再び両手を後ろに廻らし麻縄で強く縛り、上から下げている太縄を後ろの帯と両手の間に差し込み、足継台を両足で少し横に押し除け、自分の身体を吊り下げる。約五分間も経てば身体の重みが加わり、帯と縛り縄が容赦なく、自分の身体を締め付ける。身体は少しく前かがみになり、お尻が出る、膝前がウンと拡がる。紅いお腰がチラチラする。而して両足を上下左右に振り動かすと、冷汗がダラダラ流れる。呼吸が苦しくなってきた。この縛り責めを眺めると、先に言った女の肌の匂いの付いた長襦袢やお腰が、ピッタリ身に喰い付き其の上顔の白粉が汗と共に流れ出る。之らの女の着物の匂い、「かづら」に付けた髪油の匂いが一時に鼻に入り、自分

の好きな女装姿に自分ながら見惚れるのであるが、五分間以上も経てば、頭がガンガン鳴り呼吸も苦しくなるので、足継台を両足で元の位置に戻し、その上に立って始めて縛った麻縄を解き、その儘素足で着物を長く引いて庭先を歩くのであるが、この時も亦両手を後ろ手に縛って山賊に捕えられ山塞に引かれて行く妙齡の町の娘を想像しつつ、彼方此方へ引き廻わし、映画や演劇での縛られた娘の姿を実験しては、独り愉悦に耽って行くのは屢々である。これから春、夏にかけても同じことである。夏の暑い夜でも袴の着物、袴の長襦袢、厚帯、と冬期と同じ女装で、責めの醍醐味を味わうのであるが、夏の夜の責めは冬の夜に較べて一層苦痛が加わるものだが、夫れだけに味う快感も亦強まるものである。だが女装の自縄自縛よりも、若い女や娘の責め折檻はより以上の快感を覚えるのは事実であるから、私は責めの相手方を力めて、心易い芸者旅館やカフェーの女将という同志会員のほかに近隣の婦人方をモデルに、真の女の縛り責めを実験と研究を行っている、一度責めのモデルになった婦人は、回を重ねる毎に好感を以て迎えられている。婦人達も亦私の好むように着物を取り替え、趣向も変えての縛り責めに堪えて呉れるので内心飲んでる訳である。この実験と研究は共に今後も続けて行き度いと思っている。



未来幻想  
マゾ小説

# 家畜人ヤプー

(第七回)

## 第十四章 再会

### 一 クララの気持

クララは仰天して声も出ない。当然服を着ているものと思ひ込んでいた麟一郎が、一糸纏わぬ姿で扉口に立っているのだ……

——じゃ、あの時別れてからずっと裸のまま置いとかれたのかしら？ セシルは服を着せるようなことを云ってたが……

一瞬怪しんだ時、

「クララ！」

という楽しい呼び声と共に、麟一郎が急に退った——と見えたのは、鎖を握る黒奴に前進を遮られて逆に引き戻されたのだ。見れば後手錠、いや足錠まで！ 一体何としたこと？

脳中の麟一郎に対しては否定的評価を強くして来ていた彼女であるが、今この哀れな姿を見ると憐憫の情が一時に湧いた。女心は不思議なものである。何といっても半年の間熱く愛し合って来た仲、ヤプーと聞かされ、そうかと疑ってはいても、眼前に彼が立てば、

沼 正 三

恋愛中の色々な思出が纏いつくし、今迄見たヤプーと違って少しも畸形的な所のない肉体を目にすると、皮膚が黄色い丈で「人間でない」などは、飛んでもない作りごとのような気がする。思わず、駆けよった。

「麟！」

「クララ！」

然し、抱擁はしなかつた。既に、先に円盤内でポーリーンの視線を構わず接吻した時のクララではなくなっているのだった。

麟一郎が又もや前に出ようとして、邪慳に引き戻された。鎖がチャリンと鳴る。旧主人を見てその方に寄ろうと勇むのを、新らしい持主から抑えられている大犬を連想させる。

「御免なさい、遅れて」従者に目配せして鎖の端をクララに差し出させ、自分も錠を渡しながら、ポーリーンは平然として云った。

「緩解してやったらひどく暴れてね。仕方ないから鎖掛けて来たの。檻に入れてから連絡しようかとも思ったんだけど、緩解して返すって約束だったから一応貴女の手には、と思つてね。すぐ又お預りしても良いの。じゃ、返すわよ」

「確かに……有難う」

鎖を放し垂して、手錠に鍵を差込んだが、クララ、それはお止めなさい」傍からウィリアムが慌てて口を挿んだ。「危いですよ。そんな乱暴なヤプーを……」

「乱暴なんかしやしないんだ」今まで彼女と同室していたらしいばかりか、クララと名で呼び掛ける親しさをこの美青年が発揮するのに、ギョッと嫉妬を感じながら、必死のいじらしい努力でそれを顔色に出さぬ様にして、麟一郎は喋った。二人の間の言葉であった独乙語で。「着物を呉れといったら皆でひどい目に合せるから、抵抗しただけさ。ひどい奴等ばかり……さ、早く」

殆んど哀願する目附で恋人の顔を見る。

クララは、すぐにも鎖を解いてやりたい気持だったが、ここで解いてはウィリアムと喧嘩になる、と思い直した。……では、ウィリアムに部屋から出て貰うか？　こうなつてからではおかしい。それかといって、鎖のままでは、麟一郎に色々説得しようとするのが効果が薄からう。それに、イース人の知らぬ独乙語で彼と話すところを余り聞かれたくない……

「失礼して、隣室で彼と話し合おうわ。お待ち下さるなりお引取戴くなり、どちらなと……」云い捨てて、つと麟一郎の方を顧み、わざと英語のまま命令した。「こつちへいらっしやい、麟」(Come along. Rin. or is it?) おつておつて、リン」と訳した方が、この時クララの意図した語感にヨリ近いかも知れない。

自動椅子を使うのも忘れて隣室に消えたクララの背後に、後手錠から曳鎖をぶらさげ、足錠に歩き悩みつつ、麟一郎が続いた。

## 二 ウィリアムの心配

「大丈夫かな」

従者に用意させたパイプを啣えた美青年は、手真似で彼等を追い出しながら、呟いた。「うん、奴は元来よく馴れてたから、彼女に對しては乱暴することは決してないと思うわ」

「ポーリー、僕の心配してるのは違ふんだよ。……僕知ってるんだ、真相を。あのヤプーは、馴れてた所か、彼女の婚約者なんだね」

「まあ、彼女が打ち明けた？」

「僕の方が嗅ぎつけたんだ、彼女が旧世界の人に違いないってね」

「……そーお、いずれは分る、とは思ってたけど……他の人には秘密よ。ビル」

「それは大丈夫だが……心配だな」

「何が……」

「寝室に入つて……」

と云い淀む。それと悟るや否やポーリーンは高笑いして「馬鹿な。いくら何でも。……彼女に對して失礼だわ」

「でも、初め手錠を外そうとしてただろ？」

「考えても御覧なさい。そんな気があれば人の前で寝室に入れて？　そりや円盤の中では本気に婚約者扱いしてる様だったわ。でも、今はもう違ふ筈よ。だからこそ平気で寝室に連れ込めたのよ。古代語で話すのを聞かれたくなかつたからじやないかな」

「そう云われれば、そうかな」

「第一、奴はもう強化皮膚になつてゐるから、ベッドには入れっこないわ」

「そうだね。どうやら、安心した……」

「ひどく気にするのね」

「だって……」

「ビル、貴方、彼女が好きなのね」

「好きだ。一目見た時から」美青年は急に雄弁になつて、「僕はこ



んなおてんばでしょう？ あれじゃ結婚しても良い夫君ハズバンドになれまい、なんて陰口きかれたのも知ってますよ。結婚はあきらめてたし又、これなら、と思う女ひとにも出逢わなかった。それがあのコトヴィチ嬢は……」

「フォン・コトヴィッツ嬢よ」

「フォン・コトヴィッツ嬢は違うんだ。前史時代の女は皆あんなにしとやかなのかな。とても内気な所があつて……」

「そう、妾達より遠慮深いわね。男見たい」

「そうなんだ。先刻も僕に逢つてからあのヤプーに対する気持が變つたて云つたけど、きつと遠まわしに僕が嫌いじゃないってことを表現したんだと思う。普通の女性のズバリとした求婚とは違ふよ」

「おてんばの貴方には……」

「……似合いの妻だろうと思うのさ」

「成程、貴方が彼女に惹かれた気持も分るけど」ポーリーンは考え深そうに云つた。「クララは何時までそんなままかしら？ 本当は女の方が強いんだと分つた時にも變らないかしら？ 彼女はまだ何にも知らないんだから……」

「變らないと思う」ウィリアムは目を輝かせた。「前史時代人だもの」

「でも、ヤプーがどんなものか、一寸知つただけでも、もう彼女のあの旧ヤプーに対する気持は變つたのよ。男がどんなものか、それを知つた時に、ビル、貴方に対する気持も變らないとは云えないわ。とにかく彼女はまた妾達の世界のことは何にも知らないんだから……」

「うーん」

余り気持の良くないことをズケズケ云われてウィリアムは黙つて考え込んでしまった。ポーリーンは立ち上りながら、

「ま、貴方はここで待つてた方が良さそうね。じき出てくるだろうから、あのヤプーをどうするか、相談に乗つてあげると良いわ……妾、明日『タクラマハン』（高天原）に前地球都督を訪問するんで、打合せが残つてゐるから、そつちを一寸済ませて来る。そしてヤプーを受けとるわ」

「前都督エキスカパナつて、あの探検家のアンナ・テラス（天照）（地球のアンナ）のこと？」

「そう、彼女にヤプムの鑑別法を教えて貰うことになつてゐるのよ」  
「なんだ、ポーリー、今度の休暇旅行は、ヤプム買が狙いだつたのか？」

「そうなのよ。何も人に宣伝することないから、別荘新築の検分といふことにしてあるけどね。実は、それなのよ。ソフィアの時が一番高価い地球物を買つただけで、余り良い品じゃなくてね、妊娠七ななつき月に病氣されて……」

「そうだったね」

「だから、今度は直接富士山フジヤマ・アイセンディング降臨して選ろうと思うの。アンナが案内して呉れるのよ」

「僕も逢つて見たいなア、あの女性には。一昨年出した『妾達姉妹は神話となつた』という本、面白かつたね。彼女の妹は……」

「スザン（素盞鳴）のこと知りたきや、明日行つて、アンナからお聞きなさい。じゃ……」

心配を紛らそうとしてか、ウィリアムはもっとその話をしたそうだったが、気の迫いてるポーリーンは忽々にして行つてしまった。ウィリアムは、所在なさそうに、肉痰壺の頭をパイプでポカリと叩いたり、肉足台の顔を蹴りつけたりしていたが、寢室の扉が仲々開かぬのに焦慮して、不安に責まれて来た。

——一体何をいつまで話してゐるんだ。面白くもない……

部屋の外に待つ従者M9号とF1号を呼び入れると、一言命令した。  
「ソーマ」

### 三 郭公手術法

前節の二人の対話は、解説なしには理解し難いだろうと思われる。然し広大な飛行島『高天原』やその主なるアンナ・テラスについては、明日クララがポーリオンと行を共にする時まで好奇心を抑えておいて戴くよう読者にお願ひし、ここではヤブムの説明をするに止めよう。だが、その前に郭公手術法について一言するのが便宜である。

地球紀元で換算すると二十五世紀中葉のことだが、ある畜人飼育所で、胎盤移植に成功した。妊娠初期の胎児を雌ヤブの子宮から別の雌ヤブの子宮に移して発育出産させたのである。後者は単に母胎的環境条件として影響するだけで、生れて来る仔は全く前者の遺伝因子を備えているのは当然のことであった。これが郭公手術法(cuckoo operation)の名を得た所以である。

これは間もなく人間の女性に応用されるに至った。受胎に氣附いたら胎児を胎盤諸共に子宮から取り外して適当な雌ヤブの子宮に植えれば、以後出産までの母胎の苦勞を全然味わずに自分の子が得られるのである。有史以来最大の女性の福音と喜ばれたのも無理はない。そして事実二十世紀初頭に起った女權革命への物質的基礎を形造ったのは、この手術法のおかげで、女性が妊娠出産という生理的宿命を払い除けてしまったことだったのである。(これについては、後に更に述べるつもりである。)

然し、発明当初から比較すると、この手術法自体にも、大きな進歩の跡が見られるのも、もとより当然のことであろう。

第一に胎児を取り出す方法である。搔爬は危険で出来ないから、初期には帝王切開した上で取り出した。切開手術の一時の間の方が妊娠十ヶ月間の勞苦に優るとされたのである。然しいくら外科技法が進んで無痛手術と云われても帝王切開は大手術である。なるべくなら母体を傷けたくない。恰も前世紀から發達して来ていた(第十章三参照)シリウス圈征服は千六百年前即ち二十四世紀にあたる。ヤブー縮小の技術が、黄体ホルモンの検出法の進歩によって受胎直後に胎盤の形成を確知しうるようになったことと相俟って、直接母体子宮内から胎児を取り外して来ることを指向する様になったのだ。現在では、この手術は妊娠一ヶ月以内に行うべきこととされ、「肉鉗子」(fleshy pincers)として予め子宮内作業を修得させた極小ヤブー(第十章三末尾註)を女主人のwombにまで潜ってゆかせて、まだ小さな胎児を胎盤共取って来させるのが常だ。身長六厘の小人の繊細な手指には金屬製鉗子では不可避な危険が皆無である。第二には胎児の發育容器となる雌ヤブの側の問題である。遺伝因子には影響せぬにせよ、母胎の環境条件が胎児にとって無視できぬ重要性あるものなることは云うまでもない。當時はまだ廢物再生連鎖機構の出来る以前で、ヤブーの榮養が今日のように一定してはいなかったが、ポンプ虫の吸い上げる榮養液が、榮養価こそ満点であれ、凡そ正常の人士の口にするを避けるようなものであることは、その頃も今と變りはなかった。そこで、そういう母胎から白人の胎児が榮養を攝取するのは果して如何であろうか? ということが問題にされて来たのだ。——白人女性の身代りになる雌ヤブーにはポンプ虫を寄生させず、人間並みの食生活を許し、殊に愈々「神の胤」を宿して後は、白人と殆ど同じ高さにまで食生活を向上させてやる——一つにはそれが精神を明るくして胎教的にも好影響があるからだ——という形でこの問題への解答が与えられた。



だが、まだ難点は残った、苟くも人間の赤ん坊が畜生たるヤプーの股から生れるなんて恥かしいではないか、という潔癖な議論である。更には、一度ヤプーの仔を宿した子宮に入って育つのではヤプーと兄弟になる見たいで嫌だ、という感情論もあった。——経産の雌ヤプーを避けて、初産のつまり処女の雌に「神の胤」を受胎させ、月満ち分娩が始まる、その第一期即ち陣痛を感じたらすぐに帝王切開して、胎児が腔を通過しない内に分娩させる（つまり初期の手術法とは帝王切開される側が逆になったのである。）という方法がとられたのは、こういう潔癖な需要者の声に応える為であった。

イース文明の発展に伴い、ヤプーの雄と雌とは職能を分化し、白人の使役に応ずる生きた道具として<sup>レイン・デール</sup>専ら雄が用いられ、雌はその道具を生産する機械として存在価値を認められる様になって来た。この雌共の外に、数で云えば極めて少ないが、ヤプーを生産する代りに「神の御子」即ち白人の子の成育容器たるを任務とし、その為の教育を受ける専門的存在が現われるに至ったのは、郭公手術法の進歩に照応するものだったと云うことができよう。これがヤプムである。節を改めて詳述しよう。

#### 四子宮畜

郭公手術法は、初めは貴族夫人——当時は女権革命以前である。むしろこの手術法が平民に普及して後に、その故に革命となったのである。——の専有物だった。彼女等には必要に応じて地球のヤプン諸島に出かけて行った。読者も既に御承知のとおり、土着ヤプーは人間的衣食住生活を享有しているから、その雌の「子宮」(womb)を利用するのなら、他の雌ヤプーに避け難い不潔感はない。昇天(土着ヤプーがイース世界に入ること)後もポンプ虫を吞まさずに置けば良いのである。

勿論処女でなければならぬ。骨盤は広くて胎児を充分發育させる様でありたい。然し余り産が軽くて帝王切開手術の前に胎児が腔を通過しては困るから、腰部以外は華奢な難産型の体格が好ましい。容貌、知能、血統も優秀なのに越したことはない。——昇天したい雌は無数にあるので、貴婦人達はその中から右の諸条件に合った好みの一匹を選び出せば良かったのだ。

こうして選り出した雌を彼女等はヤプム (Yapomb) と称んだ。子宮畜 (Yapoo + womb) の意である。

然し平民女性間にもこの風が瀰漫して来ると、ヤプン諸島の土着ヤプー丈では需要を満し切れなかった。貴族の婦人達は特権を維持する為に、平民用のヤプム専門の大飼育場を起した。これがシリウス圈アマゾン星にある「女護島」である。ここにはヤプン諸島から移住させられた標準型のヤプムが処女生殖によって繁殖させられている。ヤプムは食生活は特別でも、衣生活は一般ヤプーと同じで皮膚強化処置を受けているのだから、島の全住民が全裸である。ここで育って十八才になった処女がイース中に輸出されて、平民女性達の身代り子宮となるのである。

貴婦人達はこれを「アマゾン物」として軽蔑する。彼女達は「地球物」を使用する特権があるのだ。平民共の需要を排除すれば、必要数も少いから、厳選が可能になる。その為の大規模な組織がいわゆる処女検査制度であって、しかもこれが畜人省土着畜人課の事業としてでなく、邪蛮国 (※) 政府の方からの自発的措置として行われているのだから面白い。

(※註。テラノヴァ軍による征服後、保護国として存立を許された時 (第二章二)、土着ヤプー達は国号を邪蛮と改めた。発音の点ではテラノヴァ人即ち英語国民に卑下し、その発音に媚びたことが明らかだが、漢字面には彼等の深刻な自己嫌悪が露われて

いる。

邪蜜国の全女性は、満十四才になると、国立検査場にいつて、容貌、体格、健康、知能、性格等あらゆる面からの検査を受け登録される。丁度昔の徴兵検査の様な国民的義務なのだ、合格者が何千人に一人の少数であること、受検者が合格を熱望していることが兵役とは異なる点だ。検査成績に門地その他の内申を綜合した上、優秀者だけが選抜されてヤブム要員となる。国民は彼等を「お袋様」(日本語のおふくろとは子袋即ち子宮を意味する。)とか「聖母」(神の胤を処女受胎するからである。)とか称んで崇め尊ぶ。

満十五才を過ぎた次の満月の夜富士山登攀が行われる。山麓で再検査に合格すると、裸になり皮膚強化処置を施された上、山頂目指して登る。黒髪をなびかせる烈風が素裸の肌にも何の寒さも与えぬのを悟って彼女等は愈々神に近ずいたかと喜ぶのである。

山頂にある修道院(nunnery)——イース貴婦人にとっては飼育所(yapoo nery)だが——で、邪蜜全国から選り抜かれた美貌の乙女達は、満十八才になるまで修行する。高級な神々(貴族達)の「お袋」となる身の幸福を思い、責任を感じている彼女達は、妊娠出産授乳時の衛生法等の学科を授けられる一方、健康に留意してスポーツに励み、胎児発育に最適の母体たらんと努める。こうして三年の期間が過ぎると、心身共に準備の整った子宮畜となつて昇天し、市場に出されるわけだ。

この様に、規模はアマゾン星の女護島の何十分の一だが、質に於て優る貴婦人用ヤブム専門の飼育所が出来ている為に、貴婦人達はわざわざ一回毎に地球まで出掛けてゆかなくとも、優秀な「地球物」が入手できることになっているのであるが、贅沢にはきりが無い。長女ソフィアの妊娠の時使ったヤブムに失敗したポーリーンは、市場で見る品では満足できず、今度は直接、この飼育所まで行って気に入ったのを捜そうと云うのである。尤もこういう富士山

降臨は、彼女が初めてではない、地球別荘に来る有閑女性には屢々試みられていることではあるが……さて、固苦しい話はこれ位にして、我々はクララの部屋に戻つてゆこう。

## 五 破 綻

焦々しながらソーマの杯をあおっていたウィリアムは、ふと隣室から器楽の旋律が流れて来るのに気附いた。子守歌のような調べ。

「やつ、催眠楽だ！ さては寝台で……」

美青年は顔色を変えてソファから身を起した。案の定猛烈な眠気が襲つて来る。両黒奴は床に蹲み込んで、手で顔を擦りつつ抵抗すると見えたが、やがてどうと俯伏し、額の金輪が床に触れると共に軀をかき出した。

クララがヤブーを抱いているのかという激しい嫉妬と、一つにはソーマによる神経興奮から、ウィリアムは黒奴よりも持ち耐えて、隣室への扉の前まで行ったが、扉越しの楽の音は一段と強く、遂に彼は扉の把手に手をかけたまま、ばたきと腰を落し、扉にだらしなく凭れて眠り始めた。

肉痰壺その他の生体家具達だけは、何の影響も受けず、キョトンと立っている。

やがて楽音は消え、微かな軀の外は静寂が支配した。

……………

大分経ってから、ポーリーンが外からの扉を開けた。虫が知らせたか、アンナとの打合せが終わると早々に戻つて来たのである。奥への扉の前に倒れているウィリアムの姿に、ハッと胸をつかれて走り寄る、その足許に二人の黒奴が倒れていて危く躓かせた。

三人共唯眠っている丈と分つて一寸安心はしたが、奥の部屋が気



に懸る。

奥の扉は、クララなら「開けよ」の命令で開けるが、他の人にはそれはできない。合鍵を取り寄せて開いた。

パツと目に写ったのは、床に倒れているクララとヤプーの姿である。美女と野獣、そんな表現がピッタリとする様な印象だ。クララの仰向けに横わった上半身にのしかかる様にして、手錠だけは外されて両手がクララの咽喉にかかり、その両手首をクララの両手が握っている。衣裳の乱れ方にも激しい揉合のあったことが分る。

——ヤプーがクララを扼殺しようとしたのだ。……だが、一体何故かしら？ 彼女に同衾を迫って拒否されたからか……？

ボン、ボンと二蹴りして、クララの上に俯伏せに重なっていたヤプーを床の上に仰向けに蹴落した。ヤプーも、クララも、昏睡している。

——誰かが麻醉短銃を使つてつたと思えないけど、一体誰か？ 又何故そんなことをしたのか？

部屋中見廻しても手掛りらしいものもない。そう云えば、小テールの横に衣裳簞笥から出したらしいスーツ一着分が放り出されてあるのが、不審だが……

検事長の職掌柄、犯罪捜査には馴れたポーリーンだが、この不思議な突発事態には、とんと見当がつかないのである。

——只一つ、確かなのは、ヤプーがクララに手向いしたこと、云いかえれば、円盤艇の中ではあんなに睦じかった二人の仲が、恐らく決定的に破綻したということだわ……

従者A3号は、甲斐々々しくクララを寝台に運び、昏々として正体のない肢体を上手に扱いながら服を脱がせる。パジャマを出して来て、下着も脱がせようとした所で、ポーリーンは押し止めた。

「寝巻は妾が着せてあげるから、お前はドレイパア郎を介抱して、彼の私室へ運んでおあげ、従者達も……」

大きな人形に着せ更えでもさせる様に、ポーリーンは眠り続ける

クララにパジャマを着せてやりながら、心中そつと話し掛けた。

——クララ嬢。さぞ恐かったでしょう、ヤプーに首を締められた時は。可哀想に、あんなに愛していたのにね……でも却って良かったのよ。所詮畜生相手の恋愛沙汰、早く清算した方が良いの。貴方の病的愛情（第六章一）は根が深いから、下手すると憐憫の気持が残るんじゃないか、と心配してたのよ……こんな目に合えば、貴女の迷も覚めて、ヤプーの扱い方が分ったでしょうし、このヤプーにしたって、これから先、甘やかされずにチヤンとした調教を受けられれば、その方が結局は幸福なんだから……

丁度、クララの靴下を脱がせていた彼女の手がハタと止った。五本趾……（第七章一）

——そうだった、この令嬢は五趾足なんだ、前史時代人だから……前史時代には人類は五本の足趾を持っていた。それが、宇宙文明の発達と共に小趾が段々と退化の一途を辿り、今から千年程前には完全に四本趾の生物に進化したのである。

——四趾足にならなければイース人で通用しないわ、アレマン医師を呼ぼう。

そう決心した時、床上のヤプーが急に身動きして、唸声をあげた。もし目覚めたら、と不安になり、従者を呼んで、

「このヤプーを生畜舎に連れて行って、予備檻（spare pen）にお入れ」

だが、途中でこいつが暴れ出したら事だ。やはり手錠を施さねばならぬ。もう一度部屋中を捜した時、彼女は枕許の台に立派な置物

——旧式宇宙船模型——があり、その横に外した手錠を置いてあるのを見出した。黙って手錠を黒奴に渡し、ヤプーを担わせて出て行かせた後、彼女は船の模型の方に近寄った。何をしようというのか？ とあれ、再会も束の間、鱗一郎とクララとは、こうして再び引き離された。恋人同志としての二人の間柄は永久に破綻してしまった。この次に両者が顔を合せる時は、一人のイース婦人と一匹の生ヤプーとしてであろう。

（以下次号）

## ＜寸劇ストーリー＞

## 南支那海の鬼



—— 本 田 由 郎 ——

(一) 町には暗雲が低く垂れ、空には雷鳴が鳴り渡り、稲妻は暗夜に刃物の如く鋭く閃いた。この嵐に、町に住む人々は戦々競々として、

町の全ては沈黙の世界に没し、暗黒の中にあつた。だが、ここに一軒だけ例外があつた。この町の中心部、即ち上海の西北部に位する日本租界の一軒がそれである。

階上の窓ガラスが、室内の光を受けて輝いている。室内には今三つの人影が見える。その中の一人は男で、中国人の様な身成りをしているが、恐らくは日本人ではあるまいか。その男と向き会って、すらりとした色の白い外人風の女は、まぶしく光る室内灯の下を腹立ちげに、足音も荒々しく歩き廻っている。この二人に挟まれて一人の女が、ぐったりとした姿で床に俯伏せになり、その背は波を打っている。そばには血のにじんだ革の鞭が投げ出されている。身に纏った服は破れ果て、殆んど裸に近かった。外の嵐は益々激しくなり、吹き荒ぶ強風のため木立がビュウビュウと音を立てゝいた。突然、「キー」と自動車の止る音、続いてドアを開けて歩いて来る靴音が、三人のいる部屋の前でぴたりと止った。部屋の中の男は急いでドアを開けた。眼差の鋭い如何にも残虐そうな顔をした男が立っていた。

「親分、いらっしやい。」

ドアを開けた男は、うやうやしく礼をした。親分と云われた男は軽うなずくと、部屋の中に入るなり重々しい声で云い出した。

「お前達二人に預けた女はどうした、白状したか。」

「親分、それが姐さんと二人で泥を吐かせ様と責めてみたのですが、この女、強情で何一つ白状しないのですよ。」



「馬鹿野郎、松公、手前も俺の手下の中じやピストルを持たしたら右に出る者もないと言われ、その名人芸が通り名となり、ハジキの松などと二つ名の異名をとる位の良い顔なのに、好い女には鼻の下を伸ばしやがって、責め手を弛めやがったんだらう。」

松公こと、ハジキの松は

「親分、御冗談でしょう。思い切り責めて責めて責めぬきましたぞ。」

松は足元の血のにじんだ革の鞭を取り上げ「親分、この血に染った鞭を見て下さい。この女の血ですぞ。ほら親分、女の着物がぼろぼろになるまで責めたんですよ。」

「何をいつてるんだ、いくら責めても秘密の一つも聞き出せないなんて、責めた口に入るかい。」

「ヘレン、お前も、俺の情婦なら情婦らしくしろ。女の責め手には女に限るとい話じやないか。」

「すみません。」

情婦のヘレンは素直に頭を下げた。

「親分、みんなこの松が悪かったんです。もう一度責めて必ず白状しますから、姐さんは叱らないで下さい。」

「手前達に任していたんじや、何時になっても埒があかねい。俺自身で責めてみる。」

「何も親分の手を借りなくても、わっちらの手で十分ですよ。」

「ちえ、云う事だけは一人前じゃねえかい。そんな事はどうでもいゝ、始めるんだ、女の顔を上げさせろ。」

松は「へい」と答えて、丈なす女の黒髪を手に巻きつけて、ぐつと引上げた。その痛みに堪えかねて、俯伏せになっていた顔を起した。明い光りに映し出された女の顔は余りにもあどけなく、少女らしい顔立ちだった。高貴の血筋が流れているのか、気高いまでに美しかった。

「秋蓮」

美少女は自分の名を呼んで、はっとした。

「おゝ、貴方は？」

少女は驚きの声を上げた。

「秋蓮、お前は、町にいた時の俺を知っているだろう。」

「えゝ、知っています。」

少女は素直にうなずいた。

「俺の本性は、インド洋南支那海を荒し廻って、人呼んで南支那海の鬼と言われている海賊の頭領だ。」

「その南支那海の鬼とやら言われる貴方が、私をなんのために、こんな目に会わすのです。」

松に革の鞭で責められ、服が破れて桃色に色づいた乳首がのぞいていたが、恥しさも忘れていざり寄った。

「なぜ、私が貴方がたに責められなければなら

らないのですか。」

「松にも聞いたと思うが、手取り早くいえば宝の有り場所を素直に白状すればよいのだ。」  
「私は、そんな宝の有り場所なんか知りません。」

秋蓮は顔をガクンと下げてしまった。

「おい秋蓮、よく聞け。或る地方で王家と王家が争った。一方が敗れて再起の時を思つて莫大な金銀、財宝を或る場所に隠した。その宝は、今日でも秘密の場所にねむっているのだ。その秘密の場所を知る者は、この王家の後裔の一人であるお前だ。」

「私は、そんな話は聞いた事ありません。」

「素直に白状しないと、残る手段は只一つ、体で答えて貰おう。」

秋蓮こそ、実は数百年前に戦に敗れた或る

王家の後裔である。

「松ッ、秋蓮を裸にしろ。」

松の手は秋蓮の服に延びて、忽ち身ぐるみ剥してしまふ。

「どうだ秋蓮、痛い目に会わない中に考え直したらどうだ？」

「私は知らない事は云えません。」  
強く秋蓮は云い放った。

「松、お前が云った通り、強情な娘だ。」

我が意を得たりと松は、  
「親分、そうなんです。私達もすっかり手を焼きました。通り一遍の責めじや音を上げ

「ませんぜ、この女は。」

「そうさな、じや地下室で責めて見るか、あそこなら東洋、西洋、両方の責め道具、拷問道具が揃っているからナ、どんな強情娘でも女一人位はすぐ泥を吐かせられるさ。」

「そうですよ、なんでもかんでも、どんどん責めてみましょう。」

「そうときまったら、早く地下室に引っぱってゆけ。」

松は裸のままの秋蓮の腕を掴んで地下室へと連れていった。じめじめとした地下室にはあらゆる責め道具が、哀れな犠牲者の血を吸って、所狭ましと並べられていた。中でも大きな鉄製の人形が一際、不気味に目立っている。秋蓮はこの責め道具を眼の当りにみて、驚きに眼を見張らせるに充分だった。いくら秋蓮が強情を張り通して白状せずとも、情を知らない無情な彼等の手に有る以上、か弱い少女の身でいつまで拷問に堪えられるか、いつまでこの責めに白状せずにいられようか。松は荒々しく秋蓮を部屋の中へ突き入れた。秋蓮は自分の裸を恥じて室の床に身を伏せていた。

「さあ、こんなに沢山の責め道具が揃っているのだから、好みの責め道具があれば云って貰いたいな。」

冷たい眼で、床にかがんでいる秋蓮をみながら、

「返事のない所をみると、お好みの道具がないようだね。ではこちらで道具を揃えてやろう。しかしお前は、そこいらの娘っ子と異なり王様の血が流れているのだ。どんなに苦しくとも王女である事を忘れるなよ。」

秋蓮は恐しさに身を戦わしていた。

「親分、早速始めるとしましょう。ところでどの道具で手始めに責めますか。」

松は王女である美少女秋蓮を自分の手で責めることが出来るのを喜んでいる様だった。

「そうさな、始めは手近な道具で責めてみるか。それ、それで責めてみる。松、お前の後にある道具で。」

「へえ、これですか。」

松は手荒く秋蓮をその道具の傍に引ずっていった。この責め道具に一本の太い柱を背にして鎖で胴を縛られた。それが済むと松は一歩後へ下り道化した調子で、

「では、この道具を簡単に御説明しましょう。」

先ず初めに責めようとする動物、いや人間、それも今日の様な美しい王女の秋蓮様のような高貴な人が一番良いでしょう。先ず柱に縛りつけます。これではまだなんの効果もありません。廻りから垂れている鎖の両端に鉄輪がついていて、この鉄輪はねじ仕掛で締る様になっています。この鉄輪をはめると、鉄輪が肌に喰い込むばかりでなく内側に針状の物がついていて、肌に突きささり苦しめるのです。この鉄輪は手足だけでなく、腹、胸と自

由に大きさが変えられます。それだけではありません。手足の四ヶ所の鎖には各々一個のモーターがつけられ、鎖がちむ様になっています。ですから手足に鎖をかけモーターのスイッチを入れますと、忽ち鎖はちちみ始め最後は……」

「頓馬野郎、調子づきやがって、そんなくだらないことより、早く秋蓮を痛めつけて、泥を吐かせねえかい。」

松は自分の説明を途中で腰を折られたのが不服そうだが、親分の命令ではと柱に近ずき秋蓮の左手に鉄の輪をかけた。この輪をかけただけで相当の苦しみに加わっているのが、顔の表情でわかった。

「さあ、これからだぞ。」

松は鉄輪のネジをぎりぎり締め始めた。「うー、うーん」秋蓮の口から苦痛に堪える声が洩れてくる。

「どうだ、これでもか。」

ぐんぐん鉄の輪は手首に喰い込んで、針の先は皮を破り肉にまで喰い込んでくる。

「ううっ、ううう。」秋蓮は呻きながら泳いでいた。

「松、待て。」

南支那海の鬼と異名をもった、親分が進み出た。

「おい秋蓮、いい加減の所で宝の有り場所を白状したらどうだ。このまま責め続けられた



ら死ぬのが落ちだぜ。責め手の休んだ今は極楽だろうが。」

「私は、どんなに責められても知らないことを、答えることは出来ません。」

秋蓮は声もとぎれとぎれに、これだけの言葉を返すのがやっとだった。

「うん、生意気な女郎だ。松ッ、かまうことねえから責めぬくん。もっとネジを締め上げろ、皮が破れ肉に喰い込み骨が砕けるまでやめるな」

「いいんですか、そんなことをすれば責殺す様なものですよ。」

「責殺してもかまわねえ。手前は助平根性を起して責めあぐんでいるんだらう。」

「親分、なにもわっちは……」

松はあわてて否定した。

「そうじゃなかったら、情はいらねえ奴だ。どんだん責めて音を上げさせろ。」

親分は怒鳴り散らした。松とて人間であるから、責めを加減して苦痛を少しでも弱めてやろうと思ったのだが、親分にこうまで云われては、情をかけることすら出来なかった。

命令通りに鉄輪を両手両足に無情にかけていた。そしてネジを力一杯に締めつけた。秋蓮は前にも増して苦痛が激しくなり、悲愴な呻き声は部屋の中に響いた。

「親分、この位でどうでしょう。」  
松が聞いた。

「馬鹿、そんな手ぬるいことで、どうするんだ。それ、乳も鉄輪でたんと可愛ってやれ。」

松は、秋蓮の乳房の上に大きな鉄輪をはめた。これも内側に針があり、ネジで締める様になっていて。ネジが締められると秋蓮は余りの苦しさに顔をみにくくゆがめてもだえた美少女の苦しむ姿は憐れというには、余りにも無惨な姿だった。鉄輪の締るたびに血がしたたり落ちた。すでに肉を通り骨にまで達したかと思われる程締められたが、秋蓮は苦しみもだえるだけで、宝の有り場所については一言も口に出さなかった。

「しぶとい女郎だ。こうなったら最後の手段だ。モーターのスイッチを入れる。」

「えー最後ですね。秋蓮、今の中に泥を吐いてしまえ。そうでねえと両手両足がモーターの力で引張られて四つ裂きになってしまうんだぜ。俺だって、こんなことは寝覚めが悪いからな」

「松、何をぬかしやがるんだ。さっさとスイッチを入れねえか。」

「親分、今直ぐ入れます。秋蓮、これが最後だぞ、白状しな、仕方がない、スイッチを入れるぜ。」

松の手で、モーターのスイッチが入れられた。ブーンと鈍い音がして、情容赦なく機械的に正確に、両手、両足の鎖をガチャガチャと、ちじみ始めた。何分後には秋蓮の体から

手足が完全にもぎ取られることだろう。ちじむ鎖に引張られて、手足が水平まで伸ばされた。秋蓮は王女の誇りも捨てて、泣き声を上げて助けを求めた。

「助けて下さい。なんでも私の知っている事は話します。私を殺さないで下さい。お願いします。」

秋蓮は必死の声で嘆願した。

「親分、親分、どうしますか、モーターを止めますか。」

「止めることはねえよ。」  
親分は薄気味悪い残忍な笑いを浮べた。

「しかし親分、このままでは——」  
そんな問答をする間にも、モーターは正確に回転を続けて、秋蓮の体は完全に伸び切ってしまった。すでに声を上げる元気もなく、首をがっくりと折って静かになってしまっている。この時

「松ッ、スイッチを切れ。」  
と命令した。もう数分遅かったら、秋蓮の手足は完全に引きちぎられていただろう。秋蓮は責めが中止されたと知ると、気がゆるんで失神してしまった。

「松、下して休ましてやれ。」

「へえ」  
モーターは逆回転して鎖が元に戻り、鉄輪がはずされ体は下された。

(二)

「松、秋蓮を連れて来たか。」

「へえ、しかし、あんなひどい拷問をかけたばかりで又責めるんですか。」

「なに、松、お前はいつから俺に返答をしかす良い身分になったんだい。」

「じゃ、さっきの地下室へ連れていきやすんで。」

「へこりとおじぎをして出ていった。」

「南支那海の鬼とまで異名をとった俺に立てつきやがって、もう少しで手足の千切れる所まで責められ、泣きの涙で頼むので助けてみれば、知らぬ存ぜぬの一点ばり、今度こそ本当に責め殺してやるぞ。」

と独言をいって、葉巻に火をつけると静かに立上って地下室へいった。地下室には、前の拷問で全身血まみれになった秋蓮が、ボロ屑の様にうずくまっていた。

「秋蓮、知っている事は、何んでも話すといふから責めを中止して助けてみれば、知らぬ存ぜぬの一辺倒、これじゃ俺が腹を立てるのも当然だろう、今度こそ直ぐ死なしてやるぜ。前の様に長くは苦しめずに直ぐ地獄に旅立させてやるぜ。」

「親分、どの道具で。」

「鉄の処女だ。」

「え、鉄の処女……」

「そうだよ、男を知らぬ美少女の秋蓮さん。」

鉄の処女と仲良くして貰おうじゃないか。」

鉄の処女とは、鉄で作られた人形で内側に無数の針があり、生贄の血を吸う仕掛の中世紀の責道具である。歩く気力のなくなった秋蓮は、松に引きずられて鉄の処女の前に立たされた。

「秋蓮、いよいよ鉄の処女の生贄になって貰おうかい。今度は、この中に入れられたが最後、命がねえぞ。」

鉄の処女が松の手で正面から真二つに割られた。内側には百本の針が秋蓮の血を求めてあえいでいる。

「松、そのボタンを押せ。」

松がボタンを押すと底がポツカリと開いて白刃が刃を上に向けていた。

「秋蓮、針先で可愛って貰い血ダルマになったお前を、この穴へ落して刃物でずたずたにするのさ。さあ、中へ入って貰おうか。」

松の手で秋蓮の体が今まさに中へ入れられ様とした時、地下室のドアをノックする音が聞えた。

「松、いつてみる。やたらにドアを開けるなよ。今じぶん誰が来やがったのだろう。」

松はドアの取手を用心深く握って、ドアの外に声をかけた。

「私です。K二十四号です。親分に取りついで下さい。」

「親分、K二十四号の声に違いありませんが

どうします。」

「そうか、K二十四号か、早く開けてやれ、何か急用が出来たのだろう。」

松はドアを開けた。入って来たのはK二十四号だが、その後から影の様に室の中に入り込んだ男があった。その男の両手には、コルト拳銃が二挺、鈍く黒い光を放っていた。

「王女さま、私が助けに参りました。」

おゝこの声、秋蓮は夢ではないかと喜んだ。「南支那海の鬼と、その一味、手を上げる。王女様、早く私の方へ。」

秋蓮は、この男に助けられ脱出することに成功した。この男こそ、今井進と名乗る秋蓮の恋人だったのである。

### ◎北原純子書画傑作選◎

〔女学生の羞恥責め〕

大中判印画紙(タテ18寸 横13寸) 焼付 四枚一組 五百円

純情可憐な制服の女学生が正面向いて後手に縛られ脚を上げたりスカートを開いたり上げられたり大胆きわまりない責め図四態

〔ハートの的、女体洗滌室〕

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

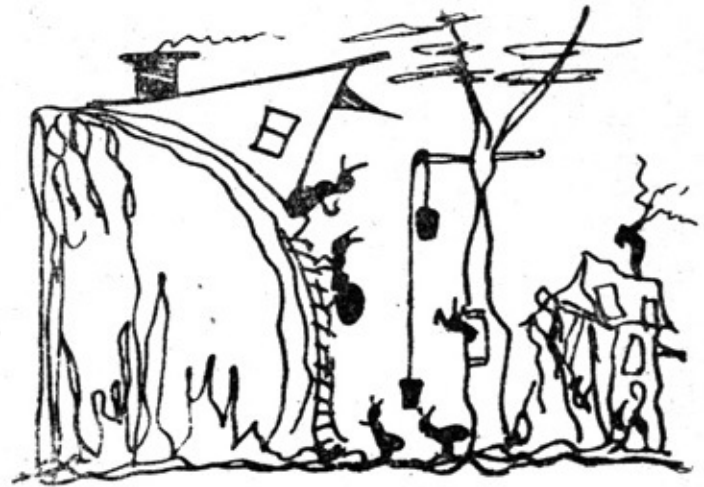
全裸の豊満な肉体を誇る女性に加えられる奇想天外な責場面、二態。

〔緊縛ヌード十六ポーズ〕

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

柱、棒、杭、石、等を用いた女体緊縛ヌードの様々。(以上、二組にて五百円)





# 空 想 の ネ タ

△「続・潰滅の前夜」休載に代えて▽

土 路 草 一

本月号を以って、愚作「続・潰滅の前夜」

を完結させる予定でありましたが、身の雑事が重り、半分程書きかけたままで、とうとう締切に間に合わず、甲斐仁参氏始め、御好評を戴いている読者の皆様に申し訳なく、又貴重な誌面を割いて下さる編集部の方々にも、心からお詫び申し上げます。

そこで、今月は、私のネタと申しますか、他より得たヒントと私自身見聞した事柄から二、三抜き書きして、休載の穴埋めにさせて頂きたいと存じます。

サディストのくせにマゾのことを書くのは筋違いかもしれませんが、サドも裏返せばマゾですから、先ず、マゾヒストの方の好適な

職業を一つ挙げてみましょう。

私の知って居ります会社に獣医薬のメーカーがあります。牛馬や犬猫の注射薬を製造しているのですが、その中でも繁殖障害の治療に使用されるホルモン剤は、需要が多いもので相当生産されています。

専門的になりますが、繁殖障害というのは牛馬、特に乳牛は乳を搾る関係上、飼主の利潤、即ち人間の経済的な要求から出来るだけ多く妊娠させて仔牛を産ませ、分娩三ヶ月を待つと直ぐ種付けと云う、彼等の生殖能力のぎりぎりの線まで交配より殆ど人工授精されますので、その方面の病氣（卵巣嚢腫、卵巣機能減退、卵巣萎縮等）が多く、その治療に

効果があるのが、所謂脳下垂体前葉性ホルモンなのです。

この脳下垂体前葉性ホルモンと云うのを詳しく説明すると永くなりしますので簡単に申しますと、プロランA(FSH)と云う性腺刺激ホルモンと、プロランB(LH)と称する黄体形成ホルモンとから成り、卵巣に作用し卵胞ホルモンの発生を促がし、排卵を促進して、発情状態を発現する役目のホルモンです。

本誌三十一年十二月号で古井直哉氏が書かれてるように、発情ホルモンの一種で、ギナンカプセル（これは内服薬、この注射薬はペペローゲン）はこの脳下垂体前葉性ホルモ

シ剤です。処でかんじんな点ですが、このホルモン剤は何から抽出されるかと申しますと妊娠した女性の尿からなのです。

LHは妊娠前期（妊娠四、五ヶ月位迄）F S Hは後期（妊娠六ヶ月より出産月迄）に余計排泄されます。（尤も前葉性ホルモンと云って居りますように、正確に云いますと妊娠尿から抽出されるのはF S HやLHの性質を持ったもので、F S HやLHそのものではありません）

さて、話は本筋へ入りますが、この会社ではLHを主成分にしています為には妊娠初期の女性尿を集めています。

通知がありますとその家庭を訪問し、妊娠三、四ヶ月の奥さんに瑤瑤びきの丸い便器とガラスの容器を渡します。産婦人科医や助産婦から薬を抽出するのだと納得させてありますし、又尿は量によって代金を支払うのですから、年配の女性や経産婦は割に平気ですが初産の若奥さん等は、こういうふうに採ってこの瓶に溜めて置いて下さいと説明すると、真赤になって、もじもじするそうです。

二十才前後や二十二、三才では無理もないと云えるでしょうが、それでも隔日に廻って歩く内にだんだんと平気になり、茶色の液体の量を云々したり、「ちよっと待って……」と便所で勢のよい音をあげてから手渡したり、仕事をしていた立つのを憶却がり「ある処知

ってるでしょう」と集尿人に便所の中へ入りこませたりするようになるそうです。

集尿人は、その瓶の液体を路傍で、別の大きな容器にあげ替えて消毒して置いて行きます。そのことを知っている子供達には「おしっこやさん」等と蔑称され、手を濡らすまいとしても、時によっては顔に迄、飛沫くことがあるそうです。「いやな商売ですよ」と集尿人はこぼしましたが、語を継いで、

「最初は尿の臭が鼻について、石鹸で手をこしごし洗ってから飯を食べましたが、この頃は慣れましたね。仕事としては暢気でいいで

すよ。出勤簿に印さえ押せば、あとは外へ飛び出しちゃうんですから、上役の眼を気にして仕事をする訳じゃないし、お天気のよい日は鼻唄まじりで走り廻りますよ。それに綺麗な奥さんにぶつかると楽しくなりますね。いいところをちらちら見れますしね、そんな奥さんの尿迄、透き通っていますよ」

私は、これも結構楽しんでるんだなと思いました。

次はサディズムに移りました。獣医師雑誌の巻末広告欄に左のような器具の価格表が載って居ました。

### 家畜解剖器

解剖剪刀（大動物用）	230円
腸切剪刀（〃）	490
鍵鈎（〃）	230
血管注入管直（〃）	90
〃曲（〃）	90
解剖鑿（〃）	280
木柄鋭鈎	150
〃鈍鈎	150
解剖板鋸	950

### 家畜（中馬）測定器械

米国製組立枰場（鉄製）	180,000円
平打縄（米国製）大	2,500
巾3寸、長20尺皮革及ベルト製平打縄、本麻縄	
大、巾2.2寸、負縄8.5尺、縄5尺	1,100
中、巾1.8寸、負縄7.5尺、縄4尺	900
小、巾1.5寸、負縄6尺、縄4尺	850
ステッキ型体尺計	3,900
金属製体尺計	4,900
キャリバス骨盤計	2,100

### 屠殺用具並肉加工器械

屠槌上	1,200円
皮剥刀大	390
〃小	290
肉切刀8寸	280
小間切刀9寸	520
検査刀	390
棒ヤスリ	390



私はこんな空想を發展させます。  
貴方の頭脳を「潰滅の前夜」のような美貌の女達を家畜として飼育している状態に置いて下さい。  
貴方が其処の管理部長と云うことにしましょう。  
此処では、新しく、若い女を委托で馴致して料金を取る商売を始めました。厳密な調査の上で会員にした顧客達は、己れの意の儘にならぬ女や眼をつけていた女を、言葉巧みに此処へ連れこんで柔順な家畜にし、弄んだ拳句、飽きれば他国へ売りとばします。  
今日は親しい知人が、美しい二十才位の獲物を捕えて来ました。

検査鉤	390
ホック	70
チヨッパー (肉挽器) #5 手動	1,200
〃 #12 单相 1/4 HP 直結	30,000
油シポリ器	7,500
ハムソーセージ用金網450匁用	250
〃 パイプ	700
背割鋸	1,100

家畜飼育管理器械

牛鼻穿孔器	630円
牛耳切記号鉗子	600
牛耳穿孔器	630
牛耳標固定鉗子	600
牛鼻挟環	390
牛鼻環	90
〃 大小	80
耳標刻印用文字 (0~8)	360
耳入墨鉗子	
2桁文字 17ケ付	3,600
3桁用文字25ケ付	4,500
4桁用文字35ケ付	4,900
緬羊耳標短冊型	4
豚 〃 丸型	4

真白な統のような肌、見事に隆起した胸の丘、むっちり凝脂に輝いている肩、ぴったり合わさっている滑らかな腿。  
又とない逸品です。貴方は靴の先で、俯向いている家畜の頸をしゃくりあげます。黒髪の下から、可憐さの残っている理智的な美貌が現われます。  
「君の蒐集品の中では上玉だな」  
貴方は興奮を押えて云います、  
「前から狙っていたんだが、今迄、隙がなくてね」  
「深窓の箱入か？」  
「それ程でもないが……先輩の妹でインター

一応、審査の終った美貌の家畜は剥き出されたクリム色の肌を慄かせながら、貴方と知人の足下に、後手で蹲って居ります。  
不意に墜された想像外の境涯に、ぶるぶると恐怖で、その清浄な裸身を粟だて怯えて居ります。

「ほう、毛色の変ったのを獲ったものだ」  
「お固くてね、俺なんか、お眼の端にも留まらなかつたらしい……」  
「他人の躰ばかりいぢくって、自分の躰をいぢくらせないなんて不合理だな」  
「これからは、こいつが俺のお眼の端に留まろうと努力するだろうよ」  
其処で貴方が気位の高いインターンの素肌に一鞭くれて追立てます。よろめきながら足を運ぶミルク色のバックスタイルは悲愁を漂わせて尚スマートです。  
「早く歩け！」  
貴方は胸の火を掻きたてられて、こずきま  
「飼育管理器械販売所」と札の下っている部屋に突き入れて  
「今度、大巾に値下げしたぜ」  
と貴方は係から受取った器械の値段表を飼主に示します。  
「飼育器具で儲け、委托調教科で儲ける。稼ぎ過ぎるぞ」  
知人は笑いながら、口をとがらせます。  
「おいおい稼ぐのはそっちじゃないか？云うなりのペットにして、さんざん自分が楽しんでおいてから遠い国へ充分の利益を見て売るのは誰だい？それに、こいつの着ていた服や時計、指輪や処分した金だけでも器械代の

お釣りが来やしないかな」

貴方は云い返えます。

そして、係に命じて首輪を嵌め、蒼白んでいる顔を定着して鼻障子を穿孔器で開けさせ鼻環を通すと耳朵に穴を作って耳標を固定します。更に、入墨鉗子で家畜番号と知人の名前を彫って所有家畜であることを明示します。

清純なインターンは、勝手に、誇っていた肉体を傷つけられ、刻印されて、絶望の悲鳴を遡らせ、麗しいシルエットで拗って悶えます。

屠殺室では、餌を与える価値のない家畜、即ち肉体的に不適な奴や精神的に不誠実と云うより家畜としての柔順さを示さぬ奴を屠殺し、皮や骨を細工し、肉を加工します。

鉤に吊されて喘いでいるふくやかな肉塊は屠槌で打たれようとしています。油シボリ器では瑞々しい大柄な娘が、精一杯の抵抗を試みた痕跡を残して、ぐったり横たわっています。切断器には、はちきれそうな、艶々しい白腿が覗いています。

そして解剖室では……

私の空想は、次々と展開してゆきます。

前記値段表で、読者の皆様も自由に想像を展げて見て下さい。

もう一つ、空想記を書いてみましょう。

酪農雑誌に乳牛共進会の模様が記事になって居りました。共進会とは乳牛の品質改良に

資する為に、地区又は全国的に優秀な乳牛を出品陳列し、その品質を競う会なのですが、検査状況の一部は前月号の「続潰滅の前夜」

に応用しましたので、別な夢を描いてみました。その雑誌には、こんなふうな展示乳牛の目録が印刷されてあります。

ホルスタイン種若牝牛（生後〇ヶ月——〇ヶ月）			
出陳番号	姓 名 号	生年月日	毛色
41	牝	28・11・8	黒白
42	牝	28・10・13	白黒
血 統			
産地 摘要			
出陳 出陳人			
地区 住所氏名			
父キングオブスローヤル 母ホームステッドベツシー	北見市	北見	訓子府市 滝田 清
父ランドジエラルデンローヤルキング 母ホームステッドベツシー	網走市	北見	北見市 織田正義

さて、今度は過去へ遡りましょう。貴方の頭の中に全盛期のバクダッドを描いてみて下さい。

ぎらぎらと灼陽を照り返す熱砂、ラクダの列を連ねて砂丘を行く隊商の群、からからに干上った咽喉に水囊を傾ける毛むじやらの隊員の顔、そのぎらぎら光る眼に映ずるバクダッドの華麗な城門、そして、その奥に櫺比する赤や白の、鮮かな夢と壁。

もう一辛抱だ、今夜はあの屋根の下で、ジブシーの強烈な踊りと唄を聴き、赤い酒に酔い痴れ、美しい奴隷女を抱くことが出来る。と商人達は心を弾ませて、砂道を踏みしめる。やがて、ラクダの列は城門を潜り、町に入る。

長い裳裾を揺って、薄絹のベールの間から

黒い情熱的な瞳を輝かせて通るモハメッドの女、ターバンの下で、赤銅色の顔が針のような鬚で埋まっている男。

かまびすしく呼売している市場には、遙かジパングや唐から運ばれて来た絹物を商う店や色とりどりの南国の美果を並べている店、笛を鳴らして蛇を踊らせている印度人、輪を作って狂熱的に鈴や太鼓でリズムを打鳴しているジブシー達が客を捉えようと愛敬を振撒いている。折なす人並が、その店先を流れてゆく。

かつ／＼、馬蹄の響きが王宮から広場へ行進して来た。高らかにラッパが丸い建物や幕張りの住居の上に鳴り渡った。

年に一度の王様主催の奴隷市が開かれるのだ。ロシア、トルコ、インド、遠くはギリシ



や、ローマからも客が招かれ、バグダッドの  
掻き入れ時でもあるのだ。

市場に溢れていた人の群は陸続と渦を捲い  
て広場へ詰め寄せ、王様の着座の合図があつ  
た時には、既に立錐の余地もない程、華やか  
な色彩が波打っていた。

それでも、前方の棧敷には富裕な商人達が  
広々と屯して女奴隷を侍らせ酒を酌んでいた  
し、一段と高い席には招待された各国の賓客  
達があわよくば、掘出物の奴隷を買おうと勢  
っていた。

「今日は世界各国の奴隷が売買されるのだそ  
うだ」

「よし、俺は飛びきり美人のフランス女をせ  
り落してやろう」

「俺はローマの女の方が情熱的でいい」

「情熱的っていえばイスパニアの女だよ」

人々は自分の好みの女を見付けようと唾を  
呑む。

特別招客の間には出陳奴隷の明細書が配ら  
れていた。

出陳 番号	性 名	生年月日	膚色	血	統	産地	出陳地区	出陳人
1	女 マルチーナ	八八、三、四	白	父イギリス 母フランス	フランス	トルコ	イスタンブール アゴヤ・スタル	
2	女 ナルージャ	八八、九、七	白	父ロシア 母ロシア	ロシア	ロシア	キエフ フスキー	
3	女 タエ	八二、六、二〇	黄	父シパン 母シパン	シパン	唐	李勝烈	

各人はその中から眼ぼしいのをチェックし、  
て売り出されるのを今や晩しと息をのんで待  
っている。

やがて、鞭の音と共に、冷い鎖の響きがし  
て、白い奴隷が台上に引出される。

まだ二十才前の、あどけないフランス女で  
ある。乳当と腰布だけの半裸な姿で、乱れ  
た金髪の下で青い眼が運命の不安に戦ってい  
る。

「さあ、今日は粒よりなのがこれでわか  
るだろう。最初からこんな上玉を出すんだか  
ら……さあ、値をつけてくれ」

せり人は、奴隷の端麗な髪を掴んで、顔を  
見物人に見せながら、声を張り上げる。

「デナール（アラビア金貨）二枚」

早速、声が飛んでくる。

「デナール三枚」

折返し反対の方角で叫びが跳ねる。

優雅なフランス乙女は、観念してか、愁然  
と汚れない身を項垂れて立っていた。

空想は楽しい。

私の頭脳は果てしないサドの楼閣を築いて  
行きます。皆さんもいろ／＼と頭脳で組立て  
たものをプレイに利用されるでしょう。

妻や恋人や気の合ったもの同志と、ドラマ  
に演出して、お互いに演技する時、楽しみは  
倍加することでしょう。そして、着想を次々  
と更新し、作劇して、秘かな楽しみを持つ  
のが、我々マニアのささやかな特権とは云えな  
いでしょうか。

(完)

### (代理部便り)

○代理部分譲品目録の残部は極く僅かですの  
で、目録が品切となった時を以て従前の分は  
打ち切りいたします。

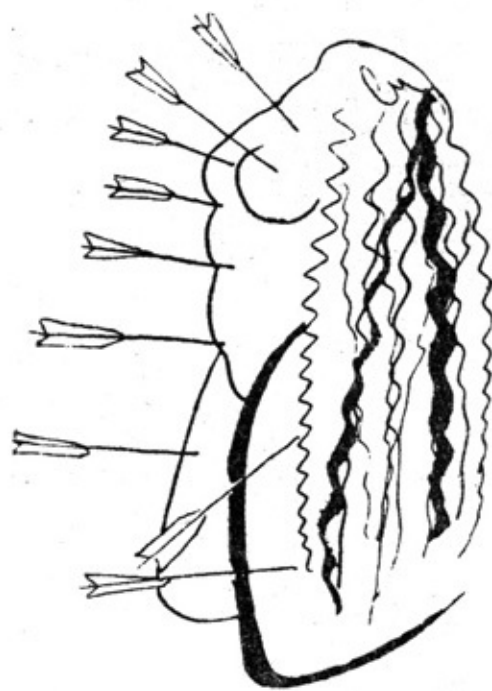
○新しい目録はまだ出来上っておりません。  
従ってお申込下さった方が若干ありますが八  
円切手はお預りしております。現在のところ  
その時期は未定ですが、出来上りましたら予  
約された方々へお送りいたします。

### ○春日ルミ嬢プロマイド (略号)

鞭をふるうルミ嬢 分譲

五枚一組 五百円 (送共)

颯爽と鞭をふるう春日ルミ嬢の勇姿、未発  
表のルミ嬢の近影を特に同好の方に限って焼  
増いたします。マゾ好みのフアンの方からの  
お申込をお待ちします。



〔雑誌通信〕

## “ワイセツか哲学か”

△パリー法廷で裁かれた『サディズム』▽

（「週刊朝日」一月七日号より）

白鳥怨之介提供

熱弁をふるった。

しかし：検事の論告は、要するにサドの著作はワイセツである、これを出版し一般に発売した被告ボーヴェールは罰せらるべきである、というのであった。世界中からやってくるお上りさん用の思い切ったストリップ・ショー、怪しげな見世物などは、見て見ぬふりをする物わがりの良いはずの、そのパリの警察が、これだけは勘弁ならぬというサド侯爵とは、どんな人物だったのだろうか。

## サド侯爵行状記

サドは一七四〇年、外交官の父と王家につながる名門の出の母の間に生まれた。七年戦争には騎兵将校として参加、二十三歳でおとなしく貴族の娘と結婚、式にはルイ十五世夫妻も臨席したほどだったが、その五カ月後に

は、“過度の放蕩”で逮捕された。風紀の乱れていた当時の世人にさえ、彼の放蕩ぶりは目にあまったらしく、国王ルイ十五世も特権を奪って投獄を命じた。

妻の母に助けられた彼は、約束の田舎に引込まずパリに帰って女優を一日二十五ルイで囲い、想像を絶する倒錯性欲にふけた。サドによると、それには六百種の方法があるそう。ところが一七六四年四月三日、もそこじきをしていたのを彼が、身の周りの世話をさせるため引取って、家に入れた若い女が広場に飛出し、大声で泣きわめいた。サドが彼女を監禁し、ハダカにしてベッドに縛りつけて、ムチでいやというほどひっぱたき、ナイフで切りつけては傷口に熱いロウを流しこんだというのだ。また、商売女にあまりのことをするので、パリの警察がサドに女を世話し

サディズム——相手をしいたげて満足を得る変態性欲、色情加害狂。虐待淫乱症（広辞苑）——という大変な言葉を生んだサド侯爵じつはサド伯ドナシアン・アルフォンス・フランソワがパリで裁判された。いや、百四十二年前に死んだサドがよみがえったわけではない。フランスで初めてといわれる、削除なしの完本サド全集を出版したジャン・ジャック・ボーヴェールという若い本屋さんが「良風美俗を乱す罪」で起訴されたのである。かつて伊藤整氏と小山書店主を被告とした例の「チャタレー裁判」の、いわばフランス版で、公判法廷は傍聴人で満員になった。作家ジャン・コクトオが被告応援の電報を打ってきた。有名文壇人が証言に立った。弁護士となったアカデミー会員、仏法曹界の大御所モーリス・ギャルソン氏が四時間にわたって



てはならぬと、ゼゲンやボン引に厳命したという話も伝わっている。

パリがうるさくなるとみると彼は郊外に移り、女だけでなく男も入れた淫楽の後宮をつくった。ところが、その一人をサドが毒殺したというウワサが流れた。警察が逮捕に向った時はモヌケの殻だった。イタリアに逃げたのである、妻の妹を連れて……。一七七七年しやあしやあとパリに帰ってきたところを捕まて今度は警戒嚴重なバスチーユ監獄に入れられた。

下獄十三年、いっさいの「楽しみ」を奪われたサドは過去の経験をくわしく書きとめ、放蕩から一つの哲学を引き出した。いわく人間の性は悪である。悪は自然である。自然は善悪を越えたものである。故に何人も自然すなわち悪の表現を非難する権利はない。そこで彼は世の偽善を痛烈にののしって、貴族の「慈善」は被圧階級の怒りを鎮めるためのマヤカシであり、法の「正義」は、既成権威の維持をはかるために操作されているゴマカシだと叫んだ。

だから、フランス大革命後釈放されたサドは一躍英雄となつて、革命政府の判事に任命された。だが眼の前に引出され、断頭台の恐怖におののく貴族たちをみて、この革命的理論家はなんと言ったか。「たれにも他人を裁く権利はない」そういつて、ほとんどすべて

の被告——中には彼を監獄に放りこんだ責任者もいたのだが——を許してしまった。

彼はたちまち手ぬるいというので革命軍に捕まり、その処刑予定の前日に、もしロベスピールが失脚していなかったら、ギロチンで首をはねられていたことだろう。一八〇一年ナポレオンの怒りを買ってシャラントンの精神病院に入れられ、一八一四年死んだ。

### コクトオも弁護

サドは人間の性は悪であり、どのような行爲も、自然であるが故に許されるべきであると述べ、その例として膨大な旅行記、人類学的文献を引用、どんな倒錯行為でも、どこかの社会で認められていないものはないと結んでいるが、これこそギャルソン氏の弁護論の出発点でもあった。

「良風美俗とはなにか」とギャルソン氏は切りこむ。

「道徳とはある時代のある国の大多数の人間が正しいとみるところのものであり、これを律する法律は、季節ごとにといいないまでも時代とともに変わるものである。初めは死刑で罰せられた重婚はやがて懲役になり、今では罰金で済むではないか、墮胎も今では大した罪ではない。フランスで禁ぜられている行爲も、他の国では法律で認められた慣行となっている場合があるではないか」(そうだと

## 絵画のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く読者の皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の添布をお願いします。(困難なときは略画はなくても差支えありません。)

### 編集部

傍聴人は思いました。ある回教国の大統領が第二夫人を公然とめとったのは、つい先年のことではなかったか)

「であるから、事の是非を判断するには、現世代を代表する人々の意見に待たねばならない。それにもかかわらず、本件の起訴すべきことを答申した諮問委員会の構成はどうか、みなオジイさんばかりである。しかも文部省顧問、法科教授、矯風会代表といった方ばかり。答申は、たった一人の作家協会代表の欠席の日に、決をとったではないか」よって公訴を棄却し、陪審法により審理すべきだといふのがギャルソン氏の意見であった。

世界的に有名なヌヴェルNRF誌のボーラソン氏はこう開陳した。「サドはボードレール

やニーチェの思想の母であり、フロイドがこれを展開してあの理論を完成した。サドを禁止することは、その後継者を全部否定することとあります」

「しかし、サドは危険です」と、やや不安そうに裁判長――

「そうです。危険です。サドを読んだら世をはかなくて尼僧院入りした娘さんを私は知っています。……時に、先日聖書を読み返しましたが、なかなか恐るべきではありません」

とポーラン氏。フザケているのだろうか。いや同氏の顔はあくまで厳肅である。とまどった判長は、「オー」と両手をひろ

## 女体切腹構成案図譜

中康弘通氏案

北原純子女史画

キヤビネ版印画紙密着焼付

八枚一組 千円（送共）

時代物

(一) 女武者の最期

(二) 腰元の自害

(三) 遊女の自決

(四) 武家の姉妹

(詳細解説は本誌、九月号、並に十月号にあり)

現代物

(五) 女剣劇の腹切

(六) 女剣士の切腹

(七) オフィスガール

(八) 農家の娘

げた。

最後に作家ジャン・コクトオの電報が読上げられた。

「サドを非難するのは、ルソーのザンゲ録を非難するのと同じである。人の非難する点、それがサドの長所である。……云々」

## 罰金二十万フラン

「チャタレー裁判」が半年以上にわたって、三十七回の公判を開いた「大事件」であったのに較べると、サド公判はたった一日（十二月十五日）で終わった。しかも裁判所は、その日のうちに次の件、「キャバレーで二人の女歌手がつかみ合った」傷害事件の審理に入った。フランスより日本の方が、より文学的かつ自由だったというわけか。

公判後ギャルソン氏は「もちろん敗訴ですよ」と言った。その通りだった。世界中の都市に、その銅像が立つ日がやがてくるだろうと、スインバーンが言ったサド、最も自由な精神とアポリネールが賛えたサド、「第二の性」のポーヴォワールやカミュなどの実存主義者に、大きな影響を与えたサドは、裁判所の眼には「いかかわしい人物」とうつった。

一月十日、裁判長は被告ポーヴェールさんに、風俗壊乱罪で罰金二十万フラン（二十万フラン）の判決を言渡した。

フランスでも「物にはホドが」あったので

ある。

（外報部 杉辺利英）

既に多くの人が読まれたであろうが、朝日の外報部の杉辺利英氏のペンによる、極めて重大な且つ味わい深き記事である。

天下のサド崇拜者たる者、この敗訴に就ては他国に於ての事とは云いながら、悲憤やるかたなしと云う心境にならざるを得まい。この事件の判決は、吾等の神、サドへの冒瀆を敢えてなした。まだまだ世の人々は「良風美俗」というボロボロの一枚着板を楯にとって真実の美と自由を追求する者に、その偽善的な操作によって「異常者」の汚名を押し付けようとしているのだ。「異常者」とは何事ぞ！「異常」という言葉そのものこそ、将に異常ではないか。

それにしても、ジャンコクトオ氏の電文を始め、ポーラン氏やギャルソン氏が、吾々の味方として世の偽善者達に一矢むくいた事実、大きな収穫であり、何と吾々の前途を明るくして呉れた事であろう。

「世界中の都市にサドの銅像が立つ日がやがて来るだろう」というスインバーンの力強い予言の実現する日まで、吾々の胸の裡にサドの銅像は立っているのだ。

（提供者記）



## 現代マゾヒズム芸術時評



原 忠 正

○復刊第二十三項

公刊物「痛ましきダニエラ」

『House of Dolls.』

一九五三年本書はヘブライ語で著者名をカ・ツエトニツク (K.A. Tzetnik) —— 囚人の意——という匿名で出版され、後に各国語に翻訳されて問題の書として喧伝された。本書については早く沼正三氏の「ある夢想家の手帖より」にも紹介され、他の筆者によっても紹介されたのであるが、本項で更に重ねてこれを探り上げたのは右の各項で甚だ簡略に扱われたという事と同時に扱い方と見方の異なるが故にである。

オスヴェンシウム (アウシュヴィッツ) ブッヒエンヴァルト、等の地名や、イルゼ・コッホ夫人の名は、ビルリッゲル博士の見解を適確に裏付けたよき実例として女性サディズムの歴史に重大な新しい頁を開いたのである。本誌のみならず、各誌に女性サディズムの引例としてよく散見する江戸時代の遊興の責めの如きはその平板さに於いて、これらナチス・ドイツの強制収容所で記録された淫虐とは比較にならないのである。各人の好悪はともかくとして、権力を持った女性——特に民族的優越感に裏付けられた場合の——が、その淫好に裏付けられた場合の——が、その淫好に裏付け

れた残虐行為を精神的にも肉体的にも如何にして楽しみ、如何にして享受するのかはこの一書によってさえ、豪宕、ゴブラン織を眺めるが如き観がある。「夜と霧」の出版によってその内容が冷静に描かれたために、そうして「夜と霧」が全く学術的な観点からの記憶であり研究の発表であるがために、必要以上に高く評価され、アウシュヴィッツは男性による男性や女性に対する加虐と殺人によってのみ終始したかの概念を与えた上、単なる殺人と傷害とが氾濫して、淫好よりは政治的な臭いを強調したが故に本誌の投稿者によって喚起される処が少かったのかも知れない。筆者はアウシュヴィッツの暴行やイルゼ・コッホ夫人の残虐愛好が決してナチス・ドイツ対ユダヤ人の間にのみ起った特殊なものと考えられることは出来ない。前者に如何なる人種をおき換えてみても、後者に如何なるイデオロギイを与えても、同様の記録は単に固有名詞を取り換えただけで同様に綴られたであろう。この残虐な収容所は、創設者がナチス・ドイツでなくとも、管理者がドイツ人やポーランド人でなくとも、飽くまでも数え切れないダニエラやエリザや金髪のヤーガを輩出したのである。強いて優越による政

治的な色彩を添えるならば、それは白色人種と有色、若しくは有色に近い人種との相対であることだけである。

本書の随所に現われる記述によっても、特色付けられた行為や規則の多くが明らかに淫好によって裏付けられているのである。「法律的に又政治的に支配権が認められ、道徳を顧慮する必要の全く失われた環境にあっては」とビルリッゲル博士は自信を以って書いた「女性はその多くがサディスティクな傾向を完璧に露呈することを憚らない」と。アウシュヴィッツやブツヒエンヴァルトはかくて理想的なサディスティクの温床であった。

匿名の著者は文学的にはむしろ十九世紀に属するかとも思われる微細な描写力によって、前半の緩徐な悲劇の開幕に約三分の一の頁を費している。私達はここに「マルテの手記」に於けるリルケを思い起す。収容所での生活に入ると、このゆるやかで色彩的な描写は、むしろサルドウの血醒い悲劇トスカを思わせる。躍動する強烈な危機感と印象的な人物「金髪のヤーガ」の登場更に醜怪な女丈夫エリザの圧迫感を伴った点綴がカタストロフを持続させる。更に最後の部分で頂点は静寂と夢想とに移ってゆ

き、私共はマアテルランクの「死」を思うのである。交錯する幻影と対比的な現実とは全く美しい格調を以って性的なものから天上的なものへと推移してゆくかに思われるのである。ダニエラの最後の如きは全く簡潔な描写法を用いて、「ダニエラ」と名付けられた本書の主人公にして最大の犠牲者である若い一人の娘の不思議な客観性に一貫した生涯の終局を超自然の力が神に帰一せしめるかの様である。

最も劇的な動きの多い中間部の初めは金髪の女司令官ヤーガの出現をもって始まるユダヤ人の医師ハリーが格子のはまった窓から外を眺めている。

——「ヤーガ！ ヤーガ！」その声がドイツ人地区の方から格子窓に飛びこんできた。頭をあげると美しい金髪の女がじっと彼をみつめている。彼女は婦人用の軍服を着て、金髪の巻毛に軍帽を斜めにかぶり、黒革の鞭を騎兵風に小脇にかゝえている。

これがヤーガであった。  
——「ユダヤ人！ 怖れなくてもよいよ、もうすこし顔をお見せ！」——彼女は両手で鞭を腿の上に押しつけていた。鞭の先には、小さな鉄の弾丸が輝いていた。——これがヤーガである。

ヤーガはこの時、ハリーの顔を見て呟く。「あの顔は聖なるキリストの顔……」

この取って付けた様な言葉は本書を最後まで読んでも解らない。「聖なるキリストの顔」を持った男も亦、彼女達の鉄の弾丸のついた革の鞭で殺されるのであるから、節のある鞭で女看守長を打ち据えるヤーガ、答刑台で、少女達を裸にして鞭で打ち殺す儀式を差配するヤーガ、残虐行為の合間には、近くの収容所長の処へ慾望を静めにゆくヤーガ、まことにヤーガは汎マゾヒストの新しい希望である。

デュッセルドルクのエリザと呼ばれる快樂区（独軍兵士の慰安婦区域ダニエラもここに延される）の「全能の領主」も亦、もっと強い刺激を求めるサディスティンである。ヤーガの美貌に対して、エリザは醜怪な容貌に大きな傷痕があり、磨き立てた長靴をはき、男の軍服をきている。男刈りにした頭髮によって示される様に、エリザは鞭によって打ち殺す娘を処刑に先立って弄ぶのである。エリザがサディスティンであると同時に加虐的女子同性愛の所有者であった事は疑を容れない処である。

この二人によって烈しい対立を示す二つの傾向は本書に直接の記述のない場合も女



看守や婦人軍人の各人にあてはまると考えてよい。詳細は本書に拠って求めて頂き度いが、かくの如く華やかに展げられた女性サディズムの公開的な事例が、今を去る僅か十年前に厳存した事、而も、その当事者が、特定の人物でなく、むしろ不特定の多数の間で行われた事は甚だ興味深い。ガス室での大量虐殺の如きも被虐者にとって快樂の限度を越えているにしても、加虐者にとって、鞭による虐待と本質的に大きな相違は無かったに違いない。これは或意味では、血醒い犯罪の記録であると同時に、雄大な規模で、国家権力の支持の下に展開された女性サド・マゾヒスムの尨大な別世界である。本書は忘却の彼方へ押しやられつつある私達の関心を、再びアウシュヴィッツへと、又ブツヒエンヴァルトへと憧憬を交えた心を伴って呼び寄せる。金髪のヤーガ、全能の領主エリザはこの世界での新しい惑星であり、希望の結晶でもあらう。

#### ○復刊第二十四項

#### 「イルゼ・コツホ夫人」

ブツヒエンヴァルトに悪名を馳せたイルゼ・コツホは珍しい、性癖の所有者であった。露出癖と加虐慾望とが強烈に混合して

いたからである。元来、露出癖はマゾヒストイックな願望の典型的な一つであって加虐慾望と混合一致するという事は先ず考えられないのである。例えば、男子同性愛に於けるウールニングに類出するに對してペデラストに現れる事のないものゝ様である。その相反する二種の傾向がどの様な形で露出されたかは多くの記録に従えば、コツホは自己の支配下にする收容所の中庭に男子囚人を整列せめて、全裸体とし自らは下半身を露出し、鞭を携行してその前を往復したという。すると、獄中で全く性慾の排出口を塞がれている囚人の中でも特に若い者は、忽ち物慾しげに反応を示し始める。イルゼは其等の者を一步前進させて、その中でも逞しい体格の一人二人を呼び出して自己の情慾を鎮める為に用い、他は、「收容所の地位高き婦人に対して妄想を抱いた」という科で、衛兵に命じて、局部を切斷し、又は棍棒で局所を殴打し、更に鞭を使用して、自ら彼等が息の絶えるまで打ったという。これらの処刑はすべて、彼女の氣紛れのまゝに執行され、他の囚人達は終始これを注視することを強制された。更に彼女は囚人の死刑に當って斬首された生首を乾燥し防臭した上でこれをミイラの如

くにして蒐集した事によって有名でもあり又この事によって裁判され死刑の判決を受けたのである。イルゼ・コツホは其の時代と、その環境をよく得たならば恐らくはエカテリーナ女皇にも比すべき存在となつたと思われる。この人については各誌が時折採上げているが本年一月七日に発刊された「週刊新潮」の記事が最も正確且つ脚色が少いのではないかと思う。何れにせよその伝記は屍臭の強い陰惨なものであるが、その汚濁に一貫したゲルマン民族好みの尖鋭な加虐による性愛の具体化に注意された。彼女は減刑されずに出獄している筈である。「ブツヒエンヴァルトの鬼女」はかくて、この同じ世界に私達と同じ自由を享受している訳である。

#### ○復刊第二十五項

#### 瑞典映画「夏の夜は三度び微笑む」

●「Sonmarnetten Leende」●

フランス風のコメディであつてグラン・プリを貰っている。映画としてはまず第一級の出来である。一分のすきもない台詞のうけ渡し、適度のお色気、鋭い警句は特殊な国語で話されるにも拘らず見る者に深い印象を与えずにはおかぬ。白黒版で

はあるが、本年度上映されたる映画の中で質的には最高のものであろう。マゾヒストとして見るべきは主人公（弁護士）の愛人である女優のパトロン（騎兵士官）の若妻についてである。場面的には特に取上げる部分はないが、一度見ると所謂マゾヒスト向きの女性であることがわかる。特有の体臭を持つ女性である。梗概其の他は割愛する。

### ○復刊第二十六項

#### 出版物「二つの平和」

M・ブーベル女史著

＝Under Two Dictations.＝

Margarete Buber.＝

本書は二部にわけられ、第一部はソビエツト強制収容所の生活を、第二部はナチス・ドイツの強制収容所を描いた体験記である。第二十四項にも挙げた様に強制収容所に於いて人間本能と潜在した慾望とが表面化するために、この書物に伝えられる幾人かの女性支配者は現代の女性サディズムの身近かな実例である。

収容所（ラーヴェンスブリュック収容所）の婦人親衛隊員（以下婦人S・Sとする）であるランゲフェルト夫人、その後任者マ

ンドル、それから姓名不詳の数多くの女看守達、彼女達はすべて、「膝までの長靴、ドイツ現役兵のスカウト、身体にぴったりくっついた上衣、片方の耳の方に斜めに被った陸軍帽」で現われ、囚人達の完全な支配者であった。又この著者が、女看守になり立てのドイツ人女性が、この任を嫌がっているが、こうした服装をつけると見違える程変ってしまい、「自信と優越感とを彼女らに与えた」と書いていることは、ビルリッゲル博士の「環境的な理由によつてのみ女性サディズムは表面化しない」という説明を裏づけるものである。

淫楽殺人の臭気を放つ部分を除くならばこの一つの手記にのみならず、ユウラシア人種による強制収容所が、如何にサド・マゾヒズム、特に女性のサディズムを華やかに展開するかを、今回こゝに挙げた第二十三同二十四、同二十五項と共に本項によつて御知らせする次第である。

### ○復刊第二十七項

#### 伊太利映画「愛は惜しみなく」

＝ANDREA CHENIER.＝

LUX FILM.

（テクニカラア、

ヴィスタヴィジョン方式）

原題と同名のウムベルト・チオルダノの作つた歌劇の映画化である。革命詩人シエニエがマツダレエナという貴族の娘を恋して、フランス大革命の勃発の時に之をかくまいつづけるが遂にマツダレエナの邸の馬丁であつたシエラルが見つけ出して、シエニエを告発し、マツダレエナはかくれていたたまれずにシエニエと共に刑場に死ぬという荒筋で、これにシエラルが馬丁時代にマツダレエナに恋焦れていたとか、マツダレエナの小間使の黒人女の動きとか「紅はこべ」同様のシエニエの活躍とかいったものが適当に絡まってゆく。アントネラ・ルアルディがマツダレエナをアンドレ・シエニエをミシェル・オークレエルがそうして、ラッフ・ヴァツロオネが馬丁シエラルを演じている。画面は鮮やかなヴィスタヴィジョン方式によっており、こうした娯楽的な大作としては誠に付けるべき非難もない。録音も立派な出来であつて、ルックス・フィルムの豪華なメイン・タイトルが華やかに現われる出だしから、刑場にゆく馬車が遠ざかってゆくウルティマ・シエーナに至るまで、全ゆる娯楽的な要素が、プラネタリウムの如く渦巻いている。決して芸術的な映画ではないが、飽きない



作である。

配役の文字が現われる間、バックグラウンドで唄われているのがジョルダノの歌劇の有名なアリア（詠唱）「青空を見つめて」(Un di all'azzurro spazio) であって、この映画には至るところ、この唄の前半が用いられている。中期イタリア・オペラの正統派の殆んど最後の作曲家であったウムベルト・ジョルダノ(Umberto Giordano)の豊かに劇的な味わいを持った旋律はこの映画をその内容以上に高級なものとしている。理由もなく内容と直接の関係もなく、只人々に深い溜息を吐かせ、胸塞がれる想いに沈ませ、そうして熱情的な昂奮を齎らし、時として、恰かも恋人が肌辺に近く在るが如き錯覚を起させるのが、ジ

オルダノの音楽であるとしても過言ではない。しかし、時評は右に挙げた様な理由からこの作を採り上げたのではない。第一景の鹿狩りの場で、マツダレエナに秘かに焦れている牛のような男、ジェラルが、マツダレエナの靴を支えて馬に乗せる部分の台詞が、注意を惹くのである。「ジェラルは私の馬と同じなのよ」

—Como il cavallo—イタリア語ではつきりと叫ばれるこの言葉は、その後につづく、マツダレエナとジェラルの其れ其れの態度によって一つ一つ実証されてゆく。狩の帰りにシエニエは自作の詩をマツダレエナに誦んじてみせるが、その詩は「男を焦れさせても又、男がその為悩んでも、彼女はそれを侮辱した態度しかとらな

い、それを嘲ける冷い心の持主である。」という内容で、勿論マツダレエナを指しているのである。

王政フランスの専制のまさに崩れんとする前夜、専制はかくの如き処女を育てた。黄禍の思潮未だ衰えを知らぬヨーロッパに反感に基いての人種差別が厳存することは沼氏の諸項に照しても御承知の事であるが同一人種の間に於いてさえ、この様な人間獣視が、少くとも映画の製作者によって考えられていること、重要視すべきではなからうか。

汎マゾヒストの意向は知らず、少くとも人間畜化に興味をもつ人々に、夢の様な言葉が現存の女性の口から直接に且つ大衆の中で叫ばれる事に私は注意するのである。

## 女 血 だ る ま

伊 藤 晴 雨 文と画

切腹が流行する。流行は勝手だが切腹をすれば一回の終りになるに違いない。物騒な世

の中になったものだ。二三十年前に東京(或は全国?)で死のう会という会があつて(死

のう死のう)と連呼して腐った世の中を覚醒しようとして時の警視庁を驚かした事があつたが、今は切腹を研究する団体が出来た?とは我等老人、度胆を抜かれた。

扱、芝居の切腹という、第一に忠臣蔵の四段目、塩谷判官の切腹だが、判官の前へ持つてくる九寸五分(?)の腹切刀を乗せるのを(三宝)といつて居るのは(義太夫でもそう語っている)大間違いで三方に穴が開いて

いるから三宝で、あの場合に限って穴がないのである。中康某という切腹専門の研究家が此点に何も云わないのは、どうした事であるう。(知っていて言わなかったか)、これは供養(くぎよう)というものだそうで、芝居

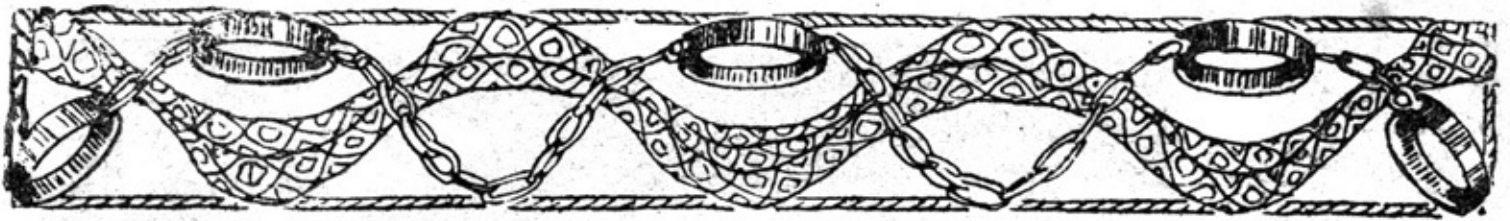
の小道具でも此場合に限って穴の無い物を使っている。(恐らく京阪でもそうだろう。)故に三方(さんぼう)と供養とは用途が自ら異なるものである。今迄の挿画画家は穴のある三宝を平気で画いているのが面白いと思う。



扱、本図は文化文政の合巻(くさざうし)に市川團十郎作と署名してある女血だるまの大詰であるが、きそう皇帝筆と伝えるお家の重宝だるまの一軸を悪人が隠してお家騒動になるのを家臣の友江(?)が近江琵琶湖中の竹生島で之を奪い返してトド立腹を切るという様な筋だと覚えていて。これは小劇場の出し物で、死んだ沢村源之助の出し物だったと覚えている。

其他に女定九郎という瀬川如昇脚色のものがあり、勘平は出ないで、与一兵衛の娘が定九郎になっていて、おかやがおかるの身代金を受け取った帰りの山崎街道で自分の娘に金を奪われるという一幕で獅子の代りに角兵衛獅子が出たりする、甚だ茶気満々たるものでこれも故人沢村源之助が得意の出し物であった。其外には、田舎芝居で見た女の弁天小僧がある。(南郷と夫婦となっていてという脚色)鎌倉の長谷寺実は浅草の観音仁王門の捕り物もセリ上げ三段返しの大道具、花道から青砥左衛門が銭拾いの体でセリ上げるという草双紙そっくりの画面本位の捕物帖(?)である。此外に女の切腹は沢山あるが、男の方ならば、東海道五十三次の川崎の場で平井権八の「比翼紋い」といふ字「川崎の渡し舟で権八の立ち腹がある。其の他の切腹は沢山あるが女の切腹は近松の長町女腹切などに止めをさしておく事にする。





# アブ・モード・オール・スクラップ

矢 桐 重 八

## セックス・プラス・アルファ

アメリカの「うそコンクール」で一等賞のカネが鳴った。

——私は、一度もウソをついたことがない。

で、二等賞は……、その時、ある雑誌が、A・C・キンゼイ博士、M・プロスコウ判事ら有数の学者たちの意見をまとめて「異議あり！」と叫んだものである。一等は、いや特等に値するものがある。それは、

——私は、一度も色情をいだかなかった。

学者たちの調査によると、「少なくとも、アメリカ人の九五パーセントは、性的犯罪者」というのである。

「毛唐の話サ」とお笑いになることは自由だが、手取り早く日本犯罪学会評議員の井上泰宏氏の話をお伝えしてみよう。

「人には、すべて変態的な性慾がかくされており、それぞれ性犯罪者としての素質をもっている。戦後は性道徳が退廃しゆがめられた性が解放されたので、性犯罪者が一度に野放しになった光景だ。私の調べたところでは、男色者は、医者、教師、僧職などのインテリが多く、労働者の割合は思いのほか、

か少なかった……」

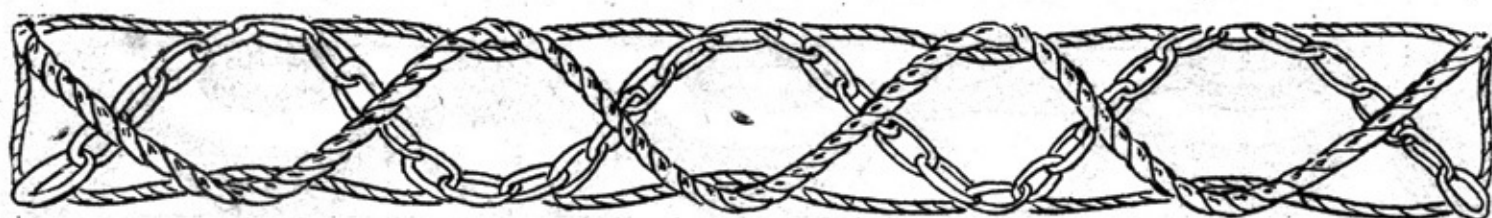
○ 昨年の夏、珍妙な大捕物があった。

東京深川で、いかがわしい本や写真をマスプロ方式でつくり荒かせぎしていた連中四十七人が芋ヅル式に検挙されたのだ主犯の稲田誠（四〇）は「ワイセツ・デパート」というのをつくり、都内五十三ヶ所で書籍二十九種類九万部、写真八十五種類三十三万枚を製造し、その売上げ高、およそ四千万円しかも一年足らずのことである。一味の一人が係官の前でうそぶいた言葉は、

「だって、買うヤツがいるんだモン」

警察庁刑事部の統計に（昭和三十年末）によると、現在の社会が、みみっちい性慾の方向に傾いていることは否めない。ちよっとみただけでも「ワイセツ行為」は年間千八百件で、五年前の約二倍。

もっとも単純でだれもが犯している行為はウオアイエールなんのことはない「のぞきの心理」である。今日の日本ではもはや一般化しているので別にとりたてていうほどのことも



ないが、明治の末年にあった「出歯カメ事件」のように、重大な犯罪になりかねない。

性心理学者にいわせると、ひどく特徴的になっているのがナルチシズム。自分だけに愛着を覚えるもので、ことに女性はその思春期で九〇パーセントこの経験があるという。早い話が、フロ場で、われとわが身の裸身にほれぼれするシーンである。ところで現代、これの端的なあらわれはまず服装。白いセーターに紺サージのストラックス、といえはいかにもスポーティなドレスとされているが、あれをつける心理がナルチシズムなる由。つまり、胸とシリを誇示しているからだ。いわゆるマゾヒズム（自虐性）と呼ばれるものでも、三十娘の気持の中に潜在的にひろがっているという。彼女たちの「どうにでもなれ」という気持が職場でセックスの花を咲かせるというわけだ。

○ 戦後の、きわだった性心理には、こんなものもある。新潟で雪にすべって流産した小学校の教員があった。それが四十才の独身女性だっただけに、視聴を集めたが彼女は病院で口をつぐんだまま絶対に父親となるはずだった男の名を云わなかった。が、二、三日して人々は驚きの声をあげた。その女教員の教え子（十三）が病院へくるや、ワッと泣きながら叫んだのである。

「先生、ボクの子供、死んじゃったの」  
まさか、と思われるような話だが、実際にあったことだし性心理のうえでは、ゲロントフエア（老人愛好症）とよばれるものだ。若い娘がロマンス・グレイにあこがれたり、あるいは逆に初老の男が、ユカ族を追い廻すのが、その初期の兆

候だという。

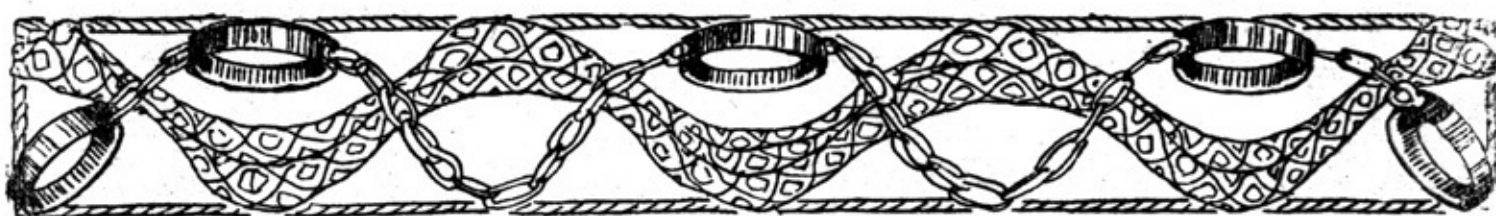
有名な独身のデザイナーQ女史の犬に対する愛情のほどはまことにすさまじい。犬に人間の名前をつけて、その名義で貯金さえしているのだが、その心理はピクマリオンズム（偶像愛着症）に近いものといえる。女学生の間でおきる「想像妊娠」も、この薄められた形で、芸能人に対するフアンの狂態などはもつと進んだものだ。

○ もっと戦後的なのが、トランスヴェステイズム（異性変性狂）という形である。この代表選手はシャyson歌手の丸山明宏君で、人呼んでシスター・ボーイ。なにしろトイレットまで「淑女用」を使うというウワサだから、相当な重症である。この逆の、つまり男が女にふんするという形は、昔から一般化している。

ところで、いくつかの性心理が存在しているのは、それなりの条件が整っているからではないだろうか。

東京の大塚で、十七才の少年が窃盗罪の疑いで逮捕されたが、彼の家に行ってみると、盗品が山のようになっていた。それが婦人のブラジャー、パンティなど下着類ばかりだった。いわゆるフエティシズム（物神崇拜症）というタイプだが、少年の告白を聞くとこうだ。彼は、東京の新制高校を希望して栃木県から親類を頼ってでてきたが、参考書を買いにデパートに行ったとき、ふと婦人下着売場で裸の人形を見た。あいにくパンティとブラジャーのつけかえの最中で、これが彼の胸に恥しい思いを起させたが、それが忘れられず、近所合壁の洗濯もののなかから下着類ばかり失敬してくる習慣がついてしまったのである。いわば「下着ブーム」という





条件が生んだ異常であろうか。

○ A君は家が貧しいので定時制高校に通う十八の少年。昼間は銀座の喫茶店Bのボーイをしていた。端正な目鼻だちで男らしいA君は女の子には大もてだ。だがA君は女の子には眼もくれない。勉学に専心する熱心な少年だった。ある日一人の銀髪の外人が入って来てA君に話しかけた。

「英語習いませんか。教えてあげますよ」

A君は日曜日ごとにその外人Aアメリカ人の貿易商の宿に英語を習いに行くようになった。半年ばかりしてA君はそのアメリカ人に見込まれ、アメリカに留学することになった。思いもかけぬ幸運をつかんだわけだ。やがて、家族や友達に祝福され、セン望されて渡米する日、羽田空港で見送る親友のN君はポツンとこうもらしたという。

「Aのヤツ可哀そうなヤツだ」

アメリカ人はA君の精神や才能を見込んだのではなく、A君の肉体を見込んだことを、N君はよく知っていたのだ。

こういう例は一般の人が余りしらないが、よくある留学美談の内幕だ。

三島由紀夫氏が長篇「禁色」で男色の少年をテーマにしてから、ゲイボーイと呼ばれる男給仕のサービスする酒場は、禁色酒場として急に有名になり、いま都内には約三十店、なかなかの繁昌ぶりだ。ここに出入する客筋は好奇心のひやし客と常連が四分六の割。常連はインテリの紳士や外人客などで、ゲイボーイの争奪戦は、一般の女給の争奪戦と同じだ。

この流行は駐留軍と共に戦後次第に盛んになり、文化国家

で法律にふれぬのは日本だけだと大手をふっている。

（週刊新潮、昭和三十二年三月十八日号）

## ○ 国庫に入った女の下着

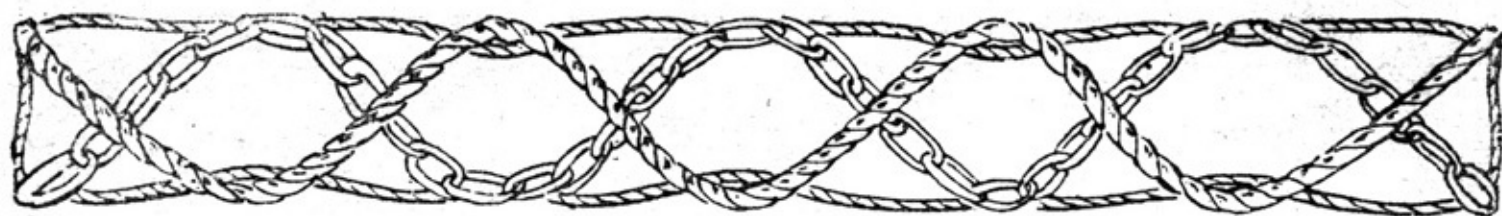
金沢地検では、国庫所有の婦人の下着類を持てあまし、目下頭を痛くしている。

というのは、この下着類は、同地検で取調べられた下着マニヤの変人たちが、盗み集めた証拠品で、約五十点。地検では、もとの持主の婦人たちを呼びだしても、さすがに取りにこないで法により「所有権を放棄したもの」とみて、国庫に帰属させた。有価物の場合は公売に付すことになっているが、買い手がつかどうか疑問なので、「無価物と認めて廃棄処分」したら、ということになりそうだ。（北国新聞、二月二十四日付）

○ マニヤ達にとっては盗んでも取りたいほどの「有価物」でも、地検のお役人にとっては「無価物」で、廃棄処分にするという。どうせ廃棄してしまうのなら渴望しているマニヤたちに進呈してしまえばよいとも思うが、お役人の立場としてらそうもいかず、世の中というものはどうもママならぬ。

## 二重倒錯？

京都、洛北に近いスラム街の青空劇場に女剣劇一座来る。座長A嬢以下のストリップはだしの猛剣劇に連日大入の盛況。世の中には悪い奴がいるもので、千秋楽の夜、青年共が彼女の行水姿をノゾキ見した。途端にビックリ仰天、足場を



踏みはずして気絶。玉の肌に眼がくらんだか、と聞くと、なんと、女である筈の彼女のデルタにチン座しますのは……介抱係も気絶した。(オール読物、昭和三十一年九月号)

男装の女である筈の俳優が、実は男であった。つまり男が女に化けて、男の役をやっていたという、ヤヤコしい話。やはりアブノーマルなものを感じる。二重倒錯? とでもいべきか。

### あばかれたベスト・セラー

終戦当時の満州でソ連兵や満人匪賊の獣欲の犠牲となった幾多の日本人女性の悲劇を体験者の一女性が克明に綴った手記、三上綾子著「匪賊と共に」(東京都世田谷区北沢一の一七五第二書房発行)は、昨年の十一月に発売されるや、異常なセンセーションをまき起して、たちまちベストセラーにのし上った。ところが最近、この本はかつて満州にいた元陸軍少佐のデッチ上げたもので、しかも著者であるべき筈の三上綾子さんの全く知らぬ間に発行されていたことが判り出版界の不祥事件として問題になっている。

三上綾子さんが、三上綾子著「匪賊と共に」なる本が東京の出版社から発刊されて、ベストセラーになっているのを知ったのは、最近のことだ。

綾子さんは東京から遠くはなれた広島県の比婆郡東城町に住んでいる。彼女はあの町の宿屋、東城ホテルの仲居だ。

正月も七草をすぎたある日、ふと街で出会った友人から「貴女のことを新聞に出ていた」と聞かされた。

が、はじめはなんのことやら、さっぱり、見当がつかなかった。彼女の生活はあまりにも、ベストセラーに縁が遠い。驚いた綾子さんは早速「匪賊と共に」を続んだ。そして、読んでいくうちに、憤りが胸の底からこみ上げてきた。そこには惨虐、目を覆う暴行の数々が、綾子さんの体験として、書かれていたのだ。

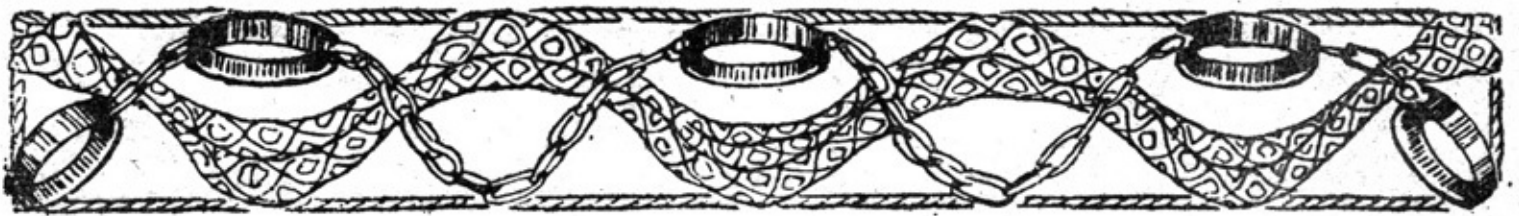
物語りは昭和二十年八月、日本がポツダム宣言を受諾して連合軍に無条件降伏した頃にはじまる。綾子さんは当時、叔母の養女としてチチハルに住んでいた。ソ連軍は満州の各地に進駐しはじめ、チチハルにもやってきた。しかし、それは在留邦人にとって、まさに悪魔の軍隊だった。

——あつという悲鳴も恐怖に消えて、ただわなわなとうちふるえている女二人。ソ連兵はそれぞれ、無造作にその場へ女をねじ伏せると、自動小銃を持ったまま、みんなの面前でゆうゆうと犯しはじめた。二人はコトがすむと、一人が見張りに構えていた仲間とかわった。その新手のソ連兵はオカミの腋の下へ手をかけたのである。そして旦那にかじりつくオカミを軽々と空へ持ち上ると、旦那を長靴で蹴たおした。ばたばたともがき抵抗するオカミへ、にやにや残酷な笑みをくずしながら、そいつは、オカミを押えつけてしまった。

——片方のソ連兵は、いま一人を犯したばかりなのに、すぐつぎの女を襲っていた。総毛だつほどの恐ろしい彼等の獣欲だった。

このかれらの獣欲のために街のあちこちで、いろんな惨劇がおこった。このような状況のなかで、綾子さんたちは、チ





チハルを脱出することにきめた。黒髪を切り、男装となって汽車に乗った。

が、ここでも、満人の暴行を守るべく同乗したソ連兵たちが、酔って女をあさりだしたのだった。

男装を見破られた女たちが、良人や親や兄や弟の前で犯された。

そして、ついに綾子さんたちにも魔手がのびてきたのだ。叔母はソ連兵を思いきり殴ったが、その報復は鬼畜の行為だった。

熊のようなソ連兵の手が、叔母のズボンの紐を苦もなく引切った。私はもう正視できないで、顔をそむけた。眼をとじた。みんなも眼をつぶって、見ないで下さい！と、私はわめきたい衝動に気が狂いそうだった。肉親の叔母が、凌辱の醜態を多勢の前でさらそうとしているのだ。だが、ケダモノたちの報復は凌辱などと、そんな生やさしいものではなかった。「ぎやーっ」と、腸をえぐりとられる思いの絶叫に、私はがくつとなった。見た！凄惨な叔母の姿！ソ連兵は凌辱の代償に、そこへ、あの錐のような鋭く尖った銃剣を、これでもか！というほど深々と突き刺したのだ――。

その時、汽車は急ブレーキで停車した。匪賊の襲撃だった。彼等は女を手当り次第にラッ致した。

――おも屋へ入った。むうッとするほどの温度に空気がぬくもっていた。同時に異妖な雰囲気私の身に迫って来た。その筈だ！この床は二間ほどの幅で黒土に区切られて、ちようど八畳間ぐらいの部屋が八つばかりも並んで……今、その各々の部屋に一組ずつ、むごたらしい凌辱が、あさましい男女の姿態がさらけだされて……私はあまりのことに、放心

の眼をそむけもやらず瞠いていた。

そして、綾子さんもついに、この運命から逃れることが出来なかった。

匪賊たちは、自分の所有と決った女たちの腹の上に、番号の焼印を押した。

――私はとつじよ、腹部へ猛烈な激痛を感じた。真ッ赤に灼けた細い棒が、お腹の上に立てられて……その鉄棒が、じゅじゅじゅじゅん！と肉を焼きながらうごいていた――

こうして綾子さんは「七十七番」の烙印を押された。が、悪魔のような所業はそれだけではなかった。さらに彼女は二人の匪賊に抱えられて、めらめらと赤く燃える鉄板の上に降されたのだ。逃げ出せないように足の裏を焼かれたのだった。

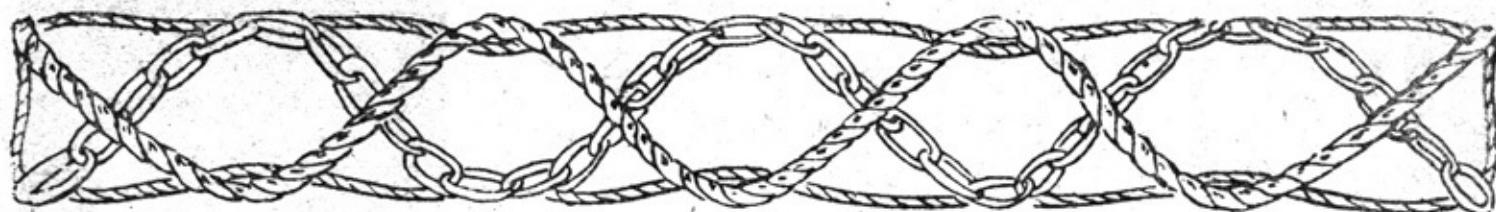
その頃女性達の間で脱走計画がもち上り、匪賊が掠奪に出勤したあと、看視にのこった奴等を媚でつり、油断をみて腰紐でつくったナワで絞殺した。

まず馬に乗れる十六人が、そして綾子さんらの徒歩隊が逃げ出した。

が、追っかけてきた匪賊のために徒歩隊は全部捕り、主謀者の一人綾子さんは制裁にペンチで生ヅメをはがされた。

そして、逃げのびた女たちの報らせで中共軍が援けに来るまで、再び獣欲の犠牲の生活が続けられた――。

これが、綾子さんが読んだ「匪賊と共に」のあらすじだが彼女は「内容は全くデタラメです。私のお腹に七十七番の烙印などありません。ウソと思うなら裸にでもなります」と激



怒している。

さらにウソは体験記だけでなく、本の巻末にある綾子さんの略歴もそうだ。……

(週刊サンケイ 昭和三十二年二月二十四日号)

この週刊サンケイの記事はこの後で、主人公三上綾子さんの抗議、発行元の第二書房社長、伊藤禱一氏、文芸評論家、十返肇氏らのそれぞれの言を載せているが、この体験記が完全なデッチ上げということはまぎれもない事実のようだ。

人間の俗悪趣味をねらって、いたずらに劣情をあふるこの種の単行本が、最近では書店の店頭に出ている。そしてベストセラーにまでなっている。いまここにとりあげた週刊サンケイ誌から察してみても、この「匪賊と共に」は、まことに通俗、浅薄な描写だということがわかる。それが堂々と店頭に売られ、ベストセラーになり、発禁にもならず、「奇譚クラブ」のような地味な真実性をもつ雑誌が日蔭の憂き目を見ろということに、むしろアブノーマルなむしろゆんを感ずる。以上、これも現代のアブ・モード世相を代表する事件なので、長々とここに引用した次第である。

### 女の髪にさわるのが好き

「サムライ会」というのがある。右翼団体の話ではない。やっぱりこれも美容界の話題なのである。去る三月に血盟一周年を迎えた十二人の「サムライ」たちのグループだが、この十二人は世話役の真野博をはじめとして、いずれも気鋭の男性美容師、ヘンリー原、穴戸盛、山田晴彦、東横美容室のバアーグ川地、田中八百樹、斎藤慎三など、白面紅顔の優男ばかりで、

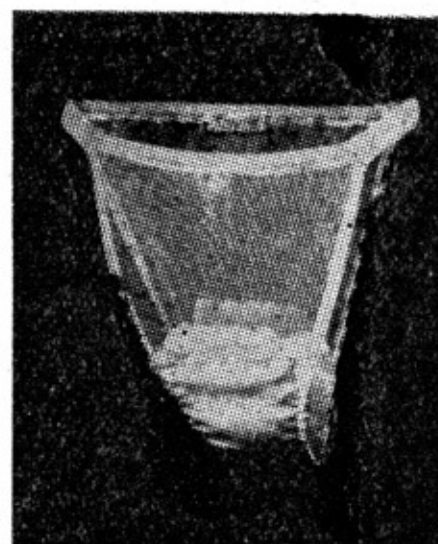
「サムライ会」はいささかカンバンにいつわりありというもののだが、ここ一年彼らの活動もなかなか活発なものがあり、女護ケ島美容界の伝統を打破した点ではやはりなかなかのサムライでもある。 (中略) 真野の言によると、

「男で美容師になるのは本当にこの道が好きで、一生をかけようという物好きばかりだから、女性とは心構えからして違う。次に、女のおしやれは男のためのものだから、男がおしやれを指導する方が本来の目的には、かなっている。」とのこと。その主張から、真野の店では三人の男性を使っており、学校でも三十人余の男子生徒を採用している。

これらの中には戦時中は幼年学校生徒で、今は髪まで赤く染めたハイカラ・ボーイや、M大学経済学部を卒業した学士様でありながら、一日一度は女の髪にさわらないと眠れないというので、この道に入った男など、やっぱりいささか変り者が多いようだ。 (娯楽よみうり 昭和三十二年三月二十九日号)

「美容師」といってみても、しよせんはこうるさい有閑マダムや、金とヒマのあり余るご令嬢たちの相手を仰せつかって顔イロをうかがいながら、ご気嫌をとり結ぶ職業であるのはわかりきっている。男のくせに髪を赤く染めたり、女の髪にさわらないと夜も眠れないという男など、アブノーマルともいえようが、近頃ではこの程度のアブは、アブともいえなくなっている。異常と正常との差がずい分と交叉しているからだ。それだけ、人間の感情生活も豊かに広がりをもってきたからであらう。





# 褌とブリーフ

(三)

池田ふみ子

今回は、少し私達の学校のダンス部の様子を紹介しましょう。私達のダンス部の中の褌愛好者のグループは、男子生徒達からH高ストリップというニックネームを頂戴している様です。勿論、彼等は私達の褌一本の姿を見たんじやないと思いますが、ダンスの時間等の殆んど裸に近い様なお尻のはみ出たキヤルマタ姿等を見て、このニックネームをつけたのでしよう。

私の体操パンツ(キヤルマタ)は薄手の黒の木綿ですが、前は太股の附根ギリ／＼の短かさで、後はお尻が半分程露出します。裾には勿論、ピッチリと締るゴムが入っていて、ブルマーでは普通ホックで止める様になっている横の部分は、チャックで止める様になっています。この女生徒用キヤルマタは足を太股まで最大限に露出しますので、非常にスマートで履き心地もいゝものです。褌グループのものは勿論みんなこの式のキヤルマタを着用

しますが、これが全校に人気を集めて、体操やダンスの時間には、キヤルマタ姿の女生徒が非常に増えて来ました。長いダブ／＼のブルマーは、私達の学校から追放されつゝあります。女学校の歴史と共に長かった体操用ブルマーの歴史もこゝに終止符がうたれて、モダンでスマートなキヤルマタの時代に入つてゆくのです。(参考までに申し上げますが、全国どここの女子高校でも、体操部員やダンス部員は殆んど全員ブルマーは着用せず、キヤルマタ式体操パンツを着用している現状です)

◇

四月号で、並原新一さんの「ズロースETC」を読んでいたら、「昼間でもパンツのかわりにズロースを穿いているので、風呂に行く時は困ります。腿のゴム跡が消えるまで待たねばならないのです。」

という一がありました。これから感じ節た

のですが、男の方は一般に下穿きの事をよく御存知ないようですので、こゝではつきり申上げておきます。並原さんは決して腿のゴム跡を気になさることはないのです。男用のブリーフにも裾にゴムの通してあるものがありますが、市販されているからです。ブリーフ(キヤルマタ)は婦人用と思ひこんでいらつしやる男の方があつたようですが、男子用がいくらかも出ていますよ。ウーリーナイロンのもの(これはピッタリして非常に履き心地がよさそうです)と、木綿のメリヤスのもの(これは裾にゴムの入つているものとゴム入りでないものがある)が市販されています。それから男子用としては三角褌(水泳褌ではない平常着用のもの)もデパート等で売られています。布地はガーゼで色は白です。デパートの下着売場で、褌型のブリーフと言われたらすぐわかります。男の方の中には、男の下着と云つたらステテコみたいなパンツか、さもない

くば典型的なゆるふんの越中禪と違っていらっしやる方が相当おありの様です。これだけ申上げておきます。ブリーフを着用される場合は、ゴムで締めつける部分が太股の附根ギリギリの所になるように、太股を最大限に露出して前のV字型のくりを強調させた方がより美的です。以上、念のために…。

◇ 松原三千代さんが、三月号の「私のふんどし」で書かれた「ヒモふんどし」について。私も似たものを作って友達に見て貰いました。前の三角の部分は隙間だらけで「ヒモふんどし」というより「あみふんどし」といった方がいい位です。

「まあすごい。露出の世界新記録ネ」とドライ女子高校生と自称するB子さんが絶讃しました。お尻の部分は前に書いたデルタカバー式の紐一本で、お尻は完全露出です。これはとても男の方は実用出来ません。私達の女性専用の禪であり、こんな禪を穿けるのは女性の特権です。

◇ 「奇ク」を通じて私は、多くの女性の禪愛用者が居らっしゃるのを知りましたが、この私達以外にもまだまだ想像以上に、禪をひそかに愛用している女の人が居られるようです。私は十日程前、市内のある所で夜九時頃、風呂から上っている女性の禪姿を見ました。こ

の方は白のもっこ禪でしたが、ガーゼで作ったある様でした。二十才位の方だと思いますがお尻にキュッと禪を喰い込ませた姿は実に立派でした。私は今、どうかして、この方とお近づきになりたいと思っています所です。

◇ 又、「禪ってどんな感じでしょうネ」「私も禪を穿いてみたいワ」こんな女性の会話を二、三聞いたことがあります。多くの女の方は、海女の禪姿の写真やストリップの股に喰い込んだツンパ等に刺戟されて、禪を着用する様です。それというのも、全女性が無意識のうちに禪の着用感に魅力を感じているからなのではないでしょうか。

◇ 元来、私達女性の場合は極く一部分を覆いさえすればことたりなのです。男性の場合、前を覆うことが重要になりますが、女性の場合はカバーしなくてはならないのは、寧ろ股下であり、その面積は男性の五分の程度ですみます。こういう点から考えを進めて、私は松原さんの「ヒモふんどし」を更に押し進めた、露出面積の最大のふんどしを作りたいと思っています。この禪が出来上りますと、これは覆うのは股下が主ですので（覆うといっても紐を一本通す程度、ほんの申し訳程度でよい）見た目には全裸体と殆んど変わらない完全露出です。これは男性の皆様にはお気の毒ですが女性でなくては出来ない、男性の真似

の出来ないものといえましょう。

◇ 私達女性の身体の中で、最も特長的であり魅力があるものは、お尻であると思います。その大きさといい、肉付きの良さといい、とても男性の及ばぬ所です。だからこそ、私達女性の下穿きとしては禪が最適なのです。お尻に喰い込んだ禪の魅力は、そのお尻が大きければ大きいだけ、倍加し、とても男性の及ばぬ所となります。今までの女性が、お尻を隠そうとして、海水着一枚着てもお尻がはみ出していないかと後ばかり気にして、両手でパンツを下に引っばっている恰好は、実に卑屈な態度だと思っています。

お尻は女性の最大の魅力であり、女性は太股やお尻を露出することによって、その美を誇示すべきです。私達十代の女性は、もうお尻を露出するのは当り前のことに思っています。学校のダンスの時間には、公然とその短い禪のようなキヤルマタから、お尻を露出して楽しく踊っています。お尻は足の一部だとさえ考えています。

◇ 全国の女子学生の皆様、もし皆様方や皆体のお友達の中に極端に短い体操パンツを、様操やダンスの時間にブルマーの代りに着用している方がいらっしやいましたら、この誌上に紹介して下さいませ。以上おねがいします。



# 一 禪 亭 雜 記



内 田 武 男

戦争が悲劇的なエピソードをもって終りを告げると、たちどころに新しい時代の波がどっと押し寄せた。それはすべてのものを一息に甜めつくしたように思われた。我々を感傷的にとらえていた過去の風物はガラ／＼と音をたてゝ崩れてしまい、明治から昭和にかけてすっかり一本の糸でつながりつめられていた日本の屋台骨はとりはらわれた。しかし、このような激しく動揺する時代の圧力を避けてランプの芯をかきたてるように、すゝだらけ

の世界が呼吸していた。それは非常に巧妙に、しかも目に見えぬ厚い壁で閉じこめられていたので、常識的な社会の眼からは完全にかくされていた。

私——正確には風太郎という固有名詞をつけられた私の人生が、まったく偶然に発するようになったのも、ちょうどこの時期であり、しかもこの世界にほうりこまれてからである。ここでは軍隊の規律が厳として支配し、封建道徳が大手を振って通っていた。生活様式のすべてが過去の足枷をはめられていたこんな世界がなぜ存在できるのか……まったくその通り、しかし、それもこの世界で、どんな

事がおこなわれているかわかれば簡単に理解出来る筈である。そこで、まず私についてつまり風太郎として人生を発するようになった、そも／＼の始まりから語らなければならない。

私の前歴については不問にしよう。なぜかというと、私は既に風太郎という、まったく別の人格に転換してしまったのだから。当時の私についてはつきり云える事は、国民の大半がそうであったように、私も飢えており、飢えから逃れるために必死になっていたという事である。私は軍隊から復員したばかりでまだ若く、非常に大胆であった。そこであるいかがわしい新聞広告に目をつけ、某周旋屋の斡旋で、場末にある小さな商社——といってもちっぽけな個人営業の店で、内容はとう／＼わからずじまいだった——に勤めるようになった。勿論住込みである。私の記憶ではこの商社に一週間程雇われたが、非常に厚遇され、当時、簡単に手に入らないような立派な背広や毛の下着などを支給された。おまけに、これという仕事もなく／＼遊んで過ごした。商社の主人は私に関するあらゆる知識を吸収しているように見えた。私に縁故がまったく無いという事が特に彼の氣に入っている事らしかった。

ある朝、——それは私の記憶に鮮やかに印象づけられている朝だった。なぜかという

この朝から始った短い一日が、私の人生をまたく間に取り換えてしまったからだ。私が例の通り事務所に顔を出すと、主人は待っていたように、

「さあ、これからが本格的な仕事だよ」と私の肩をやさしく叩き乍ら静かに云った。しかし、その声には止どめを刺すようなきつい調子が含まれていた。店先にはハイヤーがちゃんと用意され、私はせきたてられるように乗せられた。ハハア、いよ／＼プロカーの片棒でもかつがせられるんだな。これが私の頭をかすめた正直な印象である。車はかなりの距離を走り、郊外に出た。おそらく街道筋らしく、スピードを増すにつれて人家がまばらになり、田園地帯を突走るとちよつとした邸宅風の建物の門前で車はスピードをぐっと落し、門内にすべり込んだ。はげしく警笛を二回鳴らす。車が大きく揺れて停まると主人は「やれ／＼」という顔で私をチラッと眺め降りるように促した。玄関が小開きに開いて男が二人現われる。頭はいが栗坊主で、股引前掛姿に半纏をはしよった、ちよつと庭師風に見えるいでたちである。しかし体格はいずれも堂々たるもので、眼は刺すように光っていた。

「ご苦労さんでした、この方ですね」

一人の男の鄭重な言葉に主人は合槌を打った。私は案内されて建物に入ると、磨きあげ

られた廊下が続いていた。上り口には『一禪亭』という額がかゝっている。これといって豪華な飾りつけはないが、粹を凝らした造りが廊下を挟むすべての建具に感じられた。彼等は私を引立てるように廊下を小走りに幾つも曲り、手垢で黒ずんだ格子戸の前で止まった。傍の引手が引かれると格子戸は滑るように引きあけられる。一人の男が腰をかゞめて入ると、にやりと笑い「さあ、どうぞ」と私の手をぐっと攔んだ。背中をどやされる激しいショックと格子戸がしまる響きがほとんど同時だった。私は一段低くなった内側の廊下に転がっていた。私は恐怖と不安に激しく胸をゆすぶられながら憤りの言葉を発した。しかし、それもので途切れて声にならなかった。奥のドアが開くとイガ栗頭が二つ飛び出した。彼等はいずれも晒の禪一本に『一禪亭』と染め抜いた短い水泳被をはしよっていた。男は私の尻を蹴りあげると、彼等に命じて一つの室に引きずりこんだ。

「さあ、これで娑婆とおさらばだ、さんざ遊びせてやったんだ、これからせい／＼仿いもうおうぜ」

男は皮肉たつぷりに捨独白を浴びせると、彼等に次の段取を命じた。私が引きずりこまれた室は、あきらかに脱衣場であり、硝子戸をへだて、風呂場の湯気がもう／＼と立ちこめていた。高窓からは午前の光がまぶしく射

しこんでいる。

「裸になつて娑婆の垢をきれいに落すんだ。借物の洋服がよごれるから早く脱ぎな」

私の体から、むしり取られるように、すべての衣類が取りのけられ、私のために準備されていた段取が、彼等によつて素早く行われた。頭髪は綺麗に刈り取られた、ひげも脛の毛も剃られた。私は麻酔をかけられると、うつ伏せに倒された。針を入れる小刻みな感覚が私の尻を這いずり廻った。かなりの時間がそれにとられると、風呂に入るように命ぜられた。水法被の男たちも素っ裸になり、あつけにとられる私の体を洗うというより磨きはじめた。それは実に手際よく行われた。最後にオイルが全身に塗りこまれ、いわゆる仕上げが出来ると脱衣場の一侧をふさいでいる鏡を背に向けて立たされた。脱衣場には背広も下着もなくなっており、真新しい禪が一本、足もとに置かれていた。男は私に禪のしめ方を威しまじりに教え、私が馴れるまで繰り返して命じた。私は自制力を完全に失つてしまひ、命ぜられるまゝに行動した。私が禪を満足に締め終ると、男は始めて鏡を見るように命じた。私の体は高窓から射しこむ光に輝きちようどダヴィデの像のように美しかった。しかし、私のボーズはぎこちない不動の姿勢であり、しかも房々とした頭髪はもはや私の頭から落されていた。更に驚いたことには私



の尻——一筋の溝に喰い込んだ禪の真白な白線によって分けられた尻のふくらみには宿命的な烙印が彫りこまれていた。それは鮮やかな化粧文字であった。一つのふくらみには『一禪亭』という屋号が彫られており、他のふくらみには『風太郎』という、おそらく私の、奇妙ではあるが新しい半生を支配する呼名が彫られていた。

「どうだ、いゝ名だろう、これから風太郎と呼ばれたらハイ、ハイ、ときびく返事するんだ。お前、見かけよりいゝ体じやねえか、だんくゝ気合を入れて体をこしらえてやるからな、有難く思えよ」

男は重々しく云うと、私の尻をピシヤッと叩いた。そういえばすっかり錯乱していて眼にとまらなかつたが、水法被の男たちの尻にも、私と同様屋号と呼び名が彫りこまれていた。つや／＼しく磨きあげられた尻たぶには奎助という呼名と杏平という呼名がくつきりと浮きあがっていた。

これが終ると、私は、親方に引き合わされた。彼は小太りした如何にもテキ屋の親分といった感じの男であった。眼には鈍い光を湛たえ、口は残忍にゆがんでいた。私が連れてこられた室はちよつとした道場を思わせるような作りで、床は板張りで冷やりとした感じが漂っていた。親方は半ズボンに臍脂のセーターを着け、タバコをくゆらし乍ら、前に曳

き出された私をしげ／＼眺めた。ちようど狼の餌食になる小羊のように私は固くなっていた。……私はあらかじめ教えられていた通り頭を下げると、「氣をつけ」の姿勢をとり、軍隊式に大声を挙げて姓名申告をした。といつても私の場合は姓はなかった。親方は徴兵検査だと冷やかしか半分には笑い乍ら私から禪をはずさせ、体を丹念に調べはじめた。親方のグローブのように大きな手はところ嫌わず、私の体を這い廻った。室の片隅に横たえてあった六尺棒を握ると、それで床を激しく叩き乍ら氣合を入れていた。

「二日程、がっちりきたえてから、座敷に出て、私の立姿をカメラに収めると。姿を消した。一糸纏わぬ私の直立不動の全裸像は、文句なしにカメラに収ったように思われた。デッド・エンド、私は大きく口をあけた虚無の中に肩を張っていた自尊心が跡形もなく崩れてゆくを感じた。

私の運命の日は、このようにして始つた。まず、このあたりで『一禪亭』とは、どういふところか説明することにしよう。『一禪亭』には私と同様二人の『兵児』がいる。へコというのは鹿児島の方言で男——禪に共通する言葉で、禪をつけた男という意味である。つまり一禪亭の商売道具なのである。おそらく親方が鹿児島出身であるところから

きた呼名らしい。このうち十五人のへコは私に続いて入って来たもので、いずれも私よりも若い。年令では私はむしろ年長者で十六、七才から三十二、三才迄、いろ／＼である。

つまり客の要求に応じられるように年令を案配するのである。したがって若手は毎年補給しなければならぬので、一年に一人——二人の割合で入亭させられる。彼等はあらかじめ選沢されているので、いずれも筋肉質のかなり均齊のとれた体格で、しかも申し合せたように身寄りが無いのである。へコは強制された環境の中で一定期間に次第にマゾ的な感覚を自ら養成するような仕組になっている。なぜかという、客はすべてサドで、彼等の要求にしたがって行動しなければならぬからである。一禪亭には一つの大きな室といくつかの小部屋がある。小部屋は客が一人のへコを独占出来るように作られている。遊戯は夜行われ、夜明けと共にへコは解放され、就寝することが許される。客はすべて会員制度でこの会員券を獲得するために多額の代価を帳場に支払うのである。薄暮になると彼等はそれ／＼符牒のついたチケットを持って、人目につかぬように一禪亭に集り、まずへコ選びをするのである。へコ選びは見世場で行われる。見世場にはへコの全身像の写真が並べられてあり、それによって帳場に指示し、客の好みにあったへコを受けとるのである。へコは

平常、水法被をはしよった六尺禪一本の姿であるが、遊戯場に曳き出される時は、客の注文によって禪をはずして全裸になる事もありまたサポーターを着けたり、ブリーフやキヤルマタを着けたりする。色彩はそれに応じた物が用意される。私はナイロンのサポーター禪を着けさせられたり、おしめカバーを着けさせられたりした事があつた。このような場合は殆ど女性の客がついた時で、彼等は男性に比べかなり趣好にうるさかつた。男性は、ソドミーの傾向のものが比較的多いようだった。ヘコは格子戸を出されると、逃亡を防ぐために手錠と首輪をつけられ、遊戯場に入ると手錠だけははずされる。

一禪亭には二人の世話役に一人の世話頭がいた。彼等はすべて総刺青で、世話頭は背面全体に登龍の刺青をしていた。彼は普段は股引に前掛姿だが、遊戯場では真赤な六尺禪をきりつと締め、革鞭を片手に指図していた。格子戸を境に、いわゆる座敷とヘコ場に分れているが、二人の世話役はそれらの持場に分れてヘコを監督した。例の男はヘコ場の世話役で『辰さん』と呼ばれていた。ヘコは辰さんを含めて世話役を頭（カシラ）と呼び、世話頭をお頭と呼ぶわけにならない。また親方は親方様と呼ぶのである。まず、座敷の説明に入る前にヘコ場の生活に触れておこう。

主な日課について、項目別に説明すると、次のようになる。

#### 一、起床——点呼

起床は午後二時である。辰さんは二時になると寢室の出入口についているベルを押し、「起床！」と呼ぶ、ヘコはこれによって叩き起される。ヘコの寝具は、毛布を夏は一枚、冬は三枚あてがわれているだけであり、禪一本で寝るのである。それも就寝用の三角禪にとり換えて寝なければならぬ。何故かというとならぬ。同性愛はいうまでもなく、自慰行為は絶対に禁じられており、両手を禪にかけてはならない事になっている。従って万一禁を犯した場合、前袋一枚だけの三角禪だと簡単に目立つからである。（親方はこのようにヘコのエネルギーの消耗を極度に抑え、商品としての能率を最大限に発揮出来るように心を配っている）

ヘコは辰さんの棍棒に追い立てられながら短時間に寝具を整頓し、廊下に一列に並んで親方と世話頭の点呼を受ける。入亭の順序で整列するのである。親方はタバコをくわえ乍ら世話頭を従えて入って来る。辰さんは親方に人員を報告し、番号をつけさせる。これが終ると彼はヘコに向い、頭のとっぺんから爪先に抜けるような余音のある声を張りあげて「ごかあーいちようー」（御開帳）と命令する。ヘコは一齊に腰の結び目をパツとはずし

前袋がよく見えるように親方の眼前に差出すのである。一列に並んだヘコの列は高窓から流れる午後の強烈な日光に照し出され、まさに偉観とも奇観ともつかぬ光景を現出する。親方は更に一人々々の体を検査する。親方が前に立つとヘコは呼名を大声で申告し、自分で号令をかけて検査しやすい態度にポーズをとるのである。両手を直立にあげ、気をつけの姿勢で腰を落し、両膝を開く、これが終ると一歩前進し、四つん這いになり、親方が尻を叩くと不動の姿勢にもどり、一歩後退して旧位置に復する。これで点呼はすべて終る事になる。

始めて点呼を受ける者は、誰でもこの異様な光景にまごついてしまう。雪太郎というヘコが入亭し、このヘコが始めて点呼を受けた時だった。彼はまだ十七、八の少年期を脱したばかりの水々しさを体全体に湛えていたが肢体は完全に成熟していた。彼は雪太郎という呼名にふさわしく、きめの細かい白く、すいて見えるような感じの美しい肌をしていた。彼は禪姿を人前にさらす事さえ恥しいらしく全身を震わせていた。しかも昨日からたて続けに受けた激しいシヨックで前袋にかなりの汚れをこしらえていた。彼は他のヘコにならって、あわてゝ禪の結び目をはずし、前袋を親方の眼前に差出した。親方はそれを取りあげると、「この新入、もう色気を出しやがっ



て」と舌打し、まじ／＼と雪太郎の顔を眺めた。どう料理すべきか思案している風にさえ見えた。親方は世話頭にさ／＼やくと、彼は心得たといわんばかりに雪太郎から輝をとりあげて、くるつと丸めその口の中につめこんだ。彼は最右翼の古参へこの左助に一条の紐と鉛の鐘りを持って来させると、雪太郎の首にぶらさげた。彼は一列に並んだへこの前を鐘りが床とすれ／＼になるように中腰で歩かせられた。世話頭は、彼の尻を棍棒でこづき廻した。他のへこにとってはもはや日常茶飯事になっている、このような折檻も、雪太郎の羞恥心を極端に掻立てた。彼は大粒の涙をポロ／＼落し、鼻で激しく呼吸し乍ら廊下を往復した。

ところが現在の雪太郎はへことしての生活のスタイルが、ある程度、板についたように見える。前をびったり押さえている輝の緊縛感に満足した面ざしさえ感じられた。

## 二、用 便

便所は完全に開放されていて、四つの雪隠が一列に配置されたタイル張りの水洗便所だった。雪隠の側に蛇口がとりつけられ、それ／＼一本のホースが飛び出している。また前にはオイル瓶と海綿が備えつけてあった。また雪隠には絶えず溢れるように水が流れていた。へこは用便する前に浣腸をかけられる。しかし、生理が日課に完全に順応するように

なった者は除外された。へこは雪隠を前に四列縦隊に並び、不動の姿勢で順番を待つ。辰さんは最前列の者から順々に四人一組で号令をかける。

「カカレ！」

へこは一齊に雪隠をまたいで排便する。

「ヤメー」

用便のすんだ者は始めて六尺輝と水法被を着ける事を許され、次の行動の指示を待つ。

私は入亭の翌日始めて浣腸をかけられ、用便を待つ間も、もどかしい程、便意を催してやりきれなかった事を憶えている。ぐっとこらえる勢で不動の姿勢が崩れると、辰さんの怒声が割れ鐘のように私の耳をひきさいた。新しく入亭した者で、こらえる事が出来ず、不用意に排便する者がかなりあった。彼等が受ける懲罰は、両手を前について額を床にすりつけ、不始末した汚物を甜めなければならぬ。従って新入りのへこは雪隠を跨ぐと始めてホッとした顔になるのである。

## 三、掃 除

掃除は、古参が座敷を、新入りがへこ場を担当する。座敷に入るへこは二人一組で、それ／＼片足に足錠をつけられ、一定間隔の鎖でつながれる。へこ場を担当する四人のへこを残して他のへこは座敷にかゝるようになってくる。お頭と頭の間断ない命令に手際よく対処し、行動しなければならぬ。尻を追

たてる革鞭の音がひっきりなしに建物中をこだまし、あたふたと駆けずり廻るへこの眼は血のように燃えていた。座敷の掃除は床や建具をつや布巾で磨きあげる事から始まる。床の一侧に一列になって、尻を並べたへこたちはつや布巾を両手でしっかりと押さえ、頭の、「廻れ!」「廻れ!」という号令で、四つん這いの姿勢で床を往復するのである。頭は尻に彫られた呼名を見廻して、要領をつかっているへこを発見すると、たちどころに容赦なく打ちさえる。膝を床につけたり、腰を低くしたりするへこは、その都度、怒声を浴びせられる。へこたちは水法被と輝を汗でぐっしり濡らし乍ら、毎日、この試練に耐えなければならぬ。掃除は更に遊戲に使われる風変りな道具類や責具を磨いたり、整頓しなければならぬ。へこ場では建物の清掃が終ると、新入りは二組に分れて洗濯と炊事を行う。洗濯はへこの水法被と輝が主で、水法被と六尺は毎日、三角輝は二日に一回ずつ取り換える事になっているのでかなりの分量である。その他、一輝亭のすべての洗濯物を引受けなければならぬ。山と積みあげられた輝は禁欲生活をしいられた男独特の臭気を発散し、洗濯場に充満する。私は始めてこの臭気に接し、めまいを感じたが、へこの生活が身につくにつれて、一枚々々輝をほぐし、洗濯するのが楽しみにさえなった。今、雪太郎

と弥太吉がこれをやっている。この二人の若いヘコハ——特に弥太吉は新制中学を卒業した程度の年令である。——この異常な環境の中で生長する事になった。彼等は体を完全に

露出することにも次第に馴れてしまい、下腹部を締めつけている禪の緊縛感にさえ、新しい楽しみを覚えるようになったらしい。男の臭気に掩われた生活にとけこみ乍ら、知らず

知らずソドミの傾向を助長させていた。古参のヘコたちが寝室で前袋一枚の禪をかけている美しい筋肉質の体をうっとり眺めていることがよくあった。(次号へ続く)

## キクに捧ぐ

# 私のアイデア集大成

編集部の皆様へ

佐々木ツトム

## 第一部 絵について

(一)キクの表徴(表紙、その他について)

奇譚クラブのマークをこしらえては如何でしょうか?これはずっと以前から考えていました。菊の花は四十日の寿命があり、花の中では随分長い方です。それにその種類の多い事もその美しさも非常に複雑です。その菊の花をうまく変型して、それに奇クを暗示するような何かを組合せてマークにするのです。そしてそのマークを表紙に載せては如何でし

よう。これまでの画も中々味がありますが、マークだけの地味な表紙は一層深みを感じられ、どっしりした貫祿があります。派手な画よりも渋味のあるマークの方が、書店売りする奇クではないので、かえってよいのではないのでしょうか。菊の花と組合せるものとして考えられるのは、美しい鞭と蛇のようにどろろを巻く紐、又は恍惚の表徴。或は十字架のようなもの。但し、骸骨やお化けみたいな怪奇的なものは賛成出来ません。

## (二)泥田の女斗地獄区絵

映画「苦い米」の中で、出稼ぎの女達が集団で水田の中で泥んこになって、凄惨な格闘を演じるシーンがありました。以来、女の集団斗争シーンになみなみならぬ魅力を感じています。あれからヒントを得て、日本の女と白人の女の集団斗争を頭に描いて見ました。画にはならないでしょうか。

(1) 体の大きな、まるで豚の様に肥った赤ら顔の白人の女が、水田の中で足を取られ泥んこになって転がっています。そこへ小柄な日本の女が躍りかゝって散々殴りつけているシーン。白人の女は必死になって起き上ろうとしますが、何分、泥田の中で足がかりがなく空しくもがく太い足、空を掴む手等。一枚

(2) 取っ組まって髪も乱れ、歯をムキ出して共に醜い凄惨な表情。お互いに相手の肩に鋭く爪を喰いこませ必死の斗争。これは立業。共に踏んばった両足は深い水田に隠れています。以上三枚。

(3) 泥田に突き飛ばされ、起き上ろうとものがく日本の女の頭の上に、白人の女の泥足が載



せられ、ぐいぐい重圧を加えている。

(4) 大きな体軀の白人の女が、泥田の中に倒れている日本の女の髪を片手で掴み、片手は口の中へ泥にまみれた稲の穂を押し込んでいる凄惨な光景。虚空を掴む日本の女の可憐な白い手。鬼の様な形相の白人の女の顔。一枚

(5) 激しい乱斗に、乳房も腹部もムキ出しになつて互に肌と肌を密着し、何んで切ったか一筋二筋、泥にまみれた乳房と腹部より血が流れている。攻勢の上位は白人の女、守勢の下位は日本の女。白人の女の片手は日本の女の毛髪をしっかりと掴んでいる。日本の女の片手は白人の女の乳房を強く掴み、片手は空しく空を掴んでいる。

(6) 組み敷かれて最後の抵抗を試みる日本の女の頭を、白人の女は泥の中へ押し込めようとしている。相方共凄惨な形相。

(7) 互に泥を掴んで投げつけている。日本の女の顔も泥にまみれ、その下より美しい目が少し見える。白人の女の乳房に泥が一杯ついているが顔にはついていない。

以上が第一場面、第二場面は

(1) 体の大きな豚の様に肥った白人の女が、ようよう起き上つて日本の女の首を右腕で抱き込み、泥の中に押し込めている。泥の中に顔を突込んで息も絶え絶えの日本の娘は、お尻がむき出しになり汗まみれの肌に日光が映

えている。

(2) ゴジラの様な顔になつて取っ組み合っている立業の二人は、次の場面では、やはり体の大きな白人の女が有利な体勢をしめ、相手を押し倒して組敷いている。組敷いた相手の肩に、ゴジラのような歯が喰込んである。日本の女は両手を空にひろげて苦痛の叫びをあげている。

(3) 白人の女の泥足を頭にのせられた日本の女は、それをはずして両足にかじりついて持ち上げようとするが、逆に乗りかゝられて今度は首を両足の間にはさみつけられる。

(4) 口の中へ泥にまみれた稲を押し込まれた日本娘は、全く抵抗のつきた形で、白人の女は更に彼女に重圧を加える。

(5) 大きな白人の女に組敷かれた日本娘は、胸絞めにしめられて、折角掴んだ敵の乳房を離して全身でもがいている。勝ちほこった白人の女は、尚も強く痛めつけようとする。

(6) 泥の中へ顔を深くつつこまれた日本の女は、わずかに後頭部が出ているだけである。

(7) 乳房に泥のついた白人の女と顔に泥のついた日本の女が組合っている。白人の女の胸が日本の女の顔を圧迫して、目も鼻も口も泥んこの乳房でふさがれている。

## 第二部「名作と空想談」

これは、名作小説、有名な作品中より悦虐

加虐シーンをとらえて来て、次の場面は、どうなるか、又は自分だったら、どう描くかを空想するのです。

例えば田村泰次郎の作中に『肉体の門』という小説がありますが、この小説の中に「お紋」という入墨の女と、売春婦になり立ての「美和」という少女とが浴場で睨み合うシーンがあります。

今にも大乱斗になりそうな切迫した対話がありますから期待していたのに、この作品はめったに女同志では戦わないのです。美和はお紋の貫祿に圧せられ逃げ出してしまふのです。尤も捨てゼリフは強そうな事をいゝますが、結局は逃げたのです。次にそのお紋に女主人公、敬子の対立し睨み合うところがあり、お紋は短刀まで取り出しますが、これ又主人公の邪魔が入り組打ち乱斗にまで至りません。こんなシーンを捉えてきて「私だったら」と空想するのはです。で、もし二人が斗争したら、これは勿論、お紋に部がありそうです。体も大きいし年も上、経験も豊富、大陸の弾丸の雨の中をくぐった凄惨な女です。だから此の勝負はお紋の勝としても、どこまで美和が善戦するか見物であり、又勝ちほこったお紋がどのように、憎い相手を痛めつけるか、アブニストの期待するところです。

次にお紋に女主人公敬子の一騎打であり、これは敬子も又、大陸育ちであり、しかも或

る人知れぬ秘密を強く抱いた激しい性格の女で、頭は非常によいのです。だから両女の激戦は、火が出る程の凄さを發揮すると思います。体力に於ては、お紋が有利、気魄に於ては敬子が勝っており、この一戦は最初は敬子の方がお紋を圧倒するでしょう。しかしお紋には奥の手があります。女の急所を知っている三十女です。敬子はいわば若く純な所があ

ります。で、気魄に圧倒されていたお紋が敬子の急所を襲撃してから俄に形勢は逆転します。毒々しい入墨の女、お紋に敬子が組敷かれて戦は長期戦の段階に入ります。こゝで始めて主人公の登場でもいゝし、もっと後になってもいゝわけです。こんな風に空想するのは。そういう物語を載せては如何でしょう？ 何も女斗に限りません。

## 〔通信〕

沼正三氏へ

昨年「潰滅の前夜」を発表させて戴きまして以来、数々の望外な讃辭に、深く恐縮しています。「家畜人ヤプー」を読み、その該博な知識で積重ねられた、がっしりした構成には、到底及ぶところではなく、裏返しの興奮の中で心から敬服しています。

私も仕事(書物とは縁のない職業ですが)に追われ続けています。ストーリーの展開に必要な文献資料を漁ったり、実地を見分したりする努力も払わず、加えて、筆をとることが絶えて久しいのに、野放図もなく空想を拡げてしまい、今更ながら、収拾に大童になっています。

六月号のおたよりに依る、相木に対する凌辱は構想の中に入っていないでした

## 土 路 草 一

それも面白いと思います。今後とも、よろしくお指導の程を。

甲斐仁参氏へ

四月号の讃辭、恐縮致しました。

併し、私に云わすれば、貴作「電気責に關するノート」は、激しい渦に捲きこまれた素晴らしい読物でした。続いて、続電気責木馬責、操り責、又、華麗なアイデアに、その上、伊藤先生の脚本に至る旺盛な活躍には、ただただ瞠目させられています。今後の活躍を祈ります。

尚、いろいろ文献資料をお持ちの御様子私も近々、仕事の関係で貴宅の近くに転居することになるかもしれませんので、その節はよろしく。

次に同じ田村泰次郎の『今日我欲情す』について空想談を御紹介しましょう。

この中で玉枝という肉慾のかたまりの様な女と、友人の財産を拐帯して逃亡中の中田という男が争うシーンがあります。どちらも相手に負けまいと力みかえり斗争します。作品には単に臚げに書いてあり、読者の想像にまかせてありますが、これは大抵の作品がそうなのです。で、読者は勝手に想像していゝわけです。私の想像ではなくて空想です。この二人の斗争のシーンを描いてもよいのですが平凡ですから、これは止めて、もっと空想をたくましくして全然違ったものに置き換えます。玉枝も中田も氣は強いが生ぶな処がある。負けるのが嫌なので強がりというところは同じです。先ず口論から始ります。「うるさいすべため……」パチンと玉枝の頬が鳴りくやしきの余りむしやぶりつき、組んでほぐれつの大乱斗のため帯もとけ着物も脱げるがまだやめ様としない。

「こいつめ、これでもか。」

「畜生、なにくそ。」

二人共、怒号と叫びをあげて乱斗を続けます。

以上の通り、前回に洩れた私のアイデアの追加を書いてみました。御批判を賜れば幸甚です。



# 黒いペチ・コート

(マリアンヌの手記より)

原作 セシル・フォーレ

翻訳 鴉 嘔吐 夫

夫の突然の死は、やはりマリアンヌにとっては嬉しい事であった。  
嫌って嫌って嫌い抜いた夫であったからである。

ベッドに取りつけられた、鉄の環、壁に並べられてある、様々な形の鞭、どれ一つとして彼女にとって、屈辱の思い出でないものはなかった。

彼女は始めて、自分の周り全体に明るい自由がやって来た事を身にしみて感じた。唯一つ彼女が最も困ったのは、女中のジュリヤの処分である。

十日前、彼女はいつものように夫の寝室へ呼び入れられた。

夫のローランドは、その日、馬鹿に機嫌が良く、入ってくる彼女を見ると、まるで幼稚園のお話の先生が、生徒に、にこやかに話しかけるように、笑い乍ら言った。  
「さあさあ、私の優しい小猫ちゃん。御用意はまだですか」

それでも、いつものように、のっけから、脅しつけられ、哀願も悲鳴も聞かれずに、御仕置きを執行されるよりは彼女にとっては、幾らか気分の良い事であった。

「ハイ、お殿様。只今から、有難くお受けさせて戴きます」

命ぜられた通りに、即座に答えると、彼女は薄い紗の寝衣を、スルツと脱ぎ、ベッドの上に腹這いになった。

両手両足は、間もなく、夫の手によって、

四隅の環に括りつけられた。体がえびのようにそり、僅かに腹部が下の布団につくだけの苦しい姿勢になった。

「小猫ちゃんが一番好きなお菓子は何ですか？」

と言う夫の言葉に、やはり彼女は言いつけられた通り答えねばならなかった。

「先がゴムでできた、胡椒お菓子をお願いします。どうか沢山戴かせて下さいませ」

ローランドは、壁から一本の鞭を取って持って来た、把手が太い固い木で出来ており、中央から先にかけてずっと細くなっている、しなやかなゴムがはめられている。

ピシリ、やがて激しく振り下された鞭によって日課のお仕置きが始った。彼女は呻き声を押えようと心死になって耐えたが途中から

とうとう我慢できず、大声で泣き出した。

その時、俄に、ドタリと大きな音がした。

それきり、幾らたつても、夫からの鞭が来ない。泣き叫ぶのを止めたマリアンヌが、ふと気付いて、不自由な体で、振向くと、そこには、ローランドが、胸に手をあてて、口から泡を吹き、苦しんでいた。彼女はびっくりして、今度は、女中を呼んだ。

「ジュリヤ！、ジュリヤったら、早く来ておくれ、旦那様が大変だよ！」

だが、いつも主人夫婦の寝室での物音には絶対関知してはいけなさと、固く止められている女中は、幾ら呼んでもなかなか出て来ない。マリアンヌは、己れの恥しい姿態も忘れて、必死に呼びたてた。

やっと、異変に気付いて、部屋の戸を薄目にあけた女中は、そこに倒れている夫よりも彼女がふだん尊敬して、畏れている女主人のマリアンヌが、ベッドの四隅に両手両足を括りつけられている無惨な光景にびっくりした様子をして、

「奥様、まあ何と云うひどい事を」

と叫んだ。彼女は、マリアンヌの手足をほどくと、すぐそこにあった寝衣で女主人の体をくるんで抱えた。マリアンヌは女中に、

「私の事は良いから、旦那様の事を」

と命じた。女中は、主人の傍に近づいたが額に手をあててすぐ

「奥さん、これは脳溢血でございます。すぐお医者さんと呼んで来なくては」

そう言つて、電話口へかけて行った。マリアンヌが服を着終えたか着終えぬ中にすぐ医者がやって来て、ローランドを診たが、既にその時は、彼は鞭をしっかりと握り、怪しい微笑を浮べて、絶命していた。

それ以来、葬儀、後片付けと慌ただしい思いに捉われて、日が過ぎ去ったが、やっと落着いて来た、今日この頃になると、すべての秘密を知っている、女中のジュリヤの存在が彼女にとっては、却って邪魔になって来たのである。

一人ぼっちの部屋で何気なく物思いにふけていると、紅茶などを持って入ってくるジュリヤ。その彼女の瞳にかつて、自分の裸の見苦しい姿が、すべて映じてしまっているのだと思うと、彼女は我慢できない苛立たしさを感ずるのであった。

## 二

或日、ジュリヤが何時もの様に、ケーキを運んで部屋へ入って来て、ぼんやり考えこんでいる、女主人の前において、黙って立去ろうとしたが、その前にチラと彼女は奥の寝台のある方に眼を走らせた。その視線をす早くとらえたマリアンヌは、

「ジュリヤ、お前、今何を見たのだね」

と意地悪く言った。

「ハイ、奥様」

ジュリヤは、とたんに真赤になって、立ちすくんだ。そしてワナワナ震え出した。

「どうしてお前は震えているんだい」

「奥様御勘弁下さいませ……」

何故かそう言つと、彼女はその場に膝をつき、ワーツと泣き出してしまった。そして、しやくり上げ乍ら言った。

「奥様、私は今まで、ずっと奥様と旦那様のなされる事を扉口の鍵穴からのぞき見ておりました。それは旦那様が是非共そうしるとおっしゃるからでございます。私は最初は恐しくて震えておりました。しかしだんだん日がたつ中に、いつか毎日覗き見る事が楽しみになって参りました」

「それではお前は、お前は……」

彼女はもう言葉も出ない程逆上して、いきなりそこに膝まづいているジュリヤを突き飛ばした。

ジュリヤはされるままになっていた。この時、マリアンヌの心の中には、今迄夫に痛めつけられてばかりいた自分の境遇が耐らなく羞恥の感情を誘うと共に、女中に対しての惨忍な怒りが湧き上ってきた。

地面に伏して恐れて震えている豊かな臀部が余計、奇妙な意慾をそそった。

いきなり傍に近づいてタイトのスカートを



ずり降すと、そこには薄い流行のナイロンのスリッパとパンティを通して、恐怖に震えている豊かな臀部がむき出しになって横たわっていた。

「それでは、お前は御主人様がいつもどうしたか、良くお解りだね。今日は私がその代りをしてやるからね」

「ハイ奥様」

ジュリヤは却って、なにかうるんだような瞳で、マリアンヌを見つめた。

やがて、その部屋から、狂ったように泣き叫ぶジュリヤの悲鳴と激しい鞭の音が聞えてきた。

### 三

最初の中は、自由がたまらなく楽しかったが、やがてそれにだんだんあきてくると、今

度は却って、彼女は、夫の事が懐しくさえ思いう出されてきた。

不思議な事に毎日、暗い絶望の気持で受けていた。あの激しいお仕置でさえ、今は楽しい事として思いう出されるのだった。

だがこれだけは、誰かに打明けるわけには行かない。彼女は悶々として楽しまなかったが、或日、夫の遺品を探している中、妙なパンフレットが、机の抽出の奥にあるのを発見した。

美しい花園に遊び戯れているヌードの女性の像の上に「パリ・インデセント」と書いてある。表紙をめくって見て彼女はアッと声を放った。幾つも柱が立っている大広間では、大勢の女達が、その柱の一つ一つに、さまざまな衣裳、さまざまな恰好で括られている写真が二頁一杯に天然色で印刷されており、各

頁毎にその中の女の一人ずつの、前むき後むきの、ヌード写真と、年令、身長、打たれた時の泣声の特長などが書かれてある。そして一番最後に、『本会は、フランス一流の紳士淑女

諸賢の御愛顧を蒙っている、我が国唯一の豪華な社交機関でありまして、特に趣味として鞭打たれたき御婦人に対しては、絶対に秘密を守り、充分にお楽しみになれるよう、特別な配慮を致しております』

と、書いてあった。彼女は読むともなく、読む中に、俄に体がポーツと熱くなつて来るような感じになった。彼女は心の中で考えた。

(私は真面目な貞女だ。二度と他の男の事を思つてはいけけないのだ。私は、いつでも夫の事を忘れないようにするため、もう一度だけあの痛い鞭打ちを味わなければならぬ。それがどんなに辛い事であっても、私は夫を思いう出するため我慢しなければいけないのだ)

彼女は、久し振りに町へ出た。オートユイ通りの彼女の邸から、本に書いてあった、クラブ・コンプレクシヨナー(Club Complexionnaire)までは約三十分ばかり離れておりバスを二度乗り換えた所にあつた。

彼女は、その、もう郊外に近い丘の上にある、一見何の変哲もない、白い家を眺めた。正面の門の傍の小さなくぐり戸をあけて、中へ入り、ひっそりした玄関に立って、そこ

の古びた鉄の鑑を叩いた。暫くして、中ののぞき戸から一寸のぞいた後、扉があいた。

そこには、顔にはまだ美しさを残している



五十位の肥ったマダムが立っていた。  
 「何の御用でございましょうか」  
 「私、あの……」  
 彼女は思わず真赤になって口ごもると、マダムはすべてを察したように



一日勤める毎に、毎日三千法ずつ支払われま  
 すが、ここに寝泊りして、仕事をしている間  
 は、厳しい規則を守っていただき、外泊や家  
 へ帰る事はお許しは致しません。後者の方は  
 まず千法最初に会費を払って戴ければ後は一

「まあまあ、ここ  
 では何ですから」  
 と中へ招じ入れ  
 た。

彼女はオズオズ  
 と中へ入ると、マ  
 ダムはすぐ扉に又  
 ガチャンと鍵を下  
 してしまった。  
 すぐマリアンヌ  
 は、一室に案内さ  
 れた。

彼女に向って、  
 マダムは、  
 「ここに来る女の  
 人には二種類あり  
 ます。お金をもう  
 けたいので自らの  
 体を、人々に提供  
 する人と、趣味と  
 して、打って貰い  
 に来る人とです。

回毎に五百法でどのように、いつお出でにな  
 ろうと御自由です」  
 「私は会費を払います」  
 彼女は千法と今日の費用の五百法とを出し  
 た。  
 「そうですか。そういう方に対しては、特に  
 親切に念入りに、お好みの道具、お好みの強  
 さで処置がされる事になっています。いずれ  
 にしても、もしこれからおやりになるのなら、  
 会員として必要な手続きをして戴かねばなり  
 ません。よろしいですか」  
 「それはどんな事でしょうか」  
 「登録して戴くのです。もし、貴方が、この  
 クラブを当局に訴えたりする事のないよう、  
 色々調べさせて戴き、書類を作るのですが」  
 「結構です」  
 「ではまず、次の部屋で、お召物を全部脱ッ  
 て、待っていて下さい」  
 「え？」  
 「お急ぎになって下さい。どうせここへ来ら  
 れたのですから、何も今更、ためらわれる  
 事はありません」  
 マダムの言葉に彼女は、誘われるように隣  
 室へ入った。クリーム色の壁にかこまれた明  
 るい部屋で、傍らに脱衣籠があった。彼女は  
 そこに、ブラウス、スカート、等順々に脱ぎ  
 捨てた。やがて裸になると、そこへ、マダム  
 がやってきて、



「では、その足の型のある所に一寸たつて下さい」

と命令した、彼女は、マダム一人なのに安心して、そこに立った。やがて暫くして

「では後を向いて」

言われて彼女は後ろを向いた。

「結構です。これで貴女の登録はすみしました」「えっ？」

「もう貴女のお体は前と後と全部只今写真にお撮りしたのです。もし貴女が、私達の事を外にお洩らしになれば、貴女の写真も一緒に当局に押収されるのです。解りましたか」

彼女は始めて、この恐ろしいカラクリを知って呆然とした。

マダムは、手に持っていた黒いものを、マリアンヌの前にほうり出した。それは、ナイロン製のすけてみえる、腰から下だけを掩うペチコートであった。

「それが、この家にいる女の方の、趣味の方の制服です。この家に来られたら、一切のものをすぐ脱いで、それをまとわねばなりません。その仕度をしない中は、この家の中のどこも歩けないのです。」

彼女は、黒いペチコートだけを体の上につけた。体中まるですけて見え、裸でいるより却って恥しかった。

「さあ！、入会の手続きはすみしました。それでは御案内致しましょう」

マダムは、そう言って、彼女を連れて、その部屋を出た。

#### 四

「ここは、特に恥かしがり屋の人や、身分の高い御婦人の為の特別室です。銀幕でおなじみの女優さん達が顔を知られるのを厭って、使う事もあります。普通はあまり使わない事に致しております」

マダムは、紅いビロードで囲まれた部屋を指してそう言った。

それは如何にも優雅<sup>エレガント</sup>に出来た、貴婦人の遊びにふさわしい部屋であった。そこを出て、二人が廊下を歩いて行くと、紅いペチ・コートの女が二、三人すれ違い、マダムに挨拶して、通り過ぎていった。

「あれが、この家に寄宿して仿っている、私の可愛い娘達ですよ。これからお客様のお好みに応じて、二階のお部屋の方に行く所です。貴女方、御趣味の方には、一寸ひどすぎてもまだとてもお見せ出来ません。貴女方はこの下の方のお部屋でお楽しみして戴くわけです」

やがて廊下がつきて、扉をあけると広い円形の部屋になった。

あちこちに、柱がたっており、さまざまな形の寝台や椅子、木馬等がおかれてある。

女達は、皆、黒いペチコートを、脱ぎ捨て

たり、まくり上げられたりして、色々な恰好で、縛り付けられていた。

「どの恰好がよろしゅうございますか。まずお馴れになった方法でおやりの上、順次代った恰好をお試めしになるのも一興かと思ひます」

彼女は、黙って、椅子を指さした。

椅子にうつ伏せに縛りつけられるのが、夫と行った、苦難の時に一番近い恰好に思えたからである。

やがて、この家の、職員である、黒い皮のブルマーと皮のブラジャーできっちり身づくろいし、黒い皮の手袋をつけた、体の良い女達がやって来て、彼女の体を掴むと「奥様、それでは暫く、私達のいいつけをお守り下さい」

と命じた。彼女は、これからくる苦痛と快楽を思つて、身がしびれる程の感じを持ち乍ら、黙って領いた。

やがて、女達によって、彼女の体は、椅子に括りつけられた。

既にあちこちの柱や、木馬で、四十位のでつぶり肥った貴婦人や、美しい人妻らしい女や、まだ幼い女学生のような女達が、ぴしりぴしりと打たれ、悲鳴を上げたり泣き叫んでいた。たりした。

「奥様、お鞭は何に致しましょうか」

「私、夫がいつもゴムの鞭を使つておりまし

「承知致しました。それでは暫くお待ち下さい」

「やがて、そこへ、一人の上品な紳士がやって来て彼女に、静かに一礼すると、かたわらの鞭をとり上げ、最初は、やわらかく、打ち出した。

それでも、それは暫く夫の鞭に遠ざかっていた彼女は応えた。

「ウウッー」

と思わず悲鳴を洩すと

「どう致しました。少し強すぎましたか」

紳士は訊いた。だが彼女は思わず、

「いいえ、もっと強く。このペチ・コートも脱って、直接肌の上へ」

と言ってしまったのである。紳士は、そつと、ナイロンの下着を、背中の方にたくし上げ、又鞭を振り上げた。

## 五

二時間ばかりの快楽と苦痛の時が終ると、彼女は、部屋に戻って、衣服をつけ、その家を出た。

彼女の心は、すっかり晴れやかになっていった。

（私はこれで、夫の事を思い出す事が出来たのだ。打たれている間中、私は、ずっと夫の事を思い続ける事が出来た）

それは心からの満足した思いであった。

セーヌの岸辺を歩くと、まだ、カッカッとほてる臀部、苦痛でズキンズキンと痛む、背中や太股に、服の上から冷い春の風があたって快よかった。

（私は、だけど、二度とあんな所には行かないわ、私は第一、痛くされるのが、あんなに嫌いだったんですもの。それに、大勢の人の前で、ペチ・コート一枚の裸にされるなんて幾ら考えても恥しい事だわ）

彼女はそう心に何度も言い聞かせていた。

春の宵は、まだ暮れるに早く、川岸には若い恋人達が、手を取り合って散歩していた。

じつと動かず唇を合せている男女もあった。

その間を通り乍ら彼女は、むしろ一人身の自由を心から嬉しく感じていた。

（私は、いつでも行こうとすれば行けるのだわ、あのクラブに）

と思つて、ハッと顔を赤らめた。今の今、

自分で、もう二度と行くまいと心に誓ったばかりではないか。それなのに、もう又行く事を考えている。自分は、夫に、何年もの間、

毎日休みなく、打たれ続けている中に、打たれなければ、却って我慢できない、体質になつてしまったのであろうか——と、この時、初めて、彼女は恐しい事実が気がついて、慄然としたのであった。

セーヌの夕暮れは、まるで浮気心を誘うよ

うに生暖い春の気候に閉じこめられていた。

——(了)——

## 〔後記〕

### △マリアンヌの手記△

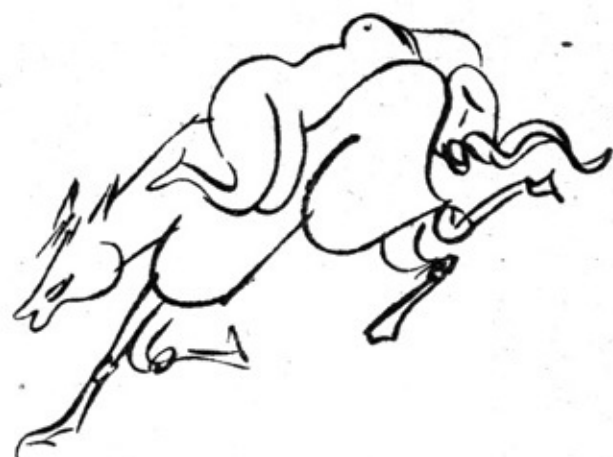
- 第一章 痛められし桃の実
- 第二章 黒いペチコート
- 第三章 赤いペチコート
- 第四章 文部大臣の専属室
- 第五章 狂い泣く大交響楽

本篇は第二章の中の約四分の一の抄訳です。

（註）本書は筆者が、横浜散策中駐留軍将兵用の古書籍屋で偶然見つけた秘本で、全頁三〇五頁中殆んどが、マリアンヌの受けた苦難の被虐状態に就いて記されてある。その大部分は相当改訂を加えなければ発表出来ない性質のもので、かつて翻譯のあった、泣き叫ぶ青春や、ロシヤ踊子の日記等の様に市販するわけに行かなかったものと思う。

ここに、その第二章の一節を試みに訳出してみたものであるが、御希望があれば、これからも各所を訳出して諸兄姉の御高覧に供したいと考えている。おそらく、サドの名著、ソドムの百二十日を敢てしのご凄烈な書となることが信じられる。





# 女斗美遍路

土俵四股平

女斗美と云う新造語が生れてハヤ三十七年になる。時の大朝、大毎が書きたてた頃は、初生児だった女斗美も、今では中年の女性に成長してしまった。思えばこの四股平とは永いつきあいである。女房もまだ貰わぬ童貞時代からの恋人だとも云える。

私の母の義母にあたる玉子未亡人は、その名の如く、煮ぬき卵のような肌の美しい肥満型の婦人で、真夏は洋服だと云って半裸によくなられたし、錦絵に見る横綱、大関の風格がそなわっていたので、子供の私に対してはよく土俵入りの真似をして、四股を踏んで見せて下さったものだ。

そんなことが原因して、私の女斗美方面に關するペンネームは「土俵四股平」と名乗る

ようになった。この雅号？は、たしか昭和二年の産で、宮武外骨翁の「滑稽新聞」に執筆した頃から用いたように記憶している。

最近になって私のこの新造語を、たゞ単なる女性の格闘に冠する人があらわれているが生みの親としては誠に迷惑である。「美」の字忘れて女斗ばかりでは脱線もはなはだしい女性の格闘に「美」を見出すことは、よほどその実態を研究せねばキャッチ出来ないポイントなのである。女子プロレスや女相撲、単なる女の喧嘩を見て「女斗美」であると云う人があるなら、それは困った世の中になるだろう。

女斗美は、どこまでも「美」の世界である。古川柳に「女千人ずらりと並べ裸で相撲が取

らせたい」と云うのがあるが、女千人並べたらずまず五百組の相撲が見られよう、だが千人の内の何人が、五百番の内の何組か、私共の求める「女斗美」を発揮し得るやは疑問である。

私には女斗美に關する旧友としてH氏やG氏がいるし、ファンも相当数ある。門下生としては、研究所時代の福田千代美や大野珠子もいたし、近年では北海千珠子や矢筈順子も話題にのぼるが、それ等三十有余年の過去を振り返って見ると、真実私と一体になって女斗美の真髓を把握した人間は、幸か不幸か一人もなかったように思う。それほど女斗美の探求は困難な道であり、メトミ道を歩む人影はこの土俵四股平たゞ一人のような孤独感にう

たれる。そんな日が来る年も／＼カレンダーのめくりと共に過ぎゆくのであった。

だが有難いことに美の女神は、新興美術の一つである「女斗美」を捨てようとはされなかった。私の青少年期に、強い憧れと慕情を感じていた、あの玉子の伯母に勝るとも劣らぬ美女を、天女降臨の如く私に与えて下さった。縁と云えば不思議がつきものだが、この師弟の縁は、たゞ男女が夫婦になる際、不思議な御縁で、と挨拶するような月並なものではなく、女斗美道の継承と宣揚のための旗手だとも云えよう。

彼女の本名は、本人の希望によってこゝ当分は発表を見合わせるが、女斗美道の蘊奥を極めんとする意欲と、描画表現の上達はすばらしいものがある。

女斗美は、若い健康な斗志に燃える美女の対応の美であり、組みぬかんとする全裸の曲線美である。女子プロレスでよく見受けるような、アクロバット式の業でもなければ、線香花火式の相撲でもない。

蛸と云う動物は、美女の表現には落第だろうが、その柔軟性と争斗のネバリに於て蛸はピタリと来る。美女人面の蛸が、八本の足に秘術をこめて格闘する場面は、たしかに女斗美の一斑を示すものと云える。蛸の足は八本であるが、事実美女全裸の寝業は、二手二足が複数に観取出来る場合がある。女斗美絵画

の表現上、一本や二本手足を多く描いても、決して不自然には見えぬものだ。

女斗美の美術的文学的表現法はいろいろある。だが一般には絵画手法によって、之を探求するのが一番近道だと云える。私と共に女斗美遍路をしている前記の娘K子は、日課として女斗美のデッサンをしている。最初は相撲四十八手の写真をモデルにして、之を女性化する練習をしていたが、どうも絵の人物が中性になって面白くない。レスリングの型も一応は筆にしたが同様の弊がある。さる二月頃からは自由に自主的なモチーフによって構図するようになってグン／＼迫力を出して来た。今では平凡なポーズはどこにも見られなくなってきた。

K子は一日一、二枚しか描かないが、描画中は師の私も近づけない。隙見すら許さない厳格さである。私もその真摯な態度をこよなく感じているので自由にさせている。

「先生、ちよっと直して下さい」と、見せに来る迄、私の楽しみは大きい。画面の人物は全裸の女性である。なまじズロースや腰巻を描くと下品になる。だから一切全裸で描かしている。恥毛はやゝ誇張して濃くひろく描かせる。これは頭髮とのバランスのためで、日本人は黒髪がきいて、全体の重量感が減じ、顛倒感が増すからである。

真迫力の構成は、なるべく顔面を見せぬよ

うに描くにある。これは一種の秘訣だとも云えよう。顔面がハッキリしないと鑑賞者の想像力が仿いて、描画によってうける固定された表情でなく、自由な表情が刻々に眼底に浮ぶことになって魅力は無限大となる。

次ぎに問題となるのは胸乳であるが、之を隠ませることは、真剣味が増大する。しかし双方が下腹を襲う迫力には及ばない。一般に公開する場合は、誤解を招く心配もあって、股間を襲う構図はさけるが、非公開な私室でのデッサンは九分迄がこのポーズとなる。その理由は、肉体の中心が臍下にあること、重心との関係上そこへ手を運ぶことによって、紐を丸結びにしたような詰めの気持が表現されるからである。頭部を股間へ突込む、相撲で云う「居反り」的なポーズも同様である。それは恥部をもてあそぶ性技を意味するものではなくて、女性特有のやむにやまれぬ斗志が、そのような構図に導く自然のなりゆきである。

K子は当年二十才のうら若き娘であるが、何の憶する気持もなく、どし／＼自分の考えにモチーフして構図していく、天衣無縫の聖らかな心境に住しているのだ。構図に詰ると古い相撲雑誌のページを繰ったりするが、私が相手になってやると、鋭く襲いかゝって来る。その美しい斗志に燃えた顔こそ、私にとって至宝的な女斗美フェースだ。世にも勝



れた表情である。

「そんなに組んでも、片手が遊んで力が入らないじゃないか」

「そう来れば、こう攻められるよ。」と一々高速度写真でとったようにポーズを動かせながら、種々に組み方を研究させる。K子はどこまでも掘下げて女斗美の泉を掴もうとする。「もっとねじって、からんで裏へ廻るんだよ」「それ、このポーズなら一寸の隙もないだろう。そのまゝじっとして心のカンパスへクロッキーするんだ。」

K子は不安定な苦しいポーズをとりながら私の姿勢と自分の姿勢を頭へ入れようと、眼をつぶっては又開く、抱込んでいる私の方も肋膜にこたえるような苦しい身のこなしだがK子の方も宙に腰を浮かせて上半身をねじっ

ている。

「先生、有難う。もういゝの……」K子は玉の汗をぬぐおうともせず、崩れるように机へ滑ってデッサンにかゝる。

世にも珍しい一つの美を完成するために、師弟が一滴の水玉となって、女斗美の河の水かさを増そうとする姿は、吾ながら美しいと思う。4Bの芯が折れたらしく、K子はコップの筆立からまた一本鉛筆を抜取った。

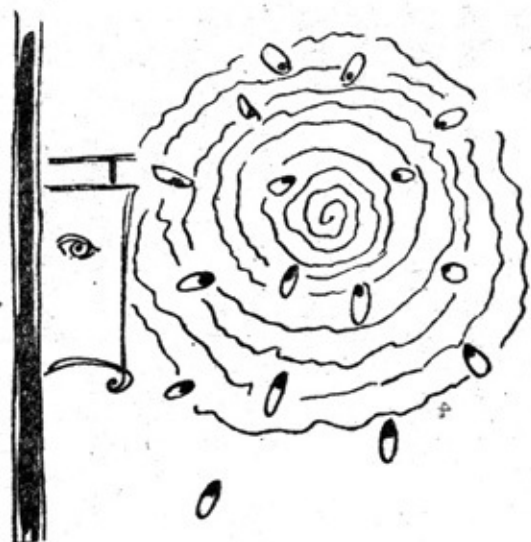
女斗美の遍路は、師弟共血みどろの道を歩いている。世界人口の二十四億分の二といった孤独を光榮として、師と弟子は三十六年の過去を振り返りもせず、たゞ前進一途に精進しているのだ。父娘のように歳の違う二人ではあるが、女斗美に燃える焰の上に立っては、どこ迄も王子と王女が存在である。女斗美王

国を支配する者は、私とK子の二人以外に誰があろう。この自負心があつてこそ、二人の胸は高鳴り、眼は明るく輝くのである。

美しい快心の女斗美画を壁面に飾って、狭いアトリエながら、冷たい麦茶に焼付くような情熱ののどを潤わせ、時間のたつのもいわず、二つの魂を画面へ投げこんで、それを取戻すことも忘れていた瞬間こそ、女斗美に結ばれた二人の誇りであらねばならない。

画中の触乳が息づいているのは、K子の胸乳が息づいている証拠だ。画面の腹が浪打っているのは、私の腹が浪打っているのかも知れない。互に顔を見合せて、ニッコリ笑った二人は、愛児をいつくしむように、クリーム色の布で、静に画面を掩うのであった。

(完)



## 那津子の浣腸日記

山田那津子

## 三月五日

春とは言えまだ肌寒い今日此頃、映画を見て居ても足許から冷えて来て、家のコタツが恋しくなる。映画館に居る間は別に考えもしなかったけども帰りに薬局の前を通り掛って便秘に×××という広告板がチラッと目に入っただけで、もうお通じの連想が私の顔をほてらせ、思わず赤くなってしまう。通行の人々が赤面している私を見ている様な気がして急ぎ足で家へ帰りつきホッとした。

色々片附物をしたり寝室の支度をしている内に、どうもお通じがつかえている様な気がしてならない。毎日規則正しくお通じはあるのに自分で言い訳をこしらえている様で、われ乍ら私ってなんてイヤな女なんだろうと愛想がつかえる様な気がした。

それでも誘惑に負けて、寒いから簡単にと三〇〇Cのシリンダーにグリセリン混合の温液を作って、トイレで浣腸する。今日は内容物が少ないせいから余り急激な便意を感じないので、そのまゝ出て来て器具の後始末をした。

家人の手前、起きていて片付の物音がしないのもおかしいと思ってあまり必要でもない片付物をガタガタとしている内にも、時々あまり激しくはないけれども、一しきり痛みとそぞろな便意が起って来た。

羽村さんの発表された論文にもありました

けれど、大量浣腸特に洗腸の場合には冷液を注入すると排出を促進する事はたしかです。

しかし之は内容を逐次排除して完成の形として注入される場合、確かに其の通りですけれども、内容の掃除を充分に行わない段階で長い時間こらえるには、どちらかといえば冷たい位の感じの方がこらえやすいと云えましょう。

花村さんの作品に五〇〇Cの温湯の浣腸をされて、其の上をバンドで押えて映画を見にゆかれるくだりがありますが、月経帯がゆるかったせいか腰掛にすわって居られても一時間と我慢が続かず途中でトイレへ走ってゆかれた相ですが、花村さんには大変失礼乍ら、きつと内容物のお掃除がしなかった処へ温湯を使われた為に、溶解がよく起り強い便意を催されたのでしよう。

私も今日はグリセリンを混入した上に温湯を使ったので三〇〇Cにしてはあまりにも効果があり過ぎた。少しお湯が温かすぎたのかもしれない。等と思い乍ら尚も其の辺を掃除したり、片付けたりしている内に幸いな事に少し便意の催し方が遠のいて来た。

イルリガートル式に洗面バケツを吊して使う高圧浣腸だと、うまくいったときにはお腹の方はそう苦しくはないし、大量で二リットル以上のときはうっかり動いてお腹に力が入るとあまり色のない水をつい少々洩らす事も

あるけれど、あの大腸がふくれ上って上へ押しあげる為に、胸が苦しく辛抱している内に今にも吐きそうになるあの苦しみよりはましだと思って楽しい様な気持ちになり、立仿きを続けている内に、どうも樂觀し過ぎた様で、アツと気が付いた時はもうそれこそ急激な催し方で急いでトイレに走れば其の運動でますますいけなくなる様な気がして、小股に静かに息をし乍らソロソロとトイレへ行って来たけれども、懸命の努力の甲斐もなくほんの少し乍ら下着を汚して了った。

今日はこんなに寒くなければ、まだもう少し高圧式のプレーをしたいのだけれども等と置いていたけれど、下着を汚して取ってうとますます寒くなったので、残念乍ら寒さに負けて中止することにした。

余計な事をして洗濯ものをふやしただけの事なんだけれども、之でも始めから終いまで私としては結構楽しみなんだと、自分自身に言い聞かせている。

## 三月十日

今日は日曜日なのでお勤めもお休みだし、自分の用事も毎日片付けているので特に日曜にしなければならぬ用事もない。

お友達でも遊びに見えろと、ヒマがつぶれるんだがなーと思っていたけれども午前中は誰ものぞいて呉れなかった。午後二時頃会社



の寮生のさえ子さんが私の頼んでおいた本があったから貸して上げると言って持ってみえた。

実は今日は何も用がないし、相変らず寒いので願望の意志固き私の浣腸も、着物を脱がずに済む三〇CCシリンドラー程度のプレイしか出来ないでいるし、三〇CCシリンドラーを使うのでは三、四日から一週間位普通のお通じを付けた処で、大腸、直腸と連続に内容物が続いている様な多少便秘気味の処をねらって行わないと、充分楽しめる様なプレイにはならず只の医療の様な気分ですべて終わってしまう。処がこゝ二、三日冷えこんだせいか少しお通じがゆるくなって、一昨日等は三回もあり、シリンドラーでは殆んど効果がなく、注入しても却って楽になって終るので、寒くさえなければ高圧で浣腸がしたい処だった。

結局五、六日前に見た薬局の広告を思い出して、家にある緩下剤を使う事にした。

昨日土曜日は私の勤めている事務所は工場が五時終いの日でも、昼迄で終り後片付を済まして二時過には家へ帰れるので、薬の説明書通り土曜の夕方から日曜日中下剤が効く様に、会社へ出勤して直ぐ二錠服み、昼食の時に二錠、家へ帰って夕食の時に二錠服んだ。会社では朝服だったので、若し効果が早く現われて執務中にお通じが頻繁に起って来たらどうしようと思えばかなり気になって居たし、

一昨日は朝一回と夕方二回も普通乍らもお通じが多かったので、その続きがあるかと心配だったけれども幸いに向うそれらしい気配もなくホッとしました。

昼過ぎ家へ帰る時も殆んど忘れていて、夕食前に一度トイレへ行ったらけど、まあ普通だったので、夕食の時二錠と寝る前に又一錠服んでおいた。寝付いた時は別に催しても来ず何んとかなく物足りない様な気分です寝付いたのだが、間もなくどうも寝付きが悪いなと思って考えていると少々お通じがついて来る様な気がするので、起きてトイレへ行くと見事に目的を達成、高圧式で二リットル以上注入した時見たいに、間断もなく強すぎもせず具合よく排出、其の後、夜中に二回程浣腸の排出の不自然さもなく、尤も注入の時の爽快さは味わえませんが本当にお腹をこわした時の通りにトイレに行った。

今日の午前中は昨夜と同じ様な状態で注入の感じは味えない乍らも、一日中浣腸して注入した状態が続いている様な感じだった。

さえ子さんが昼から遊びに来られたので私もそう何度もトイレへ席を外すわけにも行かなくなり、少しこらえていようと思っていた矢先、昨日夕方と夜服んだ分が余分だったと見えて、さえ子さんとお話ししていれば余り分らないけど頁をめくる音もさせないでいるとコロコロとお腹の中が動くのが聞えて来そ

うで気が気でなく、又直ぐトイレへ行きたくなる。花村さんの作品にあった様に月経帯でもして押えたらとも思いましたけど、さえ子さんを待たしておいてガタガタするのもおかしいと思い、途中で一度席を外しただけでこらえるだけこらえていた。勿論さえ子さんに悪いから手は逆性石鹼でよく洗った。

あまり私がソワソワしていたらいいのでさえ子さんも一時間足らずで何かいゝ残した様な顔付で帰っていかれたが、私はお玄関迄送って行くのがやっとで見送るのも早々にトイレへ飛んで帰ったけど、どうやって扉を締めたかも半ば夢中で、下着をひっぱり下すのと一しよにしゃがんでいた。一息ついて額の汗を拭き乍ら下着を点検すると残念乍ら上の方が大分汚れていた。

来客も帰られたので又下着を汚してはと思つて、花村さん式に月経帯を着けて夕方までいたけど、さえ子さんの見えた頃が頂上だったらしく後は寝るまでに二回ばかり割合におだやかにお通じがあっただけでトイレに走る様な事はなかった。

週末のプレイとしては少々大掛りすぎたかしらと頻繁なお通じと水気の不足にお茶ばかりガブガブ飲み乍ら、さすがにお腹の中がなにもなくなつた様な力のない感じに疲れてはいても、其れでも結局楽しかったわとつぶやいている。

・KK四月号の池田嬢の『褌とブリーフ』でお尋ねのことにお答え。

最近の婦人の一番下につけるパンティは、殆どが、ふんどし型となっています。ブリーフと云う名称自体が、小さな、最も簡単な云う語であり、此のことがすべてを物語っている。たとえお尻や、お腹の前を覆う部分があっても、股の所は、全く巾が狭く、それは正にふんどしになって居て、而も相当に固くきつちりとその部分だけをおおう様になっているわけです。フランス

スのは、池田さんの文のカットに出ている写真版が、そのもので、此れは、全国の有数な婦人服飾誌ヴォトルヴオテ最近号に載っているもの、同誌は月刊で

日本でも書店にどしどし出しています。広告欄はもとより、同誌毎号巻末の、よい買物、新製品紹介欄には、しきりに此の種の発表があります。アメリカでは、月経帯にも勿論、そのまま使える商品名サニ・スカンティ(衛生最小パンティ)が一番多く使用されています。大阪の女性下着デザイナー某嬢のは、此の名にちなんでスキヤンティとしたのではないでしょう。此のお嬢さんデザイナーのことは週刊朝日旧号の下着デザイナー告知板、週刊

新潮旧号等に紹介されていますから、お調べ下さい。或は此のお嬢さんデザイナー自身も

ふんどしの良さを好む人でしょう。私の少ない女友達の美しい人々は、殆ど全部、ブリーフとも褌とも云い得る下穿をしています。

普通のブリーフパンティを、自分で更に手を加えて一層短かくし、且つ弾力を持たせて股間だけにきつちりと嵌まる様に仕立てるのは容易なことだと言います。第二の肌として何時でも、そうした快よい緊まりをつけてい

ているのではないでしょう。事実上、日本の一般市販のブリーフも、色彩、生地、型、実に多種となり、日を追ってエロチックになっていきますものね。

米、仏ともに此のふんどしブリーフは、やはり生地が木綿です。ナイロン等は、いくら薄くとも、むれますから。フランスでは、此等の最小最短のふんどしをカーシエクスと云います。池田さんのおっしゃるハリバタは着けて見てその本人は、決してふんどしの快感はないと思います。

## 仏、米の婦人ふんどしに就いて

A FUN OF YOUR MAGAZIN

ることは、健康上からも、又女性としてきりとした態度肢体の美しさを保ち、容ぼうさえよくするとその女の人たちは主張します。その通りでしょう。又男性からしても、きれいな女性が、下着のその又下に、そう云うものをいつもびっちりとしているのだなど云う想像だけでも、大それたイットを感じさせられます。又更に、アメリカやフランスで大流行のペッティンクが、結局こうした、最も女性の内側のものまで、エロチックなものにし

は又別な感じでしょう。結局は、各国共に、又全部の若い女性は、ふんどしを愛用しつつあるものと言えます。

(付記) 東京丸ノ内アメリカンフアマシイには米国製の月経帯を売っていますが、此れこそ正にふんどし、而も総ゴム(糸にあみ込んだ)ピンク、ティローズ、黒等。





# 私のキタ・セクシュアリス

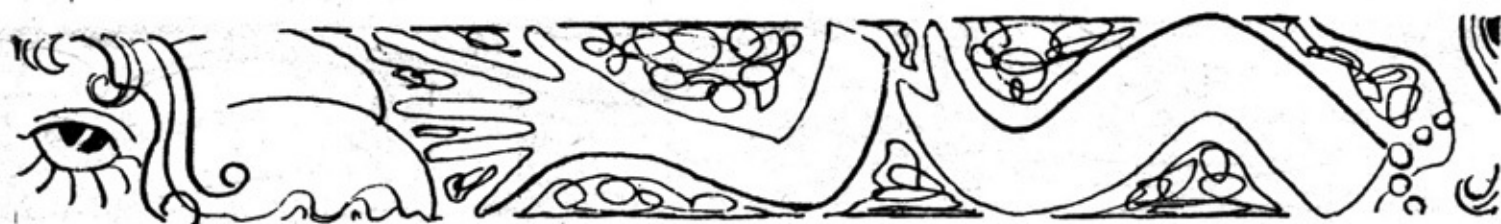
山 本 節 夫

## (補遺)

「明星」の二月号に宝塚ガールのカウボーイという写真。乗馬ズボンに身を固めた美人が長靴姿もりりしく白馬に跨って西部調。その下の見出しに曰く「馬に跨りお馬の稽古。こんなキュートなカウガールなら、お馬になりたいです」。前回紹介したものと全く同じである。女性の乗馬に対する関心は幼時より深いものがあつた。初めての直接的な心のときめきは曲馬団でみた女馬乗りであつた。その頃Y神社は春秋二回の大祭が賑やかに行われ、そこには柴田とか黒順とかいう小屋掛けの大曲馬がかかつた。正面入口の上には数々の曲馬の場面が掲げられ、入口の左右には馬房の様な形でしきられた中に、馬が数頭つながれていた。まだ開催前の準備中や、出番でない時に、女達はピツタリ肌につくジュパンに短いパンツをはいて馬に跨り、仕切りの柵の前を往ったり来たりしてデモンストレーションしていた。中には十四、五才のお河童姿の少女もいた。無雑作に跨って手綱を引きしぼる姿が何ともいえず、小学生の私は去りやらず眺め飽かしたものである。殊に素肌の桃色の太ももにびったり馬腹をはさんでしめつけている所が目にとびりついた。あんな女の人の馬になりたいと子供心にやるせない気持になった事であつた。

## 三、内 省 期

高等学校時代の三ケ年は、私のキタ・セクシュアリスの上では殆んど目新しい進展はなかつた。家が湖南の別荘地帯に移つたし、学校は東京の郊外の或る町にあつたので寄宿舎に入つたが、集団生活を強制された毎日は真善美とか哲学とか難しい論議に明け暮れた。勿論喫茶店の女の子や呑み屋の女中にうつつを抜かず人々もいた。女友達と適当に遊ぶ仲間もいたが、之らは全て私に出来ない事柄であつた。こんな調子で三年生になった時、私は軽い神経衰弱になつたのを機会に下宿生活をすることにした。それは同じ町にある静かなシモタ屋であつた。マダムと女学生と小学校の弟がいた。やつと個室の生活を取戻した私の気分は幾らか明るくなった。男の子はヤンチャであつた。隣に同年の少年がいてよく遊びに来ていた。男の子は時々何もしないで温和しく坐っているこの相手の前に立ちあはだかると片脚をあげて前から肩の上に乗るかかり、そのまま仰向けに転がして首の上に跨り、「家来になれ」という様な事があつた。姉は横で雑誌などを読んでいたが、「何もしない子をどうしていぢめるの」といつてたしなめながら私に向つて、「男の子って、どうしてこうなんでしょう。すぐ馬乗りになるんですもの」と微笑みかける。私の心臓はその時動悸を打っていた。そしてこんな情景を平然とみていられる女学生の気持を察しかねた。男の子は尚も調



子に乗ってしめつけるので相手の子はとうとう泣き出した。何を思ったか姉は立ち上ると、「よし、私が仇をとってやる。こいつめ」といいながらまだ犠牲者の顔の上に跨りつづける弟の首根っ子をつかむと引きずり倒し、傍らの坐布トンをとると俯伏せにした弟の頭の上にかぶせ、自分はその上に馬乗りになると、「さあフトンむしだぞ。降参か」といって肉のつき始めたお尻をどしんどしんと動かした。弟は勿論すぐに降参した。少し上気した顔を私に向けながら姉はやがて弟の身体から降りると、二人を外に遊びに出した。私は顔を赤らめて二階に上るのであった。

犬が飼ってあった。駄犬だったけれども大きかった。姉はよくしやがんで犬を可愛がった。脚をひろげているのでスカートの中がまる見えであった。犬はその辺りに頭を突っ込んでジャレ廻った。私はその犬が羨しいと思ったりした。坐った犬の後から跨る様に乗りかかる時など、之で女が長靴をはいていれば更に好いのにと考えた。

二階の部屋は物干に続いていた。雨の日など干物が私の部屋の中に取込んであることが多かった。そんな時、かの女学生のズロースや靴下もあった。一度私はこの二つをひそかに竿から外して、その中にクッションやセーターなどの詰め物をして本物らしく似せ、自分は抑向けに寝て私の顔の上にあたかもその人に跨がられている様に置いたりした。気が咎めて罪人の様な気持で、もとの位置に戻したことであった。大きな人形があった。この人形のスカートをたくし上げて床の間の「犬はりこ」に跨らせては、女騎士を目前にみる様子を空想した。しかし下宿の一年間、この異性に対しては私は真面目な下宿人としてのみ交際したのである。

ただ一度だけ彼女の身体に触れたことがある。床の間に懸

け軸をかけて呉れというのである。私の丈でも届かなかった。どうしよう。面倒くさい。頭の中に計略がひらめいた。「肩車になりましょう」「えっ?」と彼女は聞き返したが、すぐに子供っぽく相槌をうった。私がしやがむと彼女は勢よく脚を開いて私の首に跨がった。横目でみると、赤いガーターの喰い込んだ太腿が白々と見え、初々しい処女の肉の香りがツンと鼻を打った。彼女はそんなことには頓着なく、重心をとることに一杯。やがて私が立上ると、「アー楽チンだ」といいながら私の肩の上ではしやいだ。仕事が終わってからサービスに一回部屋の中を廻った。「ああ、いい気持。馬に跨ってみたい」嬉しい言葉であった。そのまま私がくず折れて、抑向けになって……だがそれは空想に終わった。今にして思うと、この肩車構想のヒントは横光利一の旅愁から得たものである。パリはブローニュの森で迷った時、方向を極めるために千鶴子は男の肩に跨るのである。

勇気のない私はただ焦るばかりであった。残された午後後は自分で画をかいいて自ら慰めるばかりであった。勿論テーマは全て女性の「馬乗り動作」に関するもの許りである。四這い、抑向け、俯伏せの男の上に女が跨っていちめっている図。近代女性のこともあり、旅人姿の和装の時もあった。そして一枚毎に詞書きがついていた。「やい参ったか」「馬になれ」「またをくぐれ」「のめ」「なめる」それを見ながら物語を空想する。縁台、車のついた支えなどの道具立ても考案する。殊に一人の女性が男馬に跨っていちめっている所へ、同僚が来るといふ場面を好んで用いた。そしてこの様な自分の異常さを反省しては独り悲しみに沈むのであった。

とかくして私は大学の過程に進んだ。同時に私は一軒の独



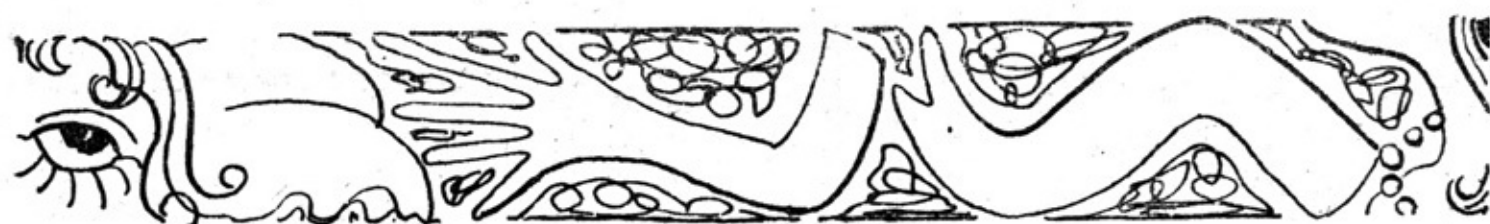


立家屋に借家することになった。女中を一人つけて当時としてはゼイタクな身分であった。私の性癖は、わがままが出来る様になってから益々劇しくなっていた。その頃から古本屋漁りをやった。カーマ・スートラとかカサノヴァ回想録とかデカメロンとか好色本も漁ったが、潤一郎のものや乱歩のものも当時始めて原文に接したのである。痴人の愛を手にして帰った時の感激は今だに忘れない。少年もよかった。その中で最後に女王様である娘が、縁台になれ、ハイフキになれ、といって男の子に命令する所があるが、具体的にはどんな事なのか、又ユーリンを吞まされたというがどんな格好でしたのかと、あれこれ想像したものである。ホーカンの中で勝気の芸者に催眠術をかけられる所があり、あらゆるひどいことをやらされたとあるその内容が、或は馬にされたか、顔の上に跨がられたか等と付度したものである。乱歩の「猟奇の果」を本屋で見出した時は足が震える程感激した。女騎士が男の馬に跨って赤いシゴキを手綱にしてハイシ／＼と調子をとって這わせる場面。そして抑向けになった男の顔の上に尻を下ろすと、その後は当時の印刷は×××であった。その伏字を一生懸命埋めてみたものである。

こんな或る日、私は幼なじみのK子に思切って手紙を出したのである。私としては正に清水の舞台から飛び下りる位の大決心であった。出してから数日、私は反省と心配と、果して返事が来るかどうかの苦悩で夜もねむれなかった。しかし案ずるより生むは易しで返事が来た。十年振りで手紙を貰って嬉しい。是非会いたい。その中訪問するというのである。彼女も女学校を卒業して某医専の学生になっていた。それはツバメの飛び交う五月の或日であった。対面の時、私は真赤になっていた。彼女は美しく成長していた。年は二つ下でも

男よりは大人であった。とはいえ昔の面影は消えなかった。節ちゃん、一寸も変わらないぢやない。こんな話から始まって二人の久闊は半日つづいた。開け広げた二階の手すりから風が薫って来た。K子は黒眼勝ちのつぶらな瞳をキラ／＼させて勢よく話し込んだ、私はあの日の「馬ごっこ」の話題を出さそうと思いつた。遂にその勇気がなかった。別れる時が来て、今度は私が彼女の家を訪問することを約して彼女は帰っていった。会えた丈でも満足しなければいけないと自ら云い聞かせながら、私は物足りない気持を漸く押えていた。

一週間後、私は彼女の家を訪ねた。家の人にも挨拶を交した後、やがて彼女の部屋で二人切りになった。私は思い切つて話を切り出した。「ねえK子ちゃん。小さい時よく僕の背中に乗ったね。覚えてる？」K子は始めキョトンとしていたが、やがて茶目らしい目を輝かせ乍ら、「ああそう／＼。馬ごっこね。馬ごっこといつてもいつも跨るのは私だったわ。毎日お馬にしたわね。どうしてそんなこと覚えてるの、私す／＼かり忘れてた。」今だったらどうかしら。私は伏眼勝ちにおず／＼しながら聞いてみた。「節ちゃん、私が私のお馬になるっていうの。へえ、私重いのよ。大丈夫？」事はスムーズに運んだ。二人はナオミと譲治よろしく馬ごっこを始めた。四這いになった私の後に廻るとK子はためらいもなく背中に跨った。その後の経験からも云える事だが、女は一遍男に跨ってしまふと相当大胆に振舞うものである。そして必ず片手で馬の尻を叩き「ハイシ／＼さあ歩け」という独言をいう。之も先天的な一つの本能なのだろうか。その時も同じ様な具合で、私は平手で一つ二つ尻をたたかれ、騎士は腰を振ると「ハイシ／＼さあ歩け」といったものである。部屋の中を二三回廻るとK子は馬上から「少し休ませて上げる」といい、



それでも私の背に跨ったまま、節ちゃん、あんた少しマゾぢやない？　そういう私は反対のサドかも知れなけど」といった。「Kちゃん、よく知ってるね」というと、「あらいやだ私之でも医者卵よ」成程専門家であった。「お馬のけいこをした後はどうしたっけ、そう、転がしてお腹や首の上に跨ったんだわね。だけど今日は可哀そうだから許したげる。」「そーいいながらテーブルの上の紅茶をとると、「さあ私の可愛いお馬ちゃん。紅茶を御飲み」彼女はハイドウと私の背中に跨ったまま頭の上にかがんで冷たくなった紅茶を、恰度馬に人蔘をやる様な具合に飯まして呉れた。私は思い掛けない幸福に天にも上る心持で彼女の家を辞したのである。

両方とも学業があるので交際はひんぱんには出来なかった。それでも月に一度位は両方で往ったり来たりしていた。「今日の日曜日、タップリ御馬のけい古をしたげるからいらっしやい」という様な文面の手紙に、私は砂漠の旅人がオアシスを求める様に彼女の下に馳せ参じたのである。子供の時にも言っていた様に彼女は地面に足のつくのはいやだといって私を椅子の所で腕立てさせて、その背中に足をブラリとたらし、跨ったりした。しかし之は動きが伴わないので御不満であった。「外でホントの馬に跨ったらどんなにいい気持かしら」私は又淋しくなった。といつても当時女性の乗馬は限られた階級の娯楽であった。「えい畜生、ヨタ馬め」女王様の御怒りのトバッチリで馬はひっくり返され、全身の重みを頭に感じなければならなかった。

本宅からつけて来られた女中というのが例のキヨウであった。年頃の青年と同居させるにはこの醜女なら安全という思惑であったことは容易に知られた。頭が良くないので家政の

切り盛りは十分出来ない事は言う迄もない。いろ／＼な手違いを生ずる度に、この憐れな女は御主人から馬として扱われねばならなかった。

K子との遊びも馬乗り丈では曲が無くなった。そこでキヨウが一枚加わる事になった。二階にキヨウを引張り上げると、キヨウはK子の乗馬にさせられた。始めは恥づかしいとか可愛そうだといったK子もやがてこの女中馬に無難作に跨る様になった。彼女は中世紀の騎士なのである。ワンピースの裾をたくし上げてズロースの中に押し込むと、長い脚がスラリとして少年の風態となる。乗馬靴がないので長靴が代用品。腰には木刀をさし、今度はキヨウの背に座ブトンにくくりつけて鞍替りとし手綱に皮鞭も用意した。私は怪物の巨龍の役である。馬に跨った騎士に巨龍が飛びかかる。騎士は馬上で之と斗う。やがて馬から下りて組打ちとなり最後に巨龍は騎士に組み敷かれ、首に跨られ首を切られて退治される。騎士は意気揚々と再び愛馬に跨って旅を続ける。こういう芝居の筋は私の幼い頃からの念願であった。彼女の騎士はその昔宝塚の鶴マキ子のようにサッソウとしていた。乗馬姿も堂に入ったものだった。その姿を第三者として見られる幸福を存分に味ったのである。こんな事の末に、私はK子にキヨウの顔の上に跨る様に仕向けた。役を代えればいいのである。同性の、長々とダラシなく抑向けに引っくり返された奴の首の上に、長靴姿のK子がガッシリと跨って股の下でアブ／＼もがくのをぐいとしめつけながらエイとばかり最後の止めを刺す時の壮厳さは、何にたとえたらよからうか。巨龍から立ち上って後れ毛をかき上げながら再び愛馬に跨ろうと大股に戻って来る女騎士を、私は四這いになったまま御待ち申上げていたのである。

(未完)



【通信】

六月号の批評と感想

近藤

御誌六月号正に拝受致しました。編集部諸氏、愛読者諸兄姉各位の真摯な御努力の結晶を御恵送にあずかり有難く感謝致します。

六月号読後雑感、思いつくままに纏めてみたいと思います。グラビヤページの庄巻は楓氏から提供された「振袖狂女」だと思いました。リアルな緊迫感を盛っています。惜しむらくは些か暗きに過ぎ、その点奇クのカラートマッチし得ぬ憾があると思います。

南氏の記事、漸く私の嗜好に合致し、佳境に入るかと思われた途端の完結で、何か肩すかしを喰わされたような気持です。悪魔！という言葉がありますが、云うならば、月岡さんの空想の世界は浣腸とおしめに魅せられた美しい女悪魔の自由な天地ですね。日下さんの続稿愈々待たれます。本号のところでは大きなヤマもなく、正直なところ、次号の予告解説という程度でした。

山本節夫氏の、私のキタ・セクシユアリスは続篇期待します。藤山さんの作品は私も好きですが、また同巧異曲という評が出そうですね。楓氏の「緊縛映画雑感」は次号が待たれます。興行界で御活躍とのこと、羨望の念を禁じ得ませんが、現在邦画界は苦況を告げています。御自愛御健闘を祈り、奇クのために豊富な資料の提供をお続け下さるようお願いいたします。LT商会の佐川氏の今後一層の御活躍をお待ちします。

本田由郎氏の時代物は、大好きな作品ですが、同時に氏の「責めの演劇」のレポートも期待されるものです。アヴァン座の劇評や予告などを報らせて頂きたいものですが、如何でしょう。例えば甲斐氏提供の「弁才天利益雪解」予告のように。

青葉模一氏の記事は、いつも娛しませて頂いています。嵯峨さんの記事に出てくる「浪

人街」は次号の奇クが出る頃は、或は一流館の上映を終っているかもしれませんが、五月に入ってから浅草の新劇場へかゝる筈です。現在は「まだら頭巾」の「乱れ白菊」をやっています。御承知の方も多いと思いますが、この館は六区の北の端にあり、時代物と活劇ばかりの邦画二本立、それにスポーツ（概してプロレス、相撲）の短篇で、十一時までの早朝割引が四〇円、普通は五五円ですから、奇クの速報を読んで残念がる方に念のためお報せしておきます。三週先のスケジュールまで掲示してありますから、表に立ってスチールを見てくるのも、いゝ散歩になります。浅草の館は一般に休憩が短時間ですが、この館は先ず二分平均の早さです。

愈々佳境の「潰滅の前夜」ですが、甲31号の苦闘と、緑川百合子の運命を予想すると、果てしなく楽しみがあります。高井氏のアイデアは口絵にしたら素晴らしいでしょうね、特に「罪と罰」が良いと思います。白金紅次氏の「和装教室」は氏の健在が嬉しく、岸本氏ならずとも歓声を上げて読んだことゝ思われました。次稿を期待しています。

玉稿落穂集、「魅入られた女」の紹介は少し酷ですね、こうなると、どうしても削除され省略された部分が知りたくなるではありませんか。他の一篇は中途のよう云うところもありません。読者通信で二、三の方々が述

べておられたように、復刊後の奇クが次第に調子を上げてきていることは、大きな喜びで

す。編集部各位、大いに頑張ってください。将来、いつの日か、私が経済的に恵まれる日が

来た時は、物心両面に謝意を表したいと思えます。(一九五七・四・一三、午後一〇・二三)

### 東映「大名囃子、後篇」

鬼倉本陣の奥座敷へかどわかされたお今(勝浦千浪)とお豊(谷鈴子)は細引で後手に縛られた縄尻を柱へむすばれ、吉田義夫と阿部九州男に口説かれるが「お前さん達は縛られた女じやなけりや物に出来ないのかい」と小気味よい啖呵ではねつける。 C級

勝浦千浪はOSKの男役出身だけに多少発声法に難があるがその

他では勝気なお今の役柄はピッタリである。

さて、私が読者諸氏にお詫びしなければならぬのは四月号の速報に発表した。「吉野

登洋子」の縛りが無い事である。そのみか前篇の終りに猿轡をされた「円山栄子」の縛りもないのである。縛りもしない女に何故猿轡をはめたりしたのか理解に苦しむ。

### 松竹「浪人街」

荒牧源内(近衛十四郎)と小幡伝太夫(石黒達也)の争いの中に巻きこまれた源内の妻お新(水原真知子)は小幡達旗本に捕えられ細引の後手で蔵に監禁される。やがて縄を解

かれ庭先へ引すえられ、細身の杖で住居を云えと責められるが、どうしても白状せぬので再び縛られ、蔵の中へ……翌日子恋の森に連れ出されたお新は後手のまゝ仰向けにころがされ、片足ずつを別々の牛に縛りつけられ牛裂の刑にされようとする。 C級

東映作品「酔いどれ八万騎」では嵯峨さんの速報のように藤間紫の後手縛りと手拭

の猿ぐつわがあったが、今度の映画化では同じおぶん役の山鳴くるみに縛りは全然ない。

## 緊縛映画速報欄

千葉栄市

### 「ボワニー分岐点」

テロの首魁「ダーヴエイ」は非常線の眼をかすめる為人質として「エヴァガードナ」を誘拐し、貨物列車に連れ込む。やがて列車が検問所へ差しかゝると彼は黒い布を「ガードナ」の首に巻きつけしめつける。

「声を出したり音を立てたりすると最後だぞ」

と云い乍ら

「苦しいー許して」

と憐れみを乞う彼女を今度は後手に縛り上げ、

「命を取らぬだけ有難く思え」

と、首をしめていた黒布で猿轡まで噛ませるとかねて用意のダイナマイトを点検する。数個のダイナマイトとほくそ笑む男の顔、更に猿ぐつわをされた女の顔の交互のアップ数回、それは「スチャートグレンヂャー」に救われる迄割合長い間マニアの目を楽しませてくれる。 A級

ただ暗い貨車内の縛りだけに画面がはつきりしないのは残念である。天然色なのでこれが明るいシーンであれば赤い服に茶色の縄、小麦色の顔に黒い猿轡の色彩が綺麗であったろうに……

なおこの他に、東映「雨の花笠」鳳衣子

東映「第十三号機橋」中原ひとみ、東映

「鳳城の花嫁」長谷川裕見子、中原ひとみ等の縛りがあるが緊縛感もなく、特筆すべき点もないので割愛する。

(以上)



【雜 誌 通 信】 丘

明 提 供

カリフォルニアの通り魔

(「週刊新潮」——三月二十五日号)

美しいモデルのグレース・ハリナンが、衣装ダナのほうに向いていた時、二人の男のうち、大柄のほうが突然うしろから、彼女の口をふさいだ。同時に今一人の男はナイフをとり出し彼女のノド元にさしつけた。

「おれたちの云う通りにして貰おう。何も殺そうというんじゃない。すぐすむさ……」

男は低い声でそういうと、恐怖におののく彼女の手首を銅線でしばり、床の上に仰向けに押し倒した。そして人間の仮面をつけた二匹の野獣はつぎつぎにこの二十二才のモデルに襲いかかり、再び風のように戸外の暗やみに姿を消したのは一時間も後のことだった。

刑事が現場にかけつけた時は彼女は部屋に倒れ裸にされた彼女の胸のあたりには、願望をとげた男の残した無数のアザが暴行のあとを示していた。

これより以前二人の人妻が襲われた時も、犯人は貸間の広告に応じて現れている。そして女の両手を縛り寝室に引きずりこんで犯している。被害者の年齢は十八才から四十一才に及んでるが、いずれも目立つほどの美人ぞろい。二人の女性の場合にはナイフを突きつ

け、被害者は要求されるままに、クツ下をぬぎ、スカートをまくった。これを好色な目でながめたあげく、クツ下で両手を縛って犯した。またある若い女性の場合には、洋服をぬがせ、パンティー一つにして両手をうしろにしばり、ヒザだけで部屋中を這い廻らせ、その後パンティーを口につめて犯している。

被害者は、ドンナ・バークという若いピアニスト。素晴らしい美人だった。古いピアノを売ろうとして新聞に広告を出した。すぐ買手はついた。翌夜、友人という男を連れて引取りに現れた。

「運ぶ前に、あなたの美しい手で静かな曲を聞かせて欲しい」

彼女はピアノに向って、ひき始めた。その時、彼女のうしろに近寄った男たちは、かつてグレース・ハリナンが暴行された時と同様薄色のじゆうたんの上に彼女を押し倒した。銅線で彼女の手首をしばり、洋服などを次々と切り裂きながら裸にしていった。そして、一人は彼女の腰に手をやり、一人は胸に顔を埋めて痴態のかぎりを尽した。

二十人目の犠牲者が出た。刑事が現場に駆けつけて見ると、全裸のマーガレットが、縛られた手首をはずそうとして、倒れたままだがいていた。

——雑誌の挿絵を中心として——

「五月号の大衆誌より」

●明星、「黒魔王」堂昌一画

半裸の女性——椅子に後手。足。

●読切倶楽部「雨の花傘」中一弥画。

●小説と読物「武者恋い鼓」野口昂明画。

●同 「大利根無頼」岡本爽太画。

裸体の後手及び次の場面

——池の中に打ち込んだ杭に女が縛りつけられていた。白い襦袢とゆもじ一枚だけの哀れな姿で水は首まで届いていた。水は絶えず川から流れこんで又川へ流れ去っている。全身が冷たい水で洗われている。

既に唇の色も紫色にかわり、死人のように青い顔色だった。——

●講談倶楽部「まぼろし若衆」石原豪人画

——一人は、まだうら若い日本婦人である。直立したまま、両手を上にのぼし、のびた両の手首には鉄鎖がくくりつけられて、石垣の高い所から吊り下げられている。——

絵はそれほど良くない。

●傑作倶楽部、「魔の六十秒」石原豪人画

二人の支那服美人の後手猿ぐつわ。

●面白倶楽部、「走る忠臣蔵」木俣清史画  
美しい女賊お銀は、仲間から裏切ったと思われて立木にしばりつけられる。そして賊の一人六六だけが引返して来る。

「林の中でお銀はなおもがいていた。血もにじむばかりに身をねじるが、心得のある丘三の縄はおいそれと解けるものではない。残月と夜明けのひかりで、チラチラ蒼白くこぼれる樹林の底で、身もだえる美女の姿は、乳房も足もむき出しになって、白蛇の様な妖しさだった。」

「たまらないね、さっきから見物しているのだが。」引返して来て云い寄る大六をお銀は蹴とばす。縛られた孔雀と腰ぬけ狼とのたたかい。お銀の足をもてあました大六は、木のうしろに廻ってお銀の片足をつかんだ。その足に縄をからむと今一方の足にも縄をかける。その両足の縄をそれぞれ反対の方角へひっぱって木の幹にくくりつけた。お銀は大の字になった。

「姐御、いくらでも腰をふりなよ」

大六は片手でムツチリした直っ白な乳房をつかみ、もみねじった。

作者は探偵作家、山田風太郎。

面白クラブの四月号に、島田一男作、堂昌一画の「屍蠟の市場」の中の一頁に、いいところがあった。これは目下連載中だ。

別冊読切傑作集(三十集)

●白無垢伝奇 矢田貝寿広画

全裸の後手、文中に責のシーン二カ所あり

●恋情吹雪肌 加藤敏郎画——色彩

天井には湯文字一枚の若い女が後手にゆ

わかれて吊されている。——

●愛怨女太刀 三谷一馬画

縛られたまま、もがくほど、肌があらわになるのに観念したのか、彼女は、目を閉じて動かない。二重に巻かれた縄が両腕にくい

## △口絵解説△

イタリフィルム社

## 愛は惜しみなく

藤木仙治

ロンドン駐在のフランス大使書記官アンドレア・シエニエ(ミシエル・オークレール)は、大使についてパリへ帰っていると、コワニイ伯の狩猟会に参加、伯の令嬢マツダレーナ(アントネラ・ルアルデイ)に心ひかれる。美貌の彼女は非常に気づかいの多いわがまま娘で、ひそかに身分ちがいの愛情を抱く馬丁ジェラル(ラフ・ヴァローネ)を、虫けらのように扱っている。この女主人と馬丁とのいきさつは非常なマゾヒズムを感じる。△写真A△参照。

マツダレーナとシエニエとはたちまちはげしい恋におちる。が、彼女の両親はこの恋愛には反対である。一七八九年七月十四日、民衆は蜂起し、パリの街は流血の巷と化する。馬丁ジェラルは傷ついた叛徒を助けて伯爵邸を追放され、やがれイギリスへ亡命しようとした伯爵一家は、途中で、いまは革命派の指導者の一人となったジェラルに捕えられる。そこへ、すでに熱烈な革命党員となっている

こみ襟もひつつれて、厚い胸のもりあがった双の丘が、男たちの目には刺戟的だった。

●別冊読切特選集「三木ノ文蔵」横塚繁画  
猿轡、後手(他に画家不明の一図あり)

シエニエがあらわれ、群衆を説得して、コワニイ一家の亡命をゆるしてやる。そのためジェラルのシエニエへの増悪は燃え上る。マツダレーナは女中のベルシ(カトリヌ・ヴァルネエ)を連れて、両親のもとを離れ、シエニエのあとを追ってパリにかくれ、逢びきを重ねる。が、それもつかの間、シエニエはジェラルの密告で裏切者として捕えられ、告発される。マツダレーナは自分の身を代償にシエニエの命を救うようにとジェラルに懇願、深く反省したジェラルは法廷でシエニエの弁護に立つが、シエニエの死刑は確定する。牢獄に最後の面会に訪れたマツダレーナは、死刑囚の一人の身代りとなり、シエニエとともに、うしろ手に縛られ、荷車にのせられて断頭台にひかれてゆく。マツダレーナが刑を受けるために、長い髪をゾリゾリと切られる場面と、恋人と共にうしろ手に縛られたままキスするシーンがある。△写真B△参照。



## △口絵解説△責画分護△

## 涙のダイヤモンド

## 甲斐仁参案

## (一) 地下の拷問室

香港………。白系ロシア人が経営する寶石店に勤めている日本娘は、恋人の入院費欲しさに自分の所持のウインドーからダイヤを一つ盗み出し、露見した時の身体検査の用心の為に、そっとそのダイヤを嚙み込んでしまった。その日は顧客しか来店しなかったもので閉店後の棚卸の際、嫌疑は必然的に彼女の上にかゝってきた。服のポケットから縫目は勿論のこと、下着についても綿密な身体検査が行われたが、当然のようにダイヤは見つからなかった。

屈強の店員達に護られた日本娘は、マダムの別邸へ連行された。身体に傷痕を残したりすると、不法監禁や傷害などの証拠を握られるのを嫌った彼等は、娘に厚い革の手袋をつけさせ、その上から頑丈な手錠をキッチリと嵌め、目かくしをつけさせた上、自動車に乗せて来たので、彼女は何処に運ばれて来たの

か、知る由もなかった。ヒンヤリと冷たく漂う地下室の空気に娘は思わず戦慄した。部屋の壁には、数々の責道具が、鈍い光りを放って並べられてあった。――△本号口絵参照△――

## (二) 伸し責

目かくしを取られた娘は、先ず拷問台の上に仰向けに寝かされ、手錠のまゝ両腕を固定された。恐怖に指をひきつらせた足首にも、分厚い革帯が巻かれ、その上に大きな足枷が付けられた。合図と共に歯車が廻転し、足枷についた鎖はギリ／＼と巻き上げられていった。手足を引抜かれるような苦しさに、娘はカッと目を見開き、真珠のような歯の間から玉切る悲鳴が絞り出された。

## (三) 苦悶のコルセット

数度の悲鳴が地下室の壁にこだましたが、それでも、ダイヤの行方を云わない娘は、素肌の上に革のコルセットを嵌められ、ペルトでキッチリと締められ、更に乳房からウエス

トまで太いロープが巻きつけられた。それだけでも息がつまり、内臓が口から飛び出すかと思われるくらい苦しいのに、その間に太い棒が差し込まれ、男の力でぐい／＼と締め上げられた。娘は目を閉じ、呻めき声を上げながら、この残酷きわまりない拷問と戦ったが、血が頭に昇ってガンガンと耳鳴りがして胃袋や乳房を捻じきられるような激痛にたえかねて、遂に自分が嚙み込んでしまったことを白状してしまった。

## (四) 胃の洗滌

娘は必死になって許しを乞うたが、彼等には情容赦なく手取足取りされて、真白い肉体を梯子の上に仰向けに固定されてしまった。両腕は後手に梯子の下で縛られ、両足首はそれぞれ梯子の棧に縛りつけられた。

鼻をつまみ上げられ、息苦しさ思わず開いた口から箆子で舌が挟み出された。「あゝ／＼」と咽喉の奥で驚きの声を出したときには、す早く太いゴム管が口の中へ挿入されていた。吐気を催す不快感に絶えず呻めきの声を放っていたが、その蛇のようなゴム管は咽喉の奥から食道を伝って、グント／＼胃の中まで送り込まれていった。

ゴム管の端に附いた漏斗からは、幾杯もの水が次々と注ぎ込まれ、胃が水で一杯になるとゴム管を引き出し、梯子を逆さに立て、水

を吐かされる苦しさ。マダムは、梯子の一端を吊り上げる縄を握って、この胃洗滌の光景を、ダイヤはまだ出ないか、と凝視し続けている。飲ませては吐かせ、吐かせては飲ませしたが、娘は、苦しさに乳房や腹部を波うたせるだけで、遂に目的のダイヤは出て来なかった。

#### (四) ヒマシ油責

娘が嘔み込んだダイヤは、早く排泄させねばならない。胃洗滌で効果がないとわかったマダムは、娘の手足を、奇妙な椅子に縛りつけさせた。尻当てのない骨ばかりの罪の椅子に全裸のまゝ坐らせられた娘は、店員達の手で、ヒマシ油責めにかける事になった。

下剤を飲ませようとするが、頑強に口を結んだ彼女は、瓶の口を拒み続けた。怒ったマダムは二十CCの浣腸器の先にゴムのスポイトをつけたものを持って来させ、彼女の鼻腔から大量のヒマシ油を胃の中へ送り込んだ。やがて、ダイヤは罪の椅子の下へ、彼女の糞便と共に排泄されてくるだろう。

#### (四) 浣腸責

下剤による排泄の強要も、彼女の必死の辛抱によって、急激にその効果を現す様子もなかった。痺れをきらせたマダムは、男たちに命じて娘を拷問台に縛りつけさせ、イルリガートルを用いて浣腸させることになった。娘は懸命に拒むが、身動き出来ず縛りつけられ

ているので、遂に多量の冷たい石鹼液が体内に奔流のように注ぎ込まれた。

やがて、この日本娘の哀れな意志を完全に無視して、便器の中に多量の尿管が音を立てて排泄した。見よ、その糞尿の中には、燦然と輝やくダイヤモンドが発見された。

この時を境として、可憐な日本娘は、罪の

### 奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	(30年10月号)	二百円	(送16)
復刊第2号	(30年11月号)	二百円	(送16)
復刊第3号	(31年4月号)	二百円	(送8)
復刊第4号	(31年5月号)	二百円	(送8)
復刊第5号	(31年6月号)	二百円	(送8)
復刊第6号	(31年7月号)	二百円	(送8)
復刊第7号	(31年8月号)	二百円	(送8)
復刊第8号	(31年9月号)	二百円	(送8)
復刊第9号	(31年10月号)	二百円	(送8)
復刊第10号	(31年12月号)	二百円	(送8)
復刊第11号	(32年1月号)	二百円	(送8)
復刊第12号	(32年2月号)	二百円	(送8)
復刊第13号	(32年3月号)	二百円	(返8)
復刊第14号	(32年4月号)	二百円	(送8)
復刊第15号	(32年6月号)	二百円	(送8)

償いとして、嗜虐的なマダムの手によって、屈辱の調教と激しい折檻に泣き濡れるのであった。

#### 『分譲』

##### 四馬孝画

略号(なみ)

(四)胃の洗滌、(四)ヒマシ油責

大中判印画紙焼付、二枚一組 三百円

○本誌の復刊号は上記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お申込下さるよう御待ちします。三冊以上まとめて御注文の節は送料は当方にて負担いたします。

○休刊前の本誌の旧号の在庫は殆どありませんが、昭和30年2月特大号から同年5月特大号まで、各月号とも若干在庫しておりますから、各一部百四十円(送16円)にてお送りいたします。右以外は売切ですから悪しからず御辛抱願います。

○アルバム「美しき縛しめ」第二集の未製本の分も今回売切れとなりました。

○三条春彦画、時代物責絵巻、未製本の分若干残部がありますから御入用の方はお申込願います。八枚一組、百五十八円(送共)○代理部分譲品目録は残部僅少ですので御入用の方は八円切手同封の上、すぐ御申込み下さい。



責められる女、責められる場面八態

## 北原純子画『風流女体アラベスク』(略号(ふう))

大中判印画紙(タテ十八糎 ヨコ十三糎) 焼付 八枚一組 八百円

## 一、嫉妬の炎

自分は唯一の愛人だと思つてゐたのに、彼には自分にかくして、こんな美しい隠し女があつたとは恵美子の物差しを持つ手は思はずブルブルと慄えた。

「かまわないから啓介、もっとひどく叩いておやり」

五月雨の降りそぼつ庭には十八九の肉づきのよい娘が全裸のまま扱帯で後手股間縛りにされて、ころがされている。下男の啓介は棒切れを持ったまま、この白蠟のような女体に、しばし見惚れるのであつた。

## 二、新妻鑑

新婚の夢まだ覚めやらぬ若妻はピチピチと張りきつた鮎のような全裸の肉体に、ひしひしと乳房に喰い込む腰紐を掛けられ後手高手のまま寝具の上に仰向けに転

されている。

「どうだ文子、そのままで起き上がることが出来るか。」

「ええ、貴方のお望みなら」

彼女は縛られた手首を真紅の腰巻について必死に起き上ろうとする。夫は冷やかな眼で新妻の全身を見つめている。

## 三、深夜の侵入者

寝苦しい夏の夜、姉妹は昼間の疲れにやっと、うとうとしかけた時だった。カタリと雨戸をはずす音がしたかと思うと、覆面をした一人の労働者風の若い男が入ってきた。派手な色模様の寝巻を脱がされて、はつと気がついた時には寝巻の紐が手首にからまり、強い力で後手に捻じ上げられていた。「何をするのよッ」うつ伏せになつた顔を左へ廻したとき、腰巻一つの姿で後手に縛られ猿ぐつわま

## 新作切腹写真『女体自決悦虐図』(略号(えつ))

血紅使用極鮮明実演切腹モデル写真

大中判印画紙(タテ十八糎 ヨコ十二糎) 焼付 七枚一組 千円

うら若きモデル嬢が自らの腹部の柔肌に刃を当て、一文字腹に十字腹に、或は又、臍の上と下二筋に、きりと割つさばいて苦悶の表情も真に迫つた切腹実演のフोट。苦痛に喘ぐ緊迫した表情、自らの手で我が腹を切る恍惚の表情など、すべて

血紅を使用して一段と凄惨さを加えました。女体切腹フोटの決定版としてマニアの方におすゝめする女体自決悦虐図。尚、従前代理部より分譲していました切腹写真は目録品切を機会に全部打ち切りとなりましたので悪しからず御諒承願います

## 〔新版〕女体緊縛フोट ◎分譲◎

R組 四十組 (印画紙の大きさ 9×13cm)

各組一枚一組 (全部送料共)

R 1	柔肌と荒縄 (須川令子)	R 4	高手小手 (花坂道子)
R 2	海浜の緊縛 (萩千恵子)	R 5	海老縛り (萩千恵子)
R 3	床間の飾り (佐賀美智子)	R 6	後手猿轡 (須川令子)
		R 7	後手足縛り (村田那美子)
		R 8	鏡うつし (伊吹真佐子)
		R 9	股間しばり (須川令子)
		R 10	鎖縛晒責 (萩千恵子)
		R 11	股間縛正面 (伊吹真佐子)
		R 12	女学生縛り (須川令子)
		R 13	尻立縛り (萩千恵子)
		R 14	開股しばり (川辺砂登子)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二四〇〇円

で囓まされた姉の姿があった。妹の太股がまるで生物のように跳ねて男をはねのけようとした。

#### 四、古寺の怪

人里離れた古寺の庫裡では、この寺にたった一人住む生臭坊主の念海が、昨日町から拐ってきた小町娘の黄八丈の衣裳から腰巻までむしり取ってしまった、手と足を一緒に麻縄で括ると梁から縄に結びつけ、鳥の羽を手にする娘の足の裏からお尻へと、その触手を伸べていった。

「ウウウ、ムムム……」

囓まされた猿ぐつわの間から娘の呻き声が洩れる。ゆらゆら揺れるローソクの火に照らされて尙も擦り責めは続く。

#### 五、雪中の折檻

「やいやいやい、よくも俺の顔に泥を塗りやがったナ、俺のいいつけの聞けねえ奴は、こうしてやるんだッ」

仏の権三は、その名前に似ぬ凄惨な形相で女の頸すじを下駄のままで踏みつけた。二十二、三の小股のきれ上ったいい女だが降り積つ

た雪の上へ、腰巻一枚で後手に雁字搦目に縛られてころがされていく。三下は竹の棒を女の左足にかまかせて捻じ上げた。女は痛さに思わず足の指をくの字に曲げた。

#### 六、ガール・フレンド

今日は珍らしく家には誰もいない。大学生の森川はガール・フレンドの緋佐子を誘って、ストッキン一枚の裸に剥いて柱に後手に縛った。箒を持ち出して両足首に括りつけて……

#### 七、ズベ公のリンチ

「掟を破った者は、どんな目にあうか知っているだろう。」  
首から足首までグルグル巻きに麻縄で縛られ猿轡をかまされたミチは、全裸のまま浴室のタイルの上に放り出されていた。

#### 八、縁側の夕顔

庭の泉水では蛙が鳴いている縁先にぽっかりと白く浮かび上った夕顔のような全裸の縛られた女、荒縄が乳房の上と下は二筋、肌もくぼむばかりに喰い込んでいく。

R 15	猿轡の魅力(伊吹真佐子)	R 16	トイレ縛り(須川令子)	R 17	立木しばり(村田那美子)	R 18	緊縛横臥(厚狭春江)	R 19	足揚梯子責(伊吹真佐子)	R 20	いたぶり(春日、伊吹)	R 21	帆立縛り(萩千恵子)	R 22	強烈梯子吊(伊吹真佐子)	R 23	椅子責め(佐賀美智子)	R 24	逆さ吊り(伊吹真佐子)	R 25	後手吊責め(伊吹真佐子)	R 26	股間縛後手(中塚文子)	R 27	逆海老責め(伊吹真佐子)	R 28	高手小手(加賀利江子)	R 29	変型しばり(萩千恵子)	R 30	松樹後手縛(村田那美子)	R 31	くさり責め(伊吹真佐子)	R 32	薄羅の緊縛(加賀利江子)	R 33	股間縦縛り(中富綾子)	R 34	首縄股間縛(坂口利子)	R 35	手足逆吊り(伊吹真佐子)	R 36	和装責め(藤田節子)	R 37	仰向悦虐責(川端多奈子)	R 38	後手首縄締(加賀利江子)	R 39	乳房下緊縛(村田那美子)	R 40	肉体美誇示(伊吹真佐子)
------	--------------	------	-------------	------	--------------	------	------------	------	--------------	------	-------------	------	------------	------	--------------	------	-------------	------	-------------	------	--------------	------	-------------	------	--------------	------	-------------	------	-------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	-------------	------	-------------	------	--------------	------	------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------

●代理部分譲品目録の中、  
左記のもののみ分譲中です

E 10	佐賀寝室場面 六枚一組	E 9	須川女学生縛り二枚一組	E 8	花坂乙女の総て七枚一組	E 7	佐賀剥れたズロ五枚一組	E 6	佐賀あわや寸前二枚一組	E 5	須川脱れる娘 五枚一組	E 4	佐賀酒宴の弄者二枚一組	E 3	佐賀臀羞 三枚一組	E 2	須川全裸悦虐集四枚一組	E 1	佐賀ヌード緊縛三枚一組	四枚組 二五〇	七枚組 四〇〇	二枚組 一五〇	五枚組 三〇〇	三枚組 二〇〇	六枚組 三五〇
------	-------------	-----	-------------	-----	-------------	-----	-------------	-----	-------------	-----	-------------	-----	-------------	-----	-----------	-----	-------------	-----	-------------	---------	---------	---------	---------	---------	---------

E組 (9×13cm)

G 10	開股一番 (萩千恵子)	G 9	優すがた (花坂道子)	G 8	全裸目隠し(村田那美子)	G 7	叫喚の森(伊吹真佐子)	G 6	アイデア (萩千恵子)	G 5	量感の帯(伊吹真佐子)	G 4	羞紅の椅子(菅登紀子)	G 3	海老晒し (萩千恵子)	G 2	股間縛正面(高瀬 忍)	G 1	鉄鎖と柔肌(高瀬 忍)
------	-------------	-----	-------------	-----	--------------	-----	-------------	-----	-------------	-----	-------------	-----	-------------	-----	-------------	-----	-------------	-----	-------------

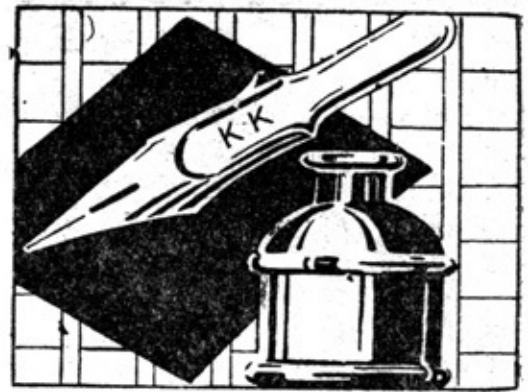
一枚 一三〇円  
五枚 六〇〇円  
十枚 一〇〇〇円  
(送共)

一枚 一三〇円  
五枚 六〇〇円  
十枚 一〇〇〇円  
(送共)

E 組 (9×13cm)

◎代理部分譲品目録の中、  
左記のもののみ分譲中です  
G 組 大中判印画紙焼付





## 【読者通信】

久しぶりに書かせて頂きます。奇クの最近の通信を見てサジの女性、マゾの男性が多くなったので嬉しいと思います。鷹野めぐみ様、三木恵子様、芳野眉美様、その他東京の方とお会いしたいものだと思います。私の希望は絶対に金銭的でない事、生活を乱す様な事をしなく、又病的でない事です。私達グループの写真はもうアルバム四冊になりました。新なSの女性Mの男性が見つからないので浅草の役者の男女にお金をやって写してみたり、又私が拷問してみたりが好きでないので迫力が無くつまりませんでした。私の男奴隷は二人共素晴らしいマゾだし、又いい男で社会的にも財力があります。

鷹野さん達Sの女性が苛めてみたかったら、いつでもお貸します。その代りMの安心出来る男奴隷を私の拷問用の道具として貸して下さい。Sの女性の方、どしどし通信して下さい。(森山美歌)

○ ほんの通信文のつもりで拙文を「揮美悲願」と銘うって貴重なる誌面に組み入れて下さった編集部の御好意、揮美マニアの一人として感激の至りです。さて、次に山口幸一先生へのお詫びを。先日は大変御無礼いたしました。実は三月十九日消印の貴信を駿河台郵便局で手に入れたのが廿三日の午前十一時、御指定の廿二日を過ぎていましたので、せめても廿三日には是が非でもお目もせねばと、締め込んだ揮のいささか汚れたのを気にしながら、その足で早速八重州口の大坂商船ビル前に駆けつけ、えんじのハンカチをオーパーの襟から覗かせて一時かつきりまで待たせて頂きましたが、遂にお目にかかれませんでした。親しくお手紙を頂戴出来るなど夢にも思っていないだったので、それを手にして天にも昇るような気持ちでしたが、その夢も止むを得ざる事情に基くとはいえ瓦餅に帰し、全く心

の底から落胆しました。それにも増して先生の胸中に焼きつけられた拭いがたき悪印象は到底いやされるものではなく、ここに重ねてお詫びいたします。次に四月号の香川S・K生様、二十一才の愛揮生様、三十年三月号通信欄に揮美フォトを出された柏山多津夫様、是非お便り下さい。不具のこの身が恥しくはありますが、私のフォトを送らせていただきます。最後にK Kを通じて多数の揮美愛好者との文通が出来たことを感謝いたします。(東京都駿河台郵便局 加藤千春)

○ 私は少年時代からの乳房マニアで女性がセーターに包んだ美しい乳房、動くたびにゆらゆら揺れるのを乳房、思わず見とれてゴクリと唾をのむ乳房、あの乳房を思う存分責めてみたいと不逞な考えを時折は持ちます。昨年の十二月号の、「沈黙の館」でイネスが乳房に乳枷をかけられ様々の型に締め上げられねじ伏せられる、とありましたが、もっと詳しく書かれていたらと残念に思いました。作者や編集者の方に、乳房を主に責めた読物やグラビアを是非お願い致します。又、乳房愛好家の方々のお便

りをお待ちします。(熊本県菊池郡菊地町隈府出端、奥山医院内、石橋昭七朗、二十七才)

○ 森本愛造様、その後いかがなされましたか、お便り下さい。その他、青山時代の同志の方々も御文通願います。森山美歌様、至急御連絡下さい。是非もう一度再出馬を御願したい処です。小生の現在の連絡先は左の通りです。(東京都港区青山北町五丁目二四西五号小島方 前田夏夫)

○ 沼正三様、お元気の事と思えます。婦人週間中は色々面白いマンガや話題が雑誌を賑わして楽しい事でしたね。さて、四月号の奇クに載った小生の雑誌通信がお目にとまった様で、非常に嬉しく思います。雑報欄のバトンをおゆずり下さい。喜こんでお引受けしたいと思えます。喜こんでお引受けしたいと思えますが、小生も本職がなかなか忙しいため毎月一寸無理なので、貴兄と一カ月交代で書かせて頂きたいと思っておりますが如何でしょうか。八月号には貴兄の興味深い雑報が拝見出来る事を楽しみにして居ります。服部みどり様是非文通させて頂きたいと思えます



東京新橋局出にてお便りお待ちしております。  
(麻生保)

○ 活発な読者通信を拝見して、奇ク愛読者の積極的な呼びかけに私も多少ながら発言させて頂きたいと存じます。私は若干、写真真その他文献の保存をしております。海老責の女体、極度に肉体を二つに折り曲げられた女の姿、逆吊の女体などサド的なフォトと交換いたしたいと存じます。サド好みの方、お便り下さいませ。出来る限り御希望にそいたいと存じます。  
(南川和子)

○ 貴誌の益々御盛栄なる事を心から喜こんでいるものです。小生は女性に対する浣腸記事にのみ興味を持っていきます。従って十二月号の高橋よしえ様の「糸姫の体験」以来の奇クには失望の連続です。奇ク愛読者の中に相当数の人達が小生と同感ではないでしょうか。最近、久利須照雄様、花村恵美子様、如何がなされて居られましようか。甲斐仁参様、貴方の文の中に浣腸に関するものを取り入れたら、奇ク史上最高の素晴らしいものが出来るでしょう。電気責に関するノート、木馬責に関するノート

は何れも熟読して居りますが、浣腸責に関するノートというものは無理でしょうか。(東京 H生)

○ 四月号は先ず表紙の如何にも春にふさわしい少女のあどけなさ。プランコに乗ってスカートがゆらめいている姿が、たまたなく魅力をそそりました。この種の健全な明るい表紙をお願いしたいものです。アート紙上は映画紹介も勿論結構ですが、画とも上手に組まれてバラエティに富む様に願いたいものです。時代物もだんだん多くなり、期待にそったものばかりで読みごたえが十分にありました。五十七頁と九十三頁の挿画の素晴らしいには、文句なしに賛辞を惜しまない積りです。挿画もだんだん多くなり、此の調子が続けて欲しいと思います。往年の「KK」のスタイルに一步一步近づいて来ました。雑誌のスタイルから云えば私は復刊後の「KK」の方が好きです。南川和子さんの登場もなつかしい。但し肝心の画がなかった事が残念。北原さんの「花と朔風」完結された様ですが、再び機会があれば随筆的なものをお願いしたい。百七頁の挿画も如何にも官能的で素晴らしい。私の下手なペン画

よりも数倍美しい北原さんのペン画が「KK」から消えない様願っております。消え去るなんて気の弱い事を云わないで下さい。尚、岩瀬祥一氏に希望します、御健康恢復を一刻も早くお祈りします。そして再び「KK」誌上に活躍されんことを。  
(東一郎)

○ 空想マゾの私は、時代物の勇婦の殺し場面(殺されるのは男性で悪人)特に女の仇討に興味を持っている者です。二十九年十月特大号掲載の「講談調のマゾの構想」の田村実様、三十一年四月号の「仇討プレー」の高杉正二様等の女々の仇討に興味を持って居られる方々のある事を非常に力強く感じ御文通を願いたく末尾に住所を記しました。尚、女性で同趣味の方が居られましたら御文通を願いたく御一報をお待ちして居ります。  
(岩手県久慈市侍浜町字本町、菅原太郎)

○ 陽気もめつきり春めいて参りました。奇ク愛読者の皆様、御機嫌如何ですか。私も始めて読者通信にお便りをさせて頂きます。京都の奥村弘子様、四月号の読者通信拝見致しました。私も一年程前か

ら奇ク存在を知りましてからはずつと愛読させて頂いていました。ほんとうに奇クは私達の心の奥にひそんでいるアブノーマルな性格をなぐさめたり満足させて下さいます。けれど、この様な事は人々には奇クの読者でございすなんてことは云えませんが、何んとかして読者で同じ様な性格に悩んだり文通などをしてお互に日常生活を少しでもエンジョイすることの出来る、お友達を持ちたいものだと思います。所へ貴女の通信を拝見致しまして、思い切ってお便りを出しました。私は現在、東京の洋裁学院に通っている二十才の娘ですが、家族は大阪に住んでいます。だから家にいられる方よりもお手紙の交換や交際が比較的容易なのですが、やはり私の心の秘密を知られるのが恐しくて今迄、気遣いがしていましたが貴女とどうしても文通したいという思いを押える事が出来ませんでした。私は東京に来て約二年になります。私は自身大阪生れの女です。ので、やはり関西のお方には特に親しみが湧いて来ます。あなたのお便りでは大体、受身の性格の様にお見受け致しますが、私は



元来、積極的な方です。受身の方は少し位なら辛抱致します。私もたまには自分の体を、奇巧に載っている様々の方法で、自縛の真似事の様なことをして楽しむこともありすが、どちらかと云うと他人を縛る方が好きで少し性に合っている様です。私は京都の古寺を散策するのが大好きで、大阪へ帰った時などは必ずと云ってよいほど出掛けますので、その内にお合い出来る事と存じます。ぜひお便り下さいね。必ず御返事は差上げます。とりあえず最初は局止で十日から廿日までにお願したいと思致します。では楽しみにしてお待ち致します。よろしくね。(東京都代々木局止 小野栄)

○ 私には本年三十九才、会社員で奇巧創刊以来の愛読者です。緊縛プレイに興味を持つ軽度のサジストです。数年以前より女子の方や男友達と色々緊縛プレイを楽しんでおられます。傷をつけたり極度の苦痛を与える様なあくどいものは好みません。私と文通、又は緊縛プレイを望まれる御婦人の方は左記へ御便り下さい。責に関する蔵書写真等をお見せし、御話をしたいと存じます。秘密に厳守します。

(神奈川県小田原局区内幸二の三九〇、木の村方気付、山崎啓介)

○ 四月号拝見致しました。矢崎英一氏の「灰色のノート」、昨年の五月号から九一年振りに掲載され大変嬉しく思いました。何しろ流腸マニアにとつて最近のKK誌は余りにも記事が少なく不満でした。矢崎氏にずっと後を続けて頂きたいと思致します。恐らく同好の諸氏は、私の意見と同じだろうと思つて居ります。ホモの性格で流腸マニアの読者ならば年令を問わず文通したいと思つて居ります。女性には興味ありません。矢崎氏の様な方から便りを頂ければ幸いです。左記へ御便り下されば御返事致します。(岡山市中出石町七〇 牧野勝治)

○ 奇巧も通刊九十四号を数える程沢山に社会へ送り出され、斯道のマニア達は夫々の個性に基いて色々の満足を得て居られるものと思致します。私も勿論其の例にもれず毎号手にして楽しんで居ります。本箱棚の中へバックナンバー順に並べ、諸者通信、編集後記など対照し、好みのものから通読し再読し更に精読してゆくと、味いを深

くし興味を新にして、誠に奇巧の存在が心の底から有難いものと嬉しさがこみ上つて来ます。最近特に感じたものに、丘与志夫氏の映画シナリオがあります。一月号の「赤いネオンの消える頃」は題名も内容も全く良かったの一語につきます。二月号「私は街の道化者」

これも良かったです。前題と後題の比較を編集後記で読者に問うて居られますが、私は両題共良いと思致しますが、強いての比較となれば前題かなと云う表現しか出来ません。映画のシナリオは今迄、奇巧に載った事がなく非常に珍しいもので、悦慮を取り入れて其の感じを短い文に表現する事はなかなかむづかしいもので、読者のイメージに訴え、読者の受入れる感じや表現の妙は映画シナリオと言う枠内では、あの程度が最高ではないかと思致します。作者の丘氏は、まだまだ書き続けようと思通で述べて居られるが、どしどし力作を発表してほしいものと思致します。其の後の三、四月号には期待に反し載つて居らなかつた。編集部から作者に書く様に促がして下さいこの節の奇譚クラブとしては、あつた作品が入って居る事は至極穏当に感じとられ、雑誌としての

評価も、より以上に高まるものと信じます。最後にシナリオ作者の御健斗を祈ります。(加沢天恩)

○ 毎号かかさず発行される編集部御苦勞を感謝します。小生は発行されてから続けて読んでいます。最近、特に四月号等は男性サド、女性マゾの記事が殆んどで、男に対する責めが非常に多いことです。毎号の読者通信でその数が相当数占めていることは御存知の通りです。このままの状態ですと、半数の人には喜ばれても他の半数の人にはあきらまれるでしょう。特に小生は故郷では奇巧の御蔭にて、健康で温順な友人を得て楽しい毎日を送っていました。最近、仕事の都合で東京へ参りましたので、今では共に語る友もなく、人柄しい奇巧は女性の責めが殆んどで淋しい限りです。広い東京に小生の心の友が居りませんか、健康な青年で、あくまでプレイとして男性に責められ縛られたい人があれば連絡方法を御知らせ下さい。尙今後の奇巧に大いに期待して居ります。故、一層の御努力を祈ります。四月号の「失念生」様、是非御連絡戴き度存じます。

(本田由郎)

瀬川方 丘与志夫)

(東京・利根生)

(野原多津)

福岡のS・Y生様、珍しいブレゼント嬉しく頂戴しました。誌上で返事との事、直接文通出来ないのが残念です。私と同じ御趣味との事、同好の士を得て大いに意を強くして居ります。御手紙を拜見致しましたが、仲々面白いアイデアですね。又、プレイも面白いですね。襦袢と云うと万人誰でも不潔に思う様ですが、勿論、幼児の便器代りと云う点に於いて、不潔視される様です。確かに汚物によって汚された物は、不潔に違いあ



りません。然し用い方の如何に依つては美しい物とも云えるでしょう。おしめをつけて幼児の如く濡して恥辱感を満喫する人、おしめの感触とおしめカバーの密着感に浸って楽しむ人等です。私の場合は後者の方です。この様に、おしめに心を惹かれるなんて、何んて自分は呪われた運命の持主なのだろうかと恨しくなる事もあります。然し持つて生れた呪われた宿命故、如何にするすべもなく、生涯この夢は消え去る事はないでしょう。最近、市内の薬局に公然と大人用ゴム製おしめカバーが飾られてあり、私は驚きの半面、云いきれぬ喜びを味いました。物は三角型で張ゴム製なのです。然し少し後にはウインドの中から姿を消して居りましたが、果してどの様な人が、おしめカバーを使っている事でしようか。私のイメージに出て来る様な美しい女性だろうか又、愛らしき少女だろうか。こんな妙な空想が次から次へと浮んで来るのです。貴兄もアイデアを自分の胸に秘めずに、誌上に発表されたら如何ですか。K誌愛読者の中には多くの同好者もある事と思うのです。唯、発表される事を控えているのじゃないでしょうか。

K誌は自分の願望するそれぞれの趣向を、同好者に伝えて呉れる機関とも思ふのです。どしどし発表して下さい。御活躍を期待しています。(S・A生)

○ 本誌六月号について、全く唯一の楽しみ「家畜人ヤプー」に挿面の少いのは、何といつても残念です。「黒人女の服を着せられて苦しんでいる麟一郎を冷やかに見下しながら、手錠、足錠をつけているポリーソン」或は「ポリーソンの後から鎖尻をとられて、ひよこひよこついていく麟一郎」といった場面は、是非とも次号に載せていただきたいものです。

(京都 中谷冷一)

○ 渋谷の有田修二様、先日いただいたお手紙に貴方の住所が明記してなかったもので、お返事が出せず残念でした。お差支えなければ是非教えて下さい。(森本信一)

○ 切腹についてのアイデアを述べます。(一)落城の際、奥方、姫、奥女中達が一室に集り割腹する話、或は開城の条件として、姫及び美しい腰元数人が代表で敵将の前で割腹する話、これが全裸、若くは

それに近い服装でという条件がつけば一層興味深い。(二)恋人が戦死したのを知り、残された姉妹が恋人の後を慕い、山の上、若くは自宅で後追い切腹する。姉妹及び腰元、二、三人同情して共に割腹する。或は切腹してる最中に、戦死したと思つた恋人が帰り、腹を朱に染めて恥しげに押さえ乍ら恋人と抱擁する。(三)徳川將軍に父母を殺された姉妹が敵を狙ったが、替玉を使われ捕われ切腹を命ぜられる。妹が腹切を恐れるのを、姉が励ましながら共に切腹する話。

(四)娘子軍が敵陣に忍び込み見事敵の一部將を倒すが、敵に包囲されて数人が敵を防いでいる間に、他の年若い数人が割腹する。切腹を見届けた後、年上の女も立腹、若くは正座して割腹する。猶、この話を変えて、敵に取囲まれた際、年上の者、数人が敵前で双肌脱いで割腹する事を条件に、残りの者を助命して貰う話。助命された者も後日、自分達の身代りとなって切腹した人々を偲び、墓前で同じ様に腹を切る話。(五)悪人の為に無実の罪に陥れた夫を救わんとして、若い妻が悪人の一味の立会いの下に妹、及び女中と共に腹を切る。然し悪人達は約束を守らず

夫も同じ時刻、城中の腹切場で詰腹を切らされる。此の際、夫も妻及び一家を助命して呉れる事を条件に切腹する。此の題材を元に素晴らしい切腹絵巻を繰り広げて下さい。(切腹マニア)

○ 須藤氏の玉稿、興深く教えられるところ多く存じました。趣訪頼重の切腹については、守矢頼真書出」という文献に(脇差ヲ乞ヒ十文字ニ切ラセラレ二刀目ニ右ノ乳ノ本へ突立テンモク程クリ下ラレサテ後へ御タオレ候)とあり、旧稿、切腹史談にて一寸触れたことがあつたと思いますが、此のテンモクが天目茶碗の意であつたことが中山義秀氏の作品で判つきりました。截ち鉄で割腹した婦人の例も珍しいものです。切腹の短歌は、小生も長く短歌の勉強をしています。久子さんという方が実際に切腹なさった由、若し事前に相談して頂いていたら、心理を分析して差上げることによって、防げたのではないかと傷ましく存じます。(ただ、憧れからのみ実行されたというのであれば——)ここで日本人の切腹ということが書かれて考察したいということが書かれ

て居りますが、例えば通信欄、正木氏の腹部加虐ということなどは異質のものと存じます。全く日本人独自のものです、此の意味で平常時は勿論ですが、戦事中、終戦時は身を以て武士道の精華を題された。烈士、烈女の事蹟は、永く伝えられるべきだと存じます。

(中康弘通)

○ 奇クの六月号は九日の夜、受取りました。実に素晴らしい内容で、復刊後以来に始めて見る力作揃いの特集号でした。口絵の四馬氏、滝れい子さんの絵の素晴らしい、秀麗な筆の和服の責めの絵には、唯唯感嘆するのみです。和装教室の振袖責め、口絵の和装女の責絵と云い、挿絵担当の滝れい子さんに感謝すると共に大いに拍手を送るうではありませんか。興奮さめやら筆を走らせる次第です。一番嬉しかったのは伊藤晴雨先生の挿絵で、何時も敬服しております。南氏の「我が異常性の記」大変興味深く読まして戴きました。先月号と云い今月号と云い南氏に御礼を云いましよう。本田氏には毎号時代小説で私にとつて最大の贈物ですよ。北原純子さんって、私

の想像していたより面白い(?)の方ですね。しまった!一番先きに書く人を忘れていました。嵯峨美也子さんへ、「鳳城の花嫁」をいち早くお知らせ下さって有難うございました。奇クを片手に持つて四月二日の封切日に見物さして戴きました。とても参考になつて封切日が楽しみでした。「浪人街」も素晴らしいシーンですね。最後に笛地様にお呼びかけしておきます。楓も和装の振袖姿に魅きつけられておりますよ!奇クが益々光り輝き発展して行きます様——。

(楓月太郎)

○ K K 六月号は素晴らしい充実ぶりでした。もう旧号と比較しても些かも劣りません。否、旧号より以上に読みごたえがあるものばかりでした。挿画も豊富、本文では月岡さんの作品、目下さんの体験記に魅力をはかれました。佐々木つとむ氏の北原純子さんへの公開状は前作に比して物足りなく、何か支離滅裂の感が強く、読み通すのに苦痛を覚える程でした。佐々木氏は余りにも自己の存在を強く出し過ぎて居られるので、後味が悪い様に思われましたのは、私のひがみでしようか。それに比べて北

原さんのマンガ的な挿画には思わず微笑したくなる程で、殊に九十九頁の「未来の妻」の予想図は何とも云えない位素晴らしい。とにかくK Kの独得な表紙は毎号変化があり、何度見直してもあきが来ません。本月号のあどけない可憐な乙女の姿もたまりません。挿画、カットにも変化を持たせ、内容とのバランスを考えての御苦心の跡も伺えて、編集部御努力に対しでは、本当に感謝の言葉もありません。六月号には読みごたえのある(?)編集後記の無かつたのが残念でした。それに読者通信も減頁された様で、物足りません。何時もこの欄を拝見して、近藤一氏のK K誌に対する御意見には全く同感する所あり、今後益々、本文でも御活躍されることを願つてペンをおきます。

(東一郎)

○ 鷹野めぐみ様、三月号で貴女様にお呼びかけした西宮のY・Tです。四月号では貴女様の記事が見当らなかつたので残念に思いました。が、六月号で再びお目にかかれて嬉しく思つて居ります。一度お手紙を下さいます様、切にお願い致します。服部みどり様、六月号で貴女様の通信を拝見致しました

スポーツで鍛えられた逞しい太股で思い切り首をはさまれてみたいと思います。そして又、ポリュームのある美しい豊かな肢体で、僕を馬として乗り廻して下さい。本物の乗馬の如く鞭でビシッビシッと打たれながら、女王様の御命令通りに這い廻ります。貴女様のような女性サジスチンが勇敢に名乗り出て下さいまして、我々にとりましては非常な喜びです。貴女様のボーイフレンドがうらやましくなれません。お呼びかけ下されば直ぐにでも、貴女様のお足下に飛んで行きます。この広い世の中にまだまだ多くの美しい女王様方が居られる事と思ひますが、どんなでも結構ですから奴隷として飼育してやろう、又、変つた責め方をしてみたいと思ひの方は、どしどしお呼びかけ下さい。決して御命令には背きません。鷹野めぐみ様、服部みどり様、又、その他の美しい女性サジスチンのお手紙を心からお待ち致して居ります。

(兵庫県西宮市平松町五、高田芳朗)

○ 復刊号も十五号となり読み応えのある作品、企画がされて来たことを喜びます。圧巻は何と云つて



# ◎次号の本誌は六月上旬発売です

本誌は今後毎月上旬発売の予定です。三ヶ月分、半年分予約の方々は出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、下旬頃までに誌代のお送りを願います。

も「潰滅の前夜」です。発刊を得ち焦れ、そして入手と同時にこの作品の最後の「未完」の二字に、ほつと安堵するのは私だけでしょ。土路氏の妙筆で、次々と展開される幽幻の物語の少しでも長かれと心から願います。相木も穂子もY本国まで連行されて、そこを舞台に日本国内という制限を放たれた死の遊戯、屈辱の見世物興行に引き出される。そこまで順々と話が進められていったら、どんなに素晴らしいものになるでしょう。この作品がサド的に見えて本質はマゾ的なものをより多く含んでいるからです。人間の自尊心を圧迫し、畜生化させようとするそれに必死に反抗し乍ら、どうにもならず畜生化されてゆく。その畜生化されてゆく女性の気持を主体として話が進められているからでしょう。この場合、その女性の気持を男性の気持に置換えることが出来るからです。もしこれが

女性が畜生化されてゆくという書き方でなく、畜生化してゆく所謂加虐者の気持を中心として書かれていたら、これ程の期待は出来なかつたと思います。(曾て奇巧に連載された「クモと蝶々」が、何かしら義憤的な不快さのみを感じさせたように。そして又、「家畜人ヤプー」が、マゾ的に見えて、結果的にはマゾ的感覚を稀薄にしているように。)人格を守ろうとする者と、人格を無視しようとするものの争斗の中にこそ、本当のサド、マゾの憧憬的な魅力が熾烈なのではないでしようか。そしてこの作品が単なる遊戯では表現されない、この魅力に充滿していることを喜びたいのです。——又、こうした作品の生れる都度考えるのですが、後日、雑誌を分解して作品毎に再綴し保管出来る様に、編集上出来るだけ一枚の頁の初めからその頁の終りに纏めるよう、心遣いして戴きたいと思ひますが

如何でしよう。尙、今後、奇巧で活躍して戴きたい方として期待出来る作品が、六月号で発見出来たことを喜びます。先ず、鷹野めぐみ様——今までそれ程と思いませんでしたが、同号小品の最後「私は自分にとつては最も汚い、木原に云わせると最高の女王の神酒を飲ませてしまった云々」この一語を以て、もし同氏がこの気持を持つて小品を進めて呉れたら、大変嬉しいと思います。自分にとつて最も汚いと思うものを与えてやるんだという気持、これを持ち続けてマゾ派の男性を喜ばしていつて下さいとお願ひします。次に高井好晴氏の「読者提供のアイデア」こうした書き方で、特に罪と罰が毎号奇巧を飾ってくれたら、写真や画では表現されない楽しみがあるのではないかと思います。また榎本利子様が、もし現在も奇巧を読んで居られたら、ぜひ続編を発表して下さい。真木不二夫氏の「黄色オラミ誕生」の続編の発表されることを心待ちにして居ります。

(KK一ファン)

越冬した動物が春になって穴の中から出て来たように、明るい活動の季節になると何かしら蠢き度

くなるのは人情かも知れません。本誌に和装という一研究分野を中心に、色々とこれまで御発表願った方々は、岸本青柳氏、福本時三氏等、数人とそれに小生、その他未発表の方で同好の士は恐らく数多くおられることと思ひます。これ等の同好の友が、事の実施と文筆を通しての遊戯に陥ることなく、今後更に和装に残された未知の世界を開拓するためには、閉じ籠った殻を破りお互の胸襟を開いて、情報の交換は申すに及ばず有無相通じ合つてこそ、本誌を飾るに足る有終の美が獲得出来るのではないでしようか。もとより本誌を離れて私共が旗挙げようと云うのではありません。天上天下唯一のオワシスでもあり機関誌でもある奇巧永遠の愛読者として、又寄稿者の末席を汚すことに変わりないことを念のため申添えておきます。皆さん如何に御考へでしょう。健全な社会人であると同時に性癖の如何を問わず同好の士が互いにガツチリ、スクラムを組み合うことは望ましいことではないでしようか。距離的な隔りは今日通信を以て連絡出来ますし、若し相互の間に不侵犯のお約束が出来れば、或は面接し合う機会に恵まれ

るかも知れません。申し上げたい事は以上の通りです。一つ和服を中核とした楽しいグループを作りきらびやかな色とりどりの花の宴に円陣を組んで、自由な夢を追おうではありませんか。

(東京・白金紅次生)

○

新年号で「ピリチスの歌」ピエール、ルイス作を御紹介下さいました九雅節夫様、本当にありがとうございます。御礼が遅れて申し訳ございませんでした。美しい詩の一節一節によって、ともすれば荒み勝ちな私の心が洗われて、楽しい幻想の世界に生きる一時的私を御想像頂けたら幸と存じます。私は皆川と名乗っています。集の方がつけて下さったのです。今まで投書なんかした事はありませんでした。あの時の投書(十月号)を皮切りに、ボツボツと通信させて頂いて居ります。今後共、何卒宜しく御指導下さいませ。鷹野めぐみ様、失礼かと存じましたが、毎月の貴女の手記を興味深く拝見しているうち、お呼びかけしたく思いましたので、若しお差支えなければ同じ性質の女同志として、おつき合い致したく存じます。

す。欲をいえば、お逢いして色々とお話をしたいと存じます。今後の御活躍を期待しております。

(東京・皆川のぶ子)

○

北原純子様へ。六月号誌上の佐々木ツトム氏との公開状応答、拝見しました。その中で貴女が御自身を評して「道子とチャ子の両面を併せ持つ」とおっしゃったので、同じ号の「読者通信」に載せて頂いた私の一文で、貴女の中に道子的性格が観られる旨を書いておいたことに一瞬どきどきとし、次にすうっと寒気を感じました。尤もそれは風邪のせいかも知れませんが。私は初めから正直に貴女を女性と信じていましたので、佐々木氏が「花と朔風」から男性を感じたと云われたことに驚いたものです。以前、私が女性だと思っていた藤山秀緒さんが藤山秀雄として載ったので不審に思い、藤山さんは女性ではないのかという疑点を通して触れておいたところ、すぐに藤山さん御自身の記事で女性であることを明言され、読者の中に波瀾をおこしたことがありました。かれこれ想い合わせると、私のカンもまんざら捨てたものではないと思えました。それはとに

かく、私は貴女に苦言を呈したいのです。貴女が御自身を説明なさるために、僅かの真実性を加味なさろうとして、他人に何らかの迷惑を及ぼすのは余り良いこととは思えません。貴女は「じよらんかい」という名をおきになったことがありますが、貴女が昭和八年とすると、貴女の「従兄」とおっしゃる方は、先ず昭和の生れで、しかも昭和七年以前と思われるが、貴女がお使いになった「H高卒業」ということは、昭和二十四年以降を意味するのです。すると貴女と従兄の方は精々三つ違いということになりますね。T大生でH高出身者は多いのですが、その中から名前、住所、年令、趣味、その他の観点から割出すと唯一人しか残らないのです。私の「じよらんかい」の友人が、これだけ調べてくれました。ところでこの方が貴女の「従兄」の方であつてもそうですが、もし違う場合の御迷惑をお考えになったことがあります。単にH高卒でT大に合格した「健」という名の人ならテニスを楽しむ仲間でも数人いるのです。迷惑の第一は貴女の「従兄」という方のお気持ですが、主

観的には納得できる性癖でも秘密にしておきたい願ひがあるのでは無いでしょうか。もしかすると「マタハリがとんでもない暴露をやがったナ」と思っているのじやありませんか。第二は少しの調査によって可能性の範囲を数人の上に絞ることができるとです。KKは勿論、広く各層の人々に読まれていますが、その特異性と、そして文献としての価値からT大生ばかりでなく、H高生にもかなり読まれている様子なのです。貴女へ直接のお使いはできませんので、読者通信を利用します。それだけに文章には気をつけてみると、どうも上手な云いまわしではないようです。ごめんなさい。それでも私の云いたいことは大体わかって頂けたのではないでしょう。とにかくアブノーマルだということ、たとえそれが淡く小さいものであつても、健康な社会人の前では胸を張って云いきることが私には出来ないのです。過ぎたことですから仕方ありませんが、お互に必要以上の事には触れないでいましょう。貴女の記事は価値の点から観て、あの部分が無くとも何ら変りがない程に



従兄の学歴は無くもがなの記述でした。「じよらんかい」の友人からの意見に基いてペンを取りました。いづれまた近いうちに誌上で御筆に接したいと思ひます。

(近藤一)

○ 六月号の冒頭「縛られた女優」の写真には感心しました。殊に宮城野由美子の「振袖狂女」に於ける四枚の吊し責めは一寸入手出来難いものであるだけに、その感激は一入でした。その上、小生は彼女の熱烈なファンで、現役当時(彼女は結婚して家庭人になりました。)は屢々激励文を送って居りましたが、時には彼女の自宅へも訪ね、彼女は勿論の事、家族の人達とも親しく交際をさせて戴いて居り、ファンというよりも友達づき合いと言った方が良い位の間柄でしたので、スクリーンで見る彼女とは別の宮城野由美子をよく知って居り、この人が女優かと思われる程の気易さと親しさ、それに一寸とした茶目気もあり、中々愉しい思い出を持って居りますが、この好きな女優さんの縛られた写真があつたらと、どんなに望んでいたか知れないのです。映画は「振袖狂女」も「江戸千両幟」も縛

られるものは皆、見ましたが写真の方は入手出来ず、こればかりは残念に思つていたのです。ところが今回、計らずも楓月太郎氏の御好意で、思いもかけず四枚の写真に接する事が出来、本当に喜んで居ります。唯、残念なのは表情がはつきりしたものが一枚しかない事で、正面から写したアップのものでもあればと思うのです。前記の通り、宮城野さんとは面識があり、スクリーンでは割合大きく見える彼女が、實際は華奢でそんなに大きくなく、もし本当にあの作品の様に吊されていたら骨が折れたんじゃないか、あの映画はスタンド・インではなかったのかと思つていたので、楓氏の写真で實際の彼女だと知る事が出来、望外の喜びを感じたわけです。

(岡山 長井勝次郎)

○ 東京の森本信一様、六月号の女装通信を拝読しました。御写真も拝見し、是非私も御仲間に入れて頂きたく思つております。二月号に通信文をのせられたそうですが二月号がどうも見当らず、お便りする宛先もお逢いするとしても連絡方法、場所等が分りません。仕方がないので誌上にてお伺いする

次第です。なるべく早急に以上の点をお知らせ下さい。

(東京 南時夫)

○ 奇ク四月号拝見、先ず近頃の紙質がよくなったのが何よりです。同じザラ紙でも非常に色が白くなつて好感が持てます。次に小生の希望が早速実現して、映画スチールが増貢された事が喜ばしい事です。これ等は貴誌御発展の表われと存じます。唯、内容に於てマゾ、サドを問わず大作は多くなつたが、皆、現代物ばかりで時代物が少いのは淋しい限りです。そこで、おこがましくはありますが、小生、今後「時代幻想サド小説」を引続き御送りしたいと考えています。その試みとして同封の「八百屋お七」を御送りしました。これは数年前、悦劇の原案として試作したものに、若干、手を入れて見たのですが、そのため余りきわどい、あくどい責場がないので物足りないかと存じますが、歌舞伎的、色彩的な絵画的感覚を表現してみたいと思つたものです。甚だ愚作ですので、その意図が完成されて居りませんので、挿画によつてそのイメージを完成したくぜひ北原様の挿画を付して頂きたく

切望して止みません。この旧作の次には色々大衆的な新作を構想中です。ので何卒よろしく。いつも勝手なお願いばかりで恐縮ですがどうか御開届け下さい。

(菅原春夫)

○ 編集後記其の他を省いて、読者通信は努めて収容するようにしましたが、相当量の通信が掲載出来なくなりしたので、この分は次号に掲載することにします。尚、麻生保氏からの「急報」や其の他、レポートなどで本月号には是非発表したいものも沢山ありましたが、締切後のため残念ながら間に合いませんでした。本誌復刊以来、号を追うて内容充実には努力してまいりましたが、殊に各傾向の方々にそれぞれに読みごたえあるように配列することに苦心しました。然し苟しくも、それが為世の指弾を受けるような個所のなきよう文章の端々に至るまで十二分に気を配つて慎重の上にも慎重に編集を致しました。若し本誌にして忌避すべき個所がありましたら何卒御遠慮なく御注意下さるようお願い致します。

(編集部)